
バトルBゲーム

佐屋 有斐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトルBゲーム

【Nコード】

N0358D

【作者名】

佐屋 有斐

【あらすじ】

活気を失っていく町を舞台に、4つの高校に在籍する生徒達のバトルが始まった。エリートから馬鹿までなんでもどんといー！

ープロローグー

――プロローグ――

春夏秋冬。新しい季節がどれだけ巡ろうが、どれだけの人間が成長し巣立っていこうが、ある町の情勢は一向に変らなかった。年々進む高齢化に、隣町の大きな百貨店やデパートに客を奪われるばかり。皆頭を悩ませ、町の商店街は重々しい淀んだ空気が漂っている。

しかし、今はそんな事はどうだっていい。町の経済に関する事は、今の所は市長に任せておこう。この話で重要なのは、そこに居る奴らなのだ。

この小さな町には、なぜか校風の異なる4つの高校が隣接していた。しかもその高校は、町の中心に位置する十字路の商店街を隔てた四方に位置し、それはまるで互いを意識しているかのように建っていた。

町で最も長寿な奥村さんは言う、「昔からこんなもんじゃった。」と。まあ、当然といつては当然の流れで、四校はそれはもう何かと競い合い、いがみ合っていた。このことについても奥村さんは言う、「昔からこんなもんじゃった。」と。

ープロローグー（後書き）

ご覧のスポンサーは、S A Y A Y U H I i n 小説家になろう
様の提供でお送りします。

プロフィール

<登場人物>

●東地区

【明雲高校】

陸上競技全般が県一、学ラン一色。
暑苦しい応援団が結成されるなど、
『生徒全教員、一心同体』私立
高校。

・周防 英司

・藤尾 行輝

・奥村 順一

・荒俣 朗

・田瀬 永吉

・斉藤先生

・木崎先生

●西地区

【坂ノ浦学園高校】

水泳、サッカー、卓球が盛んで、それなりに楽しくやっている。
比較的自由的な校風を持つ、「フリーマインド」私立高校。

・佐野 壮輔

・川口 満

・山田 悠世

・柳岡 麗

・道場 真央

・葛木

・神原先生

・乗本先生

●南地区

【葛岡高校】

ラグビー、相撲、空手、柔道部が強く、とにかく体格が良い生徒教師ばかり。

理数系が極端に少ない……。強者だけが生き残る、「弱肉強食」私立高校。

・鳴滝 巽

・狩野 忠史

・和久井 貴代

・百武 ひかる

- ・ 笹井先生
- ・ 関口先生

● 北地区

【門倉学園高校】

硬式テニス、吹奏楽、美術部が優れている。年に二回、オペラ公演。町で一番偏差値が高い金持ち、誰もが「才色兼備」私立高校。

- ・ 東 フィリップ
- ・ 篠宮 京佳
- ・ 並木 隆吾
- ・ 御手洗 翔
- ・ 八王子 直衛
- ・ ジャン・フランセル
- ・ 玖珂 ノエル
- ・ 玖珂 アンドレ
- ・ ペラジー・マントノン先生
- ・ 紫垣理事長

【十字路の商店街】

- ・稲田氏
- ・稲田 杏里
- ・奥村 晴造
- ・藤尾 千鶴
- ・渋川 庸介
- ・岸辺 龍平
- ・津幡 莓
- ・石田 肇
- ・仁さん
- ・大正さん
- ・蓬さん
- ・初夫さん

さらに詳しい詳細は、

HP*89-lux

<http://89lux.tirirenge.com/Tai>

1 s | B a t t l e . B . G a m e . h t m l
登場人物より、ご覧ください。

プロフィール（後書き）

2011.5.15更新

ピンポン パポッ

拍子抜けするような鉄琴の音が頭上から聞こえたかと思うと、教室にいる生徒も廊下を歩く先生方もハッと肩を上げ、一斉に耳を塞ぎ立ち止まる。

「ああー、ああー。今日は閉店なり。って、聞こえてんのかな？まあ、いいや。」

「フジオー！！フジオユキテル！！今すぐ俺ん所に来い！！」

学校の私物の私有化も甚だしく、耳が張り裂けそうになるぐらいの怒鳴り声が、スピーカーを通して学校中に響き渡った。耳を塞ぎ忘れた生徒は、耳を押さえながら床に転がる。そして、大きな音がガタガタとスピーカーから漏れるや否や、二度目の被害を予期した生徒達は全員、スピーカーから遠ざかる。

しかし、それつきりスピーカーから何も聞こえてこない。生徒数名は「終わったのか？」と顔を見合し、半信半疑で耳から手を離す。「いけねえ、いけねえ。消すの・・・」

突然戻ってきた声に、生徒達はビクリと身を震わせ、机の下にちぢこまる。「今度こそまた来る!!!」・・・のかと思いきや、聞こえてきたのは乱暴なスイツチの切れる音だけ。生徒達はそれを恐る恐る確認すると、安堵のため息をあちこちで漏らした。

「ああ、ようやく閣下の一日の行事終わったよ。今日はやけに早かったよな?」

男子生徒が首を捻りながら椅子を引いて、隣に座る友人に話しかけた。

「だよな? 一時間目の休み時間なんて、俺らでも予想できなかった。藤尾さんも朝っぱらから、大変だよな。」

遠目にそう言う友人をよそに、男子生徒は机の中から教科書を引っ張り出しながら笑う。

「あの人、もうすぐ怒鳴りながら廊下を走ってくるぜ。今日は竹刀持ってるのかなあ?」

ノートを丸めて竹刀に見立て、振り回す仕草をする。友人は笑いながら、それを手で掴んだ。

「いいや、持っていないだろう。さすがに、藤尾さんだって普通に授業受けているだろうし。」

「分からないぜ? 実は教室に置いているのかも知れない。・・・大体、男子校であんな迷惑行為、毎日できる閣下も閣下だけど。毎回閣下が黙って怒られるのって木崎か、あの人ぐらいだろ? 俺はやっぱりあの方は只者じゃないと思う。最強の武士の家系とかさ。」

友人からノートを奪い返すと、男子生徒は身を乗り出して声を潜めた。友人は「関係ないだろう。」と、ゲラゲラと笑いながら顔を背けた。

「・・・にしても、今日はやけに遅くないか? もうすぐチャイム鳴るっていうのに、まだ来ないし。」

廊下に視線を移せば、普通の生徒や先生が通り過ぎていくだけ。

どこにも『藤尾』らしき生徒は見当たらない。他の生徒達も同じような事を思ったのだろう、それぞれに廊下の方を不思議そうに振り向いている。

1-1 明雲高校剣道部主将 藤尾行輝失踪！？（後書き）

<第一話開始>

次回、「いつもと違うと、なんか調子狂うよなあ・・・？」by明雲
高 生徒一同 どんな学校だよっ！？

しかし、生徒達の予想を裏切るようにチャイムが鳴り、先生が教室に入ってきた。「起立。」と今日の日直が言々と、皆立ち上がる。早い閣下の呼び出しに、聞こえない『藤尾』の怒鳴り声。いつもとは違う日常を不審に思った生徒が、礼をする隙に閉まった教室の後ろ戸を少し開けて、廊下を伺っていた。着席の合図が終わった後もまだ、しつこく戸に張り付いく生徒に先生は出席簿を振り下ろした。

「こら、何やっているんだ。授業始めるぞ。」

「・・・はい。」

生徒は軽く叩かれた頭を手で撫でながら、不満げそうに戸に手をかけた。けれど、扉は閉まるどころか、逆の方向に勢いよく引つ張られる。

「おい、フジオー！フジオいるかあ？」

スピーカーから聞こえた同じ声の持ち主が、戸を全開して大声で叫んだ。当然、教室にいた生徒も先生も突然のことで呆然とている。しかし、そんなことは気にしていないといわんばかりに、騒がしい生徒は戸の前で口を開けて立ち尽くす生徒を「何やってんの？邪魔。」と押し退け、堂々と教室の奥へと歩いていく。

「おい、周防。お前、何考えているんだ？授業中なんだぞ。他の生徒の迷惑を考えろ！」

先生は慌てて制止の声をかける。すると、周防と呼ばれた灰色のパーカーをかぶった生徒は眉間に皺を何重もよせた。しかも、パーカーから覗く坊主頭に浮ぶ妙に綺麗な形をした眉毛は、なんとも言えない可笑しいやらと敵ついやらで、笑うにも笑えない。

「サイトオ先生、それどころじゃないんだって。フジオがいなくな

「つたんだって！」

周防は窓側の一番後ろに辿り着くと、前に座る背の高い生徒の影で机に伏している生徒の頭を容赦なく、叩き始めた。

バシバシッと叩かれる様はひどく痛そうだ。しかし、当の本人は黒いタオルに顔を埋めて、起きようともしない。

「あいつ、昨日電話で予習の課題教えてくれるって言ってたんだ。だから、8時ぐらいから学校来てたのに、あいつ来ねえんだもん。」

「いつも遅刻ぎりぎりのお前にしては、珍しいな。それよりも、奥村を叩くのは止めておけ。多分、痛がっているはずだ。」

苦笑いを零しながら指摘する斉藤先生をよそに、周防は手を動かしながら話し続ける。

「でしよう？家近いから、余計に寝坊しやすいんだよ。でもさ、今日はキザ先と駆けしているし、フジオも早く来ないと教えないって、言うから俺頑張ったんだ。けど、あいつ何時まで経っても来ねえし、携帯も出ねえし。仕方ないから、放送室に駆け込んだわけよ。」

「ああ、だから今日はやけに早かったのか。って、別に放送室に駆け込まなくても、教室に直接行けばいい事だろう。大体お前はな、特別待遇をいい事に・・・」

話しているうちに、説教モードになっていく斉藤先生。真面目に授業を受けたい生徒が小さな声で「先生、それより授業をしてください。」と言うものの、聞こえていないのだろう。一気に加速した熱は若い教師魂に火をつけたようで、白熱した表情で斉藤先生は周防ににじり寄った。

「お前は、学校をどこだと思っているんだ！」

いきなり怒られてきよとした周防は、叩く手を止めた。

「何言ってたんだ、斉藤先生。どこって、学校は学校じゃねえか。先生こそ、どこだと思っていたんだよ？」

確かに、間違っではない。だが、そういう事を言っているんじ

やない、と生徒達は内心呟いた。しかし、周防はまったく悪びれた顔もせず、むしろ心配そうに斉藤先生を見つめている。周防が天然で馬鹿だという事を思い出した生徒達は、必死で噴出しそうになるのを堪え。斉藤先生は怒りに身を震わせながら、顔を真っ赤にして怒鳴った。

「ばか者！！」

「んもお、煩いな。」

ようやく起きた奥村は机の上で、暢気に欠伸をしている。斉藤先生は顔を般若のように歪ませ、それを見た生徒数名はすぐに視線を反らした。そして、斉藤先生は動きに出た。奥村の学ランの首元と周防の腕を掴むと、二人を廊下に放り投げ教室の戸を黙って閉めたのだ。

起きてすぐに廊下に放り出された奥村は、頭を掻きながら廊下に座りに直して呟いた。

「ええ？何これ。」

1 - 2 (後書き)

次回、「先生、ボクは関係ありません!？」 b y ・ M r ・ A G ・ ・ ・
フジオがいない、どうする!？

遡ること午前6時前、藤尾邸。外は暗く、気温の低い冬特有の寒さで霜が凍っている。そんな中、立派な日本家屋の母屋のすぐ傍にある小さな稽古場で、若い男女が竹刀を持って打ち合っていた。

「ヤアアアアア」

「タアアアアア」

互いを圧倒するような掛け声を上げ、二人は幾度となく竹刀をぶつけ合う。そのうち、男の方が女を押していたものの、女は素早く一歩足を踏み出したと同時に、力強く正面に向って打ち込こんできた。咄嗟のことで、男はそれをスローモーションで見ることしかできなかった。

「私の勝ちね。」

前頭部すれすれの所で竹刀を止め、女は優雅に微笑むと身を翻した。後頭部高くに束ねられた黒いポニーテールがさらりと揺れる。男はそれを見ながら、床に座り崩れた。

「はあ、最後も一本取られた。姉貴、また強くなったんじゃないか？」

正面に礼をした後、姉千鶴はタオルで顔を拭きながら竹刀を壁にかけた。

「そんな事ないわ、今のはあんたに非がある。最後、一瞬迷ったんじゃない？」

姉の指摘に、弟は図星だと言葉を詰まらせる。

「・・・やっぱり。気剣体一致、技がいくら磨かれようが、それに心がついていけなければ何の意味もないのよ。」

「分かってるよ。」

男は目を伏せながら立ち上がり、正面に礼をする。そして、憂

鬱な顔のまま壁へと足を向けた。女は男の一同の動作を黙って眺め、稽古場の入り口で膝について丁寧に礼をすると、持っていたもう一枚のタオルを男にむかって投げた。

「行輝、庭で待ってなさい。」

ヒラヒラと落ちてゆくタオルを、男は不思議そうに見つめた。

「なんだっていうんだ。」

行輝は縁側の淵に座り、面倒くさそうにそう呟いた。段々熱が冷めてきて汗が冷たく、早くシャワーを浴びたかったのだ。すると、千鶴は水の張った盆を重たそうに抱えてきた。

「そこに立って。」

「えっ、なんで？」

嫌な予感がする行輝は、後ずさった。しかし、千鶴は行輝の剣道着の端を掴み、庭の真ん中へと無理やり引つ張った。

「はい、はい。いいから、そこに立ちなさい。」

言われるがまま、されるがまま棒立ちになる行輝。視線は千鶴の腕にある盆だ。

「まさか、こんな真冬に水浴びるとか言わないよな？」

弟は姉を不安そうに見下ろすが、姉はにんまり笑って盆の中の水を弟に勢いよくかけた。

「うわっ！何するんだよ。」

頭から水をかぶり、全身びしょびしょに濡れ。水が冷たいわ、剣道着は重たいわ、とにかくたまったものじゃない。朝の冷たい空気が、さっきよりも数倍冷たく感じる。行輝は顔を流れる水を手で拭きながら、姉を睨みつけた。

「何考えてるんだ、風邪でも引いたら……」

非難囂々で剣道着を絞り始める弟に、千鶴は横から口を挟んだ。

「でも、すつきりしたでしょう？」

それに、行輝は「えっ？」と、聞き返す。

「何を悩んでいるのだから知らないけど、悩みすぎたってどうにもならないわよ。あんたの場合は特にそう。同じところぐるぐる廻ってばかりで、切りがないのよ。だから、そういう時は思い切ったことをしてみなさいよ。案外、自分の悩んでいることなんて、くだらないんだって気づくから。」

盆を片手で持ち、腰に手を当てた千鶴は豪快な笑顔でそう言った。顔立ちがいいと、余計に見栄えのする笑顔だ。行輝もつい、姉のその綺麗な笑顔に騙され、危うく水をかけられた事まで忘れそうになった。

しかし、何か言い返そうにも、何も思い浮かばない。姉の言うことは最もで、冷たい水が胸のモヤモヤをわずかに流し落としたのは事実だった。

「やっぱり、敵わないな。」

午前8時頃、行輝はホームの椅子に座り込んでいた。電車の中で妙に揺れるなど思っていたら、下車した途端に目の前が暗くなり、座り込んでしまったのだ。ガンガンと頭痛はひどく、顔が熱い気がする。けれど、行輝は温かい電車から寒い外に出て眩暈を感じただけなのだと、しばらく休憩すると立ち上がりホームを後にする。

「ちよつと遅くなつたな。あいつ、もう学校来ているかな・・・早く行かないと。」

ふらつきながらも、行輝は通学路を進む。

1 - 3 (後書き)

次回、えっ、大丈夫なのか・・・フジオ!?!「寒中水泳の方がよ
かったんじゃない?」by・奥村

教室を追い出された後、周防と奥村は食堂近くの渡り廊下まで来ていた。二時間目の体育真つ最中のグラウンドから賑やかな声が聞こえてくる。二人は渡り廊下の壁に背を向け、腰を下ろした。

「ああ、負けた。負けちまった。」

パーカーを引っ張り、顔を覆う顔周防はうな垂れるようにそう言った。

「それで、その賭けって何だったの？」

奥村は寒さに震えながら温かいカフェオレの缶を開けた。周防は俯いて息を吐きながら、太ももを擦った。

「数学の課題を完璧に答えられたら、今週の日曜は休みにしてくれるって賭け。」

「・・・それって正当な賭けなのか？」

缶から口を離して、ふと思った事を問う。けれど、周防は自信満々に答える。

「正当な賭けだって。キザ先言っていたし。」

『キザ先が言っていた』という時点で、きつと上手く言いくるめられたのだろうなと奥村は思った。普段から週末も休みがないと、周防が不満を言っていた。だから、休みがほしいと木崎先生に訴えたのだろう。木崎先生は木崎先生で、勉強に関してまったく無関心で、毎回の定期テストで全教科欠点を取る周防をどうにかしてほしいと、他の先生方から頼まれたに違いない。それで、休みを『餌』に勉強させようという魂胆で、敢えてこんな無謀な条件を『正当な賭け』

と言ったのだろう。口が上手いあの先生が、馬鹿な周防を手懐けている様子がありありと思い浮かぶ。

「へえ、そうなの。」

奥村は深く突っ込まずに、目線をそらして再び缶に口をつけた。ここで間違っても『キザ先生に、いい様に扱われている』などと、余計な言葉は口にしない。下手なことを言って、周防が木崎先生の企みに気づきでもしたら、まちがいに木崎先生に目をつけられる。強いものには取り敢えず巻かれる、奥村という男はそういう男だ。

「そうなんだよ。昨日言われて、すぐにフジオに電話したのにな。」
周防は残念そうに頷いた。藤尾の名前が出て、さすがの奥村も突っ込む。

「初めから、行輝任せか。」

「当然、俺が一人でできるわけがない！」

堂々とそう言うてのける周防は、ある意味立派だ。馬鹿は馬鹿なりに、自分の事をよく分かっているらしい。

「それもそうか。でも、行輝がよく協力してくれたな。賭けの事知っているのか？」

「お前馬鹿だな、言うわけがないだろ。大体、言っていたら、教えてくるなんてあいつは絶対に言わない。」

それすらも当然の事だと言い張る周防に、奥村は声を上げて笑い出した。変な所だけずる賢く、藤尾とよくつるんでいるだけはある。空になった缶を潰しながら呟く。「お前らしいよ。」

「何がだよ？」

首を傾げる周防をよそに、奥村は立ち上がった。

「それで、行輝はいいのか？」

「……うおおおお！しまった、こんな所でのんきに語っている場合じゃなかった。今すぐ藤尾を探しに行くぞ。」

周防は飛び跳ねるように立ち上がり、奥村を指差すと、そのまま校舎へと歩いていく。その子供っぽい背中に、奥村はふつと笑った。「まあ、別に探さなくてもいいと思うけど、あいつがいないと俺が子守役になっちまうしな。」

「何、物々言っているんだよ？早く来いよ。」

足早に前の方を歩く周防に、奥村は追いかけながら尋ねる。

「けど、探しに行くつてどこに行くんだよ？」

周防は歩きながら振り返り、腕を組みながら後ろ向きで歩くなんて器用なことをしている。

「あいつん家。家に電話した時、あいつの母ちゃんが学校行つたつて言っていたけど、何か臭う気がする。」

「臭うねえ。じゃあ、俺は学校にいるわ。もしかしたら、こっちに来るかも知らねえし、行き違いになるのも面倒だしな。どっちにしろ、また電話してくれよ。」

二階に続く階段と下駄箱に続く廊下の分かれ道で、奥村は立ち止まって片手を上げた。「おつ、じゃあまたな。」周防も答えるように片手を上げた。

階段を登りながら携帯でメールを打っていると、奥村はハツとする。

「そついえば、俺。行輝の家に行ったことねえな。……まあ、い

いか。」

午前8時四十分頃、黒いベンツが東地区の狭い裏街道を走っていた。ゆつくりと車が角を曲がった時、遠くの道路の上に黒い人間らしき物が倒れ込んでいた。運転手は速度を落とし、数十メートル前に車を止めた。

「どうかしたか？」

後部座席から声かけられる。運転手は車をパーキングに切り替え、へつらいながら答える。

「へい。それが、路上に人が倒れているようで。今すぐどかしてきますんで、お待ちください5代目。」

黒に白の水玉シャツが浮き立つ眉毛の薄い運転手は、車を降りて倒れている人に駆け寄った。後部座席に座る男は、緩んだ赤いストライプのネクタイに手をかけ、フロントガラス越しに外を伺っている。

「あの制服は・・・」

1 - 4 (後書き)

次回、倒れていたのは・・・フジオなのか！？「つて、あんた。五代目って誰なのよ!？」by 千鶴

「あら、帰ってきてないわよ。」

千鶴は、門の向こうに立つ周防に向かってそう言った。

「ええ、まじかよ！学校にも来てないんだぜ、千鶴姉ちゃん。何処行っただっていうんだよ。」

周防はイライラと地面を蹴る。それに、千鶴は何かを考えるように、顔に手を添える。

「そういえば・・・あの子、何か悩んでいたみたいなのよね。」

「ああ？悩んでいたって、何を？」

スニーカーのかかとを地面に擦りながら、周防は千鶴に詰め寄った。

「ちょっと、英司君。顔近づけすぎよ。」

慌てて千鶴は、鼻がくっつきそうなほど顔を近づける周防を押し退けた。周防は「あっ、ごめん。」と、悪びれた様子もなく門に凭れなかった。

「何を悩んでいたかは知らないけど、思いつめていたのは確よ。もしかして、あの子・・・」

千鶴は思いついたように、唇に人差し指を押し付け、目を大きくする。それに、周防はゴクリと唾を飲み込み、千鶴の顔を見つめる。
「・・・もしかして？」

チャラッチャラッチャラッチャチャツ ♪

『Ah、Woo!』

チャラッテャラッチャラッチャチャツ ♪

『Ah、Woo!』

チエキッチャラッチェラッチエチャツ ♪

「うおおい！ビビッた。誰だよ、こんな時に。何だよ、この着うた！」

ハイテンションの男の低い声が、妙にリズムにのっている着うた。いや、それは自分で登録したんじゃないの？と、千鶴は心の中で突っ込む。周防は、学ランの前ボタンを乱暴に取り払い、灰色のカンガルーのような腹ポケットに手をつ込んだ。そして、変なメロデューを振りまきながら、振動する赤の携帯を取り出すと、耳に押し付ける。

「HEY、ユー！どちら様？」

『あ、もしもし？俺だけど』

「俺って誰だよ、ナ・ノ・レ。HEY、ユー！」

『なあ、今はランプモドキやめろよ。聞きづらい。俺だって、奥村』
「ああーなんだ、奥村か。」

急に、冷めたとたんばかりに周防の声はトーンダウンした。

『何気にひどくない？それ』

「どうでもいいじゃん。で、何？」

『そっちに輝行いた？』

周防は千鶴を見て、顔横に振った。

「いねえ。今千鶴ねえちゃんと密会してたんだ」

また、この子は・・・言葉の意味分かっているのだろうか、と千鶴

はばやきそうになる。

『へえ。こつちにもまだ来てない・・・あつ、キザ先生!』

昼休み中、生徒が行き交う学校の廊下を、奥村は歩きながら周防と電話で話していた。すると、目の前を木崎先生が通り過ぎた。

「へえ。こつちにもまだ来てない・・・あつ、キザ先生!」

「ん?」

木崎先生は顔だけ振り向いた。

『ああ? キザ先、そこにいんのか?』

受話器から、一気にテンションが上がった周防の声が漏れる。

「おお、周防か?」

『キザ先、何でそこにいるんだよ?』

「何言つてんだ? 学校にいて、何がおかしい。さては、外にいるんだろう? 一回授業さぼることに、練習量増えること忘れていないか?」

『げっ、』

「凶星だな」

「・・・どうでもいいけど、キザ先生。止まってよ」

携帯を掲げて、早歩きで木崎先生の後を追いかけてきた奥村は、吐く息荒くそう言った。

「ああ、悪い」

まったく、周防といい、木崎といい、どういう神経しているんだろう。両手をズボンのポケットに突っ込んで、両腕に大量の教科書を挟み、顔だけ振り向かせ、走るように歩くなんて・・・こういう人間だ! しかし、木崎は「どうした?」と何もなかったように平然に言う。

奥村は、こういう人でしたと、空虚にぼやいた。

『仕方ないだろ。フジオがいねえんだもん』

受話器の向こうで、続くように周防がぼやいた。

「藤尾がいなくて？ふうん。そうか・・じゃあ、あれは藤尾なのか」

『えっ、何？』

「キザ先生、何か知っているの？」

視線を上に向けて頷くように言った木崎先生。それに、周防と奥村は飛びついた。

「さっき、学校に電話が掛かってきてな。うちの生徒が路上で倒れているのを発見されて、十字路の商店街近くの稲田医院に運ばれたそうだ」

「え、それって行輝なの？」

『うおおおお！そこか！稲田のじいちゃんの所か！待ってるよ、フジオ』

急にうめき声を上げた周防。木崎先生は「おい、待て。まだ続きがある」と、言いかけるが・・

『ありがとう、キザ先！・・ブチッ』

二人は一瞬、白くなった。周防が話を最後まで聞かない奴だとは二人も分かつてはいた。しかし、あからさま過ぎて、どう反応していいのか分からなくなる。木崎先生はため息をついた。

「あいつ、絶対勘違いしているなあ」

仕方ないと、奥村は割り切って。

「キザ先生、続きって何なの？」

「いやなあ、その生徒が誰なのか分からないから、とりあえず様子を見に行くことを含めて、斉藤先生が生徒を引き取りに行っただ」

「え、斉藤先生が？」

奥村は咄嗟に、まずいなど、零す。

「ああ、知っている。今朝、斉藤先生に言われたばかりだよ。周防に甘いんじゃないのかって。・・それで、あいつは今どこにいるんだ？」

苦笑いをしながら言った木崎先生に、奥村は苦勞しているんだなと少し同情した。

「行輝の家だけど、もういないんじゃないかな？」

「そうか・・また、揉めなければいいんだが」

二人はさり気なく顔を合わせて、ふつと言葉も交わさずに、正反對の廊下を歩いていった。

予鈴のチャイムが二人の背中に、鳴り響く。

1 - 5 (後書き)

次回、ついに周防はフジキ、発見か・・・!? 「うおおおお
おおおお」 b y M r . A G

「ありがとう、キザ先！」

ブチっと、爽快に電話を切った周防は、笑顔で千鶴を見る。

「まっ、そうゆうことだ」

「どういうことよ、．．まあ、行輝が稲田さんの所にいるってことは、分かったわ」

もう、言葉はいらないわ。と千鶴は、納得し。周防は、うんうん、と頷いた。

そして、携帯を腹に仕舞うと、両腕を広げ、空気を胸いっぱい吸い、はぁーと搾り出すように息を吐き出した。

「ほんじゃあな、千鶴姉ちゃん」

腕を上げ、膝をまげ、ポーズをとると、

ワン．．．

ツウ．．．

スリー．．．

B
e
e
e
e
e
e
e
e
e
e
e
!!
By・誰かの声

グ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ

周防は物凄いスピードで加速しながら、盲ダッシュして行った。

「あの子……本当に足速いわね。さすが、県一！」

千鶴は真顔で感心しながら、ぼんやりとそう呟き、戸を閉めた。

一方、その同時刻。

「王手！」

将棋盤の上で、『飛車』という敵軍が、稲田氏の『王』様を落としていた。

「
・
・
待つてくれえ」

「待ったは無しだ」

低い声が、まるで威厳に満ちた、武士のような言い方でそう言った。

「器がせまいのお。少しぐらい、ええじゃろお？」

「駄目だ」

「ええじゃろ？」

「くどい」

「けちじゃのお。そんなじゃと、女の子にモテンぞ」

診療台の上、将棋盤を挟んで、稲田氏は皺だらけの目を細めた。
すると、漆黒の髪の方が言い返す。

「どうだっていい。それより、あんたの負けだ。今度の旅は連れて
行ってもらうからな」

「だから、それはいかんと言うとるじゃろ」

男は、不機嫌に眉を顰める。

「なんでだ？俺が勝つたらいいと言っただろう」

「それは、お前が勝手に言い出したことじゃろ。わしはいかんと言
うとる」

梃子でも動かないと言い切る、稲田氏。男も負けじと、眉間に深
く皺を刻み、睨みつける。

両者、視線がぶつかる先で、パチパチと赤い火花がめ飛び散って
いた。

「おじゃまします。明雲高校の斉藤というのですが、」

ノックの音と共に、ドアを開けて入ってきたのは、見た通りの斉
藤先生。

「うちの生徒がこちらへ運ばれたのとお聞きして、引き取りにきま
した」

「ご丁寧に挨拶をした。」

「ああ、早かったですな」

ここは一時休戦と、稲田氏は男に目配らせし、診察台から降りた。
「あんたんとこの生徒さんは、向こうで寝かせているんですわ」

稲田氏は診察室の外を指差した。それに、斉藤先生は目を向ける。
「よく寝とりますからなあ、お起きるじゃろうか」

ぼやくように言った稲田氏。ふと、斉藤先生が、未だ診察台に座る男に視線を移した。

「君は、確か・・・」

「ああ、巽ご存知なので？」

「ええ、鳴滝巽くんを知らない人はいないでしょう」

斉藤と目が合った鳴滝は、軽く会釈し、流れるような黒髪が、さりりと整いに整った男前の顔にかかる。

それを手で払いのける仕草は、・・・たまらく色っぽい。

1 - 6 (後書き)

次回、『鳴滝 巽なるたきたつみ』!? ダレ、ナニ、バトルBゲー
ム初の色男登場!?! 「頑固者じゃ」by・稲田氏

「鳴滝くんといえば、ラグビー部のエースじゃないですか。僕は明雲高校のラグビー部副

顧問なんでね、秋の大会にも顔を出したんです。鳴滝くんのタックルは力強かったなあ」

斉藤は酔いしれるように、そう言った。

「ふむ？ 異、お前はラグビー部じゃったのか？」

知らなかったと、稲田氏は鳴滝を見た。すると、鳴滝は真顔で。

「いや、俺はラグビー部じゃない」

「えっ？ でも、君はラグビー部だって、葛岡高校の笹井先生がそう仰ってましたよ」

斉藤は、笹井先生には去年からお世話になっていまして、と人差し指を振りながら喋る。

「どうなんじゃ？」

さつきと同じく、稲田氏は鳴滝を横目で見る。

「違う。笹井が勝手に言っているだけだ」

「じゃあ、どうして試合に出てたんだい？」

興味津々で、斉藤は鳴滝に聞く。

「・・・あれは、人が足りないからと頼まれただけだ」

「あれ？ 葛岡高校はラグビー部五十人以上いるって聞いたけど」

「・・・」

急に黙り込んだ鳴滝。どうやら、そこら辺は触れてはいけなかつ

たらしい。

見た目はいたって、色男全開の真顔だから、感情が読み取れないが、どこか禍々しさが伝わってくる。

斉藤先生は、手に汗を掻いた。

「あつ、やっぱり斉藤先生じゃん」

ふと振り返ると、開いたドアに凭れかかるように、小沢が立っていた。はあはあ息は荒く、顔も赤い。

「小沢、大丈夫なのか？」

「・・・大丈夫に見える？」

近づいてきた斉藤に抱きつくように、小沢は雪崩込んだ。

「相当酷いな。とりあえず、そこに座らせてもらえ。あと、稲田さんと鳴滝くんに礼を言っただぞ。」

鳴滝くんは、発見してわざわざここまで運んできてくれたんだ」

「はっ？鳴滝？」

椅子に座った、小沢はビクツと顔を上げた。

「あつ、あんた・・・」

垂れた汗が、こめかみを辿って首を流れる。

・・・緊張の一瞬だ。

「うおおおおおおお！！稲田のじいちゃん、フジオはいるかあ？？」

ペンキ（赤）に顔を突っ込んだように赤く、顔中汗をおびただし
い流している。

ある意味、小沢より重症の男が乗り込んでいた。・・・緊張、ぶ
ち壊し。

「かつ、閣下！」

小沢は嬉しそうに振り返った。

「ん？おお、コザワンじゃないか！！何やってんだ、こんな所で」

一応、ここ病院なのですが・・・音量、放送用。

「お前こそ、何やっているんだ！」

斉藤先生の拳骨が、周防のパーカーの上に落ちたのは当然。

「痛つてえ。つて、なんで斉藤先生がこにいの？」

「それは、こつちの台詞だ。周防、お前、学校抜け出てきたんだ
な。朝言ったこと聞いていなかったのか？」

「何か言つてたっけ？」

首を横に倒して、「何？」と周防は言う。

それに斉藤先生は、額に血管が浮き上がるほど、力強く拳を握りし
めて、プルプルと震え始めた。

蒸気が立つんじゃないのか？と、小沢は真ん前にいる、斉藤先生
を観察していた。

・っつと、周防。斉藤先生の後ろに何かいるのに気がついた。すこし、体をずらして、覗き込む。すると、

「!」

声にならないのか、大口開けて、しばらく停止あゝ・始動開始まで、

あと三・

二、
一

「ナルオカ!!!てめえ!!!」

1 - 7 (後書き)

*次回、「さっ、一番顔が赤かった人は誰でしょう?」by コザ
ワン・・・え、それ予告なの!?

「コザワン、揉めごと嫌いなんだよ」by 奥村from 今、出
番ない協会

木崎先生からの猛注意

若干(一ミリから五センチの間)、凶暴になる恐れがあるから、
痛い・怖い・駄目な人は、飛ばしとくように。

ふわりと蒸気が立ち、空気は一瞬にして緊迫化した。
野性的な鋭い目線が飛び交い、熱気と冷気が立ち込める。

「周防止める！」

斉藤先生の制止の声も手も届かず。目にも見えぬ速さで移動した
かと思えば、
構えていた周防の拳が鳴滝の顔面めがけて、豪速で打ち込まれよう
としている。

「周防！」

・・もう、誰にも止められない。
小沢は瞼を閉じた。

「何をやっとなるか、ここはわしの病院じゃぞ」

あっけなく、顎を殴って、周防の豪拳の軌道を反らし、足元まで
蹴り払って、転倒させたのは稲田氏。

フンと息を吐いて、周防を見下ろしている。

斉藤先生は安堵のため息をもち、小沢は恐々と薄目を開けた。
「じいちゃん、何するんだよ？」

周防は立ちあがって、牙でもあるような、険悪な顔で稲田氏の胸元を掴んだ。

「ばかもん、それはこっちの台詞じゃ。わしの病院で暴れるなんて千年早いわ」

お返しだといわんばかりに、稲田氏は周防の腹を殴った。

「うげっ」

腹が二つに折り曲がって、床に崩れた周防。

ようやく全開した目で、小沢は呟いた。

「あのじいさん、何者？」

「すいません、またご迷惑をおかけして」

斉藤先生が慌てて謝罪すると、稲田氏は、

「いやあ、気にせんでええ。こんぐらいの年頃じゃと、血の気が多くて当然じゃ。」

英司はまだまだ、技量が足りんが、筋はええ。鍛えれば、なかなかの武道家になれるじやろっ」

・・・あんた、周防を何者にしたいんだ。斉藤は、心の中で呟いた。

「はっ」

鼻から、息が通ったような笑いを零したのは、鳴滝。腕を組んで、勇ましく周防を見下ろしている。

・・・なんて、でかいんだ。小沢は息を二度飲み込んだ。

「無様だな」

鳴滝は極上の嫌味な笑みを浮かべて、「悪役かい！」って感じに言う。

けど、たまんない、悪い色気のオーラが依然、漂っている。

——しかし、ここにいるのは男臭い男ばかり。鳴滝、微妙に流し損だ。

「ナルオカあ！精々、今のうちに余裕ぶっこいてろ。

そんで、俺の『ストレート、ロイヤル、炎、龍、虎、竜巻、メガトンキック、銃弾パンチ』をくらって、天国で死ね！」

立ちあがって身構えた周防は、ピカリと目を光らせた。

「キュー、閣下ステキー！」

口笛（？）を吹いて、小沢は歓声をあげた。

・・・おいおい、もうどこに突っ込んでいいのか、分からないぞ。

斉藤は、なんでこんな中学生みたいな、生徒たちがうちの学校にいるんだと、泣きそうになっていた。

けれど、とりあえず先生は放つという・・・

まさに、雰囲気だけは明雲の勝利かと、思われた。

しかし、鳴滝を甘く見てはいけない。

「ギロツ」っと、超弱者小沢を睨みつけ（小沢、白化）、自分より背の低い周防にむけて、力強い蹴りを放った。

ガガガガシャンツ

当然のように、周防は軽々とそれを避けたが。後ろにあった、ガラスの入った棚は、かわいそうに、豪蹴が直撃し。

吹っ飛んだ上に、ガラスが粉々に飛び散った。見るも無残。

「ひいっ」

もう、小沢怖くて失神しそう、斉藤に抱き。

この状況には、斉藤もビックリ。啞然として、極悪な顔の二人を見つめていた。

「相変わらずの、弱々キツクだ。そんなの、俺に効くわけないじゃん。」

大体、クズのナルオカが、このスオウエイジ様に勝てるわけない！」

「・・・」

すっぱり、きっぱり、堂々、清々。周防は言い切り、鳴滝を邪惡に目を細めた。（けど、それでも色気があるんだな）

そして、メラメラと殺気がどこからともなく、部屋に溢れ返り。

小沢は斉藤に抱きつきながら、

「俺はここに居ない」「何も見てない」「何も聞いてない」と、ぶつぶつ呟いていた・・

1 - 8 (後書き)

次回、うつわあ、．．．ヤバイ雰囲気!?でも、「俺は何も知らない」by・コザワンの眩き

念の為の、木崎先生からの猛注意

作者の気分次第で、凶暴になる恐れがあるから、
痛い・怖い・駄目な人は、もう一度、飛ばしとくように。

チャラッチャラッチャラ〜チャチャッ ♪

『Ah、ニードウ!』

チャラッテャラッチャラ〜チャチャッ ♪

『Ah、インポータント!』

チエキッチャラッチエラ〜チエチャッ ♪

バギッ

「あっ」

斉藤先生は間抜けな声をあげて、驚き。そして、見てしまった。

あれは、一瞬の出来事だった、周防の変な着メロが鳴った瞬間。
周防はいちいち学ランのボタンを外して、ポケットの中の携帯を
取り出し。

——一方、鳴滝は顎を俊足が一撃、壁に吹っ飛んだ。

「ホオオ！わしの診療室を壊すなんざあ、千億年早いわ！」

荒い息を吐いたのは、他でもない、稲田氏だ。中国拳法のような仕草で、腕をくるくる回し、足位置を変える。

「おい、誰だよ？」

その傍では、周防が気にもせず、携帯に向かって怒鳴っている。

「何なんだ、こいつらは・・・」

斉藤先生、呆れて果てて、診療ベッドの上に座った。抱きついたままの、小沢まで雪崩れ座り。

小沢は、「もう、終わったの？」と、顔をあげた。

相変わらず、くねくねと構える稲田氏と、携帯に怒鳴っている周防。

壁にぶつかり、床に崩れ落ちる鳴滝を見て、小沢は一言。

「さっさすが、閣下！明雲高の英雄！」

何も見ていないくせに、ガッツポーズと声援を送った。

斉藤先生はもう無視を決め込み。「お前の風邪がうつったみたいだ」と、頭を抱えた。

「そりゃあいかな。わしが看てさしあげよう」

普段の稲田氏に戻ると、ベッドに横になるよう指示し、机の上から電子体温計を取り出して、脇に挟むよう、斉藤先生に渡した。

「お前さんはもう、大丈夫か？」

立ったままの小沢に、稲田氏は言った。

「えっ？」

一体何のこと？と首を傾げた、小沢。

「熱じゃよ」

稲田氏は小沢の額に手をあて、「もう、下がったようじゃな」

となんでもない風に言う。

「あつ、そういえば、身体が急に軽くなった気がする」

「四十度もあつた熱が、ものの一瞬で、見事に下がるとはな。お前さんもやるもんじゃ。」

「どうだ、英司と一緒に鍛えてみんか？」

「変な勧誘をしないでください」と、言いたい所だが、斉藤先生は何も聞かなかった振りをした。

「いいえ、俺は陸上部のマネージャーなんで・・・」

「うおおお、何だよ！晩飯まで抜きとか、ふざけんなよ、キザ先！」

絶叫した周防に、小沢は話の途中で、「閣下？」心配そうに顔を周防に向けた。

「だって、フジオがどこにもいねえんだ。俺が探さないと！・・・えっ、用？用なんてないけどさ、

朝なんで来なかったか、知りてえし。ほら、休み取れなかった訳だし。

「って、どうでもいいとか言うなよ、俺にとっては死かつ問題だったんだって。」

「・・・はああ？すぐ戻ってこい？嫌だって、俺はフジオを探しに・・・えっ、稲田のじいちゃん所は・・・」

周防は片手から耳を離し、ブンツと首を捻った。

「稲田のじいちゃん、フジオはどこにいんの？」

体温計を受け取った、稲田氏はデジタル盤を見ながら言う。

「藤尾さんの坊っちゃんなら、おらんぞ」

「どっか行つたの？」

「最初っから、おらなんだ。・・斉藤さん、あんた本当に熱があるようじゃ」

身体を起こした斉藤先生に、稲田氏は上着を捲るように言い、聴診器を耳につけた。

「キザ先生ですか？」

小沢は、嬉しそうに周防に近づいた。

「そうなんだよ。ここに、フジオがいなかったら、すぐ帰ってこいつて言うんだ。」

もし、行かなかったら、キザ先の奴、真冬なのに100キロマラソンしろとか、晩飯一週間抜きまで言ってくるし。

・・俺なんで、あんな鬼コーチのいる学校に行っちまったんだろっ」

「泣きそうだ」と言う周防に、

小沢は平気な顔で、「でしたら、俺がタイム測り、付き合いますよ」と笑う。

まったく、話が噛み合っていないが、二人とも気にしていないらしく。

「新しいストップウイッチ買ったんで、早く使いたくて」

「って、あれ？俺なんで走ってばかりなんだ？」

『周防、小沢、自分の言いたい事を、言い合つのは勝手だが、稲田さんや斉藤先生に、これ以上迷惑をかける前に帰ってこい！』
受話器越しに聞こえる、木崎先生の声。

小沢は携帯に向かって「こんにちは」と叫び。

・・聞こえていたのか、と周防は返事もせずに電話を切った。

「ああーあ、帰らないと」

「今日の走りこみは、何十周でしょうね？」

うんざりした顔で携帯を腹ポケットに仕舞う周防に、活き活きとした顔で話す小沢。

「そのコザマン。今日は家に帰って、ゆっくりと休まんといかん」

「ええっ、でも、さつきは見事に下がって？」

稲田氏は小沢の学ランの襟を掴んだ。

「さつきのは、冗談じゃ。一時的に下がっただけで、またすぐ熱が上がってくる。」

さつさと帰らんと、また倒れるぞ。医者命令じゃ、今すぐ帰れ」

「そんなぁ・・・」と稲田氏に襟を掴まれたまま、部屋の外へと引っ張られていく。

「あ、稲田のじいちゃん！」

周防は、稲田氏を呼びとめ。小沢は助けしてくれるのかと、目をメルヘンチックに輝かせた。

「なんじゃ？」

「そいつ、コザワンだから。まちがっても、『コザマン』じゃないから」

ちよつと馬鹿にした言い方でそう言い、稲田氏はどれも同じじやと、玄関へと小沢を引きずって行った。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

斉藤先生は腰をあげて、稲田氏の後を追うように玄関へと向かう。

周防も頷いて、後に続こうとして……

「あああああああああ！」

「今度は何だ？」

「ナルオ力はどこ行っただ？」

周防は診察室を振り返って、キョロキョロと目線を探しても誰もいない。つと、視線の端の方に誰かいた。

「そこにいたか、ナルオ力！って、あれ？何やってんだ、あいつ」
様子を窺うように、周防は眉間に皺を寄せたまま、壁に崩れ倒れている鳴滝に近づいた。

「おい、ナールオーカー！」

シャツの首元を掴み、うな垂れた顔を無理やりこっちに向けた。
目を閉じて、長く黒い睫が見え、顎が若干赤い。

「死んでるのか？」

周防がそう言った瞬間、その目がパツと開き、険悪な顔つきで周防の手を剥がそうと驚愕んだ。

「へっ、やっぱリクス高だな。死んだ振りなんて、バカみたいな作戦で、この俺に勝てると思うな！」

周防と鳴滝は一斉に拳を握り、互いの顔目掛けて腕を振り動かした。

ゴンッ

「うおおッ痛つてええええ」

「くっ」

二人の頭に拳骨を振り下ろしたのは、誰もが知っている斉藤先生。
「いいかげんにしろ！行くぞ、周防」

周防のパーカーを掴んで、引つ張り出した。

「ギャー、ちよつと、斉藤先生。首が絞まるつて！」

ピカッと反射する丸裸の頭の周防は、必死に締まるパーカーと自分の首の間に手を挟んで抵抗している。

・・・しかし、斉藤先生の我慢はとつくに超えていた。

「こうでもしないと、また喧嘩するだろう。木崎先生に罰則を増やしてもらってから、覚悟しとけ！」

「はあ？関係ないって、それとこれ」

こうして、周防は文句を言いながら、ズルズルと斉藤先生に連れて行かれた。

今日、一番可哀そうな鳴滝は、壁に頭をぶつけて二度目の失神。
騒がしい物音や登場人物達の声を聞きつけ、部屋に誰かが飛び込んできた。

「五代目！」

黒いシャツに白い水玉、ベンツの運転手だ。

運転手は、壁に凭れて伸びる、鳴滝に慌てて駆け寄り。そして、叫んだ。

「ごたいめえええええええええええ！」

「うるさいわ！」

戻ってきた稲田氏は、無慈悲に運転手を蹴り飛ばした。

1 - 9 (後書き)

*次回、「わしにできない拳法はない！」by・稲田氏 「両方とも、蹴り技じゃねえ？」by・AG
って、多分……もうフジオを見つからない!?

「それでも、AGは諦めないぜ」by・奥村 from・もう、今出番ないの協会

「あー」

明雲高校のグラウンドで、周防は無気力な声をあげた。

「こら、しっかりと走れ」

木崎先生が笛をピーと鳴らしながら「ほらほら」と手を払い。

周防は恨めしそくに木崎先生を睨みつけ、勢いをつけてもう一周走り出す。

「あーっつまんねえ！」

「おう、おう。英司の奴、おもしろく荒れてるなあ」

校舎の四階、窓枠に身を乗り出して、一学年上の荒俣が楽しそうにそう言った。

「今日一日、藤尾がいなかったんすよ」

机の上で携帯を弄りながら奥村は答えた。

「周防の奴、彼女いたよな？確か、商店街に」

「輝行は別なんですよ」

「へえ？英司も物好きだねえ。・・・そういえば、あいつらどうやって知り合っただんだろう？ クラスも違うし、部活も違うし。接点なんてないじゃん」

「さあ？英司がある日、ひょっこりと輝行を連れてきたんで、俺は知りませんよ」

普通に出会っただんじゃないですか、と言う奥村に荒俣は噴出した。

「あいかわらず、適当だなあ。お前ら、見ていて飽きないわ」
「先輩こそ」

荒俣は腹を抱えたまま、奥村を振り返って。

「・・・で、バイトは？」

「今日は休みです」

「珍しいなあ。奥村は勤労学生だとばかり思っていたけど？」

「珍しく休みです」

「へえ」

たいてい、興味もなく頷いた荒俣は、赤髪混じりの髪を撫でた。

・・・二人の淡々とした会話は、ここで一旦止まり、

奥村は携帯の画面から顔をあげず、荒俣はだらしない顔で廊下を眺めていた。

部活中の野球部の掛け声が、グラウンドから聞こえてくる。

「おっ、お出ましじゃん」

荒俣の笑いを含んだ声に、奥村は顔をあげた。

ドアを凭れかかるように開けて、しんどそうにゼイゼイと荒い息を吐いて、目が若干血走っている。

「輝行！」

・・・藤尾が肌蹴た学ランの肩から、鞆を背負って立っていた。

「おもしろい格好。襲われたの？」

冗談を言う荒俣に、奥村は立ち上がって藤尾に近づき。

「どこ行ってたんだ？英司がずっと探していたけど、・・・大丈夫かよ？」

立っているのも辛いのだろうか、よろめく藤尾を支えた。

「やっと、逃げられた」

藤尾は泣きそうな顔でそう言い、安心したのか、ずるずると椅子に崩れ座った。

荒俣は面白いネタを発見したとも思っただろう。急ににんまりした顔をして、藤尾を覗きこんだ。

「誰から逃げていたの？」

幻覚を見るかのように荒俣を見て、

藤尾は「荒俣先輩・・・」と呟き、ため息をついた。

「なんでこうも、俺は運がないんですかね。あのバカといい、あの坊ちゃんといい・・・」

剣道部の事で一杯いっぱいなのに「

誰のこと？」と荒俣は奥村の顔を見た。

「門倉学園の東ですよ」

「東？」

「フランス人と日本人のクォーターで、えらい金持ちらしいんですけど。知りませんか？」

「知らないなあ。けど、お坊ちゃん学校の子が、またどうしたの？」

「藤尾のファンらしいんですよ」

「ファンだって！」

荒俣は「そりゃあ面白い」と笑った。藤尾は不機嫌に、頭を抱えて込んだ。

「笑いごとじゃないんですよ。今朝なんて・

『あれ、藤尾くんじゃないかい？』

フラフラと藤尾が歩いていけると、白いベンツが目の前に止まり、黒い窓ガラスが下へと開いていく。

『・・・ああ、東くん』

焦げ茶色の長い髪をさらりと無意味に払い、黒いスーツを着た、門倉学園高校の生徒は微笑んだ。

『おはよう。こんな時間に君と会うなんて、偶然だね。』

今日は朝の剣術の稽古はないはずじゃないのかい？」

なぜ、東は他校の、しかも友人でもない藤尾の部活の予定を知っているのだろう。

疑問に思うものの、頭がガンガンする藤尾は早く会話を終わらせて、そそくさと言う。

『朝練はないけど、約束があって・・・』

『もしかして、あのツルツルとじゃないだろうね？』

『ツルツル？』

『周防英司だよ。あんな宇宙外生物ほかにいないよ』

爽やかな顔で東はそう言って、毒を含んだ笑みを浮かべた。

藤尾は苦笑いしながら、会ったびに、周防の呼び方が変わっているような気がする。

『あんなツンテルドッテンといたら、君までバカになるよ』

どんな名前だよ、と暢気に考えていると、東の白いベンツから黒服にサングラスをした巨大な外人が一人出てきて、

「乗れ」と命令しているかのように、ベンツのドアを開けた。

『さあ、今日こそは門倉学園に行こう』

「それから・・門倉学園に着いたら、着いたで、校内を一周案内させられ。熱があるみたいだと言われて、ホテルの様な保健室で、寝かされたと思えば、編入届けにサインさせられそうになったり。

学食を食べようと連れて行かれたら、全校生徒の前で、自己紹介させられたり

・・ちよつとした隙に逃げ出さなかったら、今頃もつと悲惨なことになってたかも知れない」

げっそりとそう言う藤尾。奥村は「お疲れ」と、藤尾の肩を叩いた。

「東も本格的になってきたな」

「いつか、無理やり編入させられそうだ」

「へえ、面白い・・じゃなくて、なんでそんなに藤尾に構うんだろっ?。」

「さあ？英司は武士みたいでカッコいいって、言っていましたけど」

「武士かあ、藤尾だったらそう見えなくもないけど・・・」

荒俣は藤尾をじっくりと見る。

確か、藤尾は時代劇でよくある鬘や着物が似合いそうな、細く釣り上がった二重の目と、薄い唇、

そこそこ低い鼻の日本人らしい整った顔のつくりをしていて。まして、剣道なんてやっているものだから、

無精ひげをつけでもしたら、若い武士に見えてもおかしくない。

「だけど、過激だねえ」

奥村は相槌を打つように、頷いた。

「うおおおおお！！アズマ！！なんで、てめえがうちの学校にいるんだよ！！」

「うるさい、野生人！」

「うそだろう？」

三人は窓に急いで駆け寄った。

グラウンドの入り口で、野球部の掛け声よりも、

さらにデカイ声で周防と東が制服とジャージの首袖を掴みあって、叫び合っている。

「僕は藤尾くんを連れ戻しにきたんだ。君に指図される覚えはないよ！」

「はああ？フジオ？なんだ、てめえが拉致つていたのか！！」

「拉致？無礼な！僕は彼が本来いるべき場所に連れて行っただけだ！」

「本来だあ？フジオは一生、うちの学校にいるんだよ」

「一生いるわけがないだろう！」

つつい、いつもの癖でそう怒鳴った藤尾。耐え難い疲労と熱に身体が限界に達したのだろうか、ブチッと血管の切れる音と共に、気を失って頭から真後ろへ倒れていく。

「「藤尾！」」

「おっと」

奥村は慌てて、藤尾を抱きかかえた。

それを見てほっとした周防と東は、再び向き合って、

「マネすんな」「お前のせいだ」
と、罵りながら二人はお互いの髪やら頬やらを引っ張り合い。

「おい、止める！」

止めに入る木崎先生やら、他部活の顧問達やら、周防を応援する生徒達の歓声がそれに加わって、
グランドはさらに騒がしくなってきた。

「やべえな」

奥村は熱を持った鉄板のような藤尾を額から手を話し、藤尾を背負って廊下に走っていく。

そして、グランドを見ながら、荒俣は一人腹を抱えて言う。
「おう、おう。楽しみじゃない、今年のバトルBゲームは！」

一日の終わりのチャイムが、始まりを告げるように明雲高校に鳴り響いた。

1 - 10 (後書き)

不幸な剣道部員、藤尾 行輝 失踪（拉致・勧誘）から始まったバトルBゲーム。

そろそろ出てくる、登場人物に脇役達。

果たして、まともな人間はいるのだろうか………

以上、第一話 完結！！

次回、第二話

いい男 鳴滝巽の素顔が知れる！？

AG「ええええええ！！ナルオカなんて知るかよ！！明雲高アンコール！！」

？「てめえ……若を侮辱するな！」 AG「ああ？やるかあ？おっさん！？」

………さあ、どうなる！？

と、その前に

<<89-lux>>http://89lux.tiriren
ge.com/ にて

バトルBゲームのバックストーリー『RED ZONE PART
Y』任意制ページにて

公開決定。バトルBゲーム 第二話は少々お待ちくださいませ。

2、葛岡高校仮ラグビー部 鳴滝巽 改心!?

——あの日、

ドシャ降りの雨は、何を洗い流そうとしているのだろう。
飛び散った血で視界を奪われても、雨は何も落さなかった。

そう、何も、何もなにも・・・嫌な記憶しかない。今も、昔も。
ずっと、ずっと —— 血まみれだ。

『出て行け』 『わしはなあ、ヤクザなんて怖ない』 『愛している』
『生まれてこなければ』
『化け物!』 『血が好きなんか?』 『いやあああああああああ
あ』

「ぎゃあああああああああああ」

突然夢の中で重なった悲鳴は、妙に近く、耳にすぐ傍で聞こえる。眠っていた鳴滝はハッと、ベッドの上から飛び起きた。

「・・・なんだ？」

「ぎゃああー出た！出た！」

隣で稲田氏の孫娘杏里が、カーテンを掴んで床を指差している。鳴滝は目を細めて床を見るが、そこには何もいない。

「何が出たんだ？」

「あれよ！あの黒いのー！」

杏里はほの暗い机の隅を指して、泣き叫んだ。

鳴滝は「ああ」と、一息をつく。泣き喚くほどのおっかない黒い物なんて、だいたいは黒い物体しかない。

——一応、ここは医院で清潔なはずだが、あっちの方は、場所はおかしいな。

くだらない理由で起こされたな、と思いながら鳴滝は緑のスリッパに足を滑らせる。

「巽くん？」

ポロポロと泣く杏里。普段は男に劣らないほど男らしい度胸の持ち主だが、さすがに弱点はあるらしい。

「殺虫剤持ってくる」

鳴滝はぼそつとそう言い。杏里が指差した机を素通りして、廊下に出た。

「ええ！ちよつと一人にしないでよお」
杏里の声だけが鳴滝の背を追った。

——今日は日曜。

当然のように病院は休みで、廊下にある待合所はがらんとしている。

平日とあまり変わらない気もするが、そんな事を言えば、稲田氏に追い出されるにきまっている。

なんたつて、大病院の院長をやっていた稲田氏が、善意で親友が譲り受けた病院だ。金が目当じゃない。

ペタペタとスリッパを鳴らせ、鳴滝は待合所を通り越し、廊下の先へに向かう。

この小さな医院のどこに何があるのかなんて、物覚えのいい鳴滝はことの一ヶ月でだいたいを把握し、

一年でもう馴染み。稲田氏以上に、医院のことをよく分かっていた。

鳴滝は壁から飛び出た二つの取手を掴み開いて、中から殺虫スプレーを探す。

暗い押入れの中は隅々まで綺麗に整理整頓されていた。

鳴滝が今朝、週一回にやっている掃除をし終えたばかりだからだ。

さっさとスプレーと見つけた鳴滝は、扉を閉め、部屋に戻る。

「ぎゃああ！英司、そっち行った！」

「うおおおお！こらあ、俺様から逃げられると思つなよ！死ね！」

赤いジャージ姿の周防が、木のバッドを片手に無闇に地面を叩き、隣では杏里が叫びながら指示している。

——いつの間に来たんだ。

さっき、間違いなく鳴滝は廊下にいた。

医院の入り口は、廊下の押入れとは反対側にあり、誰かが入ってきたら一発で分かる。

「・・・足が速いからか？」

鳴滝は質素に呟いた。

めちやくちやな周防の攻撃と、うるさい杏里から逃げてきた黒い物体を鳴滝はスプレーで秒殺。

周防と杏里は思わず、声をそろえた。

「「あつ」」

シューツという音と、白い煙が物体を包む。

「お前たち、馬鹿だろう」

スプレーを噴き切った鳴滝は、鼻でフツと粹に笑う。

さすが、いい男だ、嫌味も男前。

——もしも、杏里の趣味が普通なら、周防じゃなく鳴滝に落ちていただろう。

しかし、杏里はただものではない。なんたって、稲田氏の孫だ・・・

とりあえず、物体が絶えて安心したのか、杏里は回転椅子に腰掛けた。

周防はスルスルのデコに皺を寄せて叫んだ。

「お、お前！俺の敵をよくもおおおお！！覚悟しろよお、ナルオカあああ！」

バッドを振り上げた周防。杏里は机にあつた鉄の器を周防の顔面に向け投げた。

——しかし、当然、周防は杏里の投げた器をひょいと避ける。

「何にすんだ、杏里！」

「それはこっちの台詞よ！あれを殺してくれた巽くんに、感謝するなら分かるけど・・・」

あんた、何してんのよ！」

「決まってるだろ、これで殴るんだよ！」

バッドを杏里に見せ付けた。木だから光るはずがないのに、光っているように見える。

「そんなので殴ったら、死ぬでしょう！」

「死んでいいんだよ、ナルオ力なんて！」

ほっとけよブスと喚く周防に、

杏里はすつと立ち上がり、周防の襟を掴んで引寄せた。

「われえ、あたしに何て言ったあ？」

杏里のドスの効いた声は、かわいらしさの微塵もない。ギョウギユウと襟を締める。

「うつ・・・この男女、俺に喧嘩売ってんのかよ！」

女相手でも負けるつもりはない、と強気に言い張るのはいいが、杏里はもうすでにカチーンときてしまった。

——乙女に向かって、男女ですって!!

杏里は顔をゆらりと、鳴滝に向けた。

「ウッフ、巽くん。もう、帰った方がいいわよ。あたし、もう手加減できなくなりそうだから・・・
地獄を見たいなら、いてもいいけど」

静電気で逆立った髪が風で揺れているだけなのだが、まるでこれが杏里の恐怖だといわんばかりに、
ごわごわとゆれている。

グロスがのる唇の口角が最大限に持ちあがる。

「・・・」

杏里の極上の笑みに悪寒を感じた鳴滝は、スプレーとその場に置き無言で走り去るように医院を後にした。

黒いベンツの前には若い男が一人。

20代前半といった所だろう、茶色髪に緑の原色シャツと黒いスーツが悪さを着飾っている。

いつもの運転手である舎弟渋谷が、先日、稲田氏から受けた蹴りで全治二ヶ月の足の骨折。

そのため、代行に起用されたのが岸边龍平。ヤクザ歴三年だ。

「若！どうしたんですか？」

珍しく真つ青な顔をして医院から出てきた鳴滝に、岸边は慌てて声をかける。

——しかし、鳴滝は気だるさそうに「・・・何でもない、さつさと開ける」と言うもんだから、

これ以上は何も聞けず、言われた通りに後部座席の扉を開けた。

鳴滝は黙ったまま乗り込む。

・・・ほんとうに、色っぽい。ではなく、岸边は前の扉を開けて、稲田医院を振り返る。

ガチャンドカんと、騒音が外にまで聞こえてくる。

——あんなちつぽけな医院に、なぜ、若はこだわるんだろう。とぼんやりと岸边は思う。

日本有数の広域暴力団津幡組、その傘下でいちにを争うのは鳴滝

一家。

鳴滝巽は高校生にして一家の若頭で、次期組長。

噂では、津幡総長が直々に会いに来るほど、えらく気に入られているとか

・・・生まれた時から、ヤクザとしての人生は、何一つ申し分がないほど恵まれているはずだ。なのに、鳴滝はまったく見向きもしようとはしていない。

医院に、何の価値があるっているんだ・・・

「おいっ」

「あっ、はい」

鳴滝にせかされ、岸边は急いで車に乗り込み、運転座席のシートベルトを掴んだ。

2 - 1

葛岡高校仮ラグビー部 鳴滝巽改心！？（後書き）

*次回、岸边「いやあ〜渋川さんの代わりに登場なんて、おいしいしちやってすいません！！笑」

渋川「~~~~見舞いはシュークリームもってこいよ泣」

岸边「もちろんです！！笑」

明かされる・・・鳴滝一家！？（学校はどうしたんだ？）（

「ヤクザ」

そう聞けば、誰もが内心冷やっとして目を反らす。

目をつけられないように、関わらないように怖々と縮こっている。

小さい頃は、それがなぜなのか分りもしなかった。なぜなら、親父たちも舎弟たちも、怖くなんてなかったから。

さすがに怒るときは般若のごとく怒るが、普段はいたってどこにでもあるおっさんとそう変りはしない。

それどころか、とても親身になってくれる、いい親父たちだ。

ブルドックみたいなおどろくちや顔の津幡の親父も、イチゴののったシヨートケーキを食べる。

小指のない親父も、生クリームたっぷりのプリンを頬張る。

どこが怖いというのだろうと、ずっと不思議だった・・・

欠伸をかみ殺して、広すぎる大理石の玄関で履きなれた黒い靴を履いていると、

すぐ隣から不自然な視線を感じて、鳴滝は思わず振り返った。

すると、柔らかいカーゼのようなタオルを口に含んで、涎を垂らす三歳のガキが、

こっちをみてニタニタと笑っている。

そして、何を血迷ったか、制服姿の鳴滝に奇声をあげながら抱きついてきた。

涎がびっしょりと紺色のジャケットに垂れ落ちる。

——本当のことをいえば、今すぐにも蹴り払いたところだ。

だが、子供を蹴るのはなんだかバツが悪い、まして、このガキは津幡の親父の、何番目かの子供だ。

変な因縁をつけられて、組長集会に連れ出されるのは御免だ。

鳴滝はおろおろしながら、「どうした？」と優しく声をかけた。忘れているだろうが、鳴滝は色男だ。ムンムンとした空気を漂わせながら囁く声はホスト級。

面喰いの子供は声を高くして、さらにぎゅっと鳴滝に抱きついた。

——これには、溜息しかでない。

一人っ子として育った鳴滝は、こういう幼い子供の相手などしたこともなく、

どうしていいのか分らないものだから、取りあえずガキの服を引っ張って、無理やりにでも離そうとした。

「あついた、いた。莓ちゃん、やっぱり巽さんの所にきてたんだね」

従兄弟の石田肇が微笑ましくそう言って、遠い廊下の奥からこっ

ちに向かつて歩いてくる。

自分の子供ではないはずなのに、「苺ちゃん」と心底親しみを込めてガキの名を呼ぶ。

フレームのない眼鏡をかけたインテリ。――あながち嘘でもないが、肇はインテリだけに押し込めるのは危険だ。

なんせ、肇は津幡組でも最も過激派だといわれる派閥に属する、組きつての鬼畜生だ。

指切りからモザイク物までなんでも、涼しげな顔でさらりとこなしてしまうとか。

どうして、そんな危険な男が津幡の親父の、子供の面倒を看ているのか、鳴滝には理解できなかった。

――いや、本当のところなど、どうでもよかったのかも知れない。

「肇、こいつ離してくれ」

うつうつしく鳴滝がそう言うのと、肇は頷いて、

「ダメだよお、苺ちゃん。巽さんは学校に行かないといけないんだから、いい子だから離そうね」

苺という鳴滝にとってはただのガキを、抱き上げようとした。

けれど、苺はジャケットから小さな手を離そうとはしない。目を力一杯閉じて、

「いやあ、いやあ」と心底嫌そうにして叫ぶ。

しかし、肇は穏やかな表情を浮かべるだけ。

「困った子だねえ」

組きつての鬼畜が聞いて呆れるほど、肇は苺に甘い。

どうやったって、叱る気も力づくで引き離す気もないのだろう。とろんとした目で、苺に微笑む。

いい加減腹が立った鳴滝は、ジャケットをその場で脱ぎ捨て、よろ

めいた苺はジャケットを掴んだまま後ろに倒れた。
頭を打ったのか、「ぎゃああああ」と大声を出して泣き始めた。

—— 苛々とする声だ。勝手に人の気を逆撫でしといて、勝手に転
げて、勝手に泣いて、
嫌な記憶と重なり合うような気味の悪い悲鳴だ。

「なに、するんだ！」
急に真顔になった肇が苺を抱きかかえ、背を優しく撫でながら鳴
滝を見て凄んだ。

「傷つけたくなかったら、俺に近づかないようにしろ」
迷惑だと捨て台詞を吐いて、鳴滝は玄関を飛び出た。
いつの間にか準備していた舎弟達が、両脇に立って「腰を折り曲
げ、おはようございます」と声を合わせていう、

—— 恒例の儀式だ。
だが、鳴滝は「うるさい」と振り払うかのように一喝して、道の
先にあるベンツにただ飛び乗った。

学校への登校途中、岸边が「若、今朝は何かあったんですか？」
と心配そうに声をかけるが、
鳴滝はうんともすんとも言わずに、ただ無言で窓の外を眺めている
だけだった。

「おい、鳴滝！貴様、また部活をサボったな！」

横に並んだ青いボーダーシャツに黒い短パン、——葛岡高校ラグビー部の正式なユニホームだ。

部活中でもないのにそれを悠長に着て、鳴滝の目前で両腕を腰についているのは和久井トド。

もちろん、トドなんて本名じゃあないが、皆奴のファーストネームを知らない、

つまりは誰かが勝手につけたあだ名だ。

「俺はラグビー部じゃない」

パシリに出だした狩野を待ちながら、校庭脇のベンチに座っていた鳴滝は淡々と言った。

「嘘をつけ！このラグビー部正式部員名簿に、ちゃんとお前の名前が書いているだろう！」

どこから持ってきたのか、トドはA4の学習ノートを広げ、鳴滝に見ると叫んだ。

また・・・誰が書いたのか、横歪んだ乱暴な字で『鳴滝かつみ』と書いてある。

「ほろみろ！」

「俺の字じゃない」

——第一、俺の名前はたつみだ。自分の名前を間違えるか！

馬鹿らしいと、鳴滝は欠伸をする。だが、それでもトドはノートを見て熱弁する。

「何をあ？どうみても、お前の字だ！他の誰が書くっていうんだ！」

名前を指差してホラホラと言う。まったく、この学校でこんなにうるさく付きまとってくるのはトドぐらいだろう。

ラグビー部副部長のくせに、部長面なんていつものこと。鳴滝を見つけては、追いかけてくる。

溜息まじりに鳴滝は答える。

「知らん」

「——知らんだと？ちよつと顔がいいからって、誤魔化そうたってそうはいかない！」

何癖つけて説教でもする気なのか、トドは唾を飛ばしながら鳴滝に顔を近づけてきた。

あまりの不愉快さに、鳴滝は蹴り飛ばそうか迷うが、先に予鈴がトドを危険から守るように鳴った。

「・・・とにかくだ、今日はサボらせないからな！放課後迎えに行くから、逃げるなよ！なっ！」

気味の悪いウイंकを鳴滝に投げ、トドは跳ねるように走り去って行った。

——よく掴めない男だ、接しにくいにもほどがある。明雲高校の周防そっくりだ。

「お待たせしました。・・・また、トドですか？」

戻ってきた狩野の手には、二つのテイクアウトしたブラックコーヒー。

食後に飲みたいと言った鳴滝のために隣町まで行って買ってきたのだ。

「ああ。放課後帰るなど釘をさされた」

鳴滝は頷きながらコーヒーの入った紙カップを受け取り、蓋を取ってカップに口付けた。

それに狩野は「あいつ、何様のつもりなんだ」と、悪態をつきながら鳴滝の隣に腰掛け、猫舌なのだろう、紙カップから蓋を取って冷ましはじめる。

黒い長髪を後ろで一つに束ね、髭を生やした狩野はひどい老け顔だった。

鳴滝でさえ高校生には見えないのだが、二人が並ぶと一回り以上の年の差を感じさせられる。

だが、別に見た目なんてどうだっていい、大事な時には狩野ほど気を楽しめて付き合える友達はいないということなのだから・・・

鳴滝の容姿と古臭い性格に陶醉し、度が過ぎるほど過激で忠実な

舎弟は、子供から老人までごまんという。

家でも、学校でも、出かけ先でも鳴滝に取り入ろうと媚びを売りにきては、

傍においてほしいという一種の狂気を感じさせられるばかり。幼い頃からまともな友達もできた試しがなかった。

——大体、鳴滝は初めから、ヤクザになることなど端っから頭にないのに、

彼らはそんなことはおかまいなしに、「将来は立派な組長になりますね」と平然と言つてのけては、

手を揉んでハアハアと舌を出して、鳴滝の指示を待っている——無情な馬鹿犬ばかり。

さすがに、トド曰く、しつこい奴は滅多にいないが、「尊敬してます」とねちっこい熱い視線を見るだけでも、

鳴滝はうんざりしていた。

しかし、狩野は見た目通り大人というのか、べらべらと無意味な褒め言葉をまくしたてることもなく、

高校の入学式で知り合った時から、何ら変らない態度だった。

——確かに、犬ではあるが、静かで温厚な犬なのだ。何気ない会話のやり取りも苦にはならない、

ようやくできた友達らしい友達だといつてもいいだろう。

「帰りますか？」

黙り込んでいた鳴滝に、狩野が言った、——トドは、あいつからは早く非難されたほうがいいと。

しかし、鳴滝は首を横に振る。

「・・・いや。師匠がいない間は、保健医と将棋を打つことになっている」

——師匠とは、鳴滝が尊敬している稲田氏のことだ。

狩野もよくは知らないが、鳴滝は稲田氏と出会ってから、性格が百五十度ぐらい変ったという噂を耳にしたことがある。

以前はもつと咽帰るような殺気と色気があり、喧嘩が耐えなかったらしいが、

今では鳴滝は医院に通っては将棋をしたり、診察の手伝いをしたりしているらしい。

何があつたかは分らないが、鳴滝の信頼はすべて七十歳の老人に向けられているのは間違いなかった。

「——保険医といえば、女？」

狩野は入学式の時に見た、威勢のいい四十を超えた中年の女を思い出す。

「そうらしいな」

初めから知っていたのか、鳴滝は頷いた。

「巽さんの相手になるんですか？」

役不足ではないかと言う狩野。

負け知らずの鳴滝にとっては弱すぎて、相手をする時間ももつたいないといっているのだ。

「——女流棋士だ。強くなくては困る」

どこで仕入れた情報なのか、楽しそうに鳴滝はそう言って欠伸を漏らした。

2 - 2 (後書き)

*次回、周防「あれ？稲田のじいちゃん、ドコ行ったんだ？」

杏里「旅行よ」

周防「えっ！？旅行かよ、いいなあー。それで、ドコに旅行行くって？」

杏里「中国の・・・なんとかつて所よ」

周防「ドコだよ!？」

ラグビー部副部長トド、じゃあ部長は誰!？

将棋を俺に初めて教えたのは津幡のじいさん、つまり津幡の親父の父に当たる男だった。

津幡の親父よりもずっと気位が高く、大胆がさつで身勝手。気に入らないことがあると、すぐにじいさんは天国を地獄にかえてしまう。

鬼畜生と呼ばれる肇が蛇なら、じいさんは大蛇とっていいだろう。残酷と言う以外に、言い様がない。

——けれど、じいさんはそんな中にもしっかりと凜とした「誠」を忘れずに持ち、

多くの人間に慕われる要因もいくつもつくった。人も空気も射殺し、服従させ、

そこから生まれた敬愛と憎しみを自分の器に拾い集め、力に変えてしまう。

大蛇の動きには、何一つ無駄がなかった。

この世をよく知り、賢くより私欲的に動かす、

——組長として申し分ない、誰よりも組長という座に相応しい男だった。

——しかし、無駄のないはずのじいさんが一つだけ不可解なことをした。

天と地がひっくり返るほど、子供が嫌いだというのに、じいさんは津幡の親父と一緒に鳴滝の家に寄り付いて、

幼稚園児の俺に手取り足取り将棋を教えては、それだけの為に来たのか、

ろくに話もせずすぐに帰って行く。なんとも不思議なことをしていた。

好きじゃなければ、来なければいいのに——毎回、

「——さて、おネンネの時間だ。おりゃ、家帰ってしっぽり酒でもしようかねえ」

と、つまらなさそうに将棋盤に詰めを意味する駒を叩きつけて帰って行き。

そして、また別の日に将棋をさしに来る。

初めは、じいさんのことを煩わしいとは思ってはいなかったのだろう。

居心地が悪く、早く帰ってくれないかと何度も思っていた。

——だが、そんな俺の気持ちを見捨てるかのように、じいさんは無言で駒を並べ、強引に勝負を始めた。

早い時は五分と経たなく、勝負はあっけなく終わった。歯が立たないと分っていた。

きつと、じいさんの方が大人げなかったのだろう。子供相手に本気など・・・けれど、

それでも俺は、——いつしか、じいさんが持つ最後の駒を奪い取りたいと願うようになっていた。

強いと、決して敵わないと思いきらされるほどに・・・奪いたいと願っていた。

「聞いたわよ」

保健室の女医関口久子は、遅い昼食を取りながら将棋盤に駒を丁寧に並べる鳴滝に話かけた。

鳴滝は心持ち顔をあげて、「――何をだ？」と聞く。
すると、関口は心配そうな顔をして、

「なかなかラグビー部に馴染めないんだって？」
と鳴滝を見つめる。

――馴染むものにも、

「俺はラグビー部じゃない」と冷静に言い返して、鳴滝は溜息をついた。

ラグビー部と鳴滝の話をするのはトドだけでうんざりだ。駒を枰の中でまっすぐに置き直す。

「――和久井か、誰に言われたか知らないが、迷惑だと伝えてくれ」

――一度、試合に出たからと言って部員になったつもりはない、と呟く鳴滝。

関口は自分で作ったのだろう弁当を突付きながら言った。

「和久井くんじゃないけど・・・先輩を呼び捨てにするのはどうかと思うわよ。」

彼らあなたより年長なんだから、ちゃんと敬語を使わないと。――それに、迷惑だなんて、

先輩達はあなたの才能を認めているのよ」

「――説教か？」

顔をあげず目だけを関口に向けた鳴滝は、睨んでいるかのようにも見える。

涼しげを通り越したその凍てつくような表情は、色男というよりも冷酷な男だといったほうがいいだろう。

喧嘩というひどく熱く、そして、無慈悲になれる瞬間をよく知った目だ。

――心底振るえあがりそうになる。

しかし、関口はにつこりと微笑んだ。

「ええ、説教よ。あなたに説教できるのは、この学校にはなかなかいないでしょうから」

芯が強そうな目を向けられ、鳴滝は思わず黙り込んだ。

――四十半ばといったか。

柔らかなウエーブのかかった茶髪を後ろにかきあげ、関口はフキンに包んだ弁当箱を持って立ち上がった。

服越しにでも見て取れるすらりと引き締まった身体。中年女にしては、そのラインは出来すぎている。

鍛えているのだろうか・・・入学式で大きく言い放った、

「私を甘く見ないでね。それでも、あなた達よりもずっとツワモノ

を二十年以上相手してきたんだから、
ちよつとやそつとじゃあ負けないうわ」

教師らしかぬ印象的な発言は、嘘ではなかったらしい。

鳴滝は鼻で笑い、

「――案外、そうでもない」と呟いて、目線を将棋盤に下した。

――旅行、もとい中国にいる昔の修行仲間が大怪我をして、代わ
りに数週間ほど弟子を見てほしいと、

中国のと田舎に出向いた稲田氏。鳴滝が連れて行ってほしいといく
ら頼んでも、学生は勉強に精進しろと

ばかりで、結局は関口久子という女医を紹介して置いてきぼりをく
らった。

鳴滝としてはおもしろくない事ばかりだ。

そもそも鳴滝は勉強ができる方で、高校受験も葛岡高校という中
堅よりやや下の学校ではなく、

四校の中でも最も偏差値の高い門倉学園高校にだって入れたのだ。

――もつとも、オペラなど華々しいものを好まない鳴滝は入る気
すらなかったが・・・

授業にでなくとも三番以内に軽く入り、構内では暴力沙汰はほと
んど起こさないのです、

教師達も目の上の瘤だと称していても、たいして痛く生徒なのだ。だから、朝一の出席さえ取れば、進級や補修など必要ない。

・・・第一、もしも鳴滝自身が出席を取れなくても、狩野や他の連中が勝手に出席を取ってくれる。

学校など鳴滝には時間を持て余す場所だったのだ。

「——無理にでも、ついて行けばよかった」

「どこにだい？」

いきなり横からタックルされて、鳴滝は驚く前に地面が反転した。予想していなかった痛みに脇腹を抱えて蹲りそうになるが、鳴滝は意地で立ち上がり、猪のようにつつこんできた生徒を見た。

「いっやあーごめんね。やっと会えたから、うれしくってさ。つい、ついね！」

馬鹿笑いしながらそう言って、手加減なく鳴滝の背に平手をかましてくるのは、——百武ひかる。笑いすぎたせいなのか、それとも生まれつきなのか、どうでもいい

が緩みきつた顔をして、

その顔とは比較できないほどの馬鹿力を持っている。被害を増大させるとは気づかない百武は、

バンバンと音を鳴らしながら背を叩く。実力のみで部長になった口だろう。

——これじゃトドの部長面も、特には気にもしていないんだろうな、と鳴滝は思わずにはいられなかった。

「——おい、」

「——大丈夫？痛かった？怪我してない？——あ、でも巽くんなら大丈夫か！うちの部のエースだもんね！」

止めたと思えば、口と手は同時には動かせられなかったらしい。力を強め再度平手を打ってきた。

鳴滝は思わず咳き込んで反論できない。

——トドほど頻繁に会うことがないが、百武にここまでされるほどの恨みでも買ってしまったのだろうか。

先ほどの関口の先輩に対してのうんぬんを気にして手を出さなかったが、

——我慢の限界をとくに越えている。

鳴滝から無数の蛇のようなゾツとする邪気が、ユラユラと・・・！

いち早く気づいた関口は慌てて百武の腕を引っ張り取った。

「ちよっと、ちよっと、百武くんやりすぎよ」

「——えっ？」

「『えっ』じゃない！鳴滝くん咳き込んでいたじゃない」

——殺す気？と説教する関口に、百武は「ごめん、ごめん」と無邪気に笑う。——ある意味、

トドや周防よりもやっかいなのは、この男なのかも知れないと心に思う鳴滝、

荒い息を正そうと胸を押さえ冷静になろうとした・・・

2 - 3 (後書き)

*次回、狩野「巽さんもない。自習なんて受けても仕方がない。帰るか・・・」

岸辺「車も磨き上がったし、若の学校が終わるまで、どうしよう」

狩野「暇だな」

岸辺「ああ、暇だなあ」

狩野&岸辺「「!!!!!!」」 in 葛岡高校校門前

偶然の出会い!?!?・・・それより、ラグビー部ってどうなってる!?!?

「――一体、どこから来た？」

息切れ切れになりながらもそう言った鳴滝は、百武を振り返った。

「どこから？　いつやあー、巽くん。もしかして、僕が瞬間移動したみたいに、」

急にパツと現れたとでも思ったのかい？」

巽くんは結構SFものが好きなんだ、僕もなんだよ。と、わけの分らないことをすつ呆けながら

自分で言っで自分で頷く百武に、鳴滝はどう言い返えせばいいのか・

無言で百武を見ていたら、百武はようやく鳴滝の欲しい答えを言い出した。

「瞬間移動もいいけどね、さっきまでベッドで寝てたいんだ。ほ

ら、冬休みの試合で、
他校の子おもいつきりタツクルされただろう？その時の怪我で、時
々膝の関節が熱を持つんだ」

あれからはラグビーもできずに、ずっと病院通いで大変なんだよ
と、無理に笑う百武。

そんな余分なことまで言わなくてもいいのに——しかし、冬休みの
試合といえば、

鳴滝が笹川先生に強引に選手として出された試合だ。いや、正式に
いえば、十試合のうちの二つだ。

確か、ボールを持った百武がゴールに向かって走っている時、横か
ら変な角度でタツクルしてきた敵がいて、

鳴滝と同じ一年なのだろうよほど緊張していて、百武がボールから
手を離れた後でも、我を忘れて百武を
地面に押し付けていた。

——単純に、災難というしかない。

「・・・お大事に」

ぼつりと鳴滝は、同情を込めてそう言った。

すると、それはもう嬉しかったのか、百武は頬を赤らめ目をウルウ
ルとさせて叫んだ。

「君にそんな・・・そんな氣遣う言葉をかけられるとは思わなかった！」

——氣遣いか？氣遣いなのか・・・どっちにしろ、半分は早く話を終らせるために

そう言ったつもりだったが、百武は感激したと泣き出した。

可愛いといわれる女でも、泣くとうつとうしいのに、百武のような正統派体育系に泣かれると、

うつとうしいを通り越して、撲滅したくなってくる。鳴滝の足がピクリと動いた。

「そ、そんなに喜ばなくたってねえ？」

保健室の女医、関口はティッシュ箱を差し出して焦りまじりにそう言った。

——なんて、短期な子なの！ぼそりと心の中で呟きながら・・・

機転を利かした関口の為、百武に何もせず、鳴滝は将棋盤を見た。

すると、そこには鳴滝がつい先ほど几帳面なほど綺麗に並べた駒がゴチャゴチャと左側に歪み、

あるうことか駒が半分以上地面に落ちているではないか！さっきのタックルか！

百武は箱から取ったティッシュで鼻をかむなり、

「先生、鳴滝くんは本当に冷たいんです」

本人を指差して、普段は会えなくて滅多に言えないことをベラベ

ラと言い出した。

「笹川先生が声をかけないと、部活にも試合にも来てくれないし。部活に来てみずっとダンマリで、僕らが近づくと睨みつけてくるんですよ。馴染めないなら、馴染めないって

部長の僕に一言相談してくれればいいのに……トドくんとはよく話しているのに、僕には全然なんですよ」

「あら、やっぱり馴染めないのね」

——こいつだったのか……。

前半は間違っているとは言わない。なんせ、鳴滝は本気で嫌がつているのに、笹井先生に連れ去られるように部活に誘導され、放り込まれるように顔も知らない部員の中に並べさせられた。

初めてラグビー部員に混じった時は、鳴滝は混乱しきっていて、ストレッチのペアを組んだ三年生に肩を触れられた瞬間、蹴り飛ばしてしまったぐらいだ。

……それから、ほとんどの生徒が鳴滝と普段どうりに話すのをやめてしまったのだが、これは余談だ。

とにかく、後半は多いに間違っている。部員でもない人間が馴染むことなど、好きでない限りありえない！

それに、トドが勝手に近づいて来るんだ……鳴滝はそう説明しようと言口を開いた。

——だが、啜り泣く百武に話を通じるとは到底思えない。怒る気

にもなんだかなれない。

ハアと、鳴滝は今日何度目になるのかも忘れた溜息を深くついた。

「帰る」

不機嫌にそう言つて立ち上がった鳴滝。関口が、

「将棋はどうするの？」と聞くが、

「見る、台無しだ」

鳴滝は、ぐちゃぐちゃになつた将棋盤を顎差した。

それに関口が「元に戻せばいいじゃない」と宥める。しかし、静かな癪癢をおこした鳴滝は

「この勝負は引き分けた」と言う。

——引き止めるのは、止めた方がよさそうね。と判断した関口は何も言い返さずに、さつさとドアを閉める鳴滝の後ろ姿をじつと見た。

「あー、鳴滝くん！折角会えたのに・・・」

「ああ見えて、繊細なのよ。しばらく放っておきなさい」

仕方ないわねと、関口は床にしゃがみ込んで、散らばつた駒を拾いあげた。

小さな苛立ちは、すぐに泡のように消えてしまう。大きな苛立ちもそうだ。

一度大きな爆発させさえすれば、何事もなく普段どおりに戻る。昔から、鳴滝の怒りに対する感情はそんなものだった。

だが、稲田氏に気について学び、精神身体を研ぎ澄ますために瞑想するようになってからは、

その爆発をわずかだが、抑えられるようになってきた——と、いうのは鳴滝の見解で、本当のところは

喧嘩で発散するよりも、稲田氏との修行で発散する方が多くなっていた。

しかし、それだけでも大きな一歩だろう。やはり、周防のような激しい同属嫌悪を我慢するのは困難だが、喧嘩で物を言わせるばかりが能じやないということだ。

けれど、最近は稲田氏もおらず、発散する所を失った怒りは、じりじりと体の中で溜まる一方。

鳴滝自身もそれを感じては、必死に「無心になれ」と心に言ってきたが、それがいつまでもつかは分らない。

血に刻まれたかのような憎悪は、外に出よう躍起なのだから・・・

まだ二月だというのに、誰かが窓を開けて閉めるのを忘れたのだろっ、冷たい風が吹き付けて、廊下を歩いていた鳴滝の顔に、ヒラリと紙のようなもの被さってきた。

鳴滝はサッと腕で振り払い、薄い紙は地面に向かって叩き落ちた。

「――バトルBゲーム？」

紙に書かれた文字を声に出した途端、鳴滝はどうしようもなく血が騒いだ。

2 - 4 (後書き)

周防「フジオユキテル、夕飯忘れた！！弁当分けてくれ！！」

ブンブンブンブンツ

藤尾「英司いいい！！！！いいかげんにしろよ、勝手に放送なんか・
・ん？——何、目をキラキラさせてんだ？」

周防「うおおい！！竹刀持ちちゃって、チャンバラすんのか？今からすんのか？」

藤尾「するか！！普通に、体育の授業で剣道をやってただけだ！！」

周防「・・・ああ、煎餅食いてえ。キザ先とこ行ってもらってくるから、チャンバラは待てくれ！！」

藤尾「おい、話をきけよ！！」

送室前

i n 同時刻 明雲高校放

母が俺の姪っ子だとはつきりと自覚するようになったのは、

津幡のじいさんの葬式で、津幡の親父がふと

「俺の子供とは、何があっても結婚するなよ」

と言っていたことを思い出してからだった。

あんな場所で、あんな引つ掛かる言い方をすれば、

まるで「血が繋がっている」と言っているようなものだ。

いくら子供でも、不審に思い聞き返してしまうだろう、

「——どうして？」と。

——だが、生憎当時の俺は、聞き返しもせずにただじつと津幡の親父の黒い眼を見つめ、口を噤んだ。

聞いてはいけないと分っていたのか——

いや、俺はそんなに勘が鋭い子供ではなかった。

単純に、津幡の親父が詰めた言葉の意味よりも、もう二度とじいさんが詰めることのない駒の重みの方が、

俺には重要だった。そうだ、結婚してはいけない理由など、俺にとって何の価値もなかった。

なら、なぜ親父の言葉を思い出したのか・・・

それは、きっと母が甘えるように擦り寄ってきたからなのだろう。

あの可愛らしい手が、俺に向かって伸ばされる度、触れてはいけないと思ってしまう。

抱きつかれる度に、そこにあるのはどういう感情なのか、疑わずにはいられなかった。

そして、まだ小さいと分りながらも、矛盾した感情を持つのはなぜなのかと考えに考えた挙句に、思い出したのが親父の言葉だった。

でも、それを思い出したからといって親父に詰め寄るつもりは毛頭になく。扉は鍵をかけたまま、手をかけることもなく昔と同じ場所にあると自覚するだけ。鍵さえ開けなければ、何も変りはしない。

ただ、毎に近づいてはいけないと今まで通りに思っておけばいい。この世界で、大きな変化を起こしたいとは思わない。この世界をこれ以上悪化させたくない。

——だから、閉じたままでいい。閉じたままでいいんだ。ただ流れるだけの血は、嫌いだから——

「おい、何か飛んでこなかったか？」

紙を拾い上げた鳴滝の背に、大声で誰かが呼びかけた。

——いや、誰かというのはおかしいか。こんなに野太く妙に晴れとした声は、笹井先生しかない。

中身に一通り目を通した鳴滝は頷いて、紙をスツと差し出した。バトルBゲームという文字がデカデカと見える。

「——これか？」

と鳴滝が言くと、見られて相当ショックだったのか、顔真っ青にした笹井は、バツと紙をひったくり、くしゃくしゃに丸めて口の中に放りこんだ。

「んっ」

頬いっぱい詰めて、「どうだ、見えなくなっただろう！」とでも言いだけだ。

鳴滝はそんな笹井を見てゲンナリとする。隠したい気持ちは分るが、どう見ても怪しすぎて・・・

「逆効果だ」

溜息をついてそう教えてやると、笹井先生は慌てて口の中から取り出し、大きく広い背に隠した。

そして、咄嗟のこととはいえ、不審な行動にどう言い訳しようかと、笹井先生は焦りまじりに笑う。

「ハハハ、悪かったな！ぼうっとしていたら、風に攫われてしまっ
て」

つい、うつかりだ。と、また笑った。

短い髪は上に向かって真っ直ぐに跳ね、側面は綺麗に刈り込まれた、体育系の代表格と目についていいほどのスポーツ刈りに、厚手のセーターは、がたいの良さが強調されている――

マッスル仲間の中でも、自分が一番の筋肉美と誇る笹井先生。

フットボールというスポーツをしながらも、水泳・トレーニングジムに通い、

究極の筋肉への追究と日々欠かさずに鍛錬をして、筋肉を鍛えあげている。

30代中盤になった今は、笹井先生の中でそれが最もピークだそうで、

トドや百武という笹井先生を尊敬する生徒たちも後に続けと、筋肉美の指南をし始めていた。

――どうしてこうもラグビー部には癖があるのかと思えば、笹井先生にひどく影響されているのだ。

鳴滝は次に何を言おうかと悩んだ。

トドや百武とは違い、笹井先生は話するには悪くない相手だ。ただ、なんでもかんでも、強引に丸め込んでしまうという最強の一点を除けば・・・

「――別に」

結局、いつも通りにそっけない返事を返すことにした鳴滝は、いかにも興味が無さそうといった風に、目線を落とした。

「ハハハ、——そうか、そうか！拾ってくれたのが鳴滝でよかった」

あんな紙に興味はないよな、と笹井先生があまりにも嬉しそうな顔で胸を撫で下ろすものだから、

鳴滝はちよつと面白くなって、

鎌をかけてみた——それも、色気のある笑みを浮かべて。

「バトルBゲームの、関係者が——？」

「はっ、ハハハ！バトルBゲーム？——何の事だ？

それより、寒いな・・・あ、窓が開いたままだったんだ」

見事に動揺したまま、何事も無かったと強引に話を終えて開いた窓を閉めに行った笹井先生、

どうやら関係者らしい。

そう、あのバトルBゲーム——皆が知っていて本当には知らない黒いゲームの・・・

「楽しみはゲームが始まるまでとっておけ、・・・ということか」

鳴滝もそのゲームには興味があった。そう、おおいにあった。

津幡のじいさんが、その昔、このゲームで得たというのは、じいさんの人生を丸々変えてしまうものだった

というのだから、冷静ではいられないほど興味をそそられる。

しかし、笹井先生もゲームの関係者なら、どんなに鳴滝が吐き出させようとしても、

黙秘義務を怠らないだろう。完全に外部には漏れないように徹底さ

れている。

——ならば、今ここでどんなに粘っても仕方がない、鳴滝は足を翻した。

校門の、そのすぐ傍にある黒いベンツの前で若い男が二人、堂々と煙草を吸いながら談笑していた。

——狩野と岸辺だ。

よくもまあ、ぬけぬけと・・・

いくらガラが悪いと有名な葛岡高校といっても、校門前で煙草な
か未成年が吸っていたら問題になる

だろうと、鳴滝は控えていたのに、教師の姿も見当たらない。

無駄な努力だったと思われ、いい加減飽きた溜息をつくかわり
に、ジャケツトの内ポケットから煙草を

引っ張り出して、口に銜えた。そして、手馴れた手つきで火をつけ
る。

「あつ、若！お帰りですか？」

「巽さん」

黄色い声をあげた岸边に続き、狩野が声をあげた。

見慣れないツーショットだが、先ほどの様子ではよほど気が
合うのだろう、

鳴滝が車の前に立つまで気づかなかった。

白い息を吐く煙草を指の間に挟んで、口から遠ざけた。

「——気が合うのか？」

「はい、そうなんです。話してみると、結構いける奴で・・・」

岸边はちらりと狩野に目配らせした。すると、狩野は相槌を打ち
ように頷いた。

——犬は、犬でまともな友情を育んでいる。

胸にジリッと焼けるような小さな痛みが走った、自覚はあまりな
いが二人に嫉妬したのだろう。

鳴滝の理想がすぐ手に届く場所にあっても、鳴滝自身はそれに成
り得ることは無い、

この道から外れない限り・・・

「保健医との勝負はどうでした？」

関口は相手になりませんでしたか、と問う狩野に、鳴滝は眉を顰め「邪魔が入った」と答えた。

「——トドですか？」

「トド？」

口を割って入ってきた岸边は首を傾げた。動物の名前でも思っただろうか、

しかし、鳴滝はそれを無視して言った。

「話は後だ。——そのトドが追ってこない内に、さっさとずらかる。エンジンをかけろ、岸边」

——鳴滝は、今日もラグビー部には顔を出さないつもりらしい・

トドが足を地面に叩きつけて憤怒している姿と、百武が情けない顔をして地面にしゃがみ込みいじけている姿が目に見え、

だが、鳴滝が知ったことか！

自ら後部座席のドアを開け乗り込むと、狩野も乗れと命令して、岸边がエンジンをかけ車を走らせるまで、鳴滝は葛岡高校を見つめた。

校舎の中央にある時計が3時30分を指している。

——授業は終わった、約束は守った。

キンコンカンコンコンと鳴る鐘に、ニヤリと笑うと、

鳴滝は窓から小さくなった煙草を投げ捨てた。

2・5（後書き）

＊次回、トド「なっ、なっ、なっ、なにに！！！！」

百武「機嫌が悪くなちゃって、帰っちゃったんだ・・・」

トド「機嫌？そんなものー、言い訳にしかならん！！」

百武「ごめんね。僕がもっとしっかりしていたら・・・」

イジイジ、

トド「くそー、明日こそは覚えているよ鳴滝めが！！」
をバンバン。

指を

足

次はどうなっちゃうのー！？予測不可能！？

今朝からずっと、鳴滝は診察室の丸椅子にでかでかと座り、腕を組んでひたすら何かを考え込んでいた。

中国に旅立つ前、稲田氏から掃除のためとに与えられた、予備の鍵で稲田医院に入り込んだ鳴滝。学校を無断でサボっているのだろう、

この町の情報網に長けている稲田氏が知れば、即刻医院に立ち入り禁止となるところだ。

しかし、鳴滝にはそうも言っていられない事情があった。

せつかく顔がいいというのに、額に皺をよせ、色男を台無しさせているその原因は、

そう、すぐベッドに横たわっていた……

「うつうつ……」

悶え苦しむように顔を両手で覆い、情けない声をあげるトド。よくよく見れば、顔が赤く晴れあがっている。それに、所々から出血や青痣まで――

鳴滝はどうしようかと悩んでいたのは、これだった。

つい昨日、鳴滝に逃げられ、地面を踏んで怒り狂っていたトドは腹の虫が納まらず、散々考えた挙句に、家にまで押しかけようと、朝早く鳴滝家の前まで来ていた。

だが、鳴滝家の事情などまるで知らなかったトドは、巨大な門構えと、

その只ならぬ威圧感にチャイムを鳴らすか躊躇って、家の前をウロウロと徘徊していた。

——ちょうどその時、トドを見つけたのは、水撒きをしようと表に出てきた舎弟のそれまた下の舎弟。

ほんの少しまで、そこら辺の街でチンピラをやっていた男だ、まだ血の気が多すぎて、

とてもじゃないが冷静に話を聞くんてできやしない。

そして、それに付け加えるように、これまた運悪く、

トドは学校指定の運動着ではなく、自前の野暮ったい黒いジャージ姿で、

行動から服装まで何もかもが不審者だと疑われるのに無理はなかった。

こうして、不運と不運は見事に重なり合い、

舎弟の舎弟はトドの胸倉ひつつかんでどうこう言わせる前に、トドをボコボコにしてしまったのだ。

偶然、朝一の用で訪ねてきた肇が止めなかったら、トドは切り傷と青痣だけではすまなかったかも知れない。

——そう考えると、鳴滝は溜息ばかりが零れる。

舎弟の教育なんぞ、鳴滝には関係ないと鷹を括っていたのに、今度ばかりは締めずにはいられず。鳴滝一家の若頭に蹴られた舎弟は、

深々と散々トドに謝ったが、あんなに殴られたのは初めてだったのだろう、

当のトドは悲鳴をあげて鳴滝の後ろに隠れるだけ。

怖がって、舎弟の言葉にも耳を貸さなかった。

こうした事情で、鳴滝家で介抱するのは限度があると、肇の提案でトドを稲田氏に連れてきたのだが――、

ベッドで声あげるトドを見て、今更なかったことにしてくれとは言えない鳴滝だった。

「悪かった、——本当に悪かった」

「ううう……ううう……」

さっきから、何度鳴滝が謝っても、トドはすすり泣くように顔を両手に埋め、

いつものようなうつとうしさがまるでない。

やはり、相当なショックだったのだろう。

「慰謝料は当然支払う。——他にも何かあれば、何でも言ってくれ」

望みがあれば言ってくれ、という鳴滝。

何でも金で解決するのは嘆かわしいが、世の中は結局は金で解決できてしまうもの。

鳴滝一家にしてみれば、金を出して事を首尾よく終らせるなら、いくらでも惜しみはしない。警察がらみにさえならなければいいのだ。

「必要であれば、毎日車で送り迎えをしたっていい。お前さえ、許してくれるのなら……」

「——慰謝料も、車もいらぬ。ただ——」

「——ただ、何だ？」

ベッドに身を屈めて小さな声で優しくトドに聞く、普段ならありえないことだ。トドは言った。

「鳴滝、貴様が毎日サボらず部活に来るなら、今日のことはなかったことにする」

試合という試合に必ず出るというなら許すと、大胆にも鳴滝の弱味につけこんできた。

——だが、鳴滝は嫌だとは突っぱねるわけにもいかない。

「……つつ」

まったく、余計なことをしてくれたものだ。

トドを殴りさえしなければ、鳴滝がラグビー部に浸ることもなかっただろうに。

舎弟を恨みながら、鳴滝は静かに言った。

「――都合が悪くない限り、必ず行くとお前に誓う」

肩を落として、半ば諦め気味にも見えるが、

男が一度言ったことは曲げないと、決心の固さだけはその強い眼差しが物語っている。

トドはバツ身体を起こして、鳴滝を見た。

「その言葉に嘘はないな？」

ただれるように赤くでこぼこになった顔で見られると、

ひどく痛々しい。怪我など見慣れているが、これは喧嘩で受けたものではない。鳴滝は頷いた。

「ああ」

「――なら、さっそく今日から実行してもらおうか！」

「うわああ、これはまた凄いね。どうしたの？」

百武はトドの悲惨な顔をまじまじと見て言った。他の部員達も、一体何があったのだろうと興味本位でトドの周りに寄ってきて、むさくるしい群れがあつという間に出来上がった。

「自己練を少しやりすぎてな、皆も気をつけろよ！」

明るくそう言ったトド、どうみたって殴られたものだとは思うが、トドなりの気遣いだろう。

しかし、それが嘘だとは思わないラグビー部員達は「うっす！」と頷き、百武は「アハハ、トドちゃんらしい！」と笑った。

——彼らほど、陽気だったらどんなにいいか……

少し後ろの方で突っ立っていた鳴滝は、無言でトドたちの横を通りすぎ、

緑のグラウンドに立った。

葛岡高校にはサッカー部や野球部というポピュラーな部活は存在しない。

いや、遠い昔にはあったそうだが、ラグビーや柔道、空手という熱すぎる部活に部員を取られ、惜しくも消えてしまったのだ。

他にあるといえば、科学部や化学部といった理系のクラブだけ。

少ない部活数の分、部費はすべて強い部に持っていかれ、

葛岡最強の部活ラグビー部は、ついに芝生付きのラグビー専用グラウンドまで

作ってしまった。どしゃ降りの雨や調整日を除けば、一年中開放状態だ。しかし、一方の最弱の科学部は、少ない予算でちまちまと遣り繰りしているという――

なんとも、偏った部活編成だった。

だが、ただ単にラグビーが優遇されているのではなく、それには実力という確固たる事実があるのだから、誰も文句は言えない。

鳴滝自身も去年の試合にその確固たる事実に協力させられ、実力というものには、それなりには納得していた。

最も、だからといってラグビー部に入るつもりなどまるでなかったが……

しかし、ついさっき誓ったばかり、気を取り直そうと鳴滝は前髪を掻き揚げた。

——それにしても、がっちりしながらもモデルのように
すらりとした白いジャージ姿の鳴滝は、なんてかっこいいのだろう
か！

同じ男でも、こつも違うものと、50人近くいるラグビー部は
揃いも揃って鳴滝の後ろ姿に溜息した。

「——何だ？」

2 - 6 (後書き)

次回、

トド「さあ、練習だ!!」

まずは、ストレッチから始めるぞ!!」

ラグビー部員達「うっす!!」

トド「一、二、三、四・・・声が小さい!!」

ラグビー部員達「うっす!!」

百武「——それ、僕の役目!!」

慰謝料代わりの約束。さあ、守れるのか鳴滝!?

「どうぞ」

水道から顔をあげた鳴滝に、狩野が真っ白なタオルを差し出した。水が滴りながら、顎を滑り落ちてゆく。鳴滝はそれをタオルを受け、顔全体を拭き取る。

「——聞いたのか？」

タオルまで用意して、俺が部活に通うことになったことを——と、ぼつりと狩野に聞くと、狩野は頷いて、

「はい、岸边さんに聞きました」

左手に持っていた黄色いスポーツドリンクを差し出した。

どつりで——、タオルと引き換えにドリンクを手にした鳴滝は、
「そうか、悪いな」と水道の淵に腰を下ろし、一気にドリンクを飲み始めた。

「いいえ。——俺はこれぐらいしかできませんけど」

岸边さんに言われたものを届けるぐらいしか……、と融通が利かないことを

悔やむかのように言い、他に何かいりますか？と狩野。

鳴滝は容器を振って言った。

「これで十分だ」

「そこにいるのは——鳴滝くんと、狩野くんかな？」

舌を回して大袈裟に大股で歩いてきたのは、重森邦人。

鳴滝たちと同学年の柔道部員だ。片方の耳に開いたピアスとオレンジの頭は、

そのやたらとそれぞれのパーツが大きく細長い顔立ちには、少し不似合いにも見える。

そして、彼が着る黄色い柔道着、——いや、体中から湯気が立っていた。

「重森」

狩野が——何の用だ、

と嫌そうに眉を顰めた。すると、重森は腹を叩いて馬鹿笑いし始めた。

「何って、——何？別に用なんてないね。俺は顔を洗いにきただけだから」

青いオリンピックのロゴの入ったバスタオルを振って、

重森は鳴滝の横に立ち、蛇口を捻った。ビシャビシャと豪快に顔を洗う重森、

水が飛び散り、隣に座る鳴滝の白いジャージを濡らした。

「——重森、やめろ！巽さんにかかるだろ」

狩野が叫んだ。——だが、重森はまるで聞こえていないかのよう

に、
存分に顔を洗っている。鳴滝は仕方なく、腰をあげて水道から離れた。

——この男もまた、癖のある男だ。

顔を洗い終わった重森は、蛇口をキュッキュと閉めて、
バスタオルで顔を拭きながら鳴滝をちらりと見上げた。

「結構、ジャージも似合うじゃん」

「重森」

「ラグビー部に無理やり入れられているって聞いたけど……そうでもなかったんだ？」

鳴滝はぼつりと言う。

「——約束だからな」

「約束守るタイプだったんだ？」

意外だねと、重森は笑う。重森は鳴滝を馬鹿にしているのだろうか。

すかさず狩野は汗だくの柔道着の首袖を捻り上げた。

そして、ひどく低い声で狩野は言った。

「重森、あまり調子に乗るなよ……」

冗談を言っている人じゃない——毒々しいオーラを放ち、狩野は本気だった。

だが、血の気の多い柔道部重森もやられてばかりではなかった。狩

野の腕を

掴み半回転して、大きく狩野を地面へと投げた。――一本背負いだ。あつという間に地面に這いつくばった狩野は、背中をひどく打ったのだろう、

すぐには起き上がれずに、浅く息をしながら重森を見た。

「分っているよ。鳴滝くんは、正真正銘の若。――でも、本人が怒ってないんだし、いいじゃない？」

自分のことでつつかった狩野を助けもせずに、ただ二人を傍観していた鳴滝を見て、重森がそう言った。

狩野も追って鳴滝を見た。男前の顔には何の感情も浮んでいない。

――大して気にしてはいないらしい。

鳴滝は何も言わず無言のまま、石段に腰掛けた。

「喧嘩はまた今度ね。先輩らに見つかったら、ヤバイから」

袋叩きにされるから、と狩野に手を指し伸ばした重森。

この手を取るのは気が乗らないが、鳴滝の手前だ、

狩野は仕方がなく手を借りることにした。

「――そっぴゃあ、ラグビー部からは鳴滝くんが出るんだ？」

石段に座る鳴滝に、重森は何気なく聞いた。

「何にだ？」

――何の事を言っているんだと、鳴滝。重森は「まだ決まってるのか」と訳の分らないことを言っ、片手をあげた。

「俺、出る事になったから。もし、鳴滝くんが出る事になったら、よろしくね」

「――何のことだ？」

まるで分らないと鳴滝が言つと、「何を今更、B B Gに決まっ

んじゃん」と重森は嘲笑う。

「重森！」

狩野が食って掛かったが、重森は宥めるように手を振る。

「はいはい。——あ、もう十分過ぎてんじゃん。じゃあ、俺は部活あるから」

——これだから体育系は困る。まったく葛岡高校にはまともに話をできる奴はどんなにいるのだろう……

柔道着を整え、陽気に唄なんか歌いながら走っていく重森を見ながら鳴滝は溜息をついた。

グラウンドに戻ると、笹井先生が腰に手を当て、百武とトドの前に立ち、豪快に笑っていた。

「ハハハ！調子はどうだ？」

寒いが天気もいいし、ラグビーはさぞやりやすいだろうと言つ笹井先生。

「今日はすごく順調です、先生！」

「そっなんですよ、先生！」

鳴滝くんも来ているし、と尊敬したキラキラした目で、そう言う百武とトド。

すると、笹井先生は「ハハハ！そうか、そうか！」と嬉しそうに頷き、辺りを見回した。

休憩時間が終わり、50人近いラグビー部たちは整列して、部長、部副部長の前に立ち。そして、遅れて戻ってきた鳴滝は、その列には入らず、

広々としたグラウンドの中央に立っていた。

「おい、鳴滝！部員たちはちゃんと整列しているんだ。お前もこっちに来て整列しろ」

笹井先生が大声でそう言うが、鳴滝はぽつりと言った。

「――遠慮する」

「何が遠慮だ！」

次に怒鳴ったのはトド。「ちゃんと整列しろ」とラグビー部員の列を指差して言った。

「――約束は守っている。だが、整列は約束の内に入っていない」と、鳴滝。頑として動こうとしない。トドはキッとムキになって言い返そうとする。けれど、百武が間に割って入ってトドに言った。

「まあまあ、こうして来てくれるだけでも大した進歩だよ」

自分から来るなんて、初めてじゃないか！と百武。トドは鳴滝が約束を守ってラグビー部に来たことは、男として当然の事で、どう

して、部長（副部長）である自分の言う言葉を聞けないのか、信じられなかったのだ。

「……けどな、」

「百武の言う通りだ、和久井！」

何か言いかけたトドの背中をドンと叩いた笹井先生、そう肩に力を入れすぎると言って、ラグビー部員達に向き合った。

「鳴滝、お前はそのままでもいい。——皆もそのまま、まずは俺の話を聞いてくれ」

2・7（後書き）

次回、

周防英司「いやあー、

カップラーメンは

ストープで作るにかぎる！！」

奥村順一「だな。どうせなら、鉄板持ってきて、

焼肉食いてえーけど」

周防英司「おお、それもいいですな！！

家に鉄板あったっけ？」

奥村順一「俺に聞くなよ。キザ先生に聞いたら？」

斉藤先生「お、お前ら

！！！！

学校をどこだと思ってるんだー！！」

なんと、次回で第二話が終るー！？

「皆も知つての通り、葛岡も参戦している町の大年間行事——」

「バトルBゲームですよね？」

活きのいい一年が叫んだ。それに、笹井先生は笑いながら言った。

「ハハハ！そうだ、気が早い奴だな！——そう、そのバトルBゲームに、

我がラグビー部全員が観覧可能になった」

ヒューと誰かがすかした口笛を吹き、わいわいと部員達が一斉に隣と騒ぎ始めた。

ゲームの内容すら知らない——百武もトドだって知らない、部員ばかりなのに、

彼らのアドレナリンが騒ぐのだろう！とうとうと、笹井先生。

「まだ、話は終わってない。最後まで聞け！」
と、騒ぐ部員達に喝を入れた。

「ゲームの参加者は追々決まっていくだろ、他の部でも何人が決まり、

うちも何人が候補にあげて、決まったものもいる」

「誰なんですか、先生！」

トドが待ちきれないと声をあげた。

「それは、四月まで待ってもらわないとな！なんせ、町をあげて大イベントだ。

時間が掛かる。——だが、大将をもう決まっている」

部員たちは笹井先生の言葉を聞いて、ぞわぞわとする。なんと
って、大将だ。

ゲームにはなくてはならない重要な存在、それが誰なのか
気にならない人間はいないだろう

——トドは息を飲んだ。

「鳴滝！」

お前は葛岡の大将になつてもらつことに、会議で決まつた」

「——は？」思わず、出た疑問の音。

「鳴滝が大将！」

口々に「——俺、トド先輩かと思つた」、

「鳴滝か、——だと思つた」と初めから分つていたように言う部員たち。

その隣では、百武が口を開けて石化したトドの背をドンドン叩きながら、

「まあまあ、落ち込まないで」と言っている。

——奴らは何を言っているんだ。と鳴滝は思うが、

笹井先生は部員達にそれ以上有無を言わせないと、首に垂らした笛

をピーと吹いた。

「以上だ、すぐに練習に戻れ！」

部員達は喧しい笛の音に体を震わせ、「はい！」と声をあげ、

さっとグラウンドに広がって行った。

とろとろと歩くトドの後ろ姿はひどく惨めだ・・・

「——昨日の、あれは、俺を騙すつもりだったのか？」

笛を手にながらグラウンドを見渡す笹井先生に、拳を震わせ

——バトルBゲームの幹部だと思わせからかったのか、と鳴滝は問うたのだ。

「ハハハ！何の事だ？」

余裕のある顔でシラを切る。——くそつ、きつと笹井先生はわざと紙を飛ばし、

鳴滝がゲームに関心を持つようにわざと仕向けたのだ。

あのわざとらしい行動も、演技だったということなのか・・・

馬鹿ばかしい！！

「大将の件は、昨日会議で決まったことだ。俺が決めたわけじゃない。」

「そうだ、——葛岡は代々、選手決めは四校の内で最も早いと有名なんだ。」

「知っていたか？」

「知るか！」

「不満たっぷりこそっけなくそう言った鳴滝。よほど、納得できないらしい。」

「——だが、それもそうか。何の前触れもなく、決められたのだ。好き好まない人間にとって、冷静でいられる方が不思議だ。」

「今日、担当の者が正式な手続きをしに行った——だから、どう足掻いてもお前が大将。」

「変更は法的な要因がない限り、不可能！諦めろ！」

「今更、何をしたって遅いと言う笹井先生。」

「鳴滝は奥歯をギリギリと噛み締めた。」

「——お前のじいさんもゲームに出たんだろ？
これも何かの運命かも知れんぞ」

「なぜ、それを——？」

鳴滝は眉を顰めた。津幡のじいさんのことなど、笹井先生に話した覚えはない。

——一体、笹井先生は鳴滝の何を知っているというのだ。

「まあ、しつかり頼むぞ。——おい、そこ！」

取っ組み合つて喧嘩するラグビー部員を引き剥がしに、

笹井先生は笛を吹きながら走って行った。——あの男、

見た目とは裏腹に、相当頭も切れるらしい。

熱血馬鹿と思い込んでいて、鳴滝は罾にまんまと引っ掛かってしまった。

悔しさと、ある種の猛烈な感情が静かな心に彫り浮ぶ。

——灰色と少しの白に覆われた空、

音も無く肌に冷たい感触がして、鳴滝は天を見上げた。

「——雨か、」

さっきまで天気だったというのに、見えない早さで、
水滴がぽつぽつと落下してくる。

それは誰にも止めることができない。そう、誰もできはしない。

——あの日、

俺はある人物に会いに行っていた。何よりも誰よりも、重
要で大事な人に……

けれど、あれは本当に笑える冗談だった。

肇を蹴り倒し、拷問のように問い詰めてやっと吐かせた居場所を手に握り、

喧嘩の後付けのように襲ってきた輩を根こそぎなぎ払った。

そして、誰の血かも分らず血まみれで、傷だらけで、

それでもやっこの思いでたどり着いた先は、——ただの、冷たい雨下。

黄色い傘を持ったガキが、俺に言った。

「お洋服、真っ赤だよ」

びしょびしょに濡れても、落ちなかった血に汚れた服を指差して、

切れた顔を指差して、染まった手足を指差して、——ガキが言った。

「僕の傘に入る？」

俺は、思わず手を伸ばそうとしてしまった。黄色い傘の下に、無垢な笑顔を向けるガキ。陽の光のような黄色足元に、

——俺もそこに立ちたいと無意識に足を動かそうとしてしまった。小さな身体に縋ろうとしてしまった——

「――駄目よ、学ちゃん」

はつとする声に、俺は手を足を止めた。いや、足が勝手に止まっ
たんだ。

母親が俺を蔑むように見たから。――それから、
母親は子供を俺から遠ざけるようと、引っ張っていった。

俺は、そんな親子を見つめた。ガキは俺を見たまま足早に、母
親に言うとおりに動かしていた。黄色い傘だけが虚ろに揺れていた。

親子がいなくなり、ふらりとビルの間へこたれるように腰掛け
て、

俺はあの人に会えなかったことを悔やんだ。

――すぐ傍まで行ったのに、あの人の姿すらも見ずに、
ただ、ガラスに映った血まみれの自分が初めて怖いと思った――

それからいつのことが、

偶然に出会い連れて行かれた医院で、

稲田の師匠に宛がわれたタオルを頭につけ、大怪我を追って運ば
れてきた血まみれの男が、廊下に座っていた俺の前を横切っていっ
た。

そして、一時間して処置室から出てきた男の足には、真っ白な包帯が巻かれていた。

あんなに血まみれだったのに、男を痛みながらも純潔な白に包まれ、

血の見る陰もない。

当たり前といえば、当たり前。血は普通は止まるものだ。

流れっぱなしなわけがない。けれど、俺は暴力で血に染める事を知っていても、

この手で血を止める術を知らなかった。

人を蹴ることを知っていても、助けることを知らなかった。

「ありがとう」と怪我を負った男が言った、——その時、俺は・

ヤクザではなく、この人のようになれたら、

躊躇することなく、あの人に会いに行くことができるだろうか

——と、夢にもないことを思った。

冗談はもうこりこりだ。馬鹿みたいに嘲笑うのも、こりこりだ。

少なくとも、俺は黄色い傘の子供のようにはなれない。
分っている。

——だが、浅はかだと罵られても、
この一抹の願いが叶うなら
俺はどうなってもかまわない。

バトルBゲーム、
——勝てば極楽。負ければ地獄。

「いいだろう、受けてやろうじゃないか」

2 - 8 (後書き)

まんまと罠に嵌った、

葛岡高校仮・ラグビー部 鳴滝巽！！

ゲームまでまだまだ先は長いが、南の大将は決まった。
後が決まるのも、あと僅か！！とにかく、話は進んでいく・・・

第二話 完結！！

まったくもって、お粗末様です。

<http://89lux.tirirenge.com/>

次回、第三話

ワ。アン・ドウ・トロワ」

東「アン・ドウ・トロ

僕も、あんな風に優雅になれたならな」

百武「ああー！！

エンディングしている
場合じゃないわ！！早く生徒会に・・・」

？「フィリップ！！フ

「共学だったらなー」

「うん、あー……葛岡も」

3 - 1 門倉学園高校ジャーナル部 玖珂ノエル必見！？

赤い段幕がゆっくりと下り、明かりがワントーン暗くなり始めたというのに、
オペラホールは未だ拍手と歓声で賑わっていた。

——先日、イタリアから来日した某劇団の最高の公演が終ったところなのだ。

当然のことといえば、当然だろう。拍手の渦が絶賛と感動の意を含ませ、

ホール中に響き渡る。

——と、そんな中、瞬く間に舞台の上にさっそうと現れた、黒のスーツといういかにも制服らしくないスーツを着た、肩まで伸びた焦げ茶色のサラサラの髪をなびかせ、美しい顔にっこりと微笑ませている

——生徒は、マイクを手に優雅に腰を折り、お辞儀した。

「皆様、最後までお楽しみいただけただけでしょうか。僕はとても楽しめました。

こんなにすばらしいオペラを見ることができて、本当に僕たちは幸せです。

——門倉学園をご卒業される先輩方、一生の思い出になったことでしょう。

今日という日を、いつまでも忘れなくください。

——それでは、

今一度、ニンファアの皆さんに盛大な拍手を！」

と、その生徒は

自らも舞台を向きながら拍手した。

「グ
ラ
ッ
ッ
ィ
エ
、
グ
ラ
ッ
ッ
ィ
エ
ペ
ル
ィ
ル
ド
ウ
ラ
ン
マ
メ
ラ
ヴィ
ッ
リ
オ
ー
ゾ
！」

「に
賛
美
の
拍
手
を
ー
！」

さ
あ
、
彼
ら

演だった。君もそうは思わないかい？」

「——うん、いい公

花柄の、フェミニンな小ぶりのカップにアールグレーを注ぎ入れ、
贅沢な絞りたてのミルクを加えて金のスプーンでかき混ぜる。
これは彼は大好きな紅茶の飲み方だ。

彼はさきほどの講演で、フィガロが歌っていたアリアをフィガロ
同様、
滑らかなイタリア語で口ずさむ。

「——ええ、もちろんよか
つたですとも。

あなたが生徒会の仕事まできちんとしてくれるなら、
なお更いいの
だけだ」

と、嫌味な返事を

返したのは副会長の篠宮京佳。旧家の令嬢だ。
彼、即ち、——東はそんな彼女の方を見て、

「仕事はするさ。けどね、

今は余韻を味わいたいのさ。

卒業式の講演は一年の内で最も素晴らしい！そして、フィガロの結婚も素晴らしい！

・・・どうせなら、校庭にあるパラ園のカフェテラスで、お茶会をしたんだけどね。

——ところで、君もどうだい？」

カップを持ち上げ

て、そう言った。それに、篠宮は

少し不満気味な顔をするが、「いただくわ」と、素直に頷く。

いくらい合っても、仕方ないと思ったのだろう。

東はにっこり

頷いて、紳士的に振舞いながら、

篠宮の机にカップを置き、ゆっくりと丁寧に紅茶を注ぎ入れた。

「どうぞ、マドモワ

ゼル」

篠宮は「ありがとう」と微かに微笑む。――ふんわりとした、優しい微笑み。

彼女のガラスのような黒い瞳に、東自身はつきりと写り込むほど、目が澄みきっている。日本中探しても、こんな和風美人とは、めったに出会えないだろう。

性格は少々、真面

目すぎる所もあるが、彼女ほど出来た女性はいない。

東は、さらにと

その白い頬に落ちた髪を、掬おうと手を延ばした――

「――っ！ちょっと、アールグレーにはミ

ルクは入れないでって
いつも言っているじゃない！」

急にヒステリー

な声をあげた篠宮。

東は伸ばした手を何気ない仕草で元に戻し、サラリと自らの髪を撫でた。

「ああ、ごめん。君

の綺麗さに見とれていたなら、——つい、ミルクまで入れてしまったよ」

半ば東の言ってい

ることは、嘘ではないのに、篠宮はまるで嘘だと信じて疑わない。

彼女は、東の気持ちなどまるで気づかないのだ。——この人に何を言っても無駄ね。

と、カップを置い

て、篠宮は目の端に映るものに顔を向けた。

「まあ、いいわ。」

―それよりも、玖珂さん。
あなたたち、さっきからそこで何をしているの？」

東と篠宮が座る

大きな机たちが並ぶその前、客用のソファには先ほどから
ずっと沈黙を保ち続けている先客がいて、篠宮はその二人に声をか
けたのだ。

そこに座る一人

が、「取材です！」と意気揚々に答えた。

――シャッター

音一つしなないと思えば、

デジタルカメラの赤いランプが光っている。彼らはビデオを撮っているのだ。

篠宮はひじを机

につき、隠すように顔を手で覆った。

3 - 1 門倉学園高校ジャーナル部 玖珂ノエル必見！？（後書き）

次回、

篠宮「フィリップ、紅茶を飲んだら仕事よ！仕事！」

東「もちろんだよ、京佳。クッキーもどうだい？」

周防「げ、あいつ・・・うざー!!」

杏里「将来、尻にひかれそうね」

周防「あ？アズマなんか、

×××にでも轢かれとけ！」

鳴滝「お前もな」

周防「なんだって？え」？ナルオカあ」

杏里「ちょっと、二人

とも!!」

第三章開始!!さあ、

門倉学園はどうなっている!？」

手に持つメモ帳に、真ん丸とした目を向けながら

ペンを走らせる姉の玖珂ノエル。こちらをじっと撮り続ける弟の玖珂アンドレ。

——姉の方は春から高等部二年で、弟は確か、まだ中等部だったはず。

門倉学園は、十字路きつての高中一環学校でもあるのだから、中等部と交流があるのは喜ばしいことだ。

しかし、この兄弟には篠宮も東同様、相当手を焼いているのだ。

篠宮は弟のアンドレの持つ、デジタルカメラをその華奢な指で名指しして、

「・・・それを見れば、分るわ。誰が取材をしてもいいと許可したのかしら？」

と、付け加えるように「下ろしなさい」と言った。

すると、玖珂ノエルは、驚く速さで機転を利かせた――

「東会長」

「ん、なんだい？——マドモワゼル、ノエル。」

篠宮との会話が途絶え興味を失い、生徒会室に置かれた大きな丸い鏡を眺めていた東は、玖珂の呼びかけに気軽に応じた。

玖珂は、それに万遍の笑み浮かべ何の隙も与えずに言った。

「こんにちは、東会長。ジャーナル部の一記者として、イタリア演劇団、ニンファーアの卒業公演の感想などいただきたいのですが、

取材してもよろしいですか？」

——と、さも自然に、許可を取ろうとする玖珂。

篠宮はハツとして、「フィリップ！」と叫ぶが——言わずもなか、東は、

「かまわないよ。僕は一年中撮られて困ることなんかないからね」と、きらきらと髪をなびかせた。

彼、東フィリップは誰彼認める、ナルシストなのだ。

美しいものは世界に自分と母親、姉妹だけだと思っている、門倉学園高校の馬鹿。明雲高校の周防並といえいいだろうか。成績だけは恐ろしくいいのに、その性格ときたら、まったくもってもったいないというか——

「——だ、そうです。篠宮京佳副会長」

許可はたった今、会長から得ましたよ。お聞きになりましたよね？と嫌味のように言い、恐ろしいほど無邪気に微笑む玖珂に、篠宮は頭に浮んだモヤモヤとした軽蔑の言葉を飲み込んだ。

咄嗟に、篠宮京香が言うべきではない言葉を言いそうになったのだ。

もしも、その言葉を少しでも声に出して言おうものなら――、明日のゴシップ記事は篠宮のことがデカデカと飾っていたかもしれない。

――門倉学園高校のジャーナル部は、いくら生徒会の役員でも舐めてはいけない。

彼らは叩くところは、ピシヤリと叩きつけ、出た埃を隅々まで掻き集め探求する。

いわば、現代ジャーナリズムに乗っ取って構成された、正当派ジャーナル部だ。

世に出回るジャーナリストのエリート予備軍とでも思えばいいだろう。

結局は、華やかな生徒会副会長というイメージが崩れて困るのは、篠宮の方なのだ。

「……」

――また、やられたと、心の中で毒づく篠宮。玖珂の巧みな話術戦法には、

毎度ながら苦い思いをさせられてばかりだ。

これで、また東は生徒会の仕事をしなくなる。

彼らを舐めてはいけないのが――、それ以前に、

所詮ジャーナル部など、一部活動に過ぎないのだから、

最終手段として部費を削減すると圧力さえかければ、無理にでも取材制限できるというのに・・・

それができないというのは、――何を隠そう、生徒会長である東が原因なのだから、

生徒会としてはこれ以上どうしようもないのだ。

篠宮は好みではない、ミルクの入ったアールグレーをごくりと飲み込んだ。

——それから小一時間ほど、あらかじめ用意していたのか、質問を、冗談を交えながら立て続けにし、スラスラと東のスピーチのような感想を手帳に書き込んでいた玖珂は、

「——ところで、東会長。この春休みは、会長の故郷であるフランスに帰郷なされるのか。どのくらいフランスに滞在なされるのですか？」と、話を一転させた。

「話が早いね。公演とは関係ない話だけど、僕は答えるよ！残念ながら、フランスには帰郷しないんだ。今年は色々と忙しくて、時間がないからね」

「でしたら、バカンスもなさらないということですね」

「そうだね、日本だったらいくつかまわろうとは思っているけど」

「そうですか、日本のどこに行かれるつもりですか？」

「車で行ける範囲だね」

別荘もあるからね。と言う東。

「ハワイ近くにも、別荘をお持ちじゃなかったですか？」

と、玖珂。東は「よく知っているね」と感心しながらも、首を横に振る。「ああ・・・持っているよ。でも、行く予定はないなあ」

「やはり、時間があまりにないので・・・」

「——フィリップは飛行機が苦手なのよ」

篠宮は腹いせとばかりに、横槍を入れた。それにペンを止めた玖珂は、聞き返す。

「——苦手？」

「ちょ、ちよっと、京佳」

東は慌てて、これ以上話させないようにと口止めしようとするが、篠宮は面白半分で言った。

「ちょうどいいじゃない。滅多に聞かれることもないんだし、聞かれて困ることもないでしょ？」

一年中撮られても困らないんだから、と篠宮。

東は情けない顔をしながら首を横に振り続けた——が、

玖珂は面白いといわんばかりに、篠宮が投げたネタに食らいついてきた。

そして、東など気にすることもなく、篠宮の机に駆け寄る。

「苦手な理由とは——、何ですか？」

目をギラギラさせて聞く玖珂、調子をよくした篠宮は「いいわ、教えてあげる」と、微笑んだ。

「小等部の頃、アフリカのジャングルで4時間ぐらい、旧型の飛行機の中に置いてかれたことがあるんですって。なんでも、お姉様にライオンがいるかも知れないから、ちょっと待っていると言われて、そのまま四時間も忘れられたままだったとかそれから、飛行機の臭いが駄目なんですって。——あと、ジャングルも」

玖珂はさつきよりも倍の速さ、書き進めながら言った。

「——だったら、どうやってフランスから日本に来られたのですか？」

篠宮はカップを軽く指で押した。カタンツと陶器の綺麗な音が鳴った。

「客船よ」

「ロマンがあつてよかったよ」と、東は誤魔化すようにうんうん頷き、

二杯目になるアールグレーを篠宮のカップに注ぎ込んだ。

「へえ・・・会長は飛行機、ジャングルがダメと、

——他にはありませんか、篠宮副会長」

「そうね——、取材を今すぐ打ち切ってくれるなら、もう一つだけ」

「京佳！」

東が叫んだ。篠宮は玖珂には見えないように口元を覆い、

「私に任せて」と言っている。——そして、その目の前では、アンドレはちらりと姉の様子を伺っていた。

どちらが得か損か見極めているのだろうか、
ペンを咥えてじっとどこか宙を見つめている。

アンドレは知っていた、姉のノエルは、そういう考えを巡らせる
のが特別上手いのだ。今まで外したことは、ほとんどなく、
この数秒とも満たない時間で、それだけの判断ができるのは一種の
才能だろう。

彼女ほど、ジャーナリストに向いた人物はいない！

——束の間が過ぎ、答えを決めたといわんばかり、
玖珂は視線を篠宮に戻し、ペンを握り直した。

「——分りました。オペラの感想は頂きましたし、
今日はこれまでにします。でも、とっておきじゃなければ、帰ら
ま
せんよ」

さっきまでとはまるで違う、ジャーナリストの目で玖珂は言った。
妥協は許さない。

「あなたって、本当に嫌な子ね」

とてもじゃないけど、友達にはなれそうにないわね。
と篠宮は玖珂に応えるかのように、厳しい口調で言った。しかし、

「そういうことは、言われ慣れていますから」と、
平然と笑う玖珂。大胆さに加え、肝も据わっている。
向かうところ敵なしとでも言われているかのようだ。

お坊ちゃん、お嬢様ばかりのこの学校に、こんな生徒がいたなんて――と、

驚きながらも、篠宮はそれ装う振りもなく、冷静に言った。

「フィリップのプライベートのことは、
さすがこれ以上言えないけど、バトルBゲームのことなら・・・」

3 - 2 (後書き)

次回、

玖珂「ちなみに、——会長と副会長は付き合ってどれくらい

なんですか？」

東「ゴホッ！？マドモワゼル、ノエル。

僕たちはまだ・・・」

篠宮「玖珂さん、悪いけど、私の理想のタイプは

別の高校にきちんといるの」

東「きよ、京佳・・・」

玖珂「副会長のタイプは、

他校にいると・・・」

(カキカキ)

はやくも、恋も話も前途多難!?

「・・・よし、これである程度は納まりそうね」

青い破線の上に、玖珂は水色のペンで自分のサインを付け加える。
ジャーナル部では、あらゆる記事を纏める係りを分担していて、
ちょうど今月は玖珂がその係り。

印刷後には、消えてしまうサインでも、
玖珂達の後々ジャーナル部に入る者たちに、
誰が纏め作ったかを知らせるためにサインをしているのだ。

いわば、一般の生徒には見る事のない足跡だった。

「ノエル、この写真どこに貼るの？」

アンドレは、東と篠宮の写真の束を机に置いて言った。

「そつちは校内新聞用よ。ビデオは、後で部長にメールで送ればいいから」

「じゃあ、購読用には載せないの？」

「載せたって——、オペラの感想じゃあ読者から反感買っわ」

「——ねえ、ノエル。どうしてうちの学校、二つも新聞があるの？」

新聞は一つでいいじゃないか、と言っ安德レ。
玖珂はつぶやくように言った。

「——それは、もうじき分るわ」

安德レや他の部員が撮った写真を手探りで見ていると、
広い机の端に置いた手帳が肘に当り、床に落ちてしまった。
玖珂は落ちた手帳に手を伸ばす——

「ノエル、何見ているの？」

弟の安德レが、玖珂が拾い見ているものを覗き込んだ。それに、
玖珂は

「——パパたちから」と、安德レに絵葉書を手渡した。

荒野の地平線に沈む、赤く色づいた大きな夕陽。
表には一言だけ、「身体には気をつける」という走り書きしか書かれていない。

実にシンプルな手紙だ。

アンドレは何も言わずに、絵葉書を玖珂の手に戻した。

——彼らの父玖珂昂と母エリア—又は、
フリーのジャーナリストで、世界各地を飛び回っている
多忙な夫婦だった。玖珂姉弟は父親の祖父に預けられ、
日本で過ごしているが、いつの日か両親のように、
——いや、それ以上になりたいと思っていた・・・

「——今、どうしているのかぐらい、書いてくれてもいいのにね」
玖珂は悲しそうに目を細め、ぽつりと呟いた。そして、弟のアン
ドレは
黙ったまま、そんな姉を見つめた。

——姉は強い。

両親を知らない兄弟は、両親への尊敬以上に、新聞というものに救われた事実が大きかった。取材する時、記事を書く時、

どんなに心が安らぎ弾むのか、計り知ることはできない。

家に帰っても、両親には会えない、

だったら両親と同じように真実を探しにいけないと

姉に手を引かれ、始めた新聞作りが、今では生き甲斐といえるほど、楽しくで仕方がないのだ。

兄弟にはこの道しかないと確信さえ持っていた。

だから、疎まれても罵られても、人から得た情報を

自分なりに解釈して、新聞する。悲しむよりもずっと先に、動き続けている。

新聞は、姉の強さの象徴だとアンドレは思っていた。

幼い頃、小遣いを積み立ててまで、カメラを買い与えてくれた姉は、今でもアンドレにさえその強さを分け与えてくれる。

泣き虫だったアンドレとは違う、常に芯の強い瞳で世界を捉え、

——悲しい時だって、嬉しい時だって、

その強い瞳からは涙は流れ出たためしがない。いくら悲しそうな顔をしたって、

「感動泣き以外はしない」と言うだけ。寄りかかれるほどの肩幅があっても、

姉はけして頭を預けようとはしなかった。

——だったら、どんな状況になろうとも、

アンドレだけは姉の味方でいようと、傍にいようと思っていた。

弟では叶わない——いつか、姉を支えてくれる人が現れるまで——

「——いつものことだよ。面白いものでも見つけて、夢中で追いかけているんじゃないかな。」

……絵葉書が来るんだから、心配いらないよ」と

姉を励ますつもりで言った。だが、玖珂は

「——だったら、いいんだけど」と気のない返事を返すだけで、また写真を見つめ、しんと黙りこんでしまった。

けれど、アンドレはこれ以上何を言えればいいのか、思いつかなかった。

姉とは違い、アンドレはひどく口下手なのだ。こういう時ほど、お喋りな人間が羨ましい。気の効いた事さえ言えないなんて……

支えると誓った自分が情けないと落ち込むばかりだった。

そうして、アンドレが必死に頭の中で色々と言葉を模索して、
どうこうしていると――

バンツと五月蠅くジャーナル部の木扉が開き、
雷鳴のように飛び込んできた生徒が叫んだ。

「玖珂！特ダネだ！」

よく通る声で、――カメラ持ってすぐに来い。と、
ジャーナル部の部長丸池晴哉が叫べんだ。そして、呆然と丸池を振
り返ったアンドレの隣、玖珂は絵葉書を手早く手帳に挟んで、言っ
た。

「了解！どこで起こっているの？」

「校庭。芸術科2年の八王子直衛と、国際特進科3年のジャン・フ
ランセルが喧嘩している。――明日の一面はこれで決まりだな！」

「八王子ちゃんとフランセルが――、またあ？」

「例のアレで喧嘩しているんだ、こりゃまたジャーナル部の株が上
がるかもな！」

丸池はにんまり笑いながら、先に行っている、遅れて劇的瞬間を撮り逃がすなよ！と

念の押して、扉を開けたまま走っていつてしまった。

「例のアレ・・・」

数秒、玖珂は深く考え込んだ。

——今、門倉学園高校では他の三校と同様、謎に満ちたバトルBゲームは

ひどく話題となっていた。生徒教師の間でも、ガセネタや真実を含め、

ゲームに関する話が絶えることはなく、ジャーナル部でゲームの話題を

新聞に載せさえすれば、それなりの生徒教師の指示を得ることができた。

まさに、バトルBゲーム様サマだった。

けれど、門倉ではゲームだけでは飽き足らず、もう一つ話題になっていることがあった。

それは——・・・

「――幕開け……ってとこね。丸池部長の言うとおり、遅れたら大変だわ」

アンドレは姉が笑ったのと同時に、パツと一眼レンズが納まったカメラケースの紐を首にかけ、フィルムケースの入った箱を開け、予備のフィルムを腰に引っ掛けたポーチに補充する。

そして一方の笑った玖珂は、手帳とペンを制服の胸ポケットにしまい、

部室の壁にあるホワイトボードに大きく「校庭」と書きこんだ。他の部員への配慮も忘れてはいけない。

キュツとマジックペンの音を鳴らして、きちんとサインも忘れずに書く

――NOEL

「ノエル」

用意ができたと言ったアンドレに玖珂は頷いて、二人は急いで部屋を飛び出した。

その頃、生徒会室では、パサパサとした黒髪の、
それも眼鏡をかけた生徒が自分の机の上を綺麗に磨いていた。

——いや、失礼。殺菌消毒していた、といった方が正しかった。
眼鏡の生徒——御手洗翔は、几帳面で、なにより潔癖症なのだ。一
日に何度も、
自分の使うものは殺菌除去しなければ気がすまない、典型的な潔癖
症だった。

しかし、そんな性質を持ってしまった御手洗も、
会計委員としては働きがよく。御手洗が会計になってからというもの
の、

データは過去十年に渡るまで、完璧に生理整頓されている。だから、

生徒会役員は「御手洗はちよつと——、ほんのちよつとだけ神経質なんだ」というだけで収めていた。

——間違つても、本人に「ちよつと、やりすぎじゃない？」なんて言つてはいけない。

今年卒業した先輩の一人が随分前に、御手洗に軽い気持ちで、「お前、度が過ぎて逆に気持ち悪い」と言つて、一ヶ月近く御手洗は学校を休んでしまったことがあつた。

それはいくらなんでもひどすぎるのではないか、と同情した生徒会役員たちが、

「お前が悪い」とその先輩を責め続けていると、当の先輩の元に退学通知が送られてきて——

当時の生徒会長と共に御手洗家にまで謝りに行つたおかげで、なんとか退学騒動も丸く収まつたものの、権力という恐ろしさを心底思い知らされた出来事だつた。

それから、「御手洗は几帳面で、潔癖症で、傷つきやすい」は、他の生徒には知られてはいない生徒会の教訓になっていた。触らぬ神に祟りなしだ。

そして、そんな奇妙で恐ろしい教訓を生んだ御手洗は、今現在、息を潜め、体を机と同じ位置まで屈めて、埃や指紋がないか確かめていた。

——なんて、無謀な行為！

教訓さえ忘れて、何か言いたくるような光景だ。

だが、生憎、生徒会室には御手洗ともう一人しかいなかった。

——そう、体を屈める御手洗のすぐ手前で、

何食わぬ顔をして、御手洗の潔癖症すら気にするでもない、

東がヒョッコリと屈む御手洗の前に顔を出した。

3 - 3 (後書き)

次回、

渋川「ちわあーす！！五代目、

ただいま戻りました」

鳴滝「……………」

岸辺「——渋川さん！！

入院してなくていいんですか？」

渋川「つい、こないだ

退院になったんだよ」ボソッ

岸辺「そうだったんですか、

よかったじゃないですか！！

——でも、ギブスしているって

ことは、

まだ治っていないんじゃない？」

渋川「まあな……………」

チラリ「——五代目、」

鳴滝「……………」

——スタスタス

タスタ……

岸辺「——あつ、若！？待ってください」

「骨折スターニツキ」

http://89luxxx.blogspot39.fc2.com/
blog-entry-10.htmlもよろしく!?

・・・あれ、次回は？

「御手洗くん、掃除は終わったかい？」

顔を出した東は、小さく屈んだ御手洗を見下ろしてそう言った。

「——はい、たつたいま」机を磨いた紙を、きつちりと「ミ箱」の中心から落して、

「会長、篠宮さんなら出て行かれましたよ」

と東が言うだろう台詞を早々と言った。

「ああ、知っているよ。——それより、隆吾はどこにいるか知っているかな？」

東は生徒会室を見まわしながら言った。東、御手洗とは同級生の並木隆吾は、生徒会美化委員だ。

御手洗は立ち上がって言った。

「並木くんなら、庭師の所ですよ」

立ち上がったも尚、東よりも十センチ低い御手洗は、

——きつとそこにいるでしょうと、窓の外に見えるバラ園の方を向いた。

確かに、いつもの並木なら確実にそこにいてもおかしくはないだろう。

東は「——バラ園か。分った、行ってみるよ。ありがとう」と片手を上げた。

それに、御手洗は「どういたしまして」とぼつりと頷いて、何事もなかったかのように席に腰を下ろした。

これから、また会計の仕事でもするのだろう。

東はサッと身を翻して、扉へと向かった。そして、扉をガチャリと開けて、廊下に出ようと一歩前に足を出したら、東の胸に柔らかい何かがぶつかり、キヤッと悲鳴が低い位置から聞こえてきた。

「——おっと、失礼」

ぶつかった衝撃で後ろへ身を揺らした女子生徒の肩を、東は優しく掴んで、倒れないようにとグッと手前に引き戻した。

女子生徒は顔をあげて、恥ずかしそうに言った。

「会長！ごめんなさい、扉が開いたのに気づかなくて——」

東は、彼女が手に持った分厚いファイルに目を落とした。

彼女、——風紀委員の那谷朋江は、そのファイルの中身を見るのに夢中になっていたようだ。

東は「気にしないで」と眩しい笑みを浮かべた。

「——でも、どうしたんだい？帰ったとばかり思っていたよ」

「ニンファアアの劇団の皆さんとお茶をしていたんです」

収穫が一杯ありました。と、那谷は嬉しそうに言った。

——そういえば、ニンファアアの中に、ブロンドで海のような青い瞳をした、

顔立ちのいい少年がいたような気がする。那谷の「ニンファアアの皆さん」というのは、その少年をただ一人を指しているのだろう。

顔中をキラキラとさせて、——まるで、ネタをノートに書き込む、ジャーナル部の玖珂のようだ。

那谷はジャーナル部の玖珂ように、しょっちゅうガッツリなどしていないが、

どうも一部のアイドル的な美少年に対しては例外らしい。東は大幅前に、那谷の、そういう噂を聞いたことがあった。

東の気のせいであれば、生徒会に入ってしまったら、那谷の熱っぽい視線を感じたことがあったような、なかったような……

もつとも、それが東の勘違いでなければ——の、話だが。

那谷は少し、生徒会室を気にしながら言った。

「京佳に用があったんですけど……もう帰りました？」

「いや、まだだよ。今、職員室に行っているから、すぐに戻ると思うよ」

東がそう答えると、那谷は「じゃあ、帰ってくるまで待っています」と頷き、東が外に出ようとしている様子を見て、すかさず言った。

「会長、どこかへ行かれるんですか？」

「バラ園にね。隆吾に話があつて——」

今から行く所なんだ。と東。那谷は、だったら——、
「庭を横切るときは、隅を通った方がいいですね」と言う。東は首

を傾げた。

「——どうして？何かあったの？」

「喧嘩が——。また、ジャンと直衛くんが喧嘩しているんですよ。ちようど、カフェテラスの近くで——、本当に怖かった」

那谷はファイルを胸に抱えて、不安そうに言った。

「また、——かい？例のアレ絡みかな・・・」

「多分そうじゃないですか？二人の雰囲気が悪くなったのって、葉菜ちゃんとジャンが付き合ってからですし——」

最近、門倉高校ではバトルBゲームと、純愛がブームとなっていたのだ。まるで火がついたように、中等部から高等部まで、誰々が誰かよ付き合ったという話は後を絶えない。——そして、そんなブームの中でも、ジャン・フランセルと八王子直衛の仲たがい抗争は、ひどく話題となっていた。

東はぼんやりと思いながらつぶやいた——

「純愛かぁ・・・。京佳も、その気にさえなってくればなぁ・・・」

「——会長、何か言いました？」

全然、聞こえなかった。と那谷。東はにっこりと笑った。

「ううん、なにも。——それじゃあ、止めにいつてくるよ」

「えっ？」

並木くんに話をしに行くんじゃないか？と問う那谷に、東はサラサラの髪をなびかせてみせた。

「僕が行かなきゃ、始まらないだろう？」

カフェテラス近くの庭まで来ると、そこは生徒の人ばかりができていた。

五メートル近く離れていても見て分るほど、背の馬鹿でかい並木が、フランセルと八王子の両手首を軽々と掴んで、二人を無理やり引き離そうとしていた。

フランセルは白い顔を真っ赤にさせて、口の端が切れている。八王子の方は長い前髪に隠れて、顔の様子が見て取りにくいけど、どうやらこちらもフランセルと同じように顔を真っ赤にさせているようだ。

それに、パチパチッとシャッターの激しい音がする。探さずとも近くにジャーナル部がいる証拠だ。明日はもっと大きな事件として学校中で取り上げられるのが目に浮ぶ。

東はフツと笑った。

エンターテイナーは果たして、喧嘩の当事者、フランセル、八王子か。

ネタに飢えたジャーナル部か。

それとも、——生徒会長、東なのか・・・

東は楽しくて、笑いが止まらなかった。

そして、お門違いな笑い声を聞いて、東の登場に気づいた生徒たちは、

スツと道を開けた。——かの有名な十戒のモーセがやってのけた、海をひらけたようだ。

東は生徒たちがつくった道を優雅に歩いて、言った。

「やめたまえ、やめたまえ。素手で殴り合う喧嘩なんて美しくない！

——どうせやるなら、フェンシングで決闘すればいい！」

剣を貸してあげるから、明日の昼休みにでもどうだい？ いい余興になるよ。

と、東はにつこりと二人を見た。

フランセルはどうやら相当カッとなっていたようで、ハツと取り囲む周囲に気がついて、キョロキョロと顔を左右に振りだした。八王子はチツと舌打ちしている。

東の発言とともに、周囲を自覚した二人は、戦意がまったく失せて、——どうやら、喧嘩はお開きとなったようだ。

腕を開放された八王子は、何も言わないまま俯いて、走るように校舎へと歩いて行った。八王子はあまり、目立つのが嫌らしい。

そして、フランセルといえば——、まだ首を左右に動かして、必死に誰かを探しているかのようなようだった。

東は、そんなフランセルを無視して、でかでかと突っ立った並木に歩み寄った。

「ご苦労様。君がいなければ、もっと大惨事になっていたかもしれない」

褒めの言葉を言ったのに、並木は心配そうな顔をした。

「どうつてことない。そんなことより——フィリップ、煽るようなことを言つて……本当に決闘したら、どうしていたんだ？」

今日はなくても、明日は血まみれになっていたかも知れないと、並木は言っているのだ。けれど、並木の言葉に反して、東はクスクス笑った。

「——どうしていたつて？どうもしないよ。止めても、やめないのなら——本当に決闘させたまでさ」

まっすぐ並木を見上げた東の瞳は、本気らしかった。

並木は時々、親友である東に対して、異様なるぬ不安感を覚えることがあった。

それは、恐怖からくるものではなく——確信めいたことからくる不安感だった。東が言うことは、まるで初めから知っていたかのように、実際に起こることが多かった。

当然、外れることもよくあるのが——しかし、三つの事柄以外は、よく頻繁に当ててみせた。一種の予知能とでもいっておこう。東が言うギョツとするような発言なんて、並木にとっては珍しくなかつ

た。

けれど、どんな予知能があっても、東がそれにまったく気づいていなかった。

不思議なほどに、その能力に気づかないのだ。もしかしたら自分自身の美しさにしか興味が無いというのもあるかも知れないが——きつと気づかないことは、神様が与えてくださった東への褒美なのだろう。

並木は少し抜けた親友が、間違っただけの思考を持って、これ以上暴走しないでくれることを心から願っていた。だから、東には決して気づいて欲しくなかった——

「大概にしておけよ」

低めの声で並木がそう言うと、東は「？」——と、首を傾げた。

並木の心配は、永久に東には分らないだろう。それがいい事なのか、悪い事なのかは——本人のみが、ずっと先で知ることとなるだろう。

いつの間にか、走っていったフランセルと、散つゆく人ごみを見て、

東は言った。

「——そうだ。君に秘密にしたい話があつてね。立ち話もなんだから——そうだね、

君の好きな庭師の所にもお邪魔させてもらおうかな」

柔らかいパーティドレスに包まれた、甘く薄づきの杏色の薔薇、「フレグランス・アプリコット」が咲き乱れる園に、まだ春には早いと、冷たい風が吹きつけた。

3 - 4 (後書き)

皆様 申し訳ありませんでした・・・
重大なミス発覚。

第3 - 3話で

門倉高校ジャーナル部部长「丸池 晴哉」、生徒会美化委員
「並木 隆吾」

すっかり、名前を入れ違えていました。

これからは、こんな微妙な間違いないように頑張りたいと思います。
す。

そして、七月はアクセス数が1,000を越えました。約半年以上にして、もう感激の嵐です！！
皆様のおかげで、作者は日々バトルBゲームの構想を練るのが楽しみで仕方ありません！！

どうか、引き続き応援よろしく願いします！！

次回、「フレグランス・アプリコット」を見て何を思う!?

門倉学園高校の専属庭師になって早三十年の西氏は、バラ園の隅にある小さな温室で、春だけに捧げる白い薔薇、「マダム・アルディ」を見つめ、「ごめんよ」と謝りながら、優しく茎に鋏を入れた。

バチンと鋏が鳴り、一輪の薔薇が西氏の手の内に落ちる。

——その薔薇の落ちてゆく様といったたら！

幾つもの、白く可憐なフリルと、その中心にある緑の宝石を揺らしながらも、

気品さをまったく失わない。切り落とされたというのに一向に変わらない、

堂々とした装いには、胸を射抜かれるほどの魅力があり。

一度でも傍に置きたいと望めば、確実に心まで持っていかれてしまいそうだ。

西氏はそんな彼女を大切そうに包み、すでに摘んで置いた薔薇の上にそつとのせた。

——すると、

「西さん、お邪魔します」と並木が温室に現れた。隣には東も一緒だ。

「やあ、二人とも」

西氏は彼女達から少し離れ、手にはめた皮手袋を脱ぎながら、次いで「——珍しいね。東くんを連れてくるなんて」と嬉しそうに言った。

ニコニコとした西氏は東を歓迎しているようだ。東はそれに、にっこりと微笑み返して、「こんにちは」と挨拶も返した。

「生徒会の方は大丈夫なのかい？」

と、西氏。歓迎から急激に一転して、嫌味を言っているわけではなさそうだが——、

職員室から戻ってきた京香を思い出してしまいそうだ。

生徒会室を出る前に会った、那谷がどうにか話を反らしてくれていることを、

今は願うしかない——

「ええ、まあ……」

東は苦笑いにしながら頷いた。

——50代半ばの西氏は、とてもおとした人物なのだが、この学園には随分長く勤めているだけあって、

学園については知らないことはほとんどないだろう。

それに、なんとたつて理事長とひどく仲がいいのだ。きっと、東たちの事情すら、

筒抜けなのかも知れない。

——だが、東は念のために、「とにかく、大丈夫です」と言い直

した。

忘れてはいけない。東は一大決心をしたところなのだ。

それを並木に伝えるまでは、尻尾すら巻けない。

例え、明日京佳に怒られてもだ。この決心は揺らぐことはない。

——なんて東が考えていたら——、突如並木は、

「摘んでしまったんですか？」

と、妙に低い声で言った。眉がハの字という、いかにも不機嫌です。

と主張している顔だ。——摘んでしまった？東は一瞬、首を傾げ、すぐに並木の視線の先に気がついた。

木から離れ、切り置かれた「マダム・アルディ」。

西氏は東よりずっと先に、並木が言っている意味を理解して、「ああ——、そうだよ。あともう少しだけ、摘むつもりなんだ」、「学校中に飾るつもりでね」と、こつくり頷いていた。

しかし、並木はそれに、ますますハの字を濃く深めるばかりだった。

美しい白い薔薇、「マダム・アルディ」を摘むことがそんなにも

気に入らないのだろうか――

「そんな顔をしないでくれよ。

彼女たちもこんな温室に閉じこもっているよりも、人に見られる場所にいる方がずっといいだろう。――特に、彼女はね・・・」

西氏は「誰かと一緒にいる方がいいんだよ」と、愛でるようにアダム・アルデイの花びらを撫でた。

「マダム・アルデイ」は、その名の名の通り、フランスの庭師アルデイが愛妻に捧げた薔薇で。容姿から香りまで、何から何まで、完璧にほど近い薔薇だといわれ由縁は、その生涯に渡る恋ゆえだとか――

「生涯に渡る恋」

――ああ、なんてすばらしい響きなんだろう！

実際には起こりえない京香との甘い妄想に浸り、東は悩ましげに溜息をついた。けれど、人よりも植物に恋する並木は、ムスっとしたままだ。

並木にとっては、どんな理由があっても切り刻むことなんて、理解できないのだ。

二人のあからさまな違いに、西氏は笑いを漏らした。

「——ところで、二人は薔薇を見に来たのかな？」

西氏の問いに、並木はハツとして東を見て言った。

「——ああ。フィリップ、秘密にしたい話って？」

「あつと、え——と、……」

急に話をふられ、東は口籠った。それに、どうやら西氏を気にしているようだ。

聞かれたくない話らしい、東の様子を察した西氏は、

「大丈夫。ぼくはこれから理事長室にこれを届けないといけないから。」

二人はゆっくりしておいで」と、

摘んだ薔薇の束を横文字の並んだ新聞紙に包み、両腕に抱えた。

そして、「若いっていいね」と言いながら、微笑ましそうに温室を出て行った。

西氏が去るのを見送った東は、温室の奥にある椅子に座ろうと促した。そして、

二人は椅子まで移動し、深く腰をおろす。――が、それから、しばしの沈黙が続いた。東と一緒にいて、普段ではありえない沈黙だ。

並木はどうしたのかと、横を見ると、東は前を向いて、腕を何度か組みなおし、どこか緊張しているようだった。

「――フィリップ？」

不審に思った並木が声をかけると、

「隆吾」

東は覚悟を決めたかのように並木の名前を呼んだ。

それに、「――なに？」と、並木が聞くと、ごくりと東の喉が鳴り、

「京佳に告白しようと思うんだ」

――と、切羽詰まったようにそう言った東。

「瞬間を言い返せばいいのか分らなかった並木は、とりあえず」
…そうか」と頷いた。

何事かと思えば——、東は篠宮にようやく告白をすることを決心したのだ。

並木は、東が秘密にしたいということは、そういう事だったのかと、

心の中でうんうん頷きながら納得した。

——しかし、決心を聞くだけなのに、なぜかこっちまで緊張させられる瞬間だった。

東は必死になって言う。

「——なんといいたらいいか……。オペラを見終わった後、京香とお茶を飲みながら思ったんだ。ずっと、ああいう風に京香とお茶が飲みたいって。——それに、構内でカップルを見るたびに、羨ましくてたまらない。——とにかく、もう我慢でいいんだ！」

珍しく顔を真っ赤にさせて、並木には東が泣きそうになっているように見えた。

ナルシスト美少年も、恋をすると、ただの少年だってことか……。

余裕の片鱗すらない顔を鏡で見せたら、東はどう言うだろうか、と不純な事を考えながらも、並木は尚も頷いて、言った。

「遂にか——。もう、一年ぐらい経つんだろ？長かったな。よく今まで我慢してきた——と、褒めたい所だが……。あの篠宮が『うん』

「とうかとうか——」

並木は、気の強い篠宮のイメージを思い浮かべる。けれど、東はそのイメージを吹き飛ばすかのように言った。

「振られたときは、一晚中フェンシングに付き合ってくれ」

まったく振られることへの不安感さえない、意気揚々とした言い方は、自信があるのか、それともまるでないのか——

東の予知能を持つてすら、まったく当てることができない三つの事柄は、すべて東自身のことを示している。——そう、恋・健康・未来。よく占い師は自分の事が見えないというのは、あながち嘘ではないという、東は実物証拠だ。

——だが、そんな事さえ知らない東は、どちらにしろ、告白しないことが一番、我慢できないだけなのだろう。並木は、ただ——、破天荒すぎる親友の恋を応援しようと思い、「付き合うよ」と頷いた。

「——それで、俺は何をしたらいい？」

何か考えているんだろう？と、並木。東はにっこりと微笑んで頷き。言った。

「ある人を連れてきてほしい」

次の日、——昨日の庭での騒ぎを知っている者なら、
誰でも予想しただろう、ジャーナル部で今朝配られたばかりの新聞
が、

門倉学園中を数百部も駆け巡っていた。

授業や休み時間も関係なく、険しい顔をする者や、
面白半分の者たちが新聞の内容につきつきりで、そわそわと落ち着
きを失う生徒ばかり。

拳句には、教師陣が、授業中に新聞を広げた生徒から没収した新

聞が職員室にまで広がり。ジャーナル部や当事者たちに注意するどころか、どう伝えたのか、瞬く間に広がりつづけ——ジャーナル部新聞はもはや、学園外にまで勝手に一人歩きしていた。

けれど、ジャーナル部の部長丸池だけは、そんな学園中を歩き回っては、

新聞を手にもつ生徒たちを見てはニヤニヤとして、自分達を作り出した新聞の内容よりも、そんな生徒達に満足していた。そして、

どさくさに紛れ、丸池は興奮冷め切らぬ生徒教師、数名から購読用新聞の契約までも取り付けたのだから、恐れるに入る。

この部にこの部長あり、といったところだ。

——と、まあ、学園の状況を説明するのはこの辺にしておこう。さすがに、この物語をご覧の方もその内容が気になる頃だろう。

通りすがりの女子生徒の手にある、クシヤリと持ち歩きすぎた、肝心のジャーナル部新聞の一面を少々拝見させてもらおう——新品を望むには、
遅すぎる時刻だ。用は、中身さえ知ることができればいいのだ。

ちらりと長し読めば、皺の寄った新聞には——、派手に取っ組み合う生々しい写真が。ワイドショー並の記事には、こう書かれていた——

『芸術科2年八王子直衛、
国際特進科3年のジャン・フランセルの一途な純愛に対する横暴愛の激化!？』

昨日夕方、学園の放課後で騒がれた事件は、実際にそこに居合わせたのなら、ご存知だろうが、八王子直衛とジャン・フランセルの二人は、バラ園近くの庭で偶然鉢合わせし、突然口論し始めたかと思うと、首元を掴みあい――

二人の男を激しく揺さぶるのは、当学園の理事の遠い親戚に当たる、国際特進科2年紫垣葉菜姫！純真な可愛らしい顔には思いもよらない一面もあるのか、当部の過去の取材では、裏で学園を支配するのは彼女だと噂する人物も多々存在する――

彼女が早急にどちらか一人を選ばなければ、二人は自滅してしまうのではないだろうか？それとも、彼女は彼らの自滅を願っているのか――芸術科2年のMさんは言う。「クールな八王子くんを返して……」

――そして、最後列には、

『暴走プリンスこと、東フィリップ生徒会会長は、暴走する恋のため
に争う二人をたった一言で止めた。当部は、その瞬間を捕えた。
2面

——さすが、暴走プリンス！暴走に長けているだけあって、影響
力がある！

しかし、麗しの篠宮京香副会长との間だけは、暴走していないよ
うだが・・・』

と、激しい追及も忘れていなかった。

3・5（後書き）

丸池「ねえ、ねえ。購読新聞つてもつと内容がすごいんだよ。きわどいのも載せているしさ、購読してみない？」

女子生徒「本当ですか？」

丸池「本当だよ。ネタ情報いっぱい、裏情報いっぱい。購読しても損はしないよ」

女子生徒「えーでも、高いんじゃないですか？」

丸池「そんなことないよ。一度購読してみると色々分かるよ・・・」

——こうして、契約したのか、丸池！？

次回、真実はどこへ・・・

玖珂は今朝出回った、ジャーナル部の新聞を小さく丸め、廊下にあるゴミ箱に投げ捨てた。そして、数十歩先にある美術室を二度ノックする。

コンコンツと――、数秒、返事を待ってみるが――
しかし、返事は返ってこなかった。留守か、それとも居留守か――

「こんにちは」

と、美術室はいつも鍵がかかっていないと知っていた玖珂は、遠慮なくドアノブを捻り、美術室に入り込んだ。油の臭いがうつすらと臭ってくる。

さっきまで誰かいたのだろうか――けれど、あちこちにイーゼルが立て掛けてあり、

それぞれに椅子が置いてあるだけ。人の姿は見当たらない。

美術室の脇にある白い石膏像たちが、美術室にただ一人立つ玖珂を見つめた。

じつと立ち尽くす玖珂、ふんわりと玖珂の前髪が揺れ、どこから風が吹いているの気がついた。――一番奥の窓だ。

玖珂は歩いてゆき、開いた窓枠に手をついた。見下ろせば、すぐ真下には草ばかりの庭があり、少し向こうにはカフェと、

バラ園がそのずっと奥へと続いている。上から見れば、まるでカフエテラスがバラ園の中にあるように見える。——これは、門倉学園高校でこそ成しえる、ゴージャスな校庭だった。

玖珂は身を部屋の方へ反らして、ゆっくりと目を閉じた。

そして、すぐに目を見開いて、何かを吹っ切るかのように息を荒く吐いた。——と、

床にイーゼルから外れ落ちたキャンバスが横たわっていた。

玖珂は身をかがめて、そのキャンバスを拾いあげた。

「——ひどい」

と、ぽつりと呟いた玖珂。キャンバスには赤や緑や青が

ぐちゃぐちゃに塗りたくられ、所々筆で書いたものでない痛々しい傷で、

きたなく

汚れていた。ぼんやりとした下書きは、柔らかい女のもののなに——ひどく台無しになっていた。

玖珂はそのキャンバスをイーゼルに寄せ、美術室の入り口近くにある、

準備室の扉を遠目で見た。——こんな絵を描くのは、玖珂が会いにきた生徒しかいない。

この部屋にいないとすれば、準備室にいるにちがいない……

準備室へと動き出した玖珂の目はひどく虚ろだった。

ダンボールに紛れて、準備室でうなだれている——その生徒は、玖珂が思ったとおりそこにいた。床には、ビリビリと破り裂けられた新聞が

紙吹雪のようになって散らばり、

生徒は顔まである髪で、表情をすっかり隠していた。

「——なんだよ、言い訳でもしに来たのか？」

顔も眉も動かさずに、八王子は言った。

「言い訳なんてしない。自分書いた記事を恥じているつもりはないもの」

と、玖珂。美術室に入る前に、恥じていないという記事を潰して、ゴミ箱に捨てたなど、ついに知らない八王寺は「そうかよ、——自信がある奴はいいよな」と、毒づいた。

「——でも、八王子くんが怒っているのは分かっているつもり。それほどの事を書いたから——」

「じゃあ、ご機嫌でも取りにきたのか？——ああ、じゃなくて、取材だろ？いくら俺が違うと言っても、好き勝手に書くんだろ？——だったら、わざわざここまで来なくたっていいだろ！」

八王子は床に散らばった新聞の塵を鷲掴んで、玖珂に向かって投げた。

「……直衛」

「学校で呼び捨てにするなよ」

「——目立ちたくないって？もう、そんな努力もいらないじゃない」

学校中が、あなたとフランセルと、紫垣さんの噂で持ちつきりなんだから——と、

玖珂は眉を顰めて言った。

「お前と仲がいいって知られば、余計に面倒になる」

と、八王子ははっきりと言い捨てた。

玖珂と八王子の出会い、中等部に上がって間もない、今と同じような状況、

同じような場所、——中等部校舎の「美術準備室」で。

玖珂が新聞部に入って初めて記事を任された、とても印象的な日だった。

——当時の先輩たちには、コンクールで金賞を取った、ひどく若い芸術家の八王子には、同い年の方が先入観を持たれないだろう。

という理由で、玖珂を八王子に宛がったのだが、それは二人を仲良くさせる切欠になったとは考えもしなかっただろう。

「記者」と「話題の人」という、一時の係わり合い。インタビューが終れば、

その浅すぎる係わり合いも、それで終るはずだった。

だが——、話をしてみれば、意外と気が合い、互いを面白いと言いついて

何度も話をするうちに、どこにも存在していなかった仲が、掘るように深まっていった。それはもう、深すぎるほどに……

——そして、そのうち二人は、家が近いこともあって、

休日なんかはよく、アンドレを置いて一人でこっそりと遊びに行き、互いの食べ物の好みさえ、言わなくとも分るようになっていた。

——よき友人で、よき相談相手にもなっていたのだ。

けれど、新聞作りの多忙な玖珂だ。最近、ほとんど学校でも会わなくなっていた。だから、ジャーナル部という最も嫌われやすい部に属する玖珂と仲がいいなど知られれば、八王子の地味で静かな学園生活が侵されるから——と、学校では他人と同様に接するといふルールも、玖珂はあまり気にもならなかった。——そう、また八王子が昔と同じように、話題の人にならなければ……

玖珂は、八王子のことが全く分らなくなっていた。

「そんなに面倒が嫌いなら——どうして、フランセルと喧嘩するの？」

八王子はその玖珂の言葉に初めて首を動かし、玖珂を見上げた。玖珂の声が一瞬、妙に甲高くなったのだ。

「紫垣さんが好きなら——、どうして、フランセルに紹介したの——？」

好き人を諦めるため？——何を考えているのか分からない。と、玖珂は小さな声で言った。すると、八王子は玖珂を呆然と見て、しまいには、クツクと笑いを零した。

「——何？」

玖珂は眉を顰めた。

「——ノエル。お前、——何、嫉妬してんの？」

八王子はニタニタしながら、笑いを含ませてそう言った。

心なしが嬉しそうにも見えるが——、どう考えてもからかわれて
るようにしか

思えない玖珂は、癩癧を起して叫んだ。

「——なんで、そうなるのよ!」

「——で、なんで俺が門倉に呼ばれるんですか？」

明雲高校の藤尾は、並木にバラ園へと案内されながら呟くように言った。

「——俺、部長なんですけど。部活あるんですけど」

この服装と竹刀を見れば分りますよね？と、藤尾は竹刀を肩にかけ、剣道着の裾を引っ張って見せた。

「申し訳ない。——フィリップが、どうしても藤尾くんじゃないと駄目だって言うもんで——」

東の代わりに、並木が重々しく謝るものだから、藤尾は不満を飲み込んで、

「——前々から不思議に思っていたんですけど、なんで東くんは俺を門倉に入れたがるんですか・・・？」と、思っていることを並木に訊ねてみた。

「・・・」

並木はしばらく黙りこんで、——それから、

「剣道やっている藤尾くんが、映画にでてくる侍に見えたらしい」

「——あと、フェンシングと剣道を織り交ぜた剣の部を作りたいらしい……らしい」と、東が考るだろうことを言った。

——考え方が、

「英司レベル……」

藤尾はガツクリと、首をうなだれた。——どうして、他校の生徒に、

しかも、こんなお坊ちゃま学校の生徒にまで好かれないといけないのだろう。

まるで二人の周防を世話しているようだ。

どこにしようとも、気苦労はまったく絶えない——

地面を見て、気落ちしたように歩く藤尾に、

並木は励まそうと、「安心して。編入届けは持ってこさせながら——

——」と、にこやかに言った。

それに、藤尾はパツと顔をあげて、

「当たり前だ！」

——と言って、ズンズン先へ歩いていった。

3 - 6 (後書き)

丸池「B B G新聞の発売日が決まったぞ、玖珂！」

玖珂「あー部長、それだったら・・・」

丸池「九月一日だ、クガツツイタチ！」

玖珂「あーだから、部長」

丸池「それまでにしつかり記事頼んだぞ、玖珂！」

じゃあ、俺は顧問と話をつけてくるから」

バタンッ タツタツ

タツ――

玖珂「・・・部長、第

一号は部長が担当だって

昨日決まったのに・・・大丈夫かしら・・・」

―― B B G新聞第一

号、

無事完成するのだろうか・・・

B B G新聞登録>http://www.alphapolis.
co.jp/maga.php?maga_id=1000455

次回、犬も歩けば恋も回る!?

美術準備室では——未だ、玖珂は八王子に背を向けて腕組して立っていた。

「——お前、嫉妬しているのか？」という八王子の言葉に、玖珂は動揺したのか、ただ怒っているのか——八王子の顔を見ようとしなない。

八王子はそんな気味の悪い玖珂に痺れを切らして、スツと立ち上がった。

そして、伸びすぎた前髪をかきあげた。

「——ジャンが別の女と歩いている所をさ、葉菜がたまたま見たんだよ。

でも、好きだからとかどうこう言って、本人に直接聞けないって、うじうじ悩んでいるから、俺が代わりにジャンを聞いてやったんだ。——したら、ジャンの奴、あっさり認めやがって——こんなこと言うんだぜ？

『葉菜は堅いから、時々は軽い女の子と付き合いたい』って。

——そりゃ、俺だって男だから気持ちは分るよ。重いより、軽い方が断然付き合いやすいって——でも、葉菜は一人っ子の、それも大企業の箱入りのお譲で、金持ちだといっていても、その中でも特別なんだよ。——だから、俺はそんなに尻軽がいいなら、

葉菜と別れる。って、ジャンに言ったんだ。

——そしたら、あいつ何を考えたか——『俺が葉菜を奪おうとしている』とか

言い出してさ。急に殴りかかってきて——、俺もあんまり腹立ったから、やり返して——」

「——そんな時に、お前の所の野次馬が勝手に記事にしたんだよ。いい迷惑だよ、

本当に……。ジャンと蹴りをつけようとする度に、邪魔しに来るから、

『話し合い』にもならねえし。結局はジャンが葉菜に泣きついて——葉菜には、『もいいいよ』とか言われるし——

俺だけ、踏んだり蹴ったりだよ」

溜息をついて、八王子は窓のずっと先を眺めた。そして、玖珂は傷つけられたキャンパスを思い出した。——八王子は、紫垣に良かれと思って
やったのに、ひどく落胆して八つ当たりしていたのだ。

まったく子供だとしか言い様がない。

ちらりと振り返った先に立つ八王子を見て、玖珂はぼつりと言った。

「……ただの幼馴染なのに、そこまでするなんて——」

「俺は親友思いなんだよ。——それに、お前が言ったとおり、ジャンを紹介したのは俺だし、一応その辺のけじめはつけておかねえと、と思って——」

紹介人の義務ってやつだろ？と、言う八王子。前髪に埋もれた容姿は、

悪戯に笑っていた。——要するに義理堅いといいたいのだろう。玖珂は数秒宙をじっと見て、そして、言った。

「はじめから記事の無駄遣いだった、ってことね？

——それを知っていたら、ジャンの浮気を取り上げたのに……」

「そこまでする必要はねえよ。それじゃあ、葉菜が可哀そうだろ？
——これだから、ジャーナル部は……」

同じ女なのにこうも違うのか？呆れるよ。と、八王子は苦笑いした。

——しかし、玖珂は反省するどころか、開き直り、はつきりした口調で言った。

「当たり前でしょ？可哀そうだろうと、何だろうと、
真実を伝えるのが新聞だって、21世紀になって知るなんて遅すぎるわ！

そうよ、——真実を伝える為に、まずは訂正記事を書かないと！
ジャーナル部が出す前に、誰からが知ったら大変よ」

——と、胸ポケットから取り出した手帳に、玖珂はメモを取り始めた。

ジャーナルの天才はもう、「略奪愛」よりも、「浮気と友情」に興味を移したのだ。

玖珂が走らせるペンは、取り留めもなく、走り続けている——。

八王子はそんな玖珂を見ながら、繊細な紫垣とは違い、断然逞しい。
と思いつながら——ふと、言った。

「他人の事ばかり追いかけてるけど、——お前は、何かないのか

？」

「何かって——？」玖珂はペンを動かしながら、上目遣いで聞いた。八王子はさつと目を反らして言った。「男とか——、いないのか？」

「いないわ」——と、いとも容易く即答した玖珂。そんなの興味すらないと

言わんばかりに、メモを取りつづける。あまりにもそんざいで、あつけらかとせずにはいられない八王子、

「男に興味ないのか？」

と聞いた。すると、「あるわよ。それなりに——」人並みにはねと、玖珂は素つ気無く答えた。——だが、やはり興味が無さそうに見えて仕方がない。

「人並みにねえ——？じゃあ、誰かと付き合いたい、とか思うんだ？」

「人並みにね」と玖珂は同じく、味気なく答え。「それじゃあ——」と、

再び話しかけた八王子を牽制するよるかのように、玖珂はついに叫んだ。

「——わたしに取材しているつもり？ジャーナル部相手に、いい度胸じゃない」

——だけど、その程度じゃあ誰も、何も話さないわよ。取材って
いってもコツがあるの！と、玖珂。一瞬止めたペンを再び動かした。
そして、——八王子はハツとする。

「——ジャーナル部ってスキャンダル禁止だっけ？」

「違うわ。ジャーナル部の記者はヘマをしないだけよ」

八王子の言葉を、玖珂は上手く訂正した。玖珂らしい訂正の仕方
だ。

けれど、八王子はニツと笑って言った。

「そう、ヘマしないんだ？へえ——じゃあ、ヘマしたらどうなるん
だ？」

「——ヘマしたことないから、分らない」首を横に振る玖珂、八王
子は笑ったまま一步玖珂に近づいた。しかし、メモを書くことに目
線を注目している玖珂は気づいていなかった。——また一步進んで、
八王子は言った。

「昔とか——、ヘマした奴はいないのか？」

「——何人かはいたんじゃないかしら。真実って時には残酷だって
言っし——。わたし達だって普通の生徒と何らか変らないわ」

——もう、また二歩。

「仲間も平気で売るっていうのか？それも最悪だな」

——三歩目で、八王子は躊躇うかのように足を止めて、

「——だから、ヘマをしないの。仲間を売りにたくないから——」

玖珂がついえで、「わたしもヘマはしないつもり」と言い切るのを聞いて、

八王子は四歩目を進めた。

「でも、100%ヘマしないなんて——、言い切れないだろう？」

「——いいえ、言い切るから、わたしはジャーナル部の記者でいるともいえるわ。」

伝える情報が100%じゃなくても、わたしは100%純粋な記者でいたい。

——これからも、卒業した後も——」

「そうじゃなきゃ、わたしはジャーナルを一切、辞めるわ！」

信念は簡単には曲げない、と玖珂は言った。彼女が心底真剣なのがよく、

分る言葉だった。しかし、それと同時に、その言葉は岐路を指示す言葉でもあった。

——五歩六歩と、ついに玖珂との距離が三十センチにも満たない所まで歩いてきた八王子は、ペンを動かし続ける玖珂の手を掴んだ。

——そう、それもとてもしやにふれるかのうちに、優しく……

「——その理屈でいうと俺とスキャンダルになったら、お前は退部するっていうのか——？」

「……」

手を止められ、あまりにも近すぎる声に、書くことに夢中で鈍感になっていた聴覚が、距離感を取り戻した。そして、見上げる先には、八王子の顔が——、

前髪が透けてその表情すらも容易に見て取れるほど、普段にはない距離だ。

玖珂の心臓が——、心持ち歪んだ。普段ではありえない歪だ。

しかし、記者の端くれは、自身の心臓よりも、詰まった言葉を先に取り戻したいかのように、口を動かした。それはもう——心臓など、まったく別物だといわんばかりに——

「目立つの嫌いじゃなかった？」

と、「——冗談でしょ」という意味を含めて聞いた。だが、八王子には

その手は見透かされていたようで、

「——嫌いだ。けど、どうせ、ジャンと一緒に新聞の一面を飾ったんだ——、お友達以外で載るのも楽しそうだな。——と、思ってたさ」

と、軽々しく、あっさりと返された。咄嗟に、——顔中を襲う力ツとした熱さに、玖珂は「——だったら、他の子と載ったら？」と、歪んだ心臓の上に、手帳を仕舞い込んだ。

そして、縮まった距離を離そうと、身体を右へ揺らした。

——が、それは叶わなかった。

八王子は慌てて玖珂の手を引いて、再び向かい合わせたからだ。半ば睨みつけるように八王子を見上げると、八王子は強く――けれど、切なげに言った。

「――俺は、友達以外と載りたいんだ」

3・7（後書き）

周防「ん？前回、何で門倉にいたんだ？
フジオ・・・お前、まさか・・・」

奥村「お前、また言
ってんの？」

周防「うおおおお！

！俺は許さんぞ！！

門倉に転校なんて・・・！！
『門倉の藤尾』なんて、俺は一生呼びたくねえぞ！！」

タッタッタ——ボゴンッ

藤尾「人を勝手に転校させるな！！」

次回、最終回・・・恋は濃い
！？

八王子の言ったことは、大した事なのか、大した事じゃないのか――。

その先を聞くべきなのか、玖珂は分らなかった。

その解釈が勘違いではないのかもしれないし、勘違いなのかもしれない。

――解釈の仕方が分らない。

ただ、今知ることのできる真実は、歪んだとばかり思っていた心臓が、

正しく鼓動を身体中で奏でているということだけ。そして、玖珂はその旋律が、

ずっと昔にとくに出来上がっていたことを知っていただけ。――と、八王子と、目が合った。なぜ、隠すのか――二重のすっきりした瞳は、少し青みがかっていて

綺麗だというのに――前髪は何かを遮断するように、いつも簾のように、前を塞ぐ。

――ああ、そうだ。まるで、八王子の瞳はカメラのレンズのようなのだ。と、

玖珂は初めて思った。真実を写すときのみ、そのレンズの蓋を恐る恐る開ける――。

彼の絵は、玖珂という写真なのだ。八王子と見ている景色が、そうは変らないのだ。

だからこそ、こんなにも惹かれる。——玖珂はゆっくりと心を落ち着かせ、その神秘的な瞳をじっと見つめた。——もう、準備はできていた。

しかし、八王子の方は、一切余裕もなく、あえていうならば——不安そうな顔をしていた。思うような絵が描けない時と同じ、自信の欠片すらなかったのだ。開きかけた唇も、その自信の無さの所為で、

すぐに閉じてしまう。音がなかなか出てこなかった——だから、パツパツパ——と、

ウエディングのテーマソングがすぐ外から聞こえてきた時さえ、ぴくりと玖珂の身体が揺れたのにも関わらず、咄嗟に言葉が出てこなかった。

不安に押された八王子の知りえない——玖珂の中では、その得体の知れない、

学校に不似合いな音楽が、玖珂の全精神を「行け」と揺さぶりをかけて仕方がなかった。切り替えの早さこそ、記者だ。けれども、八王子の言葉も聞きたかった。

大きく天秤が揺れていた。

——そして、ようやくいい所を持っていかれそうだと勘付いた八王子は、
窓に視線を向ける玖珂を必死で、無理やり揺さぶって——、

「ほつとけよ、外なんか——。ノエル、俺は——」

と、関心を引き戻そうとした。けれど、玖珂は、——ドンツと、八王子の胸を力一杯両手で押し退けた。ウエディングのテーマソングが

玖珂の闘心を芽生えさせた。——そして、思っても寄らなかったその玖珂の反応に八王子は、受身を取る暇もなく、準備室の棚に背ぶつけ、床に尻餅をつけ。

追い討ちをうつように——ダンボールが頭上から降ってきた。

「いつ……」

ついでにダンボールの中身までボロボロと落ちて、それは痛くてたまらない。

だが、八王子が自身の所為で酷い目にあっているというのに——、玖珂といえば、窓まで走って身を乗り出し——すぐに身を翻して、準備室の入り口へと駆けて行った。

「ノエル！」

——玖珂は八王子の声に立ち止まった。そして、深呼吸するかの

ように

深く息を吸って言った。

「新聞は、わたしにとってとても大事なもののなの。絶対に諦めたくないの。」

——だから、どんな些細なことでも、ほっとけない。——わたしは、どんな時でもジャーナル部の玖珂ノエルでいたい……」

振り返ることもなくそう叫ぶと、玖珂はずっと先の見えない、美術室の扉のむこうへと行ってしまった。だが、八王子は玖珂を追いかけなかった。

ダンボールを払い退けながら「どうして、あんな女を好きになったのだろう」と、

自問自答して——ただ、笑いが込み上げてくるだけだった。

——追いかけたって、玖珂には追いつけない。と、八王子は

どこかで分っていたのかもしれない。八王子は顔を覆い、泣きそうになりながら、

本当に声をあげて笑いそうになった——と、パチパチッと、フラッシュ音が、

玖珂が走り去った入り口から聞こえてきた。八王子が顔をあげると、一眼レンズを構える——玖珂アンドレが一心不乱に八王子を構図の中心に、

何枚も連続して撮り続けた。

「お前……」

「特ダネいただき」

カメラから顔をあげたアンドレは薄ら笑った。

「……嫌な姉弟だな、まったく」と、八王子は手に持つダンボールをアンドレに投げた。そして、——アンドレは当然、それを避けて、——知っているよ。けど、そんな嫌な姉弟の姉が好きだなんて——

八王子さんも相当物好きだね」と言った。

話を聞いていたのか——いつから——？と、聞こうと思っても、八王子はその言葉を、何もかもを飲み込み、頷いた。

「——かもな」

「——お前も行くんだろ？早くいけよ」

ジャーナル部だろ？と、八王子。しかし、アンドレは頷くも、すぐには出て行かず、じつとこちらを見ている。

「何だよ？」と八王子は声を荒げた。すると、ノエルは「一言いい？」と聞いた。

「——たく、何だよ？言えよ」

「——ノエルはあげないから」と、アンドレは言い逃げるように準備室を出て行った。

「……このシスコン！」

何も言い返せなかった八王子は、ダンボールを蹴り上げ叫んだ。
玖珂に比べれば大人しいとばかり思っていたアンドレが、実は姉以上の強敵だったと

知った瞬間だった。「あの姉にして、あの弟あり」ということ。
姉ですら手に余るのに、弟など――…

八王子と玖珂の恋は前途多難だとしか言い様がなかった。

けれど、八王子はうな垂れることなく、込み上げるあらゆる感情を抱えたまま、
悠長に窓に凭れ、玖珂を攫った出来事を眺めた。まさに、高見の見物だ――

カフェテラスの外に置かれたテーブルと椅子の周囲には門倉のオーケストラ、

吹奏楽部がそれぞれにウエディングのテーマソングを奏で。そしてオーケストラの間という間には真紅の薔薇「オスカー」を持った、天使のような衣服を身に纏った可愛らしい三十六人もの子供たちが立っていた。

門倉付属の幼稚園の子供達だ。恐らく、行事かなにかだと言って連れてきたのだろう。

薔薇を持ちながらつまらなそうに身振りさせている子供もいる。しかし、なぜ——こんなに演出を……と、疑問に思うまでもない。

我こそは生徒会長、東は小奇麗な白のスーツ姿で膝をつき、まるで童話の中にでも出てきそうな王子様のように、テラス席に座る京佳の手を
ふわりと取った。そして、言った。

「京佳、僕と末永くお付き合いしてください」

「東くん……」

篠宮と席を一緒にしていた紫垣は驚き、けれど、告白された当の本人、篠宮は小さく笑って、「——ゲームで勝ったら考えてあげてもいいわよ」たいそう意地悪く、気丈に言った。

「えっ、京佳ちゃん！」

尚も驚く、紫垣。だが、篠宮は続けて言った。

「演出は、70点ぐらいね。場所が学校じゃあねえ……もっと素敵な場所だったら、80点はあげたけど——フィリップにしては上出来な方じゃない」と、

いささか高飛車な発言だったが、吹奏楽部の生徒たちは演奏をやめ、今度は拍手し始めた。美人の副生徒会長が暴走プリンスに及第点を与えたのだ。

すごい進歩だ。しかし、——この暴走プリンス、東は何を勘違いしたか、

「京佳！——幸せにするよ！」と、感激して篠宮に抱きつこうとした。けれども、すかさず篠宮は東の頬に張り手を喰らわせられたのだから——世話ない。篠宮は叫んだ。

「ゲームに勝ったらの話よ！」

「部長」

ようやく、カフェテラスまでたどり着いた玖珂は、荒く肩を揺らして息を吐く。

丸池はちらりとそんな玖珂に目を向け、そして、またニタニタしながら、

「玖珂、どこに行つてたんだ！今日も記事差し替えだ！題して、『暴走プリンスついに求婚！』——また売れるぞ！」と、目の前の光景を見て満足しきつた顔をした。

「やっぱり……。その記事私に書かせてください！あと、訂正記事も、私が書きます」

「訂正記事？——まあいい。書きたいなら、全部お前が書け！けど、書くなら一言一句漏らさず、的確に書けよ！」と丸池。それに、「はい！」と意気揚々と返事する玖珂。

ジャーナルは熱い！二人の隣ではジャーナル部の部員たちが、シャッターを取り留めもなく押し続けた——

「——で、結局俺は何だつたんですか？」

ジャーナル部近くで、カフェテラスの華やかな光景を眺めながら、藤尾は脱力した。

並木は俯いて、まさか、東が突飛もなく告白するなど考えもしなかったものだから——

心底、「——申し訳ない」と藤尾に謝った。

美術準備室の窓枠に凭れかかっていた八王子は、窓下の、東の告白シヨと、

嬉しそうに顔の玖珂を見て、ぽつりと言った。

「——ノエル、知っているか？『フィガロの結婚』、本当の主演は——スザンナだっていう話」

玖珂の隣に追いついたアンドレがこちらを見上げた。

「——お前はとくに知っていたんだろう」

八王子は窓からそっと離れ、準備室を後にした。——どうやら次

の絵の構図が思い浮んだようだ。八王子は美術室のイーゼルの前に座り、傷ついたキャンパスを撫で、そして、騒がしい外の雑音を聞きながら、そこに美しい赤の絵具をのせ始めた――

3 - 8 (後書き)

恋よりジャーナルを取った、
門倉学園高校ジャーナル部 玖珂ノエル！？
戦いと恋ばかりがゲームではないと、立証したのか・・・？
次の話が終れば、ゲーム開始だ。
悠長に、しばし待たれよ・・・。

第三話 完結！！

次回、第四話へ

紫垣「・・・でも、

本当によかったの、京佳ちゃん？」

??「いいもよかったも、東くん以外

おらのちゃんか？」

篠宮「あなた、失礼ね。いるわよ、世界中に」

??「規模でかいなあ。」

見栄っ張りもいいとこやな。」

篠宮「・・・。

あなた、どこの生徒？門倉じゃないわね！」

「??へーい、おれは坂ノ浦学園高校の生徒がや!」

・
とりあえず、次回ご期待を・

4、坂ノ浦学園高校幽霊卓球部 佐野壮輔遊泳！？

坂の裏手にあるから「坂ノ浦」という、見た目そのままの名がついた、

新築の学校、坂ノ浦学園高校では、今日もいつもと何ら変わらない、メリハリがない一日がはじまろうとしていた。

新学期というのに、二三年になったばかりの生徒達はダラダラとやる気なく登校し、
新入生に限っては、緊張のせいだいなのだろうか、無口な生徒が多く、

やたらに新しい友達を作ろうとはしなかった。

——なんてやる気のない学校だろうか……。

全校集会の間ですら終始、若さを感じられないほど体育館はしんと静まり返っていた。

誰かと喋って注意されるのも、かったるいのだ。口の代わりに携帯を密に片手打ち、

立つたまま上手に居眠り、口の中に放り込んだ飴を誰にも気づかれずに舐め続ける。

とても平凡だけれど、とてもやる気がない。不良や派手な生徒はいないが、これからがとても心配になってくる。

——そんな平凡で、先が思いやられる学校の、真新しいプレートの2―Cと書かれた教室——出席番号五番の短髪の爽やか少年川口満は、一人、即興で作った音痴なうたを歌いながら、箒をバツドに見立てて振り。ある種の無駄なやる気を全身から醸し出していた。

「カー！昨日の試合はよかったわ。あの、盗塁は上手かったあ」

また箒を一振りして、川口は感嘆の声をあげた。すると、

「いつから、野球バカになったんだよ？」

と、狐のような細い長い目を潤ませ、同級生の山田悠世は、後ろに仰け反り、後ろある無人の机に頭をのせた。——大きく伸びをしているのだ。大袈裟な伸びだ。

山田はそんな川口を見て、「昨日から」と、不気味に腰を振って答えた。

「——いやなあ、妹が野球ファンでな。野球のDVDをゴールデンタイムに見てて、なかなか変えよらんから、一緒に見てたら、ついハマってもうたんやあ。」

野球もやっぱいいわあ」

箒を何度も勢いよく振って、川口は「球場まで観にいいのかな」と、遠目にぼやく。——そして、伸びを終えた山田といえば、目の端を擦り言った。

「お前って、影響されやすい奴だな」

——こないだ、スノーボードが好きだ」とか言ってなかったかと、山田。けれど、川口は「そうやったかなあ？」と、とぼけるように首を傾げた。

「スノーボードは金がかかるし、あれは冬だけやろ？——けど、野球はこれからシーズンやし、山田も観たらはまんぞ？」

と、開き直り。——今度、妹のDVD貸そうか？と言うが、

山田は「はまんねえから——、いらねえ」言い訳をするでもなく適当に言っ、二度目の大きな伸びをし出した。山田はまったく野球に興味がないようだ。

無気力に机にうなだれて、今度も大きな欠伸をする。典型的な坂ノ浦学園生だ。

しかし、川口は駄々を捏ねるように、

「観たら絶対、はまるって！」と、尚も強引に言い勧めてきかず――、だが、川口と同じく、山田も頑なに興味が無いと言って聞かなかった。

それこそ、「なんでやねん」と川口がいくら突っ込んでも、山田は「なんでもやねん」ときこかない関西弁を返すだけ。少しも観る気はないと言い切った。はつきり言って、勧めても一向に意味がないだろうに――。

けれど、川口の「観ろ」と、山田の「一人で観とけ」は長く交互に続き、二人の言い合いは、いつしか漫才のような心持ち感じのいいテンポを持ち始めた頃――、

「どうでもいいけど――俺さ、思っただけど。お前ら、逆じゃねえ？」

いい感じのテンポを持った二人にそう言ったのは、これまた二人の同級生、佐野莊輔。

少しばかりが顔の可愛らしい、頭は今時珍しい、ふんわりとした金髪の生徒だった。

川口と山田は、佐野を見て言った。

「何が？」

——声が揃ったことに、山田はハツとし、「ゲツ、ハモった」と心底絶望的な顔をして、一方の川口は、それを気にするでもなく、「逆って、なんやあ？」と、佐野に聞いた。

「——キャラ？」

語尾を疑問系にして答えた佐野。川口は同じく、語尾を疑問系にして、聞いた。

「キャラ？」

佐野はこくこく頷いて、両目尻を人差指でクイツと横に引つ張った。川口も山田も、佐野の意味不明な行動に首を傾げて、佐野に注目した。キャラと目を引つ張ることにどういう関係があるのかと……そしたら、佐野は言った。

「俺のイメージでは、関西弁を喋る人は目が細いんだよ」

だから、逆だよな？と二人に同意を求める。――が、今度は純粹に二人は声揃え、

「「知るか！」と、佐野に突っ込んだ。

――確かに、「知るか」だ。勝手な思い込みも甚だしが――、
当の、突っ込まれた佐野と言えば、ケラケラと面白がって笑っている。

どうやら、二人に突っ込まれることが分っていたようで、どうも無邪氣にからかっていたようだ。二人は続けて佐野に向かって叫んだ。

「「それで終わりがいい！」」

今、この学校では漫才なのかさえ危うい、お笑いブームなのだろうか……。

――いや、そんなことよりも、これがひどく不安になってくる学校の始まりだ。どこにでもあるような始まりだ。気なんて張らずと

も勝手にダラダラ話は進んでゆくだろう。自由きままに進んでゆく
だろう。

皆様、ぐれぐれもお手柔らかに……

川口「——はい、佐野ちゃん!」

佐野「何でしょう? 川口くん」

川口「ぼく、——実は……」

授業があまりに暇で……暇で……

山田の昼飯食っちゃたんです。

代わりに怒られてくれ!」

佐野「……はい、サイナラ、サイナラ、サイナラ!」

次回、平凡な日々のはじまり、はじまり!?

新学期が始り——それから一ヶ月もすれば、
どの学校でも部活が活発になってくるのは今にはじまったことでは
なく、

坂ノ浦学園高校でも、それは例外ではなかった。

——とある一室、

「よおーく、聞け。愚民ども」

「何で、そんなに偉そうなんだよ」

両手を腰にあて机の上に立ち、高飛車に話す川口に、普通に床の上に立っている山田が手を出してそう突っ込むと、

「いいとこやねん、邪魔すんなよお」と、小さな声でぼそっと囁いた、川口。

「どこが、いい所なんだよ？普通に言えよ」

と、山田は見上げて言った。二人はどうやら部活も一緒らしい。

「まああ、いいから。いいから。——えっとなあ、今日から卓球部をはじめます」

「——や、もうとつくに部活ははじまっているだろうが」

「一年生様ははじめてやる？」

「何でそこだけ敬語なんだよ」

「そりゃ——入部してすぐに辞められたら困るやん」

部員数イコール部費や。と、川口は変に威張ってみせた。山田は少し間をあけてから、

「それもそうだな」と頷いた。——なんて会話だ！初めから部費狙いのような会話。既に、この部の実態が明らかになったも同じだ。

「あの、先輩……」

入部、といっても体験入部したばかりの一年生がおずおずと手をあげた。

二人の正直すぎる会話に、いち早く脱退を表明するつもりなのだろうか――

「なんやあ？そこの一年の君」

と、川口。名指しされた一年生は言った。

「この部は、卓球できるのですか？」

「当たり前やん！」

川口は突っ込んだ。しかし、冷静な山田、

「――何でそんなこと聞くんだけ？」と一年生に聞くと、その一年生は周囲に目を配って、

「卓球台も、球もありませんよね？　ごくごく真面目に答えた。

――そう、そうなのだ。台も球も、団扇のような物もない。

川口や山田、それに体験入部に来た一年生の合計六人がいる場所は、体育館どころか――去年文化祭で使った大道具が大量に置かれた、物置き場と化した空教室だったのだ。卓球らしいものが何処に存在

するのは奇跡しかないだろう。

「うーん」

何と誤魔化せばいいのかと、正直に首唸ったのは川口。

山田は「うちはエアー卓球部で、各自己イメージトレーニングが主かな」

「イメトレの内容は自由だから」と薄気味の悪いスマイルを浮かべた。

普段冗談を言わなさそうな人が言うのと、どういった反応をすればいいのに困る。

——それは、体験入学にきた一年生全員も同じで、しかも山田は先輩。

それが冗談であつてもなくとも、何も言えないから、尚更分が悪いけれど、呆氣にとられても無視するわけにもいけないので、

「あはは」と苦笑いを浮かべた四人。

その全員が、入部を辞退しようと考えたのは意外でもなんでもなかった。

——その実、坂ノ浦学園高校の卓球部は、活動おろか、大会など縁遠いお飾りの部活だった。本気で卓球がしたくて入部し

た生徒など、

いないのだ。この四人の体験入部者も、直に去ることは目に見えて
いる。

だが、やはり部員数イコール部費。川口と山田は形だけでも、
「いい雰囲気」でアピールして、新入部員を獲得するつもりだった。
けれど、ご覧の通り、微塵も形にすらなっていなかったが……

「とりあえず、今日は部室片付け」という山田の言葉ではじまった、
体験入部早々の大掃除に、四人の一年は内心不満を抱きながらも、
崩れた、やたらと長く大きな木の小道具をたらたらと脇に運んだ。

——これが、まためんどろな作業だ。誰が作ったのか、木の枝は
ボロボロ取れるわ、

ご丁寧に枝に付けられた葉っぱからは、何故か異臭がするのだ。

一体、何の劇に使ったのが疑問だ。しかし、首を傾げる前に、

一年の一人はその臭いに耐えられなくなり、トイレだと言って空き
教室を出て行った。

そして、帰ってこないのはお約束のこと。

一生懸命に教室を掃除する、三人に減った一年生を横目に

「そついやあー、佐野ちゃんは？」

と、川口は山田に聞いた。佐野も卓球部のようだ。
この三人の仲良しぶりは、お飾り部活、同じ芝生だったことからだ
ろう。

確かに、新学期早々互いに馴れなれしすぎるのも、十分に納得でき
る。

山田は教室の中で一番軽そうな、棘のついた奇抜な王様の衣装を
抱えて言った。

「バイトだろ？」

「そうか、今年もバイト皆勤？」

今時の若者はラジオ体操皆勤だって難しいのに、と川口はつけ加
えた。

すると、山田はうんうん頷いた。

「だろうなあ。佐野は稼ぐというより、あの場所が気に入っている
みたいだし、

部活来る見込みは皆無だろ。——って言っても、うちの部、
毎日来てもしやーねえし、別にいいんじゃないか？」

衣装をダンボールに無理やり押し込んで言う山田に、川口は人差
し指を立てて、

「しい。一年に聞こえるやろ。幽霊でもいいから、
一年確保せないと……部費減らされる」

とやたらに掃除する一年に目を配った。そして、「ああ、そうだった」と山田は棒読みで頷くも、——狭い空き教室だ。一年全員にその話が筒抜けだったのは、驚くべきことではまったくなかった。

お飾り卓球部への一年生の高感度は大きく下がる一方。そんな事すら知る由もない、完全幽霊部員と化した男佐野は、その頃——

「莊輔、何してんのよ？辞書なんか持って」

4 - 2 (後書き)

本サイト89 - 1u x

一周年感謝の連続投稿

ひきつづき

お楽しみくださいまし

「——ん？」

鼻までずれた度なし眼鏡から真ん丸とした目が
キヨロツと客に向けられた。常連の、腰まで長い髪を小奇麗に巻い
た若い女性客。

つまりは近所の新妻ナナミちゃんは、その幼い仕草に密にドキリと
するのが——、

しかし、それは単に母性心を撥るもので、大した意味をもたなか
った。

だが、きつと可愛い男が好きな女には、ファンになる価値がある
ものだっただろう……

「辞書、何か調べているの？」

ナナミちゃんは腰に手を当て、モデル立ちしながら
佐野がペラペラと捲る分厚い英和辞書を覗き込んだ。

「——あ、これ？『B』の意味調べてんの」

「B？」

「バトルBゲームの『B』。気になんない？」

佐野は辞書を抱えたままナナミちゃんに聞いた。——と、ナナミちゃんは首を傾げた。

「——そういえばそうね。バトルBゲームの『B』って、何の頭文字かしら？」

人差し指を小さな唇に押し当てて、

「考えたこともなかった」と言った。すると、佐野は待っていました。たといわんばかりに、神経質そうに眼鏡を押し上げた。

「俺が思うに、無難な『BLACK』が一番疑わしいんだよ。

『BLACK BOARD JUNGLE』、

『学校の無秩序』っていう意味まであるし、

海賊旗も『FLAG』の前に『BLACK』ついているじゃん。

——秘密にされるほどのゲームなら、『BLACK』でも通じるだろっ？」

ここにそう書いてあると、得意気に辞書を指さした佐野。確かに、海賊旗は「BLACK FLAG」と書かれている。――

が、ナナミちゃんは不満そうに言った。

「『BLACK』ねえ……。ちょっと簡単すぎない？それなら、誰にでも分るわ」と。

それに、佐野は「そうかな？」とページを次々と捲って、

「ナナミちゃん、何か考えある？」と聞いた。だが、ナナミちゃんは首を横に振るだけだった。

「わたし、英語苦手よ。――パウロに聞けば早いんじゃない」

「パウロはスペイン人」

皆勘違いしているけど、パウロ本人が言っていたよ。と佐野は笑い、
ゆっくりと辞書を閉じた。

坂ノ浦学園高校から徒歩約五分、住宅地の中に堂々と存在するの

は、

黄色い看板に赤と緑で書かれた小さなデリバリー&レストラン「パウロ」。

店の名前の由来は、説明などいらないだろう。

店長パウロから名をとったに過ぎないのだから――

パウロは、十年前にスペインからきた、真正正銘のスペイン人だった。幼い頃から一緒に育った日本人の女の子が忘れられず、帰化した彼女を追って日本にやってきたのだ。それはパウロの一大決心で、一生の忘れない出来事となった。なぜなら、その向こう見ずな、一大決心をしたおかげで、日本に来て初めて、彼女への想いは縁を結んだからだ。

――こうして、山と谷の上り下りを繰り返して、幸せになったパウロは、元々料理人だったこともあって、家の近所にピザ屋を開いたのだった。それがデリバリー&レストラン「パウロ」だ。残念ながら奥さんは他の仕事持ちで、夫婦でピザ屋を営むことはできなかったが、高校生の佐野とフリーターのバイト二人雇い、平凡だが毎日楽しく、パウロはピザとコラを作っていた――

ナナミちゃんは注文したジュースの入ったグラスに手を伸ばしながら、

「そうなの、英語喋っていると思っていたわ。」

——ね、ところで莊輔はBBゲーム出ないの？」

と、何気なく佐野に聞いた。そして、佐野は言った。

「かつちんが立候補するって」

「葛木くん？」

「そうそう、うちの学校の生徒会長」

かつちんはとにかく目立ちたがり屋だからね。と、佐野はあまり興味なく、言った。

「莊輔は？」

ナナミちゃんに「出る気はないの？」と聞かれ、佐野は「かつちんが立候補する」というそれで会話が終るとすっかり思い込んでいたので、ちよつと驚きながらも、

「俺は、そういうタイプじゃないでしょう。……妙に目立つの好きじゃないし、

面倒なの嫌いだし」と答えた。

「いいじゃない、出てみれば？」

今年は面白い子が、いっぱい出るらしいのよ。

勝ち負け関係なく、楽しんでみれば？」

「サノー！」

厨房でパウロが佐野を叫んだ。ピザのデリバリーだ。佐野は「ん。——今、行く」と手っ取り早く答え、「またね、ナナミちゃん」と、厚い辞書を片手に厨房へ向かった。

佐野はバトルBゲーム自体には興味がないようだ。

ナナミちゃんはそんな佐野の背向かって言った。

「明日、立候補しなよ。莊輔だったら、案外いけるんじゃない？」

——と、佐野は急にぱたりと立ち止まって、振り返った。

「——まさか、でしょ？」

そんな事あるはずない。と、冷めたような顔をした佐野。度のない眼鏡がまた鼻にずれ落ちた。

4 - 3 (後書き)

ナナミちゃん

「パウロ。わたし、臍上に刺青入れたのよ」

パウロ

「アアホトンウダ。デモ、コレシールジャナイ？」
ナナミちゃん

「そうよ、一週間で消えるちゃうシール。

旦那がどうしても本物はいれるなって・・・

ちなみにこのハート、旦那とお揃いの」

パウロ

「ラブラブダナ」

——バシッ

ナナミちゃん

「やだわゝ、パウロ」

新妻ナナミちゃんは最高に幸せだった・・・

次回、佐野出前中！？

「はい、お待ち！デリバリーピザ『パウロ』のチーズ・デ・パウロ
お二つと、
コカデラックス。熱いのでお気をつけください」

「……佐野くん、お願い声を小さく……。
副会長にバレたら、本当に大変なんだよ……」

ボソボソと、声と——、そして、背まで小さくしてピザの入った
ボックスを

三箱受け取ったのは、門倉学園高校二年の吉柳だった。
ドオドとしているのは吉柳の恐怖の表れで、

眼鏡をかけているのは、吉柳の視力が悪いという典型的な理由だった。

ピザ代を佐野の手に置き、佐野はコソコソとピザ屋「パウロ」専用の財布から小銭を探した。

「吉柳くん、怖がりすぎ。そんなに怖いのか——はい、おつり」

——二百五十円。吉柳は手が塞がっているから、制服のポケットに入れてくれと

佐野に頼んだ。それに佐野は頷いて、「めちやくちゃ綺麗な子だった聞いたけど？」

と会話の続きを言い、吉柳のジャケットの胸ポケットに二百五十円を押し入れた。

「篠宮副会長？——綺麗だよ。だけど、めちやくちゃ怖いんだよ」

暴力的ではないけれど、精神的に怖い。と、吉柳。

「うちの部は、新入部員歓迎でパウロのピザ、毎年とっているんだけど——生徒会にバレないかいつも心配でさ、見つかったら、廃部か部費減らされるし……出前受ける係り、今年も絶対当たらないように毎晩願っていたのにな——」

心底、残念そうに言った。

「だったら、出前じゃなくて皆でパウロの店に食い来ればいいのに。安くはないだろうけど」

「それが——駄目なんだよ。うちの伝統行事。

生徒会にバレないようにこっそりうまいピザを食う、なんて変な行事だよな？」

——「だけど、毎年やっているから、勝手にやめるわけにはいかないんだよ」

勝手にやめると、先輩達に殺されるよ。と、吉柳は悲惨そうな顔で言った。

佐野は同情したように、それに相槌を打つ。

「大変だねえ。そういう伝統行事ってやつは。——そういえば、吉柳くんの彼女って生徒会じゃなかった？大丈夫なの？」

前に話した時に、そう言ってなかった？と、佐野。以前から吉柳と交流があるらしい、

吉柳は一瞬固まって、そして、歯切れ悪く頷いた。

「う、うん……。風紀委員やっている。

見つかったら、怖いだけじゃすまされないと思う……」

すっかり彼女の存在を忘れていたのか、それとも、考えないようになっているのか——。

心なしか、冷や汗が吉柳の額で煌めいているように見えた。そして、吉柳は「優しそうに見えて、実はすごいサドなんだ」と言った。

佐野は吉柳の彼女に会ったことはないが、話を聞いているだけで、なんとなく恐ろしい想像が浮んでくる。——鞭打つ彼女。

佐野は「そうか」と一言、「ゴシユウシヨウサマ」と片言でいつてやった。それ以外に出来ることなんてないのだ。同時に手を合わせてまで吉柳の為に、幸運を祈ってやろうとまでした。——そう、天国から聞こえてるんじゃないかと耳を疑う、「あら、莊輔じゃない？」という甘美な声が聞こえてくるまでは……

佐野は振り返った。すると、ちょうどスレンダーな美女が大型バイクから降りるところだった。吉柳は呆然としながらも、しっかりと息を飲んだ。

——ビキニといい勝負丈の、セクシーなショートパンツ、とそれに似合ったロングブーツ。上着は着こなしたかっこいい黒革のライダースジャケット。そして、美貌をすっぽりと隠していたヘルメットを取った美女はようやくすべてを露にし、吉柳を遥か遠い、

妄想の中の桃源郷へと誘った——
美女は艶やかな女優のようだった。

「美香」

しかし、まるで吉柳とは違う反応、——いや、いたって普通の反応をみせて、

美女を呼んだのは佐野。いつも通りのやり取りといった風だ。

美香は「デリバリー？」と、佐野に聞いた。それに佐野は頷く。

「——ん。今、終わったとこ。ほら、この吉柳くんが客」

佐野は吉柳の肩を抱き寄せ、吉柳が抱えるピザボックスを顎指した。

客であり、友達だとアピールしているのだ。視線を向けられた吉柳はびくりと

肩を揺らした。そして、「こんにちは」と美香は微笑んだときには、吉柳は顔を真っ赤にさせて、「こんにちは」と震えながらも、なんとか挨拶を交わした。

——一体、どんなに緊張しているというのだろうか。

美香はよく知った口で、

「門倉学園テニス部の恒例のピザ？」と吉柳にそう聞いた。そして、うんうんうん、と頷く吉柳。美香の柔らかく可愛い声は、

「ああ、やっぱり！春はいつもそうよね。君も大変ね」

と吉柳を労わる言葉を言った。だが、吉柳は嬉しいさ半分、緊張半分で、

身を硬くしたまま「……はい」と味気なく頷くしかなかった。

「——だけど、苦しいのは出前を受けとるまで。

『パウロ』のピザを部室に持ち帰ったら、皆でお祭りでしょ？

そういうのっていいわよね。あたしは高校の頃、部活に入っていなかったから、

一度もそういう経験ないのよ。沢山、楽しんでね」

にっこりと笑った美香がウインクしたように見えたのは、吉柳が重症だったからだだった。容姿から話し方まで、きつと美香は吉柳の理想ど真ん中だったのだろう。

そして、クラクラとよろめき、思わずピザボックスを持つ手を離しそうになった。

それにいち早く気づいて、佐野が慌ててボックスを支えてくれなければ、吉柳は後で部活の連中に酷い目にあわされていただろう。

吉柳は小声でさつと佐野に礼を言った。美香はそれに「大丈夫？」と声をかけ、吉柳がブンブン首を上下に振ったのを見て——少し気の毒そうにしながらも、

「じゃあ、あたしは行くわね。今日のDJ、あたしの親友なの。時間にうるさい奴だから、遅れると一晩中パーティーに付き合わされるわ」と言った。

けれど、ものすごく残念そうな顔をした吉柳とは違い、佐野は別れを一切惜しむこともなく「——ん。またクラブ連れてって」と、普段どおりに片手を上げた。それに、柔らかく頷く美香。

「うん、それじゃあね。バイバイ、莊輔。——それに、君も」

来たときと同じ大型バイクに跨り、かつこよく去ってゆく美香を見て、

吉柳はデレデレとした顔で佐野に言った。

「うわあ、すごい美女だったね。なんていうか、声も顔も最高！今日は厄日だとばかり思ってたけど、いいことってあるんだなあ。——ところで、あの人、誰？誰？」

「同じバイトの人」

「えっ？あの人、『パウロ』のバイトやっているの？」

吉柳はひどく驚いた声をあげた。「あの人が？」と何度も、心底意外そうだ。

てつきり、女優ではなくとも、タレントやモデルでもやっているのかと思っていたのだ。

佐野は頷いた。

「うん。でも、他にもバイトやっていてさ、ほとんど来ないけど」

だから、今日も久しぶりに会った。と言った。

そして、吉柳は忙しいんだな。と呟いて、

「そっか……。今度、店に直接食べに行こうかな……」

もしかしたら会えるかもしれないし……」と遠くを眺めて言った。

視線の先は、先ほど幻の桃源郷だ。ピンクと黄色に包まれた楽園で、

美香が際どいビキニ姿で吉柳に手を振っている——しかし、

「彼女はいいの？ サドなんだろ？」

と、吉柳の現実を佐野に言われ、桃源郷の中の美香は脆くも崩れ去り、

その代わりに吉柳の彼女の歪んだ顔に変わった。

「それは言わないでくれよ……」

ささやかな幸せを堪能したかったのにと、ひどくがつくりした吉柳。

佐野はケラケラ笑った。

現実には砂糖のような甘さと縁遠いもの。

美香こそ、吉柳にとって究極の高嶺の花だった。

4 - 4 (後書き)

吉柳「佐野くんは、彼女作らないの？」

佐野「そうだねえ」。可愛い子紹介してくれるなら」

吉柳「——じゃあさ、合コンでもしちゃう？」

門倉学園と坂ノ浦学園ってどう？

なかなか楽しそうじゃない」

佐野「そういうのは全部任せるよ。

仕切るとかめんどくさい。

——ていうか、ピザ冷めるよ？」

吉柳「あつ・・・そうだった。

じゃあ、またメールするよ！」

佐野「おけ、毎度あり」

——吉柳は、見た目によらず大の女好き？

次回、無気力な人間ほど強い！？

——翌日の坂ノ浦学園高校、校門前。時刻は登校時だった。いつもならやる気のない一日の始まり、眠気を抑え、低血圧さながらの活気のない顔でもなんとか登校するところ。チンピラ風の男が一人煙草を吸いながら、落ち着きなく校門辺りをうろろろしていた。

地面には数本の吸殻が落ち、男は登校する生徒達を一人一人、いちいち睨みつけていた。どうみても尋常じゃない。教室の、自分の席に着いたら即行に深い眠りにつこうと思っていた生徒は、そんな男と目が合い、思わずギョツとして、半分閉じていた目があともう少しだけ開いてしまった。

だが、そんなものは束の間の出来事。結局は、何事もなく寝てしまっただけで、用は、それほど珍しい光景だったということだった。

坂ノ浦学園高校はいたって普通の学校だ。例え、奇抜なファッションの生徒はいても、これといって敵つい生徒はいない。まず、やる気がないのだ。毎日は淡々と過ぎてゆく。

——そう、今年から生徒指導担当になった蒲原先生は、少しばかり早く起きてノロノロと登校する生徒たちに「おはよう」と、

声をかけるだけでいいとばかり思っていた。だから、新学期の早々に不幸にでも

あったようにがっかりとして、元々ひどかった猫背をさらに強調させて、

校門の脇から顔を出して、じっと男を観察していた。

この場合、「一体、学校に何の用ですか？」と訊ねた方がいいのか、

男が立ち去るのを待った方がいいのか、決めかねていたのだ。

男は五本目になる煙草を銜えた。——と、男は何か見つけたようで、

五本目の煙草をしまつて、途端に片手を振り出した。

蒲原先生は男の視線の先を追った。

すると——、

「莊輔！」

蒲原先生は顔を大きく歪ませた。男に名前を呼ばれたのは、坂ノ浦学園高校指定のブレザーを着た生徒、名前を呼ばれてはしょうがない、佐野だ。

頭は金髪だが、他の生徒同様、問題など起したと聞いたことはない。

顔は可愛いが、普通の生徒だ。

——けれど、もしかしたら、

佐野は裏社会では名の通った伝説の男で、実は超能力が使える……などという在りもしない考えがもくもくと浮んだ。

最近、毎晩のように見ているSFドラマのさっそくの影響だ。

蒲原先生は頭を振って、佐野の反応を見ようとした。

どうせ、人違いだろう。あんなチンピラのような男が

坂ノ浦学園の生徒と付き合いがあるはずが……

「——なんだ、あんたか」

佐野は男を見て、男蒲原先生の気が遠ざかるような反応を示した。

「なんだ、あんたか」なんて、顔見知り以外ないじゃないか。

蒲原先生は頭を抱え、激しく振った。

——きつと、夢でも見ているんだ。何かの間違えだ。
うちの生徒に限って、裏社会になんか——

と、蒲原先生が葛藤していると、

チンピラ風の男が突然、地べたに這い蹲り、土下座して叫んだ。

「お願いだ、もう少しだけまっしてくれ」

何の話をしているのかは分からないが、登校中の生徒たちも、
蒲原先生もびっくりだ。男はどう見ても、佐野に土下座しているの
だ。

門に隠れていた蒲原先生は身を乗り出し、思わず、子供の頃の癖で
ある

四本指全部を咥えた。

「……」

「こないは死ぬかと思ったが、もう逃げたりしない。

堂々と働いて、負けた分はきつちり返す」と、男は泣きべそをかき
ながら言った。

男は本気のような。しかし、「死ぬかとおもった」、「堂々と働
いて」、「きつちり返す」というのは——？何か会話自体が、高校生
にふさわしくないような……と、

そう思った蒲原先生は、さらに耳を澄ませた。

すると、やはり普通の生徒である佐野は、周囲が怪しみ、好奇の目で見てゐるのに
気づいて、男の腕を掴み上げ、ぼそぼそと言った。

「——ああ……。あれだったら、もういいから。とにかく立つてくれない？」

恥ずかしいんだよ。と、佐野。「はっ？」と、佐野の予想外の言葉に驚いた
チンピラ風の男。佐野に「重い」と愚痴られながら、引っ張るように立たされ、
男はぼんやりと佐野を見た。

そして、すっかり傍観者に徹した蒲原先生は、背の高い生徒を盾にして、
二人の会話を聞き取ろうと近づいた。盾にされた生徒は迷惑そうな顔をしたのは
もちろんの事——。

佐野は言った。

「借りは帳消しにするよ。だけど、もう二度と賭けごとはいつて、
ここに書いてくれる？」

学校指定鞆からA4の学習ノートを取り出し、
筆箱から赤のペンを出して、男に渡した。

「莊輔……」

「実は、あんたがあまりにもひどいからって、奥さんに頼まれたんだ。
サインしてくれるよね？」

それですべて帳消しだよ。と、にっこり微笑む佐野。

男はしばらく佐野を見てから、

「分った、サインだな？　すぐする」と言っ
て、学習ノートをめちやくちやに捲り、
空いたページに何やら歪んだ文字を書いた。
しかも、
書きながら号泣しているではないか！
こんな大の男が泣いてしま
うなんて、
一体何事が起こったというのだろう。

訳が分からない蒲原先生としては、SFドラマの続きより気にな
っていた。だが、

盾にしていた生徒に「うざい」と追い払われ、こそこそと門に逃げ
戻った蒲原先生。

それでも、男が書いた文を見ようと、背伸びしているのだから、
野次馬根性は人並みではなかった。

学習ノートになにやら書き終わった男は、ノートとペンを返して、袖で涙を拭いた。

「恩に着るよ！もう二度と賭け事なんてしない」

「うん、本当にそうして。俺ももう勝ちたくないから」

あっさりと嫌味を言った佐野。けれども、男は「生意気だな」と笑って、

「じゃあな、また会おう」とにこやかに言った。――が、しかし、佐野といえば、

「もう二度と会いたくない」と首を横に振った。

佐野は男のためにそう言っていた。

男はそれが分かっていたのだろう、ただ笑っていた。

「そう言っなよ、これがなかったらお前とは上手く付き合えたはずなんだよ。」

おれも運がなかったよ、お前みたいなのを敵にまわすなんて。兄貴によろしくな！」

「うん」と佐野。男は頷くだけで、特にこれ以上話もないのか、何も言わずに煙草に火をつけ、登校する生徒とは逆の方向へと歩いて行った。

土下座して、号泣したとは到底思えない。後ろ姿は、まるで悟った男のようだった。

「佐野ちゃん、またカードやったの？」

4 - 5 (後書き)

蒲原先生「えーと、ぼくの名前は・・・」

佐野「うらはら先生？」

川口「がばはら先生？」

柳岡「はらはら先生？」

山田「かんばら先生だから。

よく、一緒に昼飯食うじゃん。覚えておこうな」

佐野「あ、そうなの？」

川口「おお、さすが山田」

柳岡「悠ちゃん、すごい!!」

次回、この女子が登場します!?

たまたま登校してきた山田は言った。

隣には相棒の川口はいないようだ。恐らく、川口は時間ぎりぎりなのだろう。

八時十五分など、まだ自宅の布団の中にいる時間だ。

——五分後に慌てて起きて、弁当と制服を抱え、自転車を猛ダッシュで走らせ、

八時半きっかりには席に滑り込む。

当然、寝巻きのまま、ご存知の通りの常習犯の手口だ。

寝坊の理由は言うまでもない。川口と同じように

明け方までゲームをしていた山田は、三時間睡眠で事足りて、

安全な時間帯には登校し、無難な方法を選ぶ。つまりは、些細な性格の差というものだ。

ここに川口がないのも十分に頷ける。

しかし、その代わりというのもおかしいが、

山田の隣には、長い髪にゆるゆるパーマをあてた女子が、同級生の

柳岡麗がいた。

一緒に登校というわけなのだが――、先に言っておこう。

山田と柳岡はただの友達だ。見た目は互いに理想のタイプではあるらしいのだが、

趣味が何一つ合わなかったのだ。それで喧嘩をするわけではないが、それで付き合うこともない。だからこそ、二人はただの友達だった。

「カードって？」

と、山田が言った言葉に首を傾げた柳岡。ほんの首を斜めに傾げただけなのに、

少し抜けているような、別次元で一人だけ浮いているような、不思議な印象を与える。そして、「トランプだよ」と山田はそっけなく答えた。

「ええ、荘ちゃんってカードゲーム強いの？」

そんなの初めて聞いたよ。と、柳岡は言った。だが、柳岡の表情は言葉ほど驚いた様子はなく、喋り方はマイペースで、とてもゆったりとしていた。

「まあまあね」

佐野は特に自慢することなく、にんまり笑った。すると、山田は片眉を顰め、首を横に振りながら言った。

「いや、話になんないって。佐野ちゃんは――」

「ええ、本当は弱いのか？」

山田が言葉と表情に込めた意味を一切探ることなく、

岡柳はまた首を斜めに傾げた。正直、本気で聞いているのか、冗談で聞いているのか、かえって聞き返したい反応だ。

山田は「――だから、まったく話になんないって」と佐野に目を配らせて、
相変わらず同じことを言った。

佐野ときたら一人笑っている。不気味なぐらい「話にならない」のは、

そのカードの上手さだと物語っていた。けれど、柳岡は

「弱いんだ？」と何度も首を傾げるばかり。

どうも、趣味だけの問題ではないようだ……

「佐野くん」

校門から半身、身を乗り出して佐野を手招きしたのは蒲原先生。

チンピラ風の男が消えた後も、佐野たちの会話の様子を盗み見ていたのは

間違いではなく、むしろ、話しかけるタイミングを見計らっていた。蒲原先生に呼ばれ、「なんだろう」と佐野は不思議に思いながらも、蒲原先生のいる校門まで歩いて行った。そしたら、蒲原先生は猫背をピンと伸ばし、

佐野を強引に校内へと引きずり込んだ。急なことで、少し驚いた佐野だが――、

蒲原先生の身長が意外に高かったことや、意外に腕力があつたこと――を
口に出すことなく、

「何ですか？先生」

と、同じ高さまで背を丸めた蒲原先生を見て、普通に聞いた。本当、「何ですか？」と問いたくなる待遇だ。蒲原先生はぼそぼそ言った。

「今の人は――、誰なの？」

「今の人？」

「さっきの、悪そうな男だよ。佐野さんの知り合いなの？」

好奇心のあまり鼻息をフンツと吐いて、ぐいっと顔を近づいてきた蒲原先生に、

佐野は「落ち着いて」両手で蒲原先生を押し返した。そして、

「ああ、さっきの奴ですね？……知り合いの知り合いの、知り合いですよ」

友達でもありませんし、もう二度と会うことはないですが――と、

続けて言った。

「二度と？」

「はい、『二度と』会いません。頼まれて会っていただけですから。用も終わりましたし、もう会う理由もありません。――あ、

もしかしてあいつが来た事って問題になりますか？生徒指導されるんですか？」

さつきちょっと注目されていたし――と。佐野はわざとらしく身を屈め、

おずおずと蒲原先生を上目遣いで見上げた。不安がっているように見せようと

しているのだ。蒲原先生とは、昼食に山田たちと一緒に弁当を食べる仲で、

蒲原先生の気の良さを、佐野は十分知っていた。佐野は蒲原先生の同情心を

煽ろうとしていた。なんとも腹黒さを思い浮さられる行動だ。

――だが、所詮、蒲原先生にとって佐野は、蒲原先生を慕う、顔同様に可愛い生徒でしかなかった。

「それは……、大丈夫だよ。大した騒ぎにはなっていないし、暴力沙汰にもなっていないから——何も心配することはないよ」

安心していいよ。と、蒲原先生はポンポンと佐野の頭を撫でた。

——その後、数時間後には、職員室に保護者からの強烈な苦情の電話が

かかってくる事も知らず、蒲原先生は目の前に佐野にまんまと騙されたのだ。

佐野は不安げな顔から嫌みったらしい笑みを浮かべ、「よかった」と安堵の溜息をついた。そして、それに蒲原先生は何の疑いもなく微笑むのだから、

いい人ほど……なんとやらだ。他にも聞きたいことが沢山あったにも関わらず、

蒲原先生はこれ以上、佐野に質問することなく、「もう行っていいよ」と促した。

——佐野の完勝だ。

佐野はロッカー前で待っていた山田と柳岡の元へ軽く駆けて行き、

「おまたせ」と、軽やかに歌うように言った。柳岡と不思議な会話をしていた、

蒲原先生と何の話をしていたのかまったく分かりはしないが、どうも不自然だと勘付いた山田は言った。

「悪い子だな、佐野ちゃん。蒲原先生に何かしただろう？」

「ええ？」

と驚いたのは、柳岡。佐野は平静なまま、ただ否定した。

「何もしてないよ。――ほら、蒲原先生微笑んでいるだろ？」

振り返って、佐野は蒲原先生に手を振った。山田は胡散臭そうに思いながらも、

校門の方へと顔を向けると、登校する生徒の中、

まるで優しく偉大な父のように頷き、三人を見送る蒲原先生がいた。柳岡も続いて、大きく手を振った。

「うん、蒲原先生が笑っているね。」

でも、何で手を振ると頷くの？なんだか面白いよ」

「それが、何かしたって証拠だろう？」

と、山田は佐野を見て少ばかり強く言った。山田は佐野を責めているような口ぶりだ。だが、佐野は黙ったまま、手早くロッカーから適当な教科書を取り出し、

すぐさまロッカーの鍵を回した。そして、依然、視線をこちらへ向ける山田を見て、
ようやく言った。

「考えすぎだよ、山田くん」

教科書を抱えたまま、ロッカーに凭れかかり、佐野は柳岡が手を振るたびに頷く

蒲原先生に目を移した。山田は「そうだといいいけどな」と、意味ありげな言葉を言って、また佐野を責めた。

山田は一体、何がしたいのだろうか、最後まで言いたいことはつきりと言わなかった。けれど、佐野は何一つ言い返すこともな

く、
岡柳たちを見て笑った。佐野は山田が言っている、本当の意味を分かっていたのだ。

——と、手を振っていた柳岡が突然悲鳴をあげた。

「きゃあ、先生危ない！」

顔を覆い、地面に崩れるその柳岡の姿を見て、
「え、どうしたの？」と、蒲原先生や山田たちが言いそうになったのも無理がない。

だが、その疑問を口に出す前に、キィィ——とブレーキの音が校内に響いたのだから、
何を柳岡に聞く必要などなかった。

急スピードで走ってきた何者かに、蒲原先生は背を押され、綺麗に仰け反りながら顎を地面に激しくぶつけた。そして、
その者が乗る自転車に下敷きにされたのだから、堪ったものではない！

ちなみに、蒲原先生を轢いた者の第一声は「ぐはっ」という濁音だった。

謝罪の言葉ですらなかった。

——奇妙な事故の瞬間というのは、すべてが一瞬静止してしまう。冷たく、不思議な空気が流れるのだ。登校中の生徒たちはぱたりと

身体を

止めてしまい、自転車に轢かれた蒲原先生をただ凝視した。

しかし、一種の緊迫した空気を破ったのは、笑い声だった。何者かの第一声である濁音に、佐野と山田は顔を見合わせて、爆笑しはじめたのだ。すると、周囲がワツと騒がしくなった。

蒲原先生に一齐に駆け寄る、生徒達――

「いてて、腹にハンドルが食い込んだ。

つて、やばあ……蒲原先生を轢いてもうた！先生、大丈夫かあ？」

蒲原先生を轢いた容疑者は、川口だった。

時刻は八時二十五分。五分前に着くなんて、雪が降るところか――、蒲原先生を轢いてしまった。佐野と山田は涙を流しながら笑い、柳岡だけは可哀そうだと、蒲原先生から自転車を退ける手助けしている。

――自転車に下敷きにされた蒲原先生。今日の運勢は太凶だった。

4 - 6 (後書き)

柳岡「先生、顔変だよ？」

佐野・山田「ブアハハハハハ！！」

蒲原先生「・・・・・・・・」

川口「のわっ、自転車の前カゴがへこんでるやん！！」

柳岡「満ちゃん、先生の顔の方が心配だよ

　　なんだか可愛くないもん」

川口「ごめんなあゝ先生。

　　けど、これ位で顔がへこむとは・・・」

佐野・山田「アハハハハハハ！！」

次回、メールは。。。状にも成り得る！？　ご注意を！！

その後、――結局、

蒲原先生は顎に大きな青痣をつくっただけですんだものの、
「気をつけなさい」という一言の注意ですませた蒲原先生は甘いと、
坂ノ浦学園高校の乗本教頭は、川口に「昼休み、職員室に必ず来る
ように」と、

死んだ魚のような目つきで言いつけた。

しかし、乗本教頭の説教を受けた生徒は、今までいなかった。

説教をするべき問題児さえ、今までいなかったのだ。

あの恐ろしいほど生気のない教頭がどんな説教や罰を川口に与える
のか、

まるで検討がつかなかった。

けれど、言いつけられた当の川口といえば、まったく不安がる様
子もなく、

いつも通りの休み時間、定位置である山田の席周辺で、

席の主山田と佐野、そして、唯一の紅一点である柳岡とで、

乗本教頭の説教を楽しみ会話の話題に上げて、陽気に笑っていた。

川口の神経は並々以上のようなようだ。

「呼び出されちまったけどさ、——案外、乗本教頭って優しいかも知らへんで」

こないだ、花壇に水やっていたから。と、

「木花に優しい人は、人にも優しい」と根拠もない事を川口は言った。

「分かんねえぞ？よくあるトイレ掃除とか、反省文とか書かされるんじゃない？」

先に言つとくけど、俺は手伝わねえから」

と山田。川口は「冷たいなあ、悠世ちゃん。お友達でしょうが」

山田に擦り寄った。すると、

「教師を自転車で轢くような馬鹿、いらねえよ。近づくな。あっちいけ」

シッシと、山田は川口を手ではなく、足で遠ざけた。

「つれないわあ、悠世ちゃん」

川口は負け犬のようにうな垂れながらも、すぐ隣で綿菓子を頬張る佐野の手から袋を奪い取り、中身をすべて口の中に放りこんだ。

「あつ、全部食うなよ」

「壮ちゃん、手伝ってあげたら？」

柳岡がそう言うと、川口は口をもごもごさせながらうんうんと頭を上下に振った。柳岡に親指を立てて「後押し、ナイス」と

言っているのだ。

だが、佐野は空になった袋を裏返し、ムスツとして言った。

「俺も嫌だ。俺の綿菓子全部食う奴なんか手伝わない」

「佐野ちゃん」

岡柳はそこで、ようやく綿菓子の袋が空になったことに気がつき。

「ああ、見たことないパッケージだったから、あたしも食べたかったのに。それ、どこで売っているの？」

「ナナミちゃんにもらったから、知らない」

——でも、多分、この辺では売ってないと思う、と佐野。岡柳は恨めしそうに、

「満ちゃん」

川口を見て叫んだ。そしたら、山田は笑いながら、

「今日のお前、最悪だな。何やっても駄目じゃん」

ときつい言葉を追って言った。

山田は川口に容赦がない。

川口は皆に責められ、ついには現実逃避するかのように目を瞑り、両手を合わせて「修行でもしに行くかぁ」と呟いた。それに、山田が

「いつてらっしゃい、二度と帰ってくるな」

と微笑んだのは、外でもない、サディズム・サディストである証拠だった。

ふざけている時は大して気にも留めないが、時々、川口は本気で泣きそうになる。

ボケも大変なのだ。

川口は山田を見て、唯々、

「どうか、優しい人になってくれ」と祈るように言った。

そんな三人のやり取りを佐野がぼんやり聞いていると、制服のズボンポケットに入れていた携帯が振動し始めた。おそらく、メールだろう。振動はすぐに止まり、また元の同じように静かになった。

——ピザ屋パウロの店長、パウロからのバイトに関するメールかも知れない。

佐野に限っては、ほとんどシフトを入れていて、急なバイトが入るはずもなかったが、

美香がバイトに入ると、客がこぞって配達に美香を指名する。

その訳は、門倉学園高校の吉柳と同じだ。美女ほど重宝されることなく、

美香自身性格の良さも加わって、どこに行っても美香は人気者だった。

その為、佐野は大抵暇になった。配達は美香がしてくれるのだ。厨房に入るとしても、パウロは盛り付けしか佐野にさせなかった。

だから、美香がバイトに入る日は、少し遅めにバイトに入ってもかまわなかった。

パウロのメールはそれを知らせるためだった。

佐野は携帯を取り出して、
今日の放課後はこの三人を遊びに誘ってみようかなと思いつつ、
メールボックスを開いた。

「――あれ、川口。俺にメール送った？」

4・7（後書き）

連続二話投稿第二弾（1）

サイト2000hit

ありがとう&メリークリスマス!?

次回、

川口「——えっ、何でメールが勝手に??」

「今度は何だよ、川口」

相変わらず、きつい口調で山田はそう言った。
しかし、川口は身に覚えがないのか、首を捻った。

「あん？送ってないで。何でなん？」

「満ちゃん、喋りながら携帯を打ってたの？」

すごい、と柳岡は口では大げさに言いながらも、
大して驚いた顔をしていなかった。けれど、そんなことよりもと、
山田は携帯の画面をじっと見つめる佐野を見て、
そつと佐野の携帯を覗き込んだ。それに、我こそはと、
川口も、首を傾げながら身を乗り出して覗き込んだ。

「From・川口」

Re：無題

黒百合と引換えに、最後のダイスで償え」

後から携帯画面を見た柳岡が、初めに口を開いた。

「ねえ、ダイスって何？」

すると、山田は「サイコロだよ」と答えた。

「サイコロ？」

「——おい、待ってくれや。おれはこんな変なメール送ってないで」

「だろうな」と山田はまるで、何もかも知ったふうに頷いた。
川口はそんな山田にギョツとした。

「だろなって……、川口何か知っているんか？」

「どうせ、なりすましメールだろ。今時、珍しくねえよ」

「なりすまし？うそやん、誰かが勝手におれを名乗って、
佐野ちゃんにメール送ったんか？」

心底嫌そうな顔をした川口。山田は言った。

「名乗った奴の方が、気の毒だけどな」

送った奴も、もっと人選べばいいのに。と付け加えた。

「おい。それはひどいんちゃいますか。どうみても、おれの方が気の毒やろっ」

「悠ちゃん、だったら黒百合は何なの？お花だよね」

と首を傾げ、横から口を挟んだ柳岡。

メールの文面の意味が分からず、興味深々なのだろう。

岡柳の頭の中では園芸部だけあって、無数の花が浮かんでいる。

もしかしたら、黒百合の種でも分けてもらおうと、

見当違いの事を考えていたのかもしれない。

けれど、そのメールの意味に思うところがある山田は、

ずっと黙ったままの佐野に目を配らせて、「それは分かんねえな…

…」と言った。

佐野はしばらく見つめていた携帯を二つに折り、

「最後のダイスっていえば、あそこしか思いつかない……」
とうわ言のように呟いた。

どうも、佐野はメールの内容も、差出人すら分かっているようだ。これから何が起こるかも重々承知だったのだろ。だが、三人には何を言わずに、

「ちよつと行ってくる」とだけ、コンビニにでも行くような様子で、佐野は席を立った。

「はあ？——佐野ちゃん」

驚いた声をあげたの川口。佐野は振り返って、

「また、明日」と簡素な言葉を残し、言葉通りに教室を出て行ってしまった。

「えっ、佐野ちゃんって！」

急いで佐野を追おうとした川口、その川口の肩を掴んで山田は大人しく

「行かせてやれよ」と、後を追うのを止めさせた。

それにも驚いて、ぴたりと体を止めた川口。

「——けど、チャイム鳴るで？」

時計を指差して、あと一分もないやろ。と、真面目なことを言った。

山田は川口を席に座らせながら、首を横に振った。

「川口、お前はまず佐野の心配する前に、自分のメールアドレス変えろ。

前から思ってたんだ。mituruchanとか、自分の名前をアドレスにするなよ」

「めっちゃいいアドレスやろ。ていうか、俺の勝手やん！」

喚く川口に、山田はしょうがないなと、未だに黒百合の種が欲しいな、

と一人思い耽っていた柳岡に

「——麗、川口のアドレス一緒に考えてやってくれよ。こいつにセンスはない」

お前なら、まだマシだろう。と、言った。川口はその言葉にカッとなって、

「山田、お前こそセンスないやろ！お前の私服は最悪やんか。何やんねん、いつも縞々ばかり着やがって！」

と関係のないことまで口走った。けれども、それに乗るのが山田だった。

「ボーダーの何が悪い。お前だって前は着てたじゃねえか」

「山田が毎回縞々を着ているの見て、着る気はもうとつくに失せたわ！」

と、飽きずに二人は叫び合い、それを見ていた柳岡は二人を諷めるわけでもなく、鳴り出したチャイムを聞きながら、空席になった、ついさっきまで佐野が座っていた席に目を移した。

4 - 8 (後書き)

木崎先生「今回は、少し痛々しい表現があるようだ。
気をつけてくれ」

周防「あれぐらい、痛々しいうちに入んねえよ。

キザ先!!」

木崎先生「周防。

お前みたいな人間ばかりじゃないんだぞ」

周防「……。

言っている意味が分かんねえ」

次回、時には身を切る思いもする!?

ぼんやりと目が開いた。

青い空に浮かぶ、流れる雲がうつすらと見えたかと思うと、すぐほの暗い闇に変わった。

此処がどこなのか、何があったのか、思い出すのも煩わしい。心臓が脈打つ度に、ヒリヒリと腹の痛みが走り、意識が戻っては、激しい睡魔に襲われた。

——もう、何も考えずに落ちてしまいたかった。

ひどく気だるくて、真っ暗な闇に落とされても、どうなってもよかった。

ゲームオーバーだと白旗を揚げて、眠りにつきたかった。

なのに、——誰かがあんまり身を揺らすものだから、佐野は楽な方を選べなかった。

逃げ出せばいいのに。耳に障る声。それに反応して、意識が勝手に再起動しはじめる。

どうせなら、寝た振りをすればいいのに、苦しいなら、すべて無かったことにすればいいのに——飽きずにまた、同じことばかり繰り返してしまふ。

「佐野ちゃん、起きろよ」

山田の声だった。佐野は目を開けた。すると、見上げる先には、困ったような同情するような山田の顔が見えた。空より面白い風景。要するに、山田は心配しているのだが——隣町の、どこにでもあるような、

ありきたりなビルの屋上で、そんな山田の珍しい顔を見るとは思わなかった。

なんだか佐野は笑ける。

「おはよう。——どうして、ここが分かったの？」

あんなメールでよく、居場所が分かったね。と、佐野は思ったままの事を聞いた。

山田は言った。

「美香さんに教えてもらってたんだよ」

「美香に？」

「『最後のダイス』の意味はともかく、先週、隣町でサイコロを使った賭博が

開かれたから、もしかしたらそこじゃないかってさ。

——そう教えてもらわなかったら、正直、ここまでたどり着いてねえよ。

まったく、らしくねえんだよ佐野ちゃん。

出て行ったきり、メール一つもよこさねえし、やっと見つけたと思っただけ、

傷なんかつけちゃって暢気に寝ているしき。川口に似てきたとかなんとかなうなよ」

人に心配かけといて——。と、山田は佐野の頬にある、今朝はなかった掠り傷を小突いた。そしたら、ほんの軽く触れただけなのに、

佐野は「うつ」と、小さな悲鳴をあげた。

見た目以上に痛みがあるのかと、山田が首を傾げると、佐野はシヤツのボタンを

すべて外し、下に着ていたＴシャツを捲りあげて、紫に変色した痣の広がる、引き締まった腹を佐野は山田に見せた。痛みの原因はそこだといっているのだ。

山田は細長い目をピクリと痙攣させた。

「ゲーム好きなのはいいとして、ここまで相手にやらせるなんて……」

Ｔシャツを下ろし、佐野は笑った。

「俺は、別にゲームが好きじゃないよ。金になる芸があるとき、人がほっとかないんだ」

「ふうん、そうかよ。でもさ――、

いつもは呼び出されたって、わざわざ出かけたりしなかったよな。

暗号みたいなあのメール、何か特別なのか？――まさか、麗のいうように、

黒百合っていう花目当てとかじゃないだろ」

「まさかねえ、俺は花になんか興味ないよ」と佐野、目を元の細さに戻した山田に言った。

「黒百合と引換えに、最後のダイスで償え。——だっけ？」

「黒百合っていうのはさ、俺の幼馴染の愛称なんだよ。
本当は、さゆりっていうんだけど、石黒の女だから——黒百合。
単純なくせに、皮肉だよな？」

山田は溜息をついた、

「俺に聞くなよ。ますます、佐野ちゃんらしくなくて気味が悪い。
——けど、人並みにはモテるくせ、何で誰とも付き合わねえのかな
と思っただけ、
そっいう事だったとはね……」

「そっいうことって？」

「好きな女の為に殴られたんだろ？いいんじゃないか、普通の高校生らしくて」

山田は茶化すようにそう言って、寄りかかるように座る佐野と同じ高さまでしゃがみこんだ。佐野は言った。

「山田くん、俺はいたって普通の高校生ですが？」

「普通っていうのは俺や川口の事をいうんだよ。博打なんてしない奴のこと。」

——とにかく、肩貸してやるから立てよ。あんまりここで時間くつていと、
下で待っている川口と麗が待ちきれなくて上がってくるから」

そうになると、煩い。と、山田は「立てるか？」と佐野に聞いた。

「——ん、大丈夫。一人で立てるから」

佐野はかわいい顔を歪めながらも、折れそうな両腕で重い身体を支え起こそうとし、

山田はそれに手を貸した。そして、山田は辛そうに立ち上がった佐野から、

後方を振り返って言った。

「ところで、佐野ちゃんの想い人は帰ったのか？」

佐野は小さく首を横に振って否定して、

「——あれは、初めから俺を誘き寄せるためのガセネタだった。殴られ損ってわけ」

それが分かった途端、返り討ちにしてやったけどね。と、佐野は真顔でそう言った。

しかし、好きな女を餌にされたのだ、相当怒っているはずなのだが——、それっきり、

怒りの片鱗すら口にも顔にも出さずに、佐野は「降りようか」と、階段への扉に手をかけた。

山田はそれになんとか寂しさを感じた。佐野の背が孤独だといっているわけではなく、佐野が深い沼にでも立っているような、友達として手を貸すことすらできないほど、随分と早くに大人になってしまった子供のようだった。山田は頷いた。

「そうだな。けど、さゆりちゃんが無事ならそれでよかったじゃないか。

連絡はつくんだろっ?。」

佐野は人一人が通れるほど扉を開けると、言った。

「連絡はつかないよ」

山田は思わず目を泳がせた。あまりにも佐野が「連絡がつかない」ことが

当たり前のように言うものだから、冗談なのかも分からなかったのだ。

どんな場合でも、罔にされたのなら、まず無事を確認するものだろう。「――何、佐野ちゃん。電話したら話し中だったとか言うなよ」

「――ん、言わないよ。さゆりは行方不明だから、電話もメールも繋がらないんだ」

と、軽くそう言うと、手摺に手をつきながら階段をゆっくりと降りはじめた。

佐野の手の支えを失った扉がピシヤリと、山田の目の前に立ちはだ

かる壁のように閉まった。

山田はただ絶句するしかなかった。好きな女が行方不明になるなんて、そんなメロドラマのような事があるなんて——というより、今ようやく、佐野らしくない行動の訳を知って、納得するべきなのだろうが、どうも混乱してそれ所ではなかった。

「……」

山田は無言で薄灰色の扉を見つめた。

4 - 9 (後書き)

連続二話投稿第二弾 (2)

2000 hit ありがとう & HAPPY NEW YEAR!!

佐野に少し遅れてビルから降りてきた山田は、
ビルの左隣にあるファーストフード店前で数人の客に紛れて川口と
柳岡、佐野が
遠くの方を見て、ひそひそと何やら話しているのが目にした。

「何を見ているんだ？」

山田は川口の肩を掴んで聞いた。

「——あ、山田。降りてくるん遅いで！十分以上待ってんから」

「悪い、ちょっと考えごとをしていた。——それより、喧嘩でもあったのか？」

オフィスビルとシャッターの閉じた中華料理店の間で、

やたらと背の高い長身の若い男と綺麗に髪をすべて剃った高校生ぐ
らいの学生が言い争い、その隣では宿めるように警察官が二人立っ
ている。そして、少し離れた所で鞆を不安そうに抱えて俯く門倉学
園中等部の制服を着る少年がいた。

柳岡は言った。

「喧嘩じゃないよ。わたし見てただけど、あの子たち何も悪く
ないよ?」

「話の筋さえ見えねえんだけど?」

山田が苦笑いすると、今度は佐野が言った。

「麗が言うには、かつあげにあっていた中学生をあの禿たジャージ
の奴が助けたんだけど、途中で警官が来て、話がややこしくなっ
ているらしい」

「勇気あるよなあ。見てみるやあ、あの長身のおっさん。

身長2mぐらいあるんとちゃう?おれやったら、見てみぬ振りして
通り過ぎてまうわあ」

腕を組みながら関心する川口に、「確かに」と山田は相槌を打つ

た。度胸がない所など、川口と山田はなんだかんだいっても、似たもの同士だった。

「ああ？お前、今こいつに妙な因縁つけて、金とろうとしたただろ
う？」

禿た学生は、片手にぶら下げたスポーツ用品店のビニール袋を揺らし、

自分よりも背が高く、がたいの良い男の腕を掴み凄んだ。

男は「してねえよ、離せよ！コラア」と、声を荒げながらも、どう見ても禿た学生に迫力負けていた。

もつとも、学生のいかつさは妙に綺麗な眉を見ればよく分かるのだが――

「君達やめなさい」

警察官は平和な町に迷惑な奴らがいたもんだ、と思いながらも、公務だからこそ、二人を落ち着かせようと必死だった。

「――ね、あの赤いジャージって明雲高校のものじゃない？」

見覚えあると思ったら、と佐野は腰に手を当てて言った。

「ああ、よく見たら、そうやなあ。あんな感じのジャージやった気がする」

「部活の買出しの帰りってところかな」

山田は、そう言って佐野が少しふら付いたのに気がつき、腕を掴んで「ファーストフード店に入るか？」と、川口たちには分からないように、そっと目で訴えるが、佐野はにこやかに「大丈夫」だと言つて、掴んだ手を払った。

それに、山田は「分かった」と頷づく事しかできずに、ため息を漏らした。

「――あつ、あの子、周防って子じゃない？」

ほら、陸上で県一番になったとか、去年騒いでいたよね」

柳岡は急に思い出したように言った。けれど、川口は何の事だかさっぱりにようで、「え、そうやっけ？」と頭を掻いた。

「絶対そつだよ。いかつくて禿ているって、かつちゃんが言っていたよ」

「うゝん。かつちゃんがいうことは信用できへんわあ。

こないださ、小さい頃にこんな巨大クラゲに出会ったとか……うおっ！」

「おい、どこみてんだよ。気をつける！」

喧嘩などさて置き、両手で巨大クラゲのジェスチャーをしていた川口の腕が、

話が済んだのか、周防や警察官から逃げるようにこっちにやってきた長身の男にぶつかり、男は八つ当たりするかのように川口を怒鳴りつけて、さつき山田と佐野がいた賭場のあるビルの中に入っていた。

「ひゃあ。やっぱりおっさん、怖いなあ」

身を震わせて川口が言い、「ああ、お前も気をつけるよ」と、山田が言った途端、

赤ジャージの明雲高校生周防は男の入っていたビルに向かって、

「うおおおお！お前、顔を覚えたからな。次見つけたら、二度と逃がさねえ！」

——と、大声で叫んだ。それも声がよく通るものだから、周囲一体がびくりと体を揺らせ、凍てついた。そして、心臓が飛び跳ねたんじゃないかと思うほど、動悸がする警察官が周防に「——君、静かにしなさい」と言うのがやっとだった。隣町に来てまで、人を、それも大勢を動揺させるなんて……。

それでも、周防は言いたい事を叫んで満足だったのか、警察官に馴れ馴れしく「次あいつ見つけたら、捕まえてくれよ」と言い、

鞆を抱えて尻餅をついた中等生に「じゃあな！中坊」と笑顔で手を振って足を屈伸させると、一目散に走っていった。

——嵐が去ったかのようにだった。

やれやれと警察官は座り込んだ門倉学園中等生を保護するかのよう
に声を掛け、
それを拍子に、固まった周囲は時間を取り戻したかのように動き出
した。

「……面白い」

嵐が去った後の、坂ノ浦学園高校群の初めの言葉は、佐野のその
言葉だった。

「——えっ？佐野ちゃん？」と川口は驚きの声をあげた。

「今一瞬、背筋がゾツとした。何だろう、——俺、あいつを追って
みるよ」

佐野はそう言って、一歩足を出しただけで、激痛に思わず腹を押
さえたが、
それから何事もなく周防が去っていった方角へ歩いて行く。前代
未聞の佐野の行動に、三人は物珍しそうに佐野を見送りながら、――
まず、柳岡が言った。

「あつ、わたしも行かなきゃ」

「——何で、麗も行くんや？」と川口。柳岡は
「だって、男子校に行ったことないし。かつこいい子いるかもしれない」と言った。

「なんや、男目当てかい！——山田はどうするんや？」

川口は隣にいる山田に声をかけた。山田は言った。

「俺はいいよ。お飾り卓球部に顔出しとく」

「おまえは本当にやる気ないなあ。じゃあ、おれも卓球部いってこ
うかなあ」

「お前もやる気ないだろ」

山田は、佐野を追って走って行く柳岡の後ろ姿を見ながら、やる
せなく、
川口にビンタした。そして、川口が「ひどい！」と、コント染みた
ように喚くのはお決まりだった。

コンコンツ——と、

佐野は電車に乗って約三十分、徒歩約十五分から二十分かけて冷や汗を掻いて

腹を抱えながら明雲高校に辿り着き、さつき見かけたばかりの、

唯一の周防の手がかりである容姿を、校門で出くわした黒い学ランの集団に問えば、

容易に校内へと案内してくれ、応援部である学ラン集団に最初に教えてもらった

「周防は陸上部である」という情報からグラウンドへ向かうと、そこでは気のいい明雲生に「周防は剣道部に冷却スプレーを届けに行つた」と聞かされて、佐野が最後に向かった剣道場で、ややくたびれ

ながらも木戸をノックした。

「――禿で、眉が面白いぐらい綺麗で、声が拡声器並みに煩くて、何故か閣下と呼ばれている二年の周防英司くんいますか？」

佐野は知っていることだけ挑発するように言って、とにかく返事を待った。すると、奥からドスドスと木の床を鳴らして、佐野が目当ての人物がやってきた。

佐野は思わず微笑んだ。

「何だ、お前。俺を呼んだか？」

佐野はうんと頷いた。周防は眉を顰めた。

「何の用だ？見たことない奴だな」

「俺は坂ノ学園高校二年の佐野莊輔。よろしく、周防ちゃん」

「ああ？周防ちゃんだって？」

「——おい、英司。初対面の人に突っかかるなよ」

雲行きを心配した藤尾が剣道場の奥からやって来て、周防の腰を突付くも、

周防は何も言い返さなかった。周防は五感で佐野があまり気に入らないんだろう。

藤尾は取り入るように言った。

「……ごめん。態度悪いけど、悪い奴じゃないんだ」

「いいよ、まったく気にしてないから。——ね、握手しない？」

佐野は周防に手を差し出してそう言った。

周防も藤尾も、佐野が何を考えているのかまるで分かりもなかった。

「はぁあ？何言ってるんだ。何で握手なんか……」

「握手」

と、強引に手を差し出した佐野。痛みの限界が近く、切羽詰って普段よりも何十倍も図々しくなっていた。

藤尾は佐野の顔色から、具合の悪さを察して、「英司」と周防を強

いた。

いつもなら、嫌なら嫌だと突っぱねる所だが、周防も佐野の顔色の悪さに気がひけて、

——嫌々、言われるまま周防は佐野の手を握った。しかし、周防が手を握るなり、佐野は手をさっと捻り、周防の胸を押して後ろへ叩き倒した。

「！」

あまりに突然のことで、言葉を失くす周防と藤尾。

佐野は言った。

「俺はさ、坂ノ浦の大將になろうと思うんだ。というか、これから大將になるわ。」

——つまりさ、俺たち敵同士になるってこと。

最初はB B Gなんかどうでもよかったんだけど、今日あんたに会って気が変った。

とことんやってみたくなった。だから、これ戦線布告ってことね？」

「おまつ、——戦線布告だと？上等だ！こつちこそ、とことん殴つてやる！」

「おい、英司。やめろって」

藤尾が床に叩きつけられた周防を上から必死で押さえ込み、佐野は蒼白の顔でにんまりと笑った。

「頑張ろつな、周防ちゃん。楽しみにしているから」

——その頃、佐野を追ったはずの柳岡は南の方角、葛岡高校の前で佐野を探していた。

「もお、壮ちゃん遅いなあ」

貴重な女子の到来に、葛岡生がウヨウヨと校舎から柳岡の様子を伺っていたとか、どうとか……

気ままな一日、明雲高校に新たな敵が生まれ、
葛岡高校にアイドルが生まれた。

4 - 10 (後書き)

2008年12月31日

第四話完結締め――

葛岡高校ラグビー部一同「ウッス!!」

ありがとうございました。

次回、バトルBゲーム開始!?

5 - 1 十字路商店街発 バトルBゲーム解禁!?

第五章 十字路商店街発 バトルBゲーム解禁!?

バイクのエンジン音が響く、深夜遅くに最終電車を見送った駅長は、客がいなくなったホームで一人点検をし、いつものようにガラスのドアに鍵をかけた。

小さな駅だ。駅員は三人ほどしかおらず、通勤や登下校時間である朝と夜を除けば、駅はガランとして静かだった。近くに商店街もあるのだから、もう少し賑やかでもいいんじゃないかと、駅長たちは度々話の種にしていた。

それなのに、今日に限っては、駅員二人を先に帰してしまった。

——なぜだろう。

駅長はホームをしんみりと歩き、しばらく長年勤める駅を愛しむように眺めてから

業務員用のドアから外に出て。閉じられたガラスのドアに一枚の張り紙を貼りつけた。

——一体誰が書いたのだろうか。

薄黄色い紙に墨で書かれた時代錯誤なほど律儀で古臭い文字。

そこには「五月十六日ヨリ七日、駅ヲ封鎖スル」と、

駅を封鎖する詳しい理由も何も書かれてはいない。とても奇妙な張り紙だった。

駅長は張り紙を見つめながら敬礼するかのように帽子を脱ぎ、首を左右に傾けた。

ゴリゴリという痛々しい音が鳴った。ひどく疲れているのだろうか。いや、それはまるで仕事の疲れを感じているどころか、

全身全霊で何かを待ちきれないという焦りの気持ちを表しているようだった。

血の気の盛んだった昔を思い出したのだろうか、凡人のものとは違う、

太い首筋に熱い血管が浮かんだ。

「ああ、あの頃は楽しかったな」

駅長は鏡に映った自分の記憶に微笑み、
もう一度張り紙をしつかりと貼り付けて、
鞆を手に駅を後にした。

5 - 1 十字路商店街発 バトルBゲーム解禁!?(後書き)

只今、執筆中。御用ノ方は待タレヨ

ありがとう~~~~9000hit!?
既に、心の中で喚んでいます

東・明雲高校の場合（壱）

「……はあ、熱ちい。

まだかよ、キザ先！

この一時間ずっと階段登りっぱなしなんだけど、まだてっぺんも見えねえじゃん」

「てか、これ何運ばせてんの？」

やたらと重い黒の木箱を背負い、汗を赤いＴシャツの袖で拭きながら

明雲高校二年の周防は、数段下の、同じく明雲高校体育科教諭、木崎先生を見下ろしてタラタラと文句を言いはじめた。

もう一時間も階段を登っているが、石段はまだまだ上と続いている。

それでもまだ、高さからして、よくて山の中腹までしかきていない。この分じゃあ、見えていない所も含め、あと千段以上は登らなければならぬだろう。

目の眩むような後景だ。周防が文句を言うのは、計算の内だったのだろう。木崎先生は、「気にするな。もうじき着く」と適当な事を言い返して、周防を追い越した。

それに、周防は待ってくれよといわんばかりにさつと階段を駆け乗り、

木崎先生の前に立って、階段のずっと下を指差して言った。

「俺はまだいいよ、こういう練習たまにしているから。」

けど、あいつらを見てくれよ。へバリすぎてあそこで死んでる」

「死んでいる？」

木崎先生は首を傾げて振り返ると、周防の言ったとおり、明雲生達がダラダラと石段を登り、その一部といたら半ば疲れて座り込んでいた。

疲労困憊だ。木崎先生は溜息をついて言った。

「俺より若いのに……仕方ないな、五分休憩するか」

周防は「さすが、キザ先!」と、すかさず、その吉報を同士に叫んで告げた。

「うおおおい! フジオ、順一、コザワン——
と、その他大勢! 五分休憩だつてさ!」

階段の下方で、「あゝ、やった」という喜びの声が聞こえた。スタミナのある周防や木崎とは違って、相当きつかったのだろう。喜びの声が悲鳴のようだ。心中察しする。

——と、その内一人、周防の叫び声に反論する者が出た。

「おい、待てよ！俺も『その他』に入ってるの？」

休みにわざわざ手伝に来てやっているのに、と

ぼやくのは明雲高校三年の荒俣だった。周防と同級生であり、友人の奥村は

同情するかのように、荒俣の腕に手を置くが――

「それより、水持っていません？」

と、まるで別の話をした。奥村は荒俣に対してゴマをするつもりは毛頭ないようだ。

荒俣はムカツとしながらも後輩に優しく、「全部飲むなよ」と、コーラのペットボトルを奥村の腹に思いっきり押しつけた。

もつとも、これが別の先輩だったら、腹ではなく頭に振り落とされていただろう。

荒俣はわりと後輩を思いやる性質なのだ。

だが、それを奥村が知ることは永遠にないだろうが……

「輝くん、俺を置いて先に行ってくれ」

荒俣の小さな悲劇などなんのその、石段にへたれ込んで、

ぶるぶると震える手を伸ばす明雲高校二年、小沢。

「何言ってるんだ、小沢！お前を置いていけないだろう」

と、同級生、藤尾はその手をぎゅっと握った。

階段程度でやけに芝居がかった二人。

「——お前たち、何をやっているんだ？」

すぐ隣で腰掛けていた社会科教諭、斉藤先生は二人とにかく水分を補給しろと水筒のコップを手渡した。

しかし、五分というのは早いものだ。水分をよく取って、

小沢が息を整えて、階段を固い椅子だと思って休息する前に、

先頭に行く周防と木崎先生は階段を登りはじめている。

風に揺れる爽やかな木々の中、眩しい太陽のもとへ進む二人は、

明雲生にとっては化け物のようだった。

けれど、叫んだって、二人には聞こえないだろう。どうせ付いてくしかない。そうするしかない。進む先は二人と同じだ。どんよりと重たい体を起こして、一行はまだ登っていない新しい石段に片足に乗せた。

それから十五分程、石段を登った頃だろうか。

先頭を行っていたはず周防が立ち止まっている姿が見えた。

木崎先生が言ったとおり、もう目的の場所へ辿り着いたのだろうか。だが、それにしても、周防の様子がおかしかった。荒俣は周防に向かって声をかけた。

「周防、どうかしたか？」

周防は、ゆっくりと振り向いて言った。

「——俺、こんなものはじめて見た」

「えっ？」

荒俣は眉を潜め奥村の方を咄嗟に見たが、奥村はすつと階段を登って行ってしまった。奥村は周防がいう、「こんなもの」に

興味があるようだ。荒俣は肩をすくめ、奥村を追った。

そして、周防の隣にまで登ってきた奥村は、周防が見ているものを、その目で見えて呟いた。

「木が……。まるで鳥居みたいだな」

一体、どれぐらいの歳月を経てこうなったのだろう。

両脇に生えた数本の木が、石段がそれ以上続かないように、石段の侵入を拒むように太い根っこごと溶け合うように成長し、人が簡単に通れるほどの大きな隙間は、自然のアーチのようで。奥村はその場の雰囲気からして、神社にある鳥居のようだといったのだ。

「へえ、そう言われてみればそうだな」と、追いつくなりそう言った荒俣。

「先輩、初めてじゃないんでしょう。これ何ですか？」
と奥村は言った。だが、荒俣は

「さあね、ただの木だろ」と首を横に振り、「——そういえば、去年、田瀬がこの木に何か彫っていたな。どこだっけ？」と、木に触って探しだした。

「あの田瀬先輩が？」と奥村。

呆然と木の鳥居を見ていた周防は、田瀬の名前を聞くなり、見ていた木を蹴りつけて、

「そんな奴の話はどうでもいい。早く行こうぜ、順」

と、木が作る鳥居を通って行った。

「おい。待てよ、英司！」

「——あいつ、何で怒ってんの？」

荒俣は周防が怒ったわけもわからず、不思議そうに頭を傾げた。

——田瀬永吉。

荒俣と同学年の、元剣道部だった田瀬は、去年一昨年と、明雲高校剣道部に繁栄期を迎えさせた、剣道の実力もカリスマ性を備えた明雲生だった。けれども、そんな華やかさは、外見だけで。田瀬の性格の悪さは度を越していて、後輩にいわせれば、逝ってる。または最低最悪の男だった。

田瀬の悪名にイラつくこともない荒俣を見て、奥村はうんざりした顔をして、

「やあ……」

と、木の鳥居をくぐった。

5 - 2 (後書き)

・ ・ ・ 次回まで、御待ちください ・ ・ ・

西・坂ノ浦学園高校の場合（壱）

同時刻、西方の山では、木の鳥居をくぐった後、更に三十分階段を登ってようやく頂上に着いた、一団の最後尾にいた坂ノ浦学園高校二年の川口は口を開けて、目までも見開いていた。

それは、要するに驚いていたのだが。

「やりすぎだろう」と、相方と称される同学年の山田が、川口の頭をクイズ番組のボタン宜しくペコンと叩いた。すると、途端に、川口の首が肩へと沈んだ。気持ちはボタンを叩くように軽やかに――だが、

実際はかなりの力で叩いたようだ。つつこみには加減というものが必要なのだが、山田はイマイチこつ

が分かっていないようだった。けれど、川口はへこたれずに首を元にもどして言った。

「こ、こんなことってあるかあ？」

山田に叩かれた痛みよりも、ずっと関心を引かれるもの。老朽化して所々痛んでいるとはいえ存分に存在を主張する、立派な、瓦屋根から柱まですべて黒一色の寺を見て、川口は「鳥居あるから神社やと思ってたのに……」と、つぶやいた。

寺に鳥居？

——そうだ、確かにおかしい。

鳥居は神聖な神社にあるものだ。寺にあるなんて、「神仏習合」という、

複雑きわまりない、神紙信仰と仏教の合体なんてものを知らない現代子には、

よく理解のできない現状だ。

しかし、

「じゃあ、さっきのあれは鳥居じゃなかったんだろう」

と、あっさりと鳥居の存在すら消してしまった、山田。
川口は一瞬固まってから頷いた。

「……そうか。あれは鳥居じゃないんや。
けど、この寺に仏様もおらへんやん」

黒い本堂の開け放たれた扉の向こう、
一般の参拝拝の場である外陣には畳もなく、内陣にはいるべきはず
の仏像の姿も

なかった。ただ、そこは何の区別もなく、長くそこありすぎたせい
か、

くすんでしまった木床が一面広がり。そのずっと奥から光が数本
の線のように差し込んでいた。明るい表からではよく見えたもので
はないが、閉じられているようだ。

きつと扉だろう。もうひとつの出口か、それとも本堂より先へと
まだ何かがあるというのか。

この本堂は、まるで客を煩わす筈のようだ。

先に辿り着いた坂ノ浦学園高校の一団がいるというのに――
いや、人がそこにいるいない関係なく、まるで入ってこいともいわ
んばかりの佇まいに、川口は足が竦みそうだった。ここは一体何の

為に建てられたのか。仏像を祭るためにつくられたわけではなさそうだ。寺だと思うより、寺の顔をした剣道場。

まさしく、それがふさわしい。しかし、なぜ、そんなものがどうしてここに？

ゲームとは何か、扉の向こうには何があるのか。

そこはゲームの舞台か。何も分からない。

分からない。

分からないから、余計に怖い……

「お出かけ中なんじゃねえ？入るぞ」

と、何を気にするでもなくそう言った山田。

「なんや？仏像がお出かけ中とか、滅茶苦茶やな」

と、川口は屁たれだと思われないうつ、弱音を心中に隠してそう言った。

意地を張れるうちは、まだ、大丈夫だ。

「えゝ、こんな暗くて怖い所に入るの？」

本堂へと入る二人を見るなり、数千段の階段地獄をようやく登りきった

二年の柳岡は悲鳴をあげた。息はひどくあがっていて、汗もながしている。

唯一、シャワーを浴びたくても、こんな山ではそれは叶うこともない。

柳岡はもう何もかもうんざりしていたのだ。

山田は半ば呆れながらも、柳岡の気持ちを察して、川口には決して使わない優しい口調で言った。

「お疲れ。入んないの？」

「入らないとダメ？」

「そりゃね。入ないと、始まらないでしょ」

「あゝん、ゲームになんか参加するんじゃないかった」

「お前、ここまで来てそんな事よく言えるなあ」

と、川口は自分の事は棚にあげて、柳岡の腕を乱暴に掴んで本堂に無理やり連れて行くとした。

「満ちゃん、いたいよ」と、泣き声で叫んだ柳岡。

山田は苦笑いして、けれども、あえて助けはせずに、成り行きを見守り。

登ってきたメンバーに目を流し、

「そつえば、佐野ちゃんは？」

と聞き覚えのある台詞を言った。

「——えっ、佐野ちゃん？」

「そこで何モタモタしてんだよ？オレ、すごく暇！早く入れよ」

川口たち同じく二年の、しかも、生徒会長である葛木は入り口で騒いでいた三人に偉そうに文句を言った。

「かつちん、ごめん。佐野ちゃんが先に入ってる？」

「いや、見てない。そっちにいるんじゃないの？」

「いや、いない」

山田の即答に、葛木は眉間に皺をよせて「マジかよ」と、もう一度本堂の中を振りかえった。

中ではやる気のない坂ノ浦学園高校のゲーム参加者たちが、学校にいるときと同じようなことをしていた。つまりは、飴やガムを噛みながら携帯をいじくり、小声でぼそぼそと会話をしていた。その中には金髪の生徒はいないようだ。

葛木は山田たちの方を向いて、首を横に振った。

「——まさか、来てないとか？」

「いやあ、違うやろお。俺、車の中で見たで。佐野ちゃん、爆酔してた」と、川口。

「それは、お前だろ」

山田は、寝ぼけて女子と間違えて抱きついてきたくせにと、うっとおしくつつこんだ。

川口は薄ら笑い、それから殺菌だと言わんばかりに腕を掴んだままの柳岡に抱きつき、
セクハラをきめこんだ。すぐさま、山田が川口の腹にパンチを入れたのはいうまでもない。

とにかく、話の流れでは誰も佐野の姿をみていないようだった。
セクハラから開放された柳岡は、いつも通りにボケツと言った。

「じゃあ、壮ちゃんはいいの？」

「大将不在とか、マジでありえねえじゃん！ゲーム、どうすんの？」と、

半ば怒った葛木。

川口は「まあ、まあ」と軽く受け流して、

「案外、呼んだらひょっこり出てきたりして」と笑いながら言った。

またしょうもないことを言うと、突っ込もうと腕をあげた山田は、考え直して

下ろす手の代わりに、「そんなので出てくるのかよ」と言った。

川口は咄嗟に頭を抱え、構えた防御をゆっくりと解いて言う。

「分かん。けど、ま、呼んでみよう。

——佐野ちゃん！」

「壮ちゃん！」と、柳岡も同じく佐野を呼んだ。

誰も姿を見ていない、恐らくはここにいるはずもないだろう人間が、

そんな掛け声で出てくるわけがない。と、思っていた山田も葛木も、その時ばかりは、佐野の姿を必死で探した。

本当にいなかったら、血祭りものだ。バッシングだけでは、まずすまされないだろう。

「佐野ちゃん！」とまた、川口が呼んだ。

——そしたら、「何？」と遅れて、背後から朦朧とした声が聞こえ、その場にいた全員が登ってきた石段の方を向いた。

「——お、いた」

「佐野ちゃん、大将が一番最後ってどうなの？
わざわざ大将の座を譲ったのに、オレが馬鹿みてえじゃん」

葛木は、佐野を見るなり不満を一気に捲し上げた。けれど、佐野には葛木の言葉は、自身の狂ったように激しい呼吸音で、あまり聞き取れてはいなかった。汗で金髪が顔にへバリつき、シャツは体にへバリていた。

「お前たち……、生き物じゃあねえ……」

佐野はやつとの思いでそう言ったが、ひどく呼吸困難になっているのようで、本堂の中から四人を通り越して静かにやってきた女子、同学年の道場が「これ吸いな」と、酸素マスクを佐野の口に押し付けた。

まるで聖母マリア様のように優しい道場。

「酸素マスクなんか用意してたんか？」と聞く川口に、

「乗本教頭に持たされた。

こういう奴が、一人は出てくるだろうって」と答えた。

「やっぱり、乗本教頭は優しいなあ。前も一分説教だけやったし」

前とは、一ヶ月前に坂ノ浦学園高校の教師、蒲原を自転車で轢いた件だ。

死んだ目をした教頭は、実は寛大で優しかったのだ。

佐野は濃度の高い酸素を吸い込みながら、「サンキュウ……」と、道場に礼を言う。けれど、道場は涼しい顔で頷くだけだった。彼女はとてもクールらしい。

「これで全員そろったか？」

道場が佐野を中へ押入れるのを見た後、本堂にいる坂ノ浦学園高校の生徒たちに

そう呼びかけ、仕切りだしたのは、生徒会長葛木。

教師が同行しているのにも関わらず、体育館での朝礼時と同じように、人前に立ち、

列になって並ぶよう指示して全体に目配らせした。

生徒全員の注目は葛木に向けられていた。気持ちのいい瞬間だ。

葛木がゲーム参加者三十名を、間違いなく数えていると、生徒のうち一人が手をあげて言った。

「かつちゃん会長、ここで何すんの？」

ずっと背負って階段を登り運んだ黒い箱を叩いて、開けていいの？とも聞いた。

葛木が何もかも知っていて、指示を出していると、その場にいる全員はそう思っていたのだ。全員が耳を澄ませた。

——けれど、それは間違いで。この葛木もまた何が始まるのかも知らなかった。知るはずがなかった。葛木は口を開こうとした。知らないとはつきり言うつもりだったのだろう。しかし、それとは逆に、本堂の扉が大げさに閉じられ、本堂は差し込む光だけ希望のよ

うに残り、あっという間に真っ暗になった。

5 - 3 (後書き)

× × 次回迄、御待ちクダサイ × ×

5 - 4 (前書き)

* 木崎先生からの猛注意 *

これより非常に安全な軽度から気まぐれな重度の暴力表現あり。苦
手意識のある人は、目を瞑って読みましょう

南・葛岡高校の場合（壱）

本堂に閉じ込められ。さっきまで昼だったはずなのだが、すっかり夜のような

ひっそりとしてしまった為に、葛岡高校生達はパニックを起こしたように騒ぎ出した。

少しひんやりと肌寒いのは、階段でたつぷりと掻い掻いた汗が冷えたせいだろうか。

一部の生徒達はお化け屋敷のような、何かのアトラクションのようだと思んだにちがいないが、賢い生徒たちはなるべく冷静に、目が暗闇に慣れるのを待とうとしていた。

けれど、そんな努力の甲斐もなく、五分も満たないうちに、前方でふっと蠟燭が灯った。突然の光に全員の目が眩み、反射的に閉じた目を恐る恐る開いて次に見たのは――

片手に光の灯った細い蠟燭を持ち、もう片方では杖をついた、笑う翁の面を被った老人だった。

身なりは時代劇のように野暮つたい直垂と袴で。腰が随分曲がっているのにもかかわらず、床が軋むことなく足音も立てずに、老人は本来なら内陣と呼ぶべき場所に立っていた。幽霊よりも気味が悪く見えるのは、灯りに照らされる翁の面のせいだと思っていた。何人かの生徒たちは息を飲むのも忘れた。老人は面に隠された口で、物を言った。

「よう来なさった」

長い歳月を思わせる、小細く老いた声だ。

十字路の商店街近くで医院をやっている稲田氏よりも年上で、その一声で、「聞いたことのある声だな」と、葛岡高校二年の鳴滝はぼそりと呟いたが、誰も気づきもしなかった。老人はまた言った。

「さっそくじゃが、電話はすべてここに出して床に置いてもらおう」

「電話とは、携帯電話のことですか？」と、葛岡高校三年の和久井こと、トドは聞いた。すると、老人は「さよう」と頷いた。

「それなら、大丈夫です！おれは携帯を常備していません」

機械は小賢しくて使えない性分です。と、自慢するようにトドが言った。

それに数人が笑ったが、老人は笑い声を出すどころか冷やかに「はよう出しなさい」と、催促して言った。

葛岡高校生たちは何だか気分悪く、けれど、言われるまま制服のズボンから

それぞれ携帯電話を取り出して、木床に置いた。そして、これで文句はないだろうと、老人に目を向けると、老人はのろのろと腰を下ろして蠟燭を携帯と同じように木床に置いていた。これはじっくり話をするのだろうと、誰もが思った。

しかし、老人は

「電話を置いたら、外に出て箱を開けて。そうして、まっすぐ小面の女子を見つけたらいい。小鼓を鳴らしておるから、外に出て歩いとると聞こえてくるじやろう」

と、曖昧な事を言った。

本堂はただ、携帯を置くだけの場所だというのだろうか。

「……あの、ゲームの説明とかないんですか？」

遠慮がちにそう聞いたのは、ラグビー部部长であり三年の百武だった。葛岡高校の代表

で、大将のはずの鳴滝は黙り込んでいた。頼りにならない大将は、何も明雲高校や坂ノ浦学園高校だけではないらしい。老人は口を開いた。

「そんなもの、必要ない。行けばわかる」

「行けば分るって、それはないでしょう！

せめて、バトルBゲームの意味ぐらいはじめに教えといてくださいよ」と、二年の九重森が言うと、「説明がないと、ゲームができないのか！」と、老人の代わりにトドが無闇に叫んだ。

「そうじゃ。箱の中身さえ持ってりゃ、死にはせんよ」

老人のその言葉に、全員が目を見開き。誰かが言った。

「死なない？……どういふこと？」

「そろそろ行ったらどうじゃ？出遅れると、後々面倒じゃぞ」

「じいさん、どうなんだよ？」

「死ぬってどういうことだ？」

納得いかないと、噛み付くように次々と葛岡高校生は叫んだ。

「うるさい小童どもじゃな。

ゲームをしようないのか？それとも何か？此处で死にたいのか」

翁の面を被った老人はどうやって持っていたのか、直垂の内から短刀を何の疑いもなく取り出して、蠟燭の前で鞘を抜いた。短刀の刃がゆらめく蠟燭の火で光り、老人の震える手がなんとも生々しい。老人は本気なのだろうか。その短刀が本物かどうかよりも、本堂の空気と、老人のそのすべてに声すら出てこない。ドクン、ドクンと心臓が五度ほど鳴った、——そのとき、鳴滝はただ一人立ち上がって老人に向かって言った。

「外に出ればいいのか？」

「さよう」と、同じように老人は頷いた。鳴滝はそのどこが面白かったのか、

フンと鼻で笑い、そのまま一人で入ってきた方の扉ではなく、光が漏れてくる扉を押して、外に出た。長髪の同級生で、おそらく鳴滝の「友達」である狩野も出て行く。そして、他の葛岡高校生は――普段は、部活でがむしゃらに身体を張っているが、老人の普通ではない姿に肝が小さくなつてすっかり萎んでいた。

だが、いつもと変わらず淡々としている鳴滝を見て、一同は老人の「此処で死にたいのか」というのは、そんなものはただの脅しだと思い直して、鳴滝に続くように、楽しげに叫びながら本堂から出て行った。

しかし、それでも数人は本堂に残っていた。ゲームには参加しない教師たちと、正座したたまの空手部で巨体の二年九里、三年の宇治を筆頭にした理数系のとても賢い生徒たちだ。中には老人とゲームに対する不安で震えるだけの者もいるが、自分自身がどうすべきなのかを十分に思考を巡らせている者もいた。弱肉強食の学校で生き残るには、知恵が必要だと、彼らはよく知っていたのだが。そんな生徒を尻目に、老人は小さく、消え入るように言った。

「ゲームに参加しとうないなら、蠟燭の替えは仰山ある。
ここで口をじつと継ぐんでおれ。――わしと一緒にな」

それを聞いて、生徒の半数は本堂から慌てて走って出た。誰とも知れない可笑しな老人と、ただ、蠟燭が溶ける様を見つめているなど、まっぴらごめんなのだ。けれども、残らなかったことを後悔しなかった生徒はどれほどいるだろうか。残ったことを後悔した生徒はどれほどいるだろうか。

老人から逃れるように本堂から出てまっすぐ歩くと、そこではもう既にゲームが始まっていた。

下から運んできた黒い木箱が倒され蓋は開いていて、中身が地面に散らばっていた。厚みのない薄いヘルメットのような兜、ボロボロの臍当、鞘のない刃の錆びた刀、緑の絡まった紐。今さっき脱ぎ捨てられた制服のネイビーのジャケットに、誰かが本堂に置いて行かなかったのだろう、泥に汚れた携帯まで落ちている。それを拾う余裕がどこにあるだろうか。

本堂から出ると、そこは竹林がずっと続いて、その竹林を「まっすぐ」歩いていると、小鼓も音色が聞こえてきた。生徒達は面の女が近くにいるんだろうと、何を心配することなく、そう思った。そして、音色の方へ足を向けた途端、横から顔に黒い塗料を塗った自分たちとはそう年の変わらない、若い男たちがやってきて、刀を振り回しながら葛岡高校生たちに襲いかかってきたのだ。

驚いている間もなく、自己防衛のために、応戦するしかないだろう。

木箱を盾にして、ごつい拳で襲ってきた男を失神させたり、その逆もあり。

刀を避けようと、のけ反りすぎて木に頭から衝突したり。唯一、男の持っていた刀は安物のようで、研がれてもおらず、髪の毛一本切れたものじゃなかった。

そのおかげで、黒塗りの男たちの半数は返り討ちにされていた。

葛岡高校の大半は格闘部ともいえない部に属しているのだ。切れる刀を持たない華奢な男たちは体格も比べ物にならなかった。しかし、音色の方へ進むたび、襲ってくる数は多くなっていた。その度に、拳を腫らすのも億劫になってきた生徒は、木箱を置いた場所に降り、落ちている刀や臍当てを持って、前に進んだ。徐々に小鼓の音が大きくなって、すぐ傍で聞こえてきた。

老人が告げた、小面の面を被った女が洞窟の前で小鼓を叩いていた。

白い小袖に、淡い紅梅色の表着を羽織っていた。顔は当然見えないが、その長く綺麗な腕の先にある美しい手は滑らかに小鼓を叩いて、その場にいるすべての者の闘志を煽るように鳴らした。

鳴滝は襲ってくる男を一蹴りし、その小面の女に歩み寄ろうとした。

話をしようとしたのだ。

「どこへ行けばいい」と、聞きたかっただけだった。

けれど、女は近寄ってくる鳴滝にいち早く気づいて、叩くのをやめて小鼓を持って急ぎ足で洞窟に入ってしまった。

女が怖がっている？

——いや、そんなはずはない。いくら鳴滝が色男だからだといっても、

怖がるほど神経が細くか弱い女が十字路の街に居ると思えない。そうではないはずだ。

鳴滝は小面の女を追おうと、洞窟に足を踏み入れた。洞窟は本堂と同じように、小さな灯りが転々と灯っていた。女は道案内しているのか。鳴滝が洞窟に入っていくのを見ていた葛岡高校生たちは、進む先はそっちか！と、次々に殴りながら蹴りながら洞窟に入った。遅れて本堂を出た生徒達もその洞窟へ。

洞窟は生徒全員を受け入れると、何者かが動かした岩によって入り口を塞がれた。今度こそ、本当に閉じ込められたのだ。洞窟から出るには、岩をどけなければならない……しかし、そんな暇はなかった。休むことなく、襲ってくる黒塗りの男たちを喧嘩のように、戦いのように倒して、前に進むしかできなかった。そのうち、長髪の狩野は、必要以上に鳴滝ばかりを襲っているのに勘付き、必死に守ろうとしていた。大将を落とそうとしているのだ。

将棋と同じように、大将を落とされたらゲームはお終いか。どうしたらいい。

とてつもなく長い洞窟の壁は切ったような深い線が走り、刀が何本もずばりと刺さっていて、思わずそれを本能的に引き抜いて、使ってしまう生徒もいたほどだ。

ルールも何もなく、理由もない。

なにしろ、密閉された洞窟での襲われる恐怖と緊張で、何も一々認識すらことすらできなやしない。

倒した人数？倒れた人数？

そんなものは知らない。嵐のように激しく手足を動かしていた。

——これがゲームのやり方らしい。

なぜ、襲ってくるのか。謎に満ちた黒塗りの男が狂気に満ちた声で叫んだ。

「前座を楽しもうぜ」

5 - 4 (後書き)

次回、「前座のはじまりはじまり」・・・

5 - 5 (前書き)

* 木崎先生からの猛注意 *

これより非常に安全な軽度から気まぐれな重度の暴力表現あり。苦
手意識のある人は、目を瞑って読みましょう

北・門倉学園高校の場合（壱）

身体のあちこちにかすり傷や擦り傷、赤紫の打撲が増えていく中、気を失った者たちを振り返る偽善も、「手加減する」という戸惑いも忘れた。

限がなく押し寄せる黒塗りの男達をいちいち接待しているせいだ。首元引つつかんで取っ組み合いをしている間なんて、あっという間で。

一人の頭をポカンと叩いたら、待っていましたといわんばかりに次の相手がやってくる。そのためか、おまけに時間の感覚も失った。

ラテンダンスのように激しく踊り燃える蠟燭と、刀を避けて傾きまわる体が視野を暈し、黒塗りの男の光る目ばかりを追いかけた。それはまるで自分が相手と同じ獰猛な野獣と化したようだった。獲物以外、眼中にない獣だ。黒塗りの男たちが獲物か、自分たちが獲物か。気絶させた方が思い知るだろう。冷えはずの汗が、じわりと

吹き返した。

こんな気持ちは、日本の平和なアスファルトの上では感じたことがない。洞窟の、生の土に足が滑り、まだ殴りあっている戦いをより現実的だと思わせた。しかし、切れない刀は飾りだろくに、黒塗りの男達はけして素手で殴ってはこなかった。単にゲームの粗筋に沿っているだけの律儀さか、それとも、そこに意味があるのか――

門倉学園高校の二年で生徒会長でもある東は、木箱にひっそりと忍ばせた私物のフェンシングの剣で、黒塗りの男の姿をなぞるように隙なく仕切りに突いていた。計算されたように、一度も剣先が当たっていないというのに、直立に立ったまま動けないでいる黒塗りの男は焦った悲鳴をあげた。フェンシングの剣先は平らだが、その突く速さは、蠟燭しかない洞窟ではまともに見ることができず、鋭利な針で体突き刺かっているような錯覚に陥ってしまうのだ。正気ではいられなかった。それなのに、東は突く速さをさらに加速させた。疲労という言葉よりも、東の胸には別の深い物で埋め尽くされていたのだ。東は叫んだ。

「――ああ、京佳。」

僕はこの戦いを君のために捧げてみせる！僕が京佳に求婚したのは、門倉学園の生徒だけでなく、対戦相手ではるが、明雲高校の剣道部主将藤尾くんも証言してくれるだろう。彼は尊敬すべき剣士であり、同士だ」

ひらりと身を捻らせ一回転した東は、居た堪れない思いをしていた黒塗りの男に「まだやるかい？」と、剣先を向けて上から言った。

すると、ひいっとシャックリ声をあげた黒塗りの男は腰が抜けたように地面に座り込み、そのまま力なく気絶した振りをした。あっけなく降参だと言っているのだ。東は勝利の微笑みを浮かべ、フェンシングの剣を顔の前で垂直に立てたかと思うと、うっとりと剣に口付けた。中世の騎士気取りなのだ。

「フィリップ、どこに向かって叫んでいるんだ？」

疲れ果てた美化委員長の並木は、向かってきた黒塗りの男の顔面を片手に止めながら言った。

「きつと、こんなゲームがなくとも、僕の気持ちは京佳には届いているはずだ。」

僕は、そう信じたい」と、

並木の話も聞かずに酔いしれた東は、次に後ろからやってきた新しい黒塗りの男に脇腹に刀を向けられた時には軽やかに身をかわして、連打するように剣を振るった。そこそこフェンシングに腕のある東は、殴り合わず、弱い相手に恐怖を与えて勝ち進むという自意識過剰な、個性的なやり方をとっていた。心は紳士なのだ。そしてここには――並木の高い背に隠れた小柄な少年が、きつちりと鞘に収められた刀を腕に抱え、不機嫌顔を出して言った。刀の柄についた、青い紐に括られた鈴が二度鳴った。

「並木くん、僕は喧嘩ができません」

「生徒会の仕事の一環だと、会長の指示通り、僕はゲームに参加しましたが、暴力なんて下品なことではできません。なので、少しでも並木くんが僕を同じ生徒会の仲間だと思ってってくれているのなら、僕をしつかりと守ってください。君を信頼しています」

と、まるで戦うこともなく、自己主張している会計委員長の御手洗がいた。あくまでも、自分より長身の並木に頼りつきりになるつもりだ。

「ああ。安心してくれ。しっかりと守るつもりだから」と、並木は親切心で言ったが、他の門倉学園高校生たちは黒塗りの男と戦いながら、――出たよ。御手洗の几帳面さと潔癖症！と、恐ろしくて声には出せないが、内心ひどく毒づいていた。生徒会の暗黙の了解は、実は学校全体での暗黙の了解だったのだ。よくあることだ。人の内心など覗けやしない、純粹で傷つきやすい御手洗は「君のような仲間を持てて、よかったよ」と笑った。

黒髪の御手洗は、時々、誰よりも悪質だった。

そのうち、戦いながらメートル単位で進むほど、洞窟の奥からやってくる黒塗りの男たちの数は一人二人と減りだし、洞窟は男達が減ったせいで少し広々としているのに気がついた。横に四人並んで

も十分歩けるほどの穴だ。上がる息を吐いて、汗が零れ入ってきて、うな目を擦ると、周りがよくよく見えてくる。洞窟はいつの間にか、大きく曲がっているとはいえないが、ほんの少し右側に傾いていた。今どの地点にいるのだろうか、ふと思うが、それを教えてくれる者は此処にはいなさそうだ。東はフェンシング用の剣を脇に置いて叫んだ。

「なんて弱いんだ！僕の足元、いや、靴の底にも及ばないね」

「フィリップが強すぎるんだ」と、並木。東はさも「当然だよ」という風に美顔の頬に撫でた。すると、

「——あ、八王子くんが戻ってきた」

と、頭から被った黒い木箱を少し上げて、二年のテニス部員である吉柳は言った。

洞窟の中にまっ先に入って、小面の女を追いかけた芸術学科二年の八王子は洞窟の壁に刺さった皿付の蠟燭を持って引き戻してきたのだ。そして、悪態をつきながら、地面にスツと座り。その後から、国際特進科3年のフアンセルも戻ってきた。

「ちつ。あの可笑しな女、見失った」

「あの女つて、君、麗しいレディーに失礼だろう」フランセルは軽蔑するように言った。

「『あの女』以外に、どう呼べばいい？ 小面なんて小細工して。どうぞ、十字路の町にいる女だろう」

「それを言ったら、元も子もない！」

「二人だけに追跡を任せて申し訳なかった。怪我はなかったか？」

並木はまたフランセルと八王子が喧嘩しては堪らないと、割入るようにそう言った。

「気にするなよ。俺はただあの女に見覚えがあつたから、追っただけだから。」

フランセルは怪我したようだが、俺の方は平気だし」

「少し、擦りむいただけだ！これが怪我に見えるか？」と、フラン

セルは沸騰したように叫んだ。

「この先はどうなっているんだい？」と、

二人の仲など気にせず、柔らかくそう聞いた東。八王子は言った。

「行き止まりか、それとも、まだ続いているのか……」

「それはどういう意味だい？」

「口ではうまく説明できない。もう少し歩けば、そこに着くから。自分の目で見てくれ。あと、刀あっただろう。十本ぐらい持っているか？」

並木は振り返って、

「今、刀持っている奴は手をあげてくれ」と言うと、手をよろよろあげた門倉生はたった三人。「まったく足りないね」と、東は肩をすくめた。

「ちょうどいい、残った人数も数えよう。」

刀は襲ってきた変態たちを持っていけば、足りるだろう?」「三

年ジャーナル部の部長、丸池はそう言うと、同じく三年のフェンシング部長三成は

「そうだな」と頷き、「しかし、役立たずの刀なんか、何に使う?」と言った。

それに、「着いたら話す」と、何か考えがあるのだろう、八王子。「会長、残った数は二十二名です」と、誰よりも早く言った御手洗は、八王子の方を見て

「——君が絵ではない他の事柄に関して、率先してやろうとするなんて意外ですね」と口元だけ微笑んだ。

「ゲームに勝った方が、紫垣さんと付き合うとか?」

と、丸池は冗談を言ったただけなのに、フランセルはキツと八王子を睨み付けた。だが、八王子は「俺は今目立っているのか?」と逆に聞いた。

それに、「いい意味でね」と、丸池ではなく、御手洗はそう答えた。御手洗は八王子にも信頼という魔の手を伸ばしはじめていたのは、怖い話のはじまりだ。

「――八人もやられたのか。彼らは大丈夫だろうか」並木は言った。

「引き戻す気か？」と、人が倒れているのを見ても、さっきのことを思えば、どうも助ける気にもならなかったのか、全員が首を横に振った。

「洞窟を閉めた人間がいるんだ。誰かが助けるさ。行こうか」と、丸池。

「そうだな、気を引き締めていこう！」と、全員の気持ちは一致したのだろう、合点して、前に歩き始めた。けれど、心優しい並木は気遣うように、倒れた人たちに悪いと会釈するように軽く頭を下げて、それから歩きはじめた。

黒塗りの男たちがいない洞窟はとても静かで、自分たちの歩く音ばかりが洞窟の中で反響していた。壁の蠟燭はどこまでいつても火が灯り続けているが、肝心の蠟の方は小指よりもずっと小さくなっていた。一時間もすれば、すべて消えてしまうのだろう。引き戻す選択肢は随分前に手放したが、これではゆっくり進むとという選択肢もない。先にある蠟燭も消えてしまいかもしれないからだ。老人の忠告を思い出した。

「気をつける。この先には地面がない」

壁に掛かった蠟燭の終わり目目まで来たとき、八王子は叫んだ。

「地面がない？」

八王子は「見ろ」と、蠟燭の皿を地面に向けた。洞窟の入り口から続いていた土の地面がすぐ目の先では存在せず、そこだけ切り取られたように真っ黒だった。

「——あ、本当だ。地面がここからなくなっている」と吉柳。「それじゃあ行き止まりか？」三成がそう言うと、八王子はしゃがみ込んで、なくなった地面の方へと蠟燭の皿をまっすぐに下ろした。

「変な連中に壁に頭を押し付けられたから、よく見えなかったが、確か、あの女、この下へ降りて行った気がして。さつき蠟燭の灯りでこの下を見てみたら——」

オレンジ色の蠟燭を照らした先に九十度の絶壁から何やら棒状の物が突き出ているのが見えた。「何だ、あれは？」全員が首を傾げた。

「刀の柄だ」と八王子。「下の方へ、刀が壁に刺さっている」

「まさか、これを降りていくのか？」

「底がないかもしれないぞ」

「これを使いましょう」

御手洗は抱えた刀の柄についた紐を解いて、そこに結ばれていた鈴を手のひらに乗せて言った。

「それを落とすのか？」

「そうです。鈴を落として高さを測るんです。古典的な方法ですが、確実でしょう」

「だが、刀に鈴なんか付いていたか？」とフランセル。

「これは会長の木箱に入っていた刀で。」

会長の刀だけにこの鈴が付いていたので、何か特別なんじゃないか
と思ひまして、持ってきたのです」と御手洗言つた。そしたら、「
ちよつと貸してくれ」と、手を伸ばしたのは八王子。

「どうぞ、重いので両手で受け取ってください」

「重い？」

三成はその言葉に反応した。

「こつちの刀は重くないぞ？」と、丸池。御手洗は頷いた。

「それはそうでしょう、会長の刀だけ真剣です」

「真剣？」

「御手洗くん、君の冗談はユニークはだけど、それを聞いている状
況では……」

と薄ら笑つた東に、御手洗は真面目な顔で言つた。

「違います。冗談ではなくて、これは――、

あなた方が望んでいる、正真正銘の切れる剣ですよ。

ここに来るまでに僕は、並木くんの背に隠れているだけだと思っているようですが、僕はこの刀の鞘を抜いて指先を掠ってみたのです。そしたら、この通りの傷が！」

御手洗はまだ切れて間もない、血の滲む指先を見せて言った。

生徒たちははじめ疑うような目を御手洗に向けたが、刀の鞘を抜いた八王子が壁にある蝋燭を切ってみせたので、一同は啞然として、一気に御手洗の言うことを信用した。斜めに切られた蝋燭は、腕の悪さのせいか、若干湾曲しているようにも見えるが、切れ味はとてつもなくいいと訴えている。御手洗の持っていた刀は、間違いなく切れて、間違いなく真剣だ。

御手洗は証明してくれた八王子にお礼のかわりに頷いて、

「まだその使い道は分かりませんが、この鈴は僕たちの役に立ってくれそうです」と、

「鈴を落としますよ。誰も話をしないでくださいね」

注意を促してから、そつと鈴を落とした。

カランと鈴の可愛げのある音色を零しながら、壁にぶつかりながらも落下してゆく。

数十秒後、少し遠くだが、そこほど遠くない所に底はあるようで、地面で最後の音を鳴らし終えると、鈴は役目を果たしたように静止した。

道はこの下だ。

5 - 5 (後書き)

累計アクセス1万越え、サンキューソウマッチ♪

バトルBゲームの後の新作は、

ファンタジーかモダンストーリー

アウトロー小説も捨てがたいが、

やっぱりここはファンタジーか!?

次回は、「下へ」

*誤字訂正報告

「会長、残った数は二十二名です」

二十五名は誤りです。申し訳ありません

西・坂ノ浦学園高校の場合（弐）

「地面はあるようだな。さて、降りるか」と、
清々しくそう頷いたのは生徒会長、葛木だった。

「――降りるって簡単に言っけど、どうやって降りるのよ」

距離的に飛び降りられる高さではないでしょう。と、道場が言った。鈴はただ地面があると知らせただけで、何も底が深くないとはいっていないのだ。葛木は言った。

「じゃあ、刀の柄を足場にして降りるか」

「体重かけて刀折れやしないか？」と山田。三年の松方は苦笑いし

ながら

「ていうか、そもそも、一般的にこの岩みたいな壁に刀って刺さるものなのか？」

と聞いたが、「知らねえよ」と、葛木は一喝した。仕切ろうとしたりくせに、いい加減な男だ。すっかり話題の外野に徹して、座り込んで休憩していた佐野が腰をあげた。
そして、首を擦りながら言った。

「——ん、かつちん。それに山田。手を貸して？」

「手？」と、山田も葛木もさも嫌そうに言ったが、佐野は頷いた。

「ちょっと降りて壁を見てみるから。——ね？手を貸して」

「なるほど、そういうことか」

「もしかして、今にも崖から落ちそうな友達を引張り支えるっていうポーズするんか？」

と、興奮気味に川口は言ったが、「それって、ポーズか？」と、佐野に手を伸ばしながら山田は首を傾げた。「何でもいいんじゃないやねえ？」と葛木。

佐野は、山田の右手首と葛木の左手首を掴み、二人も佐野と同じように佐野の手首を掴んだ。がっちり掴んで手が外れないようにするためだ。

「いい？体重かけるからから」と、佐野。山田と葛木が頷くのをみると、佐野は背中を闇に向けながら恐ろしく慎重なペースで絶壁を降りだした。靴が壁を擦り、パラパラと砂が底へと落ちた。支えている二人ではなく、それを見ていた川口が生唾をゴックリ飲んだ。

「麗、蠟燭を照らしてやれ」

山田は佐野の体重を抑えながらそう叫ぶと、柳岡は「はあゝい」と、壁に掛かった蠟燭の皿を取って、体を半分絶壁に投げ出した。「落ちるなよ」と山田。

「わかってるよ」と、大した不満気もなくそう言った柳岡が照らした蠟燭のおかげで、佐野は壁に刺さった刀の両脇に、穴のような傷を幾つも見つけた。穴は壁に刺さった刀と同じように不自然なほど無数にあり、近くの穴をよく見ると、その穴は細長い二等辺三角形をちょうど横に倒したような形をしていた。

「佐野ちゃん、どう？」

川口が聞いた。

「――刀の他に穴がいくつもあった。多分、降りるときに刀を刺しながら降りるんじゃない？」

「やっぱり、刺さった刀を踏み台にするのか」

「また、手の凝ったことするなあ」

「ロープでひゅうつと降りた方が早いのにね」

「スパイ映画みたいにか？」

「そうそう」

「それもいいけどなあ。俺はやっぱりスパイやったら、七つ道具を使いたかったわ」

「――おい、無駄話はいいいから。もう引き上げるぞ？」

と、柳岡と川口の会話に口を挟んでそう言った葛木。佐野を支えるために力を入れすぎて、腕が震えていた。佐野の体重は標準よりやや軽く、けして葛木だけに全体重をかけてはいないのだが、葛木にはひどく重荷だったようだ。「——ん、よろしく」と、佐野。葛木は山田に合図して、二人は「せいの」で佐野を引っ張り上げた。佐野が地面に着くなり、葛木は両手を振りながら「それじゃあ、気を取り直して降りるとするか」と、何事もなかったように言った。しかし、

「待つてくれやあゝ腹減ったわあ。今、何時やねん」

川口はいざ壁を降りようという時に、そう叫んだ。びくりと生徒たち全員は一斉に川口を見た。

「おい、余計なこと言つなよ」

……なるべく口には出すまいとしていたのにと、腹筋が緩んで空

腹を知らせる鈍い音が所々で鳴った。腹の虫の合奏だ。

「本気で腹減ってきたじゃねえか」

生徒全員がよろよろと地面に崩れ座った。

「思い出したら、もう動けないよ」と、柳岡。
「確かに」

「飯なしとか、聞いてねえ」

「——お前、罰として一番に降りろ」と、葛木。

「うそやん！」川口は泣き声交じりに叫んだ。「嘘じゃない。行けよ」

「そうだ、行け。川口！」

「健闘を祈ってる、川口！」

「いややあ〜」

「川口！」

「降りねえと、俺が突き落としてやるよ」

山田が笑顔でそう言った。悪感のする、意味深な笑みでそう言ったのだ。

「……はいはい、分かったわ。降りればいいんやろ」

と、川口は山田には勝てないと、早々に諦めて。集めて置いてあった刀を一本取ると、絶壁にそろりと足を下ろして刀の柄に足をのせると、刀を壁にある穴に差し込みながら、しまいには猿のようにすばしこく、実に器用に壁を降りていった。

「すげえよ、川口。意外な特技があつたんだな。あいつ、動物園のサルに紛れても、分かんねえじゃね？」と、葛木が冗談を言っていると、

もう底に着いたのか、ほんの数秒しか絶っていないのに、川口が「おゝい、もう着いたでえ。——えっ、あれ？」と叫び。それにつづいて、「ぐほっ」と悲鳴をあげた。

「川口、大丈夫か？」

「きつと暗闇で躓いたんだろ。あいつ馬鹿だな」

川口がふざけていると思った葛木は「次降りろよ」と、柳岡に言った。「うん」。悠ちゃん、降りるの手伝って」

「——あ、佐野ちゃん！」

黙々と下を見下ろしていた佐野は何かを感じ取ったのか、急いで刀を引つ掴んで壁を降りていった。「どうしたんだ？」と、佐野の行動に、そこではじめて葛木は不審に思いはじめた。山田は首を横に振り、下で何が起こっているのかを見ようと体を地面にすれすれまで屈ませた。

「佐野ちゃん？」

真つ黒な底まで降りた佐野は、降りるために持っていた刀を片手に持ちながら、川口を手探りに探しはじめた。こんなに暗くては、そう遠くまでいけるはずなのに、絶壁周辺には川口の気配などまるでなかった。

ここにいないとすれば、奥になるが……

「佐野ちゃん？」と、誰かが上で呼んだ。

「——誰でもいいから、降りるときに蠟燭も一緒に持ってきてね。暗くて何にも見えない」

佐野は叫んだ。すると、上では何やらザワザワ話をしはじめた。恐らく、誰が火のついた蠟燭を、絶壁を降りながら持って降りるか、相談しているのだろう。こんな時こそ「譲り合い」「助け合い」を

すればいいのにと、一番団結力のない佐野がそう思ったのだから、坂ノ浦学園高校のチームワークは破滅的だ。

なんとなく白けてきた佐野は上を見上げて、蠟燭の光が何時やって来るのを待っていた。そしたら、独特の匂いが佐野の鼻を掠めた。

佐野は洞窟の奥を振り返った。

顔に少し風が当たった。奥から風と一緒に煙が吹いて来ている。

——この先に出口でもあるのか？

いや、それよりも……

気がつくと、さつきからそこにあっただのか、闇に、朧な赤い光がポツポツ浮かんでいて。その赤い光の浮かぶちようど真下から、虫の息の、誰かの声が漏れていた。

「——山田、蠟燭は後でいい。今すぐ降りろ」

普段はのほほんとした言葉遣いの佐野が、荒い言葉でそう言った。

5 - 6 (後書き)

……次回につづく。

これからのご時世、暗闇にはご用心を。

南・葛岡高校の場合（弐）

闇で煙を放つ赤い光が地面へ落ちて、そして、潰されるようにして消えていったが、匂いと煙はまだ辺りを漂っていた。咽そうなほど空気が悪い。この匂いはまちがいに煙草だ。密室の洞窟でよく吸ったものだが。しかし、こんな所で、のんびりやっているような今までの流れで思い当たるのは、黒塗りの男たちしかない。よほど暇を持て余したのだろう。

色気ある薄い唇が低く、ある種の喜びを込めて言った。

「どうやら、随分待たせたようだな」

葛岡の一番乗りは、小面の女をひたすら追った鳴滝だった。いきなりの悪名高い学校の大將の登場に、男たちは少しうろたえた

のか、しばらくの間、口をきかず静かに奥に立っていた。鳴滝は言った。

「小面の女はどこだ？」

けれど、誰も返事を返さず。男たちは無言に徹していた。

上から下へ、騒がしく降りてくる葛岡高校の生徒たちを見つめているのか。

それとも、鳴滝の言葉がきこえていないのか定かではないが、どちらにしろ、

鳴滝には癪な事だった。長時間戦ったせいで疲れ、ひどく空腹だ。

優しく受け答える気力も失った。鳴滝はズンズントと暗闇へと歩いていった。

「鳴滝さん！今、蠟燭を降ろさせるので、待ってください」

下に降りてきた狩野がそう叫んだが。鳴滝は歩き続けた。

目が利かない悪条件は相手も同じだ。近づいてくるという気配に、奥にいた男たちは恐怖に駆られて、鳴滝より先に襲い掛かってきた。

——ドスツと殴る音、蹴る音、血の吐くような音な聞こえたかと

思いつく、

「うわあああああ」という悲鳴が……

「鳴滝さん、大丈夫ですか？」

ようやく蝋燭を手に入れた狩野が走って奥を照らすと、
そこには気絶して地面に寝転ぶ黒塗りの男たちと、

まるで屍の上に立っているかのように鋭い視線を放つ、頬を手の甲
で拭く鳴滝がいた。

急ぎ足で助太刀しようとしたトドも百武も、それを見て悲鳴をあ
げた。

「……貴様、悪魔か！」

「一瞬だったよね」と、相槌打つ百武はしゃがみ込んで、ぼんやり
と気絶した男を照らした。

「誰だか知らないけど。」

僕らの学校は運動部が多いから、煙草は駄目だよ。煙草は！
鳴滝くんが怒って当然だよ」

トドはあっけらかんとしながらも桃武に「お前は少し思い違いを

している」と言おうとしたが、突然動いた鳴滝にビクついただけだった。

鳴滝は顔をしかめていたのだ。

鳴滝は言った。

「……飯の匂いにする」

「えっ？」

「なんだと？」と、食べ物の話になると、トドは戸惑いなく飛び掛る勢いで話に入ってきた。上から降りてきた生徒たちも「飯だって？」と喚いた。また騒がしい。

鳴滝は片手で「黙れ」と言っ、て、気絶する男を足で転がし、狩野に服を漁るように指示したが、狩野は男の服からは何も見つけられなかった。男たちからする匂いではないようだ。

「ありませんね。俺も吹いてくる煙草の匂いに混じって、飯の匂いにするんですけどね。一体、その匂いがどこからしているのか……」

葛岡高校の生徒全員が洞窟中を鼻で匂いを探し嗅ぐが、煙草の匂

いのせいでよく分かったものじゃなかった。奥へ進みだしたが、少し離れると、別の匂いがしてくるだけ。

辺りはどこにも匂いの元となるものが見つからなかった。

ラグビー部顧問の笹川から生まれた筋肉馬鹿の椎名は、ストレスのあまりに胸をしきりに叩いたが、笑う者は一人もいなかった。皆、空腹で気が狂いそうだったのだ。洞窟に十数頭の虎を放ったように、生徒たちはウロウロしていた。

けれど、研究部でもある宇治は一番冷静に、目の見える高さで探していた生徒は違って、単純に天井を見上げていた。

——なぜ、上なのだろうか。

それには列記とした根拠があつて。宇治はしっかりと見ていた。洞窟のずっと奥に進んだとき、気絶する男たちがいる絶壁側とでは、

洞窟を照らす明るさが大きく異なっていたのだ。洞窟の天井に何か光沢のある金属があつて、それが反射して洞窟が明るくなっている。宇治は天井を見上げて確証を得ていた。

「……上だよ」と、存在の薄い声で宇治はポツリと教えてやると。すると、目が飛び出しそうなほどの生徒たちが宇治に従うように上を見上げて、眉間に皺を寄せ。最後に歓声をあげながら、天井にぶら下がる丸い金属を落としにかかった。

おそらく、あれはアルミのタライだろうかと、宇治は内心思いながら、また、教えてやった方がいいが、彼らを前にして食べ物はもら

えるのだろうかという不安に駆られた。

野獣な葛岡高校生たちは、持って降りた刀を上投げはじめた。タライを支える縄が、絶壁と同じように壁に刺さった刀に括られているので、

そう簡単に落とせるものではなかった。だが、根性というものには驚かされる。

爪が剥れるのも恐れずに、両壁に指を食い込ませてよじ登った生徒たちは、腕力のみで縄を引っ張りとり、タライを落としたのだ。

落ちたタライには、海苔もない少し黄ばんだおにぎりが、仕切りに詰め込まれていた。途端に、「飯だ！」と、ハイエナのごとく、葛岡高校生が群がった。仲間だというのに、殴り合いながら、おにぎりの奪い合いがはじまったのだ。理性が吹っ飛んでいた。

——が、ドンツと壁が削れ落ちて、生徒たちは固くなったおにぎりを飲み込むをやめた。壁を蹴ったのは、鳴滝だった。

気が遠くなるほど腹のすいていたのは鳴滝も同じだったが、どうしても譲れないものがあつた。鳴滝は睨みながら叫んだ。

「飯を食うのは……、そのチビが食ってからしろ」

先輩をチビ呼ばわりするのはどうかと思うが、鳴滝は鳴滝なりに筋を通そうとしていた。「男なら義理を通せ」。身に染みた家の教育だ。トドはたまにはまともな事を言う奴だなと、微笑み。同学年の宇治におにぎりを取るように言った。

このとき、誰もが思った。——鳴滝は見た目だけでなく、実にいい男だと。

狩野は拍手すると、全員が拍手し、宇治は鳴滝にひっそりと感謝した。

僕も飯にありつけたと……

5 - 7 (後書き)

執筆中ではありませんが、
まだ続きます。続きます。

北・門倉学園高校その（弐）

固いおにぎりを食べた一同は、いつしか疲れ果てて地面にぐつたりと眠りこけていた。

一体、どれほど迷路のような洞窟を動きまわっていたのかはさかたではないが、激しい運動の後の睡魔には勝てなかった。普段なら気になる鼾も、まるで聞こえず。吸い込まれるような眠りという欲求に、生徒達は何ら抗うことなく落ちていった。

とてつもなく深い眠りの間、門倉学園高校の美術準備室と同じように、壁に凭れ眠っていた八王子は身じろぎしたとたんに、身体がずれ落ち。驚いて目を覚ました。

「——ああ？」

目に映るのは闇で、布団とはくらべものにならないほど硬い地面に、

何でこんな所にいるのだろうと、八王子は疑問に思った。

熟睡しすぎて、記憶が飛んでいたのだ。

だが、とろんとした目を瞬きさせているうちに腕の傷が疼いて、すぐに思い出した。」

「バトルBゲームの最中だった？」

あまりにも緊張感のない、周囲の静けさに頭を& a m p ; # 2 5
6 2 0 ; きながら座りなおした八王子は
また眠りにつこうとした。まだ眠い。

あいにく、同学校の生徒達もまだ寝ているし。
小さくなっていた蝋燭は燃え尽きていて、眠りを妨げるものはなかった。

八王子は欠伸一つして寝入ろうとしていた。

頭を壁に預け。ずっと聞こえていた風の音がやけに過剰に聞こえた。

八王子は耳を塞いだ。台風でもきているのか、ビュウビュウと風は強くなっていた。

鼾がかわいく思えるほどだ。耳を塞いだぐらいでは、止みそうになかった。

眠りたいのに、寝付かせてくれない。誰かの嫌がらせのような風音に、八王子は我慢できずに立ち上り。悪い魔女の呪いで糸車を追いかけた美女のように、八王子は歩きだした。

その途中、誰かを蹴ったようだ。寝言なのか、泣き声で謝っていた。フランセルだ。夢の中で紫垣に謝っているのだろう。起きそうもなかった。八王子は壁を伝って歩いた。あと何人が蹴ったようだが、フランセルと同じで起きはなかった。皆、仲良く楽しい夢の中だ。

八王子が壁を伝って歩き続けていると、足元が急に濡れる感触があった。

靴の中に水が入ってきているのが分かる。八王子は後退さった。

目の前に水溜りか何かあるのか……。

八王子は感覚だけを頼りに、手を地面に突っ込むと、思ったとおり水の中に腕まで浸かっていった。そして、掴めない水を無理に掴んで、水中へ引っぱり出した。

喉はカラカラだった。随分、昔に飲んだきりだ。舌に零れ落ちる水を滴らせ、数回手の内の水を飲み干した八王子は、後で他の奴らにも教えてやるうと、制服のシャツで顔を拭った。

「美味いかのお」

頭から降ってきた言葉に、八王子は蹴躓いて。咄嗟にそこにあつた石を掴んだ。

「誰だ！」

警戒心剥き出しにして、怯え叫んだ八王子に恐ろしいほど下品な笑い声が返ってきた。向こうには八王子の様子が手に取るようにわかるのか。

掴んだ石を投げようかと思った矢先、強風を伴奏のように女が歌

つていた。
とても小さな声で歌っていた。

「 おやかたさまのお戯れじゃ おやかたさまのお戯れじゃ
”
「

「—— 倅の四つ首射取らして
あいこは首切り首賭けじゃ
褒美はなにかなんじやろうか
わしはあれが欲しいお前はそれ
一首 二首 三つ首取らしたらくださろう

おやかたさまのお戯れじゃ おやかたさまのお戯れじゃ
”
「

新しい道を照らすように燃え、現れた松明。
それを持っていたのは、あの小面の女だった。

八王子は掴みかかる勢いで前進したが、ただ水に行く手を阻まれた。
制服のズボンが膝まで濡れていた。松明が照した水の正体は湖だった。
洞窟の中に湖。テレビで見たことがある。時に山の水が洞窟の中にまで流れ込んで湖や川ができると……
女は湖の上に浮かべた木舟に乗って、おかしくてたまらないといった風に笑っていた。

「何がおかしい？」

八王子は叫んだ。「お前、殺し合いをさせる気なのか？なんでもんなに——」小面の女は最後まで八王子の言葉を聞かずに大きく首を傾げ、松明を八王子の方に投げつけた。

「——うわっ」慌てて避けたが、危なかった。
腰をついた目の先で、松明が燃えていた。

小面の女が言った。

「早よう起き 早よう起き」

小鼓を叩き散らし、意図的に木舟が流されていく。

小面の女は面を心少し持上げ、見せた形のいい赤い唇が、「追いかけてきな」と声もなく言った。一瞬だった。

「——おい、待て！」

「何だあ？」そろそろと背後で生徒達が起きだした。小鼓がうるさくて起きたのだ。

木船が奥へと消え去って行く。泳いだところでも追いつけそうになりほど距離が深まってゆくばかりだ。松明を拾い上げた八王子は「クソ！狂っている」と罵りながら、松明を道場に押し付け。首を振りながら叫んだ。

「あの報道馬鹿どもは、此处に来ているのか——」

誰よりも心配なあいつが此処にいるか……？

5 - 8 (後書き)

次回、近日公開。

——近日っていつだろう？明日？？

5 - 9 (前書き)

* 木崎先生からの再度、猛注意 *

これより非常に安全な軽度から気まぐれな重度の暴力表現あり。苦
手意識のある人は、目を瞑って読みましょう

東・明雲高校の場合（貳）

明雲高校生たちの雲行きは怪しかった。

東で小面の女を目撃したの小沢だった。寝ぼけてフラフラと歩いて壁に向かって立小便をしていたら、女の笑い声が聞こえたが。

もちろん、気の弱い小沢は幽霊がいるんだと勘違いばかりしてその場から立ち去ったのだから、それが小面の女だと知るはずもなかった……

だから、小鼓で叩き起こしたのが一体誰なのかと揉めていても、教えてやれる者は誰もいなかった。

三年の弥刀と生島は、はじめは宥める側にいたはずなのに、

寝不足のせいが無理やり起こされた怒りが飛び火して、
シャツの首元を掴み合い、今にも殴り合いをしそうな雰囲気になっ
ていたが、
もう殴りをしているのもいた。

最悪の状態だ。

「――どうするんだよ。これって仲間割れみたいじゃねえ」

揉めあいから離れ、壁にべっとり張り付いていた生徒が言った。

「みたいじゃなくて、仲間割れだろ」

「あんまり近づくなよ。巻き込まれる」と言った尻から、
殴られて吹っ飛んできた米原に押しつぶされ、注意を促した生徒は
あっけなく撃沈した。

絶句ものだ。

最後までゲームをがんばろうと、誓った友が仲間によられてしま

った。

壁にへばりついている場合じゃない！怒りを新たに、既に大騒動の渦と化した生徒郡の中へと走った。そして、無口な陸上部、

米原は気絶した体の上からのそのそ起き上がり、すっかり空になって放置されていたアルミのタライを投げつけた。

「米原がキレたぞ！」

タライが頭に当たって打ち所が悪かったのか、うずくまる生徒をよそに、大喧嘩は米原をも巻き込んで、尚も悪化した。

「残念。ここには焼却炉ねんだよ」と、おちよくった弥刀は米原に飛び蹴りを食らわされ沈し。二年の応援団、千葉の喧嘩を止める声かもはや、煽りにかわっていた。

これは自滅という類のものになってきた。

——この騒動の原因の一端でもある小沢は、
必死で奥村を摩擦の痛さ凌ぐ早さで揺さぶり起こした。
奥村の頭はまだうまく起動していなかったが、やはり奥村。明雲高
校ではまともな方だ。

「はああ。眠い。何騒いでんの？」

「喧嘩だよ。奥村くん、閣下を起して」

「英司？起せばいいじゃん。そこで寝ている。輝行も一緒だろ」

赤いティシャツと制服のズボン姿で大の字で鼾をかいて寝ている
周防の隣、

胡坐をかいて眠る藤尾。赤い紐のついた刀が藤尾の右側に立てかけ
てあった。小沢は二人を見る前に、首を振りだした。

「駄目。無理。怖い」

「何が？」

「俺、まだ閣下の寝起きに立ち会ったことがない」と、小沢。奥村は笑った。

「出産じゃねえんだから、立ち会わなくていいと思っけど。英司の寝起きてそんなに悪かった？」

「閣下は何があってもおかしくない」

「——何があってもか」とケラケラ笑い、奥村はさっそく「英司、起きろ」と面白半分に揺さぶった。けれど、数回揺さぶって周防はまったく起きず。

その代わりに、藤尾が眼を覚ました。

「起床の時間か」

目をパチパチさせながら刀を手に持って立ち上がる藤尾は、まだ寝ている周防見て「時間だ」と足蹴りした。だが、周防はそれでも起きなかった。

「輝行でもだめか」と、諦めかけていると、飛んできたタライが周防の髪のない頭に直撃した。

「うおおおお。痛てえ！」

「あいつ、タライで起きたぞ」

奥村は青ざめた小沢に言った。頭にたんコブを作った周防は頭を擦って、

本能的に犯人が分かったのか、地面で転がるタライを掴み、「てめえ、やったな」と、素手でタライをボコボコにへこまし出した。タライの変形速度は普通じゃなかった。それを見た明雲高校生

たちは殴ろうとしていた手を引つ込めた。

——周防がこっちに来たら、ヤバイ。と、悟ったのだった。

「俺の勝ちだ。分かったら、二度と俺に勝負を挑むな！」

地面で拉げたタイヤを見下ろし、そう言った周防は気が済んだのか、

また寝ようと「よいしょ」と座りだした。藤尾が刀で周防を突いた。

「寝るなよ。そろそろ先に進む時間らしいぞ」

振り返った周防は、眉間にこれでもかと皺を寄せて言った。

「――何で、俺の家にフジオがいるんだ？」

5 - 9 (後書き)

次回、第五章完結！？

来月より第六話最終章が始まるのであります

寝ぼけた事を言う周防の耳を有無言わせず藤尾は引つ張り、

湖の方へ連れて行つた。そこに喧嘩をやめた、意識のある十五人の生徒たちが集まっていたからだ。藤尾は真面目な男だ。

松明が焚き火のように地面で燃えていた。

小面の女の経緯をさっぱり知らない明雲高校生たちは、湖の水を飲みながら言つた。

「これ以上、どうやって進むんだよ」

「蠟燭の次は松明か。誰が点けたんだ？」

「どうします？ 閣下」と、皆が大将である周防を見て答えを求めた。しかし、

聞く相手が正しかったのか、赤いティシャツを脱ぎ捨てた周防は、首を左右に曲げ、ストレッチしながら「道がないなら、泳ごうぜ」と、そう言つて、湖に入つていった。

あまりにも無鉄砲だったが、藤尾も「そうだな」と、あっさりと頷いて赤い紐のついた刀を肩に乗せて湖に入つた。どこまで続いて

いるかも分からない湖を泳ぐ——躊躇などまるでしていなかった。学校での無謀のやり取りの賜物か、二人の息はぴったり合っていた。明雲高校生は湖に半分沈んだ二人が「何してるんだ？」と言うものだから、湖へ飛び込んだ。

五月の水はまだ冷たい。湖は少し深いのか、

進むほど地面に足がつかなくなっていた。顔を水面上に上げて、松明を片手に半ば平泳ぎをして泳ぐ者や、米原や泳げない者が掴る刀を引つ張り泳ぐ者。そして、周防のように激しい水飛沫をあげながらクロールしている生徒が数人ほどこいた。後者は迷惑以外他ならなかったが、先行するには便利かもしれない。後ろから先の状況が分かるだろう。安全といえば、安全だ。

さっそく、クロールをしている一団の動きが止まった。

手が何かに当たったのだ。泳ぐのを止めて水面から顔を上げて見ると、

そこには木船がプカプカと浮かんでいた。

周防は無理に木船に乗りあがった。そのせいで木船が裏返しそうになったが、

周防はすぐにバランスを取り直した。

「おっと、セーフ——おい、火。火はやくこい」と、周防に急がされた松明を持った生徒が泳ぐペースを速めた。

「なんだこれ……？中に瓢箪と縄があるぞ」

周防は木船にあつた瓢箪を拾い上げると、ほの暗い暗闇の中、無数に潜む気配に「前だ！前！あいつらがいるぞ」と叫んだ。

相手側は今度こそは隠れていたわけではなさそうで、周防の叫びと共に、

松明が一気に点火された。こんな狭い洞窟にどう詰め込んだのか、数十隻の木船が現れた。度肝が冷された気分だ。

これをどうしろと言つのだろう……。

追いついた生徒たちが、木船に乗り上げようとしていた。

「おい、そんなに乗れねえぞ」

「英司、はやく降りろ。泳げねえ奴を乗せる」と、手を貸す奥村。周防は「わかつた」と頷いて湖に飛び込んだ。「舟を守れ！」

数隻の船に乗った黒塗りの男たちがカンカンと打つ音を響かせ、奥で何やらもそもそと始めた。息を合わせる掛け声をあげている。何かを壊しているのか。

「何やっているんだ？」藤尾が舟の真横で言った。

向こうで刀が無数に光っていた。何を待っている？手前の舟に乗る黒塗りの男たちは後ろばかり気にしている。何が起きる？

——嫌な気分だ。

カンツという最後の音の後、水が流れ出した。湖に浮かぶすべての木船が動き出した。黒塗りの男たちは、壁を壊したのだ。湖の水はまだ満たしていない壁の向こうへと懸命に下ろうとしている。船に乗っていない生徒まで、水の勢いに巻きこまれた。

川と化したその早すぎる水流に、明雲高校生たちは溺れそうになつていた。

流される体は泳げる余裕などなく。水ばかり飲み込んでいた。だが、そんな中でも誰かの強い力で水中に引つ張りあげられ、貧欲に酸素を求める事ができた。救ってくれたのは木船に乗っていた米原たちだった。けれど、助かったと思うのは早かった。さほど大きい舟ではない。そこにはもう十人ほどのついで、沈みかけていた……。

水面から一瞬、木船に乗り上げた周防が言った。

「動くな！」

再び水面下へ沈んで見えなくなった周防を目で追う暇なく、後ろから黒塗りの男たちの舟が近づいてきた。相手の舟には四人しか乗っていなかった。刀を手に持ち、反撃しようと思った。こちら側はあきらなかに不利だが、どうせ沈んで溺れるなら、せめて立ち向かおうと思ったのだ。

すると、黒塗りの男たちの舟に水を滴らせた藤尾が半身乗り上げて、鞘を抜いて男たちの足元を掠らせた。八本のズボンの裾が真横に切れた。

足首までは届いてはいなかったが、それは真剣だ。

次はまちがいなく斬ると脅していた。

黒塗りの男たちは静かに手から切れない刀を手落として、両手を上にあげた。

「頼むから動くなよ」

奥村が用心深く、溺れていた明雲生三人を黒塗りの男たちの舟に乗せ、「小沢がいない」と言った。

「うおおおお。小沢ならここにいるぞ」

周防は前を流れる五隻の舟を陣取り、小沢が手を振っていた。

いつ、戦ったのだろう。周防たちの乗っている舟には、黒塗りの男たちが全員倒れていた。

ボクシングのポーズで周防はにんまりして、前の舟へと、舟から舟へ飛び移った。

小沢は周防が拾った瓢箪に、先ほど取りに行った縄をグルグル巻きにして米原たちの乗る舟へと投げた。小沢は舟を手繰り寄せるつもりだ。藤尾は刀を鞘に納め、後ろからまだまだ来る黒塗りの男たちの舟に飛び乗った。小沢の唸り声が聞こえてくる。奥村が介護していた千葉が目覚まし、小沢に声援を送った。

米原の舟が小沢の真横に着く頃には 舟は平地へと流されたのか、

速度はとても緩やかになっていた。だが、黒塗りの男たちの舟はまだ何隻も、明雲高校生たちの舟を取り囲んでいた。絶望的だ。一人で立ち向かっていた周防と藤尾も、いい加減腕がだるくなっている、

あと三十人近い人数を相手にするのは難しい。

奥村や米原が、どうか手はないかと洞窟を探っていると舟が何かにぶつかり。波に舟が揺れた。松明を下ろし見れば、陸についているじゃないか！

「英司、輝行！陸地だ。とりあえず、水上戦は避ける。退け」

奥村に頷き。

陸地の方へ走りながら目の前の敵に気を取られていた隙に、藤尾は後ろから頭を殴打され倒れた。

「フジオ！」

陸地と川の狭間、ぐったりとした藤尾の手から刀を取った黒塗りの男は、

鞘を抜いて藤尾へ向かって振り落とそうとしていた。周防は思いつき走りこみ、

藤尾を吹き飛ばした。振り構える黒い影が今度は周防を覆った。「閣下！」

「東の大將か。申し分ねえな。死ね」

周防は不利落ちてくる刀から逃げられなかった。
急に走りこんだせいで、足を怪我したようだ。思ったように動けなかった。

刀が顔に近づいてくる——間違いなく、死ぬ……。

「うわぁぁぁぁぁぁ」

誰彼分らない悲鳴の中、
ヒュ——と甲高い口笛が目の中の殺意を沈黙に変え、
香水のきつい匂いと熱気が肌を撫でた。

「——おっさん。やりすぎはよくねえよ」

その男は滑らかな口調で尚も言った。

「監視されているの知っているだろう。バイト代無しになんぜ？」

周防は目を見開いた。

刀が額の一センチもない宙で止まっていたことじゃない。
殺意が消えたことじゃない。
命が助かったことじゃない。

人間味のない表情と、この目で見る憎悪に――

「田瀬永吉」

「――だるいから早く終わらせようぜ。 “ようこそ、戦場へ”」

5 - 1 0 (後書き)

最低な先輩の登場で第五話完結

↓ ↓ 次回、最終話へ

6 - 1 ゆるぐ夜燭の如き、天下の許に！？

明雲高校の場合（参）

背後からの重痛い振動で体がよろめき、一瞬にして視界が暗くな
ったかと思えば、

地面へと体が倒れてゆくところで記憶が途絶えた。

どこかで周防と小沢の声が聞こえたかもしれないが、
遠くへってしまった藤尾にはもう知ったことではなかった。

藤尾のだらんと放り出された足の片方が川に浸かり、
力のない体が少しずつ川へ滑りだしていた。

意識があるのか、ないのか。

「助けてくれ」と無意識に、図々しくも誰かに助けを求めてしまっ
たせいだ。

体だけでなく、心までズルズルと引きずられ。閉まっていた、
かつて懂れていた田瀬先輩の裏切りが頭の中で蘇ってきた。

——嫌だ。思い出したくもないのに。

何度も繰り返される田瀬先輩の冷たい微笑と、手に握られた札束。仕組まれた試合の敗北。活き合いあいとシャワー室で汗を流し、知らない振りをしつつづける先輩たち。田瀬先輩を仲間だと信じて疑っていなかったんだ。きつと最後まで、隠し続けただろうに。先輩たちに用がなくなった途端、田瀬先輩は部活を辞めて……あっけなく、一人の退学と十五人の停学が下された。残されたのは、田瀬先輩のお情けで助かった一年組だけだった。

不正の汚名をそそがれ、追い詰められた剣道部には部員がどんどんいなくなった。

田瀬先輩の、見たことすべてを話せばよかった。退学になった先輩、停学になった先輩たちの濡れ衣を晴らせばよかった。そしたら、剣道部も助かったはずだった。去った部員たちが戻ってくるはずだった。だけど、それこそ裏切りのように思えてならなかった。田瀬先輩を守り通した先輩たちに対する裏切り。

何もできなかった。

どうしようもなかったんだ。

なのに、ずっと思い出す度、心がどうしようもなく重い。

万札の雨が空を舞、藤尾の足が沈み、腰が沈み。肩も沈んだ。ただ、頭だけが水面上にあったのに、誰かが刀を大きく振り。頭をどこかへ浚っていった。頭には正義が詰まっていたのに。何が裏切りで裏切りじゃないのかわからなくなってしまった。仲間なんて助けるからこうなってしまうたのか。仲間を全員助けなかったからこうなってしまったのか。

頭だけが知っているはずだった。溺れている場合じゃないのに、姉さんの言う事をもっと聞いていれば頭を取り返せたのかもしれないのに。

深く後悔した。

でも、それ夢だったのか――

何の前触れもなく、目が開いた藤尾は暖かい布団でなかったが、薄い布のような物を被っていた。服は下着しか着てはいない。藤尾がいる場所は布で作ったテントの中のような。どろりで寒くな

いはずだ。

テントの外で焚き火がカチカチと音を出して燃えるのが見えた。焚き火の傍にシャツやらズボンが岩の上に置かれている。

誰かが藤尾の濡れた服を、風邪をひかないように脱がしてくれたのだろ。体を起した藤尾は、後頭部に走る痛みに咄嗟に頭を抑えた。すべて夢だと思ったが、頭を殴られたのは本当のようだ。藤尾は痛みを我慢しながら、周囲の状況を飲み込もうと、まずは明雲生の姿を探そうとテントの外へと出た。

とてもいい匂いがした。

「藤尾さん所の坊ちゃん。目が覚めたのかい？」

何やら入った鍋を焚き火へと運んできた老婆が、元気な調子で藤尾にそう声をかけた。髪は白く、顔の皺は生きた年齢の分だけ刻まれているのに、鍛えているのか、腰はピンと背筋が真っ直ぐで。紫の花柄の長袖に黒い長ズボンを履いているいたってラフな格好の健康的な老婆だったが、藤尾は老婆の姿を見るなり、驚いて布を胸までたくし上げた。

「あっ！」

「十字路の商店街の蓬ばあさんだよ。婦人服を売っているよ」

鍋を重たそうに石の上に置くなり、「坊ちゃんの裸なんて見やしないよ。服そこに持って行ってあげよう」と、近にあった制服を拾い、テントの中まで持って来てくれた。
藤尾は服を受け取った。

「ありがとうございます」

「坊ちゃん、頭打たれたんだってね。もう大丈夫なのかい？」と蓬はあさん。

シャツを羽織り、藤尾は頭を撫でて「はい」と頷いた。

お喋りな蓬はあさんに、見知らぬ男に頭を殴られて気絶したこと知られてしまった。小さい頃から、商店街の人たちとは付き合いがあり、

十字路の商店街に警察一家の藤尾を知らない人はほとんどいない。噂でも立てられたら、恥もいいところだ。

父、母、姉になんと言われるだろう。藤尾は顔が赤くなった気がした。

「嘘つくんじゃないよ。顔が真っ赤だよ！後で痛くなってもわたしや知らないよ」

「はい。嘘はついていないです」

「まだ痛いんだったら、氷でも持ってくるよ」

「いいえ、本当に大丈夫です！」

両手を振って藤尾が断ると、蓬ばあさんはため息をついた。

「そうかい、でも、無理だけはしないでくれよ。」

——まったく、あの人たちは子供に無茶させるよ」

「どうだい？景気づけに豚汁でも食べるかい」

「はい、いただきます」

藤尾は急いでシャツのボタンを留め、
ズボンを履いて蓬ばあさんがよそった豚汁を飲み込んだ。

「おいしいかい？」

「すごくおいしいです」

6 - 1 ゆるぐ夜燭の如き、天下の許に！？（後書き）

戦の前には腹ごしらえ。

食ってばっかだな。それが人間だ！？

次回、戦場が明らかに・・・

*おーつとと、第五ー十話の番号間違っていた
失礼！！そして、最終章ゆえに、
最後まで読んでくださるように祈願！！

「そうだろう。他の子たちもおいしいって平らげていったよ

「他の？——英司たちはどこに行ったんですか？」

「皆食べ終わって、とつくに外に出ているよ」

「外？」

藤尾はテントか豚汁の入った椀を手にも外にでた。途端、初冬のような外気に、

藤尾は温かい椀にしがみつくように胸に抱いた。そこは山頂から通ってきた

洞窟の通路より一回りほど大きい空洞だった。燃える焚き火と豚汁の鍋の脇で水が滴る。

洞窟の天井には、白い岩の氷柱が垂れ下がっていた。鍾乳石だ。

テントの真上にあったものは切り落とされたのだろうか、足が踏ん

でいたのはザラザラとした光沢のある砂だった。その上に、テントは五本のパイプでかろうじて立っていた。

蓬ばあさんは、空洞の、ちょうど自分より少し高い、二つ並んだ巨大な岩を指差して、

「その小さい隙間から外に出るんだよ。
わたしや目があまりよくないから見えないんだ。
綺麗に平らげたら、若い立派な目で確かめてごらんよ」

藤尾は蓬ばあさんに頷いて、豚汁を口の中に放り込んだ。
気を急ぎすぎて気管に入ったのか、藤尾は咽た。

「何を急いで飲み込んでいるんだい。慌てなくとも、
あの子たちはまだそんなに遠くにはいつてないよ。
外でもきつと喧嘩しているはずだよ」

「喧嘩……。心配だな。あれからどうなったんだろう……」

「坊ちゃんは自分のことだけ心配をしたらいいんだ。
頭を叩かれて気絶したんだよ。大変なことだよ。」

今だったら、ここに避難していられるんだ。これが最後だよ！
自分から痛い目に合いに行くことはないんだ」

蓬ばあさんは心配そうに藤尾を見つめた。
けれど、藤尾は首を横に振った。

「俺はどんな事があっても行きます。遅れを取りたくないですし。
それに、俺は最後まで戦いつづける男なんで。あいつらだって――」

呆れきった深い溜息をつき、蓬ばあさんは

「――まったく、可笑しな子供たちだよ。どうしようもないね」
と藤尾の手から腕を受け取り、その代わりに長ズボンのポケットから
お守りを取り出して置いた。

「いいかい、もうそこを出たら意識が無くなるまで戦うんだ。
何の足しにもならないけどね、これを持ってお行き。
ただのお遊びなんだ。命なんて捨てるんじゃないよ」

濃紺の擦り切れ、少し汚れているお守りには、白い糸で「命」と
いう文字が書かれていた。このお守りを蓬婆さんがどんな気持ちで
藤尾に渡したのか、渡してきたのか、

藤尾には到底分らないが。蓬ばあさんの優しげな目に浮ぶ涙に、
藤尾はお守りを握り締め、「はい！」と、とにかく頷いた。

そして、まるで教室の簞入れのように狭い、二つの岩を通りすぎよ

うとしたとき、

藤尾は蓬ばあさんの方を振り返った。

蓬ばあさんは鍋を&a m p ; # 2 5 6 2 0 ; き回し、鼻を嚙つていた。それも、「おやかたさま」と意味の分らない歌をうたいながら……

藤尾は二つの岩の先に明雲高の生徒たちの姿を目にするなり
安心しきって、笑いながら「ちよつと油断した」と

輪の中に入っていこうと思っていた。しかし、

その場はそんなふざけた雰囲気ではなかった。

周防が喚いていたが、暴れてはいない――

どうなっているんだ？何を喚いている？

大きい空洞の先にはもつと、ずっと広々とした空洞が繋がってい

た。

鍾乳石もぶら下がらない、東京ドームのように高すぎる天井。想像もできないほど果てしない空洞の、その中心には五重の塔よりもずっと長い、十七も屋根を持つ塔が建っていた。

歪だ。何なんだ？

塔を背後にして奥村と千葉が後ろから周防を羽交い絞めにしなければ、周防はまちがいなく田瀬先輩に殴りかかっていただろう。

「田瀬先輩」

先輩の右手左手に置かれた二つそれぞれの缶には刀が何本を放り込まれていた。

田瀬は時計を嵌めた右手首を見ながら言った。

「時間だ。全員こっちを見ろ」

「このゲームの話はこうだ。俺の右側にあるのは偽物。左側は本物だ。早く好きな方を選んで遊べばいい。」

正し、今までどおり、あいつらを殴り蹴り倒せばいいが、これからは掠り傷じゃすまなくなる。言っている意味が分かるな？俺なら真剣を選ぶ。

どちらも嫌な奴は、尻尾巻いて逃げている。誰も咎めやしない。この町の男である資格がなくすなけだ」

田瀬は藤尾が気を失うまで持っていた刀を刃から、押さえられている周防の足元に刺し、

「この刀はお前が最後まで持ちつづける。どんなに面倒でもだ。そして、あの塔を登りきれ。簡単な話だろ。

この刀とお前が一緒に塔を上りきれば、ゲームは終る。刀かお前、どちらが欠けたらゲームは永遠に終わらない。死ぬまで。もう分かっただろう。お前に全員の命が今この時より預けられた」

周防に「後は、お前次第だ」と言葉を突きつけ。何が時間だったのか、ブオオオと法螺貝が塔から響いた。

「行け」

地面が急に割れたように揺れた。閉じ込めていたいくつもの雄叫びが塔から聞こえてきた。塔からどんどんあの、顔を黒く塗った男たちがもう我慢する必要もないとでてきたのだ。

藤尾は瞬時に沸いた雑念をなぎ払い、先輩の左に走った。

「フジオ！起きたのか？」

6 - 2 (後書き)

来週、更新予定!?

いや、いや、いや――

六話終了まで毎週更新!! (たまにさぼる)

毎日、がんばろう

次回、木崎先生「表現」注意報発令・・・

6 - 3 (前書き)

< 木崎先生猛注意・暴力やそれ以上に嫌いがある方は避けるように
! ? >

門倉学園高校の場合（参）

十七重塔の北にも、黒塗りの男たちの群れは迫っていた。
刀を落とさないように、握り直した。

唾を飲み込みすぎて、胃がムカムカしてきた。

そうして、確認のためにと見た、唯一の逃げ場である二つ岩の入り口は、

誰かがいそいそと封をしていた。もう誰も逃がすまいとしていた。

鍾乳石のぶら下がる洞のひと時は、まるで安らかな夢のようだ。
北では、肉屋の仁さんが作ってくれた豚汁は最高だった。

疲れた身体に染み渡るようだった。

それなのに――

と、吉柳は激しく逆上して、「まだ閉めるな!」と、二つ岩へと逃げ戻るように走った。吉柳だけじゃない、あと数人は戻ったのだろう。

あまりにも不潔になりすぎたと、全身にじん麻疹をつくった御手洗のように、

鍾乳石の洞にいた時点で、「僕はもうリタイヤする」とはつきり負け犬宣言した方がマシだった。

異様に滑る地面も、この場にいることもなにもかもが苦でしかなかった。

戦いを手放してすべてを放棄しなかった。

ところが、もう一方では、逃げる吉柳たちを傍に、膝が少し震わしても、まっすぐ走り出していった。

黒塗りの男たちの群れに、戦意を失わない門倉学園生は目をカツと見開いていた。

八王子は真剣を選び、並木は刀を逆手し、東は刀ではなくフェンシング用の剣「エペ」から弓型にまがったサーベルに持ち替え。丸池は無闇に刀を二つ持って振り回していた。

黒く唇まで塗りつぶされた男は刀を左上から右下へと刀を振るった。それを払うように己の刀を向けた。

――刃が固く、きらびやかに交わった。

真正直に真っ向から斬りかかったが、黒い男にひょいと刀をかわされた。

風を斬るように頬を斜めに斬られ、流れた痛みにも喚く間もなく腹を蹴られ。

吹き飛んだ拍子に刀をつい落とした。

しかし、仲間の三成が偽刀で突いて男は腹を抱えて倒れた。

生徒は三成に礼を言って、さっそく刀を手に走る。

三成は東と同じフェンシング部だった。刀を持つのは初めてだったが、

柄の手触りは悪くなかった。

三成は封をされた二つ岩で叫んでいた吉柳たちを見て、

「おい、逃げるなら後ろを見て逃げろ！」

怒鳴った。

逃げようとするあまりに、油断している吉柳たちの後ろに黒塗りの男たちが忍び足で近づいていた。

三成の声に振り返った吉柳は声にならない悲鳴をあげた。

「よお、北のお坊ちゃんたち。

そこから逃げようとしているのか？

他の奴らは戦っているのに？

こりゃ面白いことをやるもんだな。

そうだ、”逃げれば勝ち” ちゅう言葉があるんだから、逃げたいなら逃げればいい。昔から皆やっている。

——けどよ、残念だがそこはもう二度と開きやしないんだ。

戦場に出口があれば、皆逃げちまうだろう。

それじゃあ、戦いにはならねえ。ゲームにならない。許してもらえねえんだ。

戦いたくないなら、それでもいい。

こつちには好都合。大人しく、泣き叫んで寝てくれよ。俺たちのために」

吉柳は目を瞑ったまま刀を振り回した。

テニスラケットをハの字に回すように振っていた。

だが、男はひといきに刀をすり抜け、吉柳の手首を引っ掴み。

次に首を掴んで持ち上げた。吉柳の刀は手から離れた。必死に男の手を引掻いたが、

そうすると男の手の力が強くなった。

すっかり喉を締め付けられ、息ができず。

目に映るのは白く濁る男の顔。片手を伸ばし、べっとり黒い物が手についた。

顔がまったく見えなくなってきた。純白の白に溺れている。

吉柳の五本の指が男の顔を滑り落ち。

泡が口から漏れた。

6 - 3 (後書き)

——また来週！！

ああ、作者は眠い。

「眠りの秋」いざ来たれり

6 - 4 (前書き)

< 木崎先生・猛注意 >

「何してんだよおお！」

逃げようとしたはずの生徒たちがいきなり発狂して、次々に吉柳の首を絞める黒い男を叩いた。

頭や肩、腰、足。いたるところを激しく叩かれて男は少し屈み、嵐のような集中攻撃にもはや吉柳を持ち上げられる余裕はなかった。吉柳が地面に倒れたが、泡を吹いたまま動かなかった。

死んではいないよな……。

ひたすら叩かれている男は地面へ張り付くように頭を抱え、丸くなり。我を忘れた集団に叩かれ蹴られ、

そのうちに、男まで動かなくなつた。急所に当たったのか。逃れようとして、吉柳が落とした刀に伸ばされた手はとても痛々しい。

ずっと見ていた三成は「あいつら、なんだよ。やるじゃねあか」と漏らし、

心配いらないならと、目の先にいる東たちへと急いだ。

並木は190センチという高すぎる身長をもろともしない軽い足取りで立ち回ると、
黒塗りの男の腹を一撃し。刀を横に構え、別の、
小太りの男の刀に押されている八王子を見つけて、近くに駆け寄った。

「男たちの走り方が妙だ」

八王子の隙に付け込もうとした男の足を、並木は払い。
巨体の半分の体重をかけて、男の身体を足で踏みつけた。
蛙のように男は喚いた。「——妙って？」

押された刀をわざと一旦引かすと、力をかけすぎた男がよろめき、
刃が八王子の胸へ一段と攻め寄ろうとしていた。
だが、八王子は男の脂汗臭い体臭と息を嗅ぐ前に、
刃を真下へ転がし、男に刃紋が見えるように動かした。
そして、さらに、刃先の方をぐい持ち上げ、男の刀を横へと強引に
反らした。

刀の側面に傷がついたが、八王子には気にはならない。

「こっちに走ってきていたのが、急に走る方向を変えている」

「ゲエヘヘ。ゲエヘヘ。これで金がもらえるなんて、たまんないよ
お」

熱っぽく、もう一度立ち上がった男を今度は並木が逆手で持った
刀で
光のよりに打ち返し、一歩踏み込んで顔を殴った。これも一撃だ。
男は目をまわしながら、気絶した。

「方向を？」

八王子のちょうど足元で伸びた、男の垂れた涎が黒い塗料を洗い
流し、

濁った素肌が見えた。

「こんな奴もいるのか。金の為に……。襲われたりしてないよな……」

八王子は顔を上げ辺りを見渡しながら、言った。

「並木、どっちに走っている？」

「西と東だ」

並木は一撃で確実に一人一人仕留めながら、

「どうやらあの塔の西と東側には誰かがいるんじゃないか。まさか、塔に逆戻りしているとは思えない」と言った。

「誰か。何かいるっていうのか？」

「今、考えられるのは、あの三校だろう。さつき、先輩が“戦場”だと言っていた。

この男たちを倒し終わったら、鉢合わせさせる気なのだろう」

「正気か。まだ、戦わせるのか？」

「そのつもりらしい。さすがに疲れたな」

「そうだな、疲れた」

八王子は男の顔を連続で殴った。「——って、言っている場合じゃねえ。

俺は気が気じゃないんだ。並木、ジャーナル部がここに来ているのは知っているか？」

「ジャーナル部？丸池先輩ならあそこにいるが」

「先輩じゃない。玖珂とかそういう下っ端の奴らだ」

「玖珂さんたちか。それは知らなかった。こんな所まで来ているなんて度胸がある」

「アイツらを褒めるな。俺はあの度胸というか、強情さには困り果てているんだ」

並木は倒した男の首元掴んで笑った。

「あのときはどうやら思い違いをしていたらしい」

「どう思おうが、並木の勝手だ」

並木はまた笑った。

「御手洗くんが言っていた。誰も気づかなかったが、洞窟のあちこちで光が見えた。もしかしたら、ジャーナル部だったのかもしれない」

「フラッシュか」

「ここが明るいののはライトが地面に埋られているからだ。

ここに隠れ場所があるとは思えない。あの塔にいる可能性がある」

八王子は塔を見上げた。「あの塔は地上に繋がっているのか？」

「行ってみないことには、分からない」

フランセルは齒をガタガタ鳴らして逃げ回っていた。
半ば滑るように走っていた。

刀ぐらい簡単に使えるだろうと思っていたのに、
真剣は片手で持つには重すぎた。偽刀に持ち替えようにも、
刀の入った缶から遠ざかってしまっていた。

地面が軽い坂のように下りになっていて。また、もっと塔に近づけば、

きつと同じような上りの坂があるのだろう。塔が小高い場所にあることがわかる。

地面は随分緩やかなVの字のように上がり下がりしていた。

フランセルは後ろを振り返った。

後ろには黒塗りの男たちが六人も追いかけていた。おっかない顔をしている。

フランセルは仰天して、走ってどうにか逃げ込もうとした。
けれど、前から来た黒塗りの男たちが刀をフランセルに向けて構え

ていた。

「うわっ、挟み打ちされる！」

フランセルはつい、口を開けて脱力して刀を落としたというのに、焦ってそれに蹴躓いた。こうして、痛い、痛い、膝を擦っていると、追いかけてきた男が急には止まれないと、フランセルの足に躓いて、ちょうど塔から走ってきた男たちへ飛んでぶつかった。フランセルの目の前で繰り広げられた、マンガのような出来事に思わず笑ったが、文句を言い合っている男たちからそそくさと離れ、サーベルで突きまくっている東に叫んだ。

「会長、これをどうにかしてほしい」

後ろを指して「倒してくれ」と言った。

東は走ってくるフランセルと、顔を抑えてフランセルを追っている黒塗りの男達を見て、綺麗な面を膨れっ面にさせた。サーベルで襲ってきた男の手を突いて、華麗に一回転し、そっと近づいて、顔を叩いた。

「フランセルくん、僕に命令しているのかい？」

「命令だなんて、そんなこと——」「それじゃあ、八王子さんと喧嘩をするような君が、どうして逃げているのかな」

フランセルはばつが悪く、言った。「——この刀は重すぎて」

「そうかい。だったら、この男の刀を使えばいいよ」

と、東は地面に転がった刀をフランセルに投げた。

「僕は、浮気者は好きじゃないんだ。君らのような愚か者がいるから、

無実の者まで疑われるんだ。大いに一人で戦ってくれたまえ」

追ってきた男が刀を振ると、フランセルはひょういと避けて「会長、勘違いです。そんなこと言わずに助けくださいよ」と言った。

「いいや！僕ならけして京佳を裏切ることはいさ」

東は長い髪をなびかせて、塔の方へと行ってしまった。フランセルは思わず舌打ちした。

「浮気しないなんてよく言い切れる！

目の前を通ってゆく、麗しいレディーたちを放っておくなんて、普通の神経じゃできないね」

東が投げた刀を拾い、真剣を投げ捨て。「浮気をどう思う？」と、刃を向けた相手に聞いた。

「——浮気？今はそんなこったあ、どうだっていいだろ」

散々走らせやがってと、いつの間にかカンカンになっていた男は、フランセルの刀を金槌で打つように、強く叩いた。

刃を止めるたびに、カンカンツと鳴っている。手首が少し反れて痛い。

「ああ、聞いた相手が悪かった！」

フランセルは刃を素手で掴んだ。手の肉に刃が食い込み、血が流れた。

それなのに、フランセルはそのまま刀を奪い取り、

「八王子の奴がでしゃばらなきゃ、こうはならなかったのに……」。

葉菜が一番好きなんだから、浮気したって一番なのには変わらないだろ。

なのに、葉菜ときたらまだ怒っている！どっしろっというんだ」と、八つ当たりするかのように、男の脛を何度も何度も蹴り上げた。

6 - 4 (後書き)

次回は・・・今週と来週の間。
オ―ッス!!

南・葛岡高校の場合（参）

ギリギリと刃が削れ、こぼれた。力づくで押し込んでくる黒塗りの男は、

狩野の後ろで膝をついた鳴滝を見て、狂ったように狩野を押した。あと少しで大将の首を取れる。例の金が余分に手に入ると――

「巽さん！逃げてください。こいつ、なかなか力があるんです」

「おい、狩野忠史」

狩野の反対側で鳴滝を守るように応戦していたトドが叫んだ。

「ちょっと、耳を貸せ」

「なんだ、トド。今、忙しい。手を貸すなんて余計な事ほざくなよ」

「ほざくなどは、何だ？先輩に向かって生意気な！」

「ちょっとちょっと、言い争っている場合じゃないでしょ」

狩野に食って掛かり、トドが余所見した所を殴りにかかった、黒塗りの男の首元を重森はさっと掴むと、足を引つ掛け男を地面に叩きつけた。

以前、狩野にかけた技だ。狩野は奥歯を不機嫌に擦らせた。

神経質とはまったく縁のない男、重森は、

狩野とトドに守られ膝をつく鳴滝の腕を掴んだ。

「どうした？怪我でもしたのか」

半身持ち上げられ、鳴滝の髪が顔にかかった。

狩野はカツとなって重森の手を叩いた。

「触るな。少し腹を切られただけだ」

「切られた？」

よく見れば目を閉じた鳴滝の男前の顔には汗が垂れていた。かすかに息が震えている。片手をわき腹に当てていたが、その手に赤い血がついていた。

「深いのか」

狩野は頭を掻き毟り言った。束ねた髪が数本乱れ飛び出た。

「わからない。俺は倒れた鳴滝さんしか見ていない」

重森は狩野に舌打ちして、鳴滝を覗き込んだ。

鳴滝は苦悩しているかのように眉に深い皺をよせて頷いた。

「何言ってるの？大丈夫なわけないでしょ」

「ほら、全員ボサツとしているな。援護しろ」

重森はその場で多く叫んだ。汚くなった制服のシャツを無理やり引き千切り、

歯で噛み切った。そして、鳴滝の血のついた手を取り払い、鳴滝のシャツを脱がせるようにトドに言った。

「へ？脱がせるたって……」

「早くしろ」

狩野が怒鳴った。

「……なっ、生意気な狩野め」

「先輩、早く！」

「わかった！」

しゃがみ込んだトドが鳴滝のシャツを腕から丁寧にシャツを脱がし、

下着のタンクトップも頭から脱がせてやった。

「まったく、先輩を敬う後輩はどこにいる……！　こうでいいか」

重森は頷いて切り裂いたシャツをきつく鳴滝の腹に巻いた。

あまりにもきつくまいたから、重森は鳴滝が声をあげるかと思ったが、鳴滝は声一つあげることなく、シャツを腹に巻き終わると、重森の肩を持って「肩を借りる」と言った。

「もう立つのかよ」

シャツだけを上から羽織り、体重を半分以上重森にかけて、

立ち上がった鳴滝は「大丈夫だ。目眩がしたただけだ」と低く言い。

葛岡高校生が集まりに集まった周囲を見て、

「俺は大丈夫だ。先へ進むぞ」と、自らが先頭になって

葛岡高校生たちはいさましく叫んだ。

「おい、鳴滝！」

一人だけ鳴滝の名を呼んだのはトドだった。

鳴滝は声もなく振り返った。鋭い目がもっと、険しくなっていた。儂い容姿など、微塵もない。トドは言うのをためらったが、我慢して言わないのは性に合わない。

「無理をするな。動けそうにないなら、リタイヤしたってかまわない」

鳴滝は目線をトドから地面に落とし、言った。

「――柄にもなく、俺に泣き言を言わせる気が。反吐がでる」

トドは静かなる鳴滝の迫力に乾いた唇を舐めた。

鳴滝は尚も言った。「俺のじいさんがやり遂げたゲームだ。半端であるはずがない。」

先輩と名乗った奴が言ったとおり。

大将である俺がこの場所から抜け切れなければ、ゲームは終わらない。このかすり傷は序の口だ。ここで諦めたら何も終われない。

生きなければついてこい」

放たれたシャツの前から覗くのは、包帯のように巻かれた血の滲んだ重森のシャツ。

男前の顔には苦悩が浮かんでいた。紛れもなく、その男には相応しい道があった。

誰にも疑いようない道が目の前に。

それでも、鳴滝という男はその道を見てはいなかった。

ゲームが終われば、すべてが終わる。思いひとつで、血の出る体を動かした。

なにもかもが——あの塔の上へと。

「出て行かないで」

「わしはなあ、ヤクザが怖い」

「愛したかった」

「生まれてきてよかった」

「可愛い子！」

6 - 5 (後書き)

常にく暴力表現猛注意中>
漢字ばかりだな。

作者、風邪引いて更新遅れている。
イアッホー

俺の一生はまだ始まったばかりというのに、
一日も一年もいつもいつも、余分に長すぎた。
知らずと生きる日々には、人々、些細な動作、それを包む世界が現
れ。

時に、辛さを与えては喜びを与え、柔い心を大小かまわず揺さぶる。
誰にも本当は必要とされていない。誰もほしくない。何も上手くで
きない、人より劣る。人とは違う。己が何者なのかが、わからずに
叫び。暴れ。壊し。最後に気づく。

ああ、どうして気づかなかったのだろう。

壊し終えた後に気づく。それは最大の過ちだ。涙を流し、壊れそ
うだったのは、真実を知ろうとした俺だったのに。他人を壊して、
俺を壊し。見捨ててしまっていた。信じたくなかった。目に写った
すべてを殴り倒しても、後には忘れてしまう、ほんの一瞬だけの優

越感を感じるだけ。使い捨てのような安っぽい優越感。そんなものの為に、理性を失ってしまう。野獣のように荒れ狂う血筋のせいではなく、大勢の中でしか見られない俺のせいだ。信じられず。まったくの別人にならなければ、清廉潔白なあの人に出会っても、同じことをしてしまうのではないか。傷つけてしまうのではないか。そう思うと、ますます己も、己が纏うものも嫌悪するしかなかった。俺は変りたい。変えたい。用意されたものになるのではなく、人を救える善人に。そうなれば、きっと……

見えない九掛ける九の升目の内、歩兵が一步步進むとき、

桂馬が敵の歩兵を攫り。飛車が二つ歩んでその下に控える。

玉将を前に左金将も同じく前へ進み。右金将はそのまま。

角行は全体の様子を見ながら斜へ。ここは将棋盤の上ではけしてないが、

そう変わらない位置で全駒が戦っている。

将棋の駒はもともと、刀を振り回す者たちを表されているのだ。平和を謳う現代に、この身をもつて戦を経験し。これが最後の大喧嘩になるなら、

これほどまでに光栄なことはないだろう。

腰を捻ると同時に足を高く上げ、黒塗りの男の顔を蹴ると、また、足を上げて斜めの方角にいた男を蹴飛ばした。緑の紐をベルトループに通して、

ギラギラとした刀を無理に縛り付けていた。刃が鳴滝の太股に刺さりそうに刺さらない。怪我をしたと思えないほど、鳴滝の動きは俊敏だった。

狩野とトドは互いに皮肉りながらも頷き合って、

トドは目に見えた男たちをタツクルし。狩野は片手で一人の首元を掴んで、

男三人の方に投げた。鳴滝たち一同はやっと上がり坂のちょうど境目に差し掛かった。

下り坂はラグビー部専用のグラウンド十数周ぐらいだろうか。坂を走りぬいても、まだ、同じほどの上がり坂があり。それを上りきれば、塔に出会う。障害もなく駆け抜けたら、ここから塔まで十五分もかからないだろうに。一日二日、三日？蓄積された疲労が生徒全員を苦しめていた。

横にも縦にも長い、巨漢の黒塗りの男に手間取っていた桃武が転倒した。

足で数回、腹を蹴られるが、日頃から腹筋を鍛えている部長は、体を丸めて男の痛い蹴りに耐えていた。葛岡生たちが「何を！」とタツクルや腕掴んで技をかけるとするが、この巨漢は重すぎて技を

かけようにも、

子供が親の手を引っ張って遊んでいるようなものだった。

タツクルなど、巨漢がビクリと動いただけ。男はたるんだ瞼の下にある小ぶりの目でこちらを見下ろしていた。さすがの葛岡高校も、こんなに大きく丸々太った男はいない。

2メートルはいつているんじゃないだろうか。殴られたら、吹っ飛ぶだけではすまなさそうだ。

けれども、そんな程度ではひるまないのが葛岡高校生だった。

重森が巨漢の足へ、さっと奪った黒塗りの男の刀を投げた。

巨体を支える足を狙えば、塔へとつづく道を通してくれるだろうと重森は思った。

しかし、巨漢は縄跳びでもするかのように刀を飛び越えた。

意外にも男は身軽だった。葛岡生二人の首をさっと掴んで、顔面をぶつからせた男は、気絶した二人で周囲を殴り散らし。狩野とトドの間にいる、

鳴滝の方へ急に走り出した。地面が鳴る。「誰か止めろ！」

重森は叫んだ。鳴滝は怪我をしている！と、口に出せばいいのだが、

「なんだ？」と、暢気にこっちを見た葛岡生は役には立たない。

いちいち説明している暇はないんだと、重森は自らが巨漢を追いか

け、
がつつちりと腹を掴み。「よおいしょ」と、真っ赤な顔に腕に筋肉が

もりあがる。

重森は巨漢を少しだけ持ち上げた。が、ピキピキとどこかしら無理があつた。

逞しい筋肉を持っているとはいえ、巨漢を投げる力はない。

だから、重森は巨漢を振りまわそうと回転しだした。

振りませば回すほど巨漢は重くなるのだが、この巨漢を倒さなけれ

ば、

全滅してしまうかもしれない……

焦った重森は筋肉が壊れ力尽きるのを覚悟して振り回った。ところ
ろが、

巨漢はただ振り回されているだけではなかった。肉のたっぷりついた腕を曲げ、軽く重森の顔を直撃。「ハッ！」重森は鼻から血を流し倒れた。少々、目が回った様子だったが、巨漢は頭を振ってから鳴滝の方へ、体を揺らしながら全力疾走した。鼻時を押さえながら、「狩野！」重森は叫んだ。

狩野は振り返ったが、巨漢は狩野の横を素通りし。

別の男とやり合っていたトドが気づいたときには通り抜けて、鳴滝にタツクルしようと飛んだ。鳴滝は巨漢に気づいてはいなかった。

巨漢にとって絶好のチャンスだった。

巨体が鳴滝の背を押しつぶそうとしていた。が、鳴滝はその瞬間、誰かに突き飛ばされた。

「ぐはっ」

巨体が体当たりしようとしていた相手の鳴滝は地面を擦り飛んだだけで、

他に無傷だった。男は自分の巨体の下敷きになったか細い少年を見て首を鳴らし、

立ち上がった。咄嗟に、その少年は鳴滝を突き飛ばして身を張って庇ったのだ。

巨体はそんなことは気にせずに、鳴滝を押しつぶそうとまた全力疾走したが、

今度は鳴滝自身がそれを避け、倒れた仲間を鳴滝はそっと起こした。

「お前」

——宇治だった。鼻からも口からも血を流していた。

宇治は虫の息で「おにぎりのお礼がしたくて」と言った。

「礼など！」

「いいんだ。ここまで来れるとは思ってなかったから。」

こういうのも面白いね。運動部に入ってみようかな……」

思ってもいないことを口走った宇治は間もなく意識を失った。息はしている。気絶しているだけのようだが、ぐったりとなった宇治を鳴滝はそっと地面に寝かせ。また馬鹿みたいに突進してくる巨漢に、鳴滝は渾身の力をかけた蹴りをお見舞いしてやった。男は地面

を削り倒れ、すぐにいの中のを吐き出した。鳴滝の怒りは、巨漢の胃にまで届いたのだ。男が吐いたその場所にいた少年が「汚ねえ！」と叫んだ。鳴滝は黒塗りでもない、ごくふつうの金髪の少年を見据えた。

6 - 6 (後書き)

ちよつと、遅くなつた!!
寒さのせいにしておくれゝ

次回、坂ノ浦!! 出会つちやつたよゝ編

西・坂ノ浦学園高校の場合（参）

砂埃を薄目で見れば、ずっと向こうに凜々しい男前が立っていた。赤い染みのついた包帯のようなものを腰巻き、シャツを羽織り。顔のすべてのパーツが整っている。それに、色気もあるように思えた。

年上か。巨体を倒したのはあの男なのか。

佐野は「誰だろう」と小声でつぶやいた。

見たことのない顔だった。相手も佐野同様、じっくりとこちらを見ているようだった。

顔は黒く塗られていない。汚れに汚れたシャツやズボンがどこことなく、

スーツのような、制服のような……。緑の紐に結ばれた刀……。

これと同じものが右手にあるような気がする。

佐野の持つ紐の色は黄色——思い出した。

北か、南の大将！

どうやら、その一瞬、相手も思い出したようだった。

両者の足が動いた。踵を高く上げて、爪先で走る二人。そう長くない距離を縮め。バッドを振るようなフォームで刀を振った佐野に

相手が足で蹴り止めた。「おお！」と、空いた左手で顔面を殴ろうとするが、ス力。

相手を避けて、佐野のわき腹を蹴ろうと足を振り上げた。間一髪、刀でそれを防いだが、あと少しで当たっていた。

一ヶ月前前に作った痣がきれいに治ったばかりなのに、また作るつもりなんてない佐野は一步後ろに下がった。すると、攻めてきてもおかしくなかった相手も一步下がった。

互いに威嚇するように、眉を潜めたが、

すぐに決着がつきそうにないのは直感的に分かった。

この男は手ごわい。

決着がつかないなら、ここで足止めを食らうよりも、前に進んだほうがいい。ゲームを終わらせるためにも。

仲間のためにも。どうぜ、塔に向かうのには変わらない。

身を引いたほうがいい。と、佐野は相手より先に背を向けて、元いた場所へ戻った。

もしかしたら、攻め追われるかもしれないが、佐野が思った通り、相手は追ってはこなかった。振り返ると、相手も佐野と同じように元いた場所へ戻って行く。

次にあんなのと会ったら、どうなるのだろう。

周防となら、楽しく遊べそうなのに。佐野は先読みできなくなったゲームに、

ここに来て初めて戸惑った。

「佐野ちゃん。何処に行ってた？」

山田が言った。黒塗りの男の腕を背中を押さえ、男は「痛い痛い！」と叫んでいるが、山田は姿を見失って倒されたかと思つたと言つた。

「——ん、大丈夫。ちょっと北か、南の大將に会つてた」

「大將！」

葛木が山田の横に来た黒塗りの男の足を引っ掛け、倒れた上に座り込んで「どうだった？」と聞いた。

「思つたより、男前だった」

「オレ、顔の事なんて聞いてない！」

「男前？」山田は抑えていた男に頭突きした。「北は西洋風の王子だつて噂があるけど」

「顔がいいと強いのかよ」と、葛木。

「王子というか……。ヤクザ？」

「は？」

山田と葛木は声揃えて、佐野を見た。

「俺のイメージでは、男前のヤクザだった」

「ヤクザの息子か！」葛木は下で暴れる男の手足を引っ張りながら叫んだ。

山田は二回目の頭突きをして気絶した男から手を離し、地面に置いた刀を取って、次に来た黒塗りの男に投げた。

「さすが、大將は半端じゃないな」

「失敗した。俺は東の周防ちゃんとやり合えたら満足だったのに」

「我儂言つなよ。それなりに実力あるくせに！で、あいつは起きたのか？」

「誰？」

「川口！」

「川口か」佐野は言った。

「どうだろうねえ。危ないから麗と一緒に置いてきたけど」

「……あいつは、川口だからな」と、山田は無愛想に声だけで笑った。それに、葛木は「ああ、そうだった」と頷いて、座る土台になっていた男の背に力いっぱい肘を打ち込んだ。

この地下の舞台でゲームが始まってすぐに、
二つ岩から三メールも離れていない所で寝覚めした川口が、
精神的に朦朧としながら、ぽつりと言った言葉は、とても惨めった
らしかった。

「ああ、神様。僕はなんで、こんな所で寝ているんやろうか」

刀を合わせる大勢の男たち。世にも恐ろしい奇妙な声。

走り回る地響きが耳に全部入っていく。殴られて、変な物でも見えているのだろうか。

川口は起き上がろうにも起き上がれなかった。手を組み、じっとしているしかない。数メートル先で黒塗りと男と、坂ノ浦学園の生徒が取っ組み合っているからだ。汗じゃなく、涙が流れ落ちそうだった。

6・7（後書き）

次回は早めに書きたいものじゃな・・・

あと四話で終えてみせる！！

11月20日はHP、89-1UXの二周年記念日だ！？

「え〜。嫌だよ」

不意に、柳岡の声が聞こえてきた。
柳岡だけじゃない。

「でもね、でもね」

「お嬢ちゃんが倒れてくれないと、おじさんたち困るんだ」

「そう、そう。お願いだから、向こうで少しの間寝ていてくれないかな。」

気絶した振りでもいいから。ね？」

地味声の三人の男たちが、柳岡相手に必死にお願いしているようだった。

「横になつてくれるだけでもいい」と。さすがに、

女の子である柳岡に手を出せないようで、川口は他人事だと内心笑っていた。

柳岡は言った。

「嫌だよ〜。悠ちゃんと荘ちゃんに、ここに座っているって言われたから。」

動かないよ。それに、麗は満ちゃんが起きるの待っているの！」

川口は小声で「げっ」と叫んだ。

「満ちゃん？」

「あそこで寝ている子だよ」

わざわざ教えなくてもいいのに、

柳岡は寝ている川口を指差しているのだろうか。
足音が近づいてきて、川口の頭を蹴った。

「満ちゃんを蹴っちゃ駄目だよ」

かわいい柳岡がそう言うならと、

「ああ、ごめんね」男たちは蹴るのを止めて、川口の頭を撫で出した。

川口は「無言、無表情、僕は睡眠中」と声もなく唱えた。

男が男に頭撫でられるなんて気色悪かった。

しかも、知らないおっさんになんて、尚更だ。

吐き気がしてきた。

「もう、無理や！」

目をぱつちり開けて立ち上がった川口は、頭を撫でていた男の顎

に突撃。

「満ちゃん」と言う柳岡を他所に、川口は「ハアッ」と息み、体勢を低くして走り、

柳岡の隣にいる一人に抱きつき。頬を限界まで引つ張ったり、ピンタを繰り返し。

男は「降参」と、後ろに自ら倒れた。残った男はあたふたと刀を三本持ったが、

川口は柳岡の手を取って、格好よく「行くで！」と、塔の方角へ走った。

下り坂を走る川口と、引つ張られ走る柳岡。どんなに戦っても、坂ノ浦学園高校の生徒も黒塗りの男たちも、敗れは起き上がり。

体が傷つこうか、負けたくない思いひとつ、その場から離れられない戦いを繰り返した。先に行った佐野たちに追いつく必要なんてない。そう思ったのか、すんなりと、走ってきた川口たちに「通れ」と道をあけてくれた。黒塗りの男も戦いに夢中なのか、邪魔をしようとする気配すらなかった。柳岡はそんな男たちに「頑張って」と元気つけとうとしたが、言葉を口にする前に速く遠ざかってしまった。

後ろで、腕を切られた男が悲痛に叫んだ。

冬の、学校のマラソンのように、風が冷たく辛い距離を喉が痛くなるほど走った。

温かさなんて物はない地下のかわりに、心臓だけが熱をしきり全身に運んだ。

脹脛の筋肉が張っていた。繋いだ手が汗で滑りそうだったが、川口が何度も繋ぎ直し、力強く柳岡の手を握った。

誰かの体から血が噴出し。殴られ。蹴られ。倒れ。川口の手から離れれば、

いつ、ひ弱な自身の身に何が起こるかもわからない。

女の子がゲームに参加するなんて、両親にも友達にも無茶だと散

々いわれたけれど、

せっかく巻いた髪が崩れて泥がついても、守れなくても守られなくてもいいから、

こうやって一緒にいられるだけで柳岡は嬉しかった。

「あ、おった！」

前しか見てない川口が叫んだ。

柳岡は「なあゝに？」と聞いたかったが、苦しい息しかでなかった。川口はぱたりと泊まり柳岡を振り返ると、息を弾ませ

「すぐそこに佐野ちゃんたちが見えているのが分かるか？」と言った。

柳岡は首を横に振った。酸素が足りずに、目の前が真っ暗になっていた。

顔も青白い。「麗？」と川口が言うと、柳岡の気持ちに反して、足がガクリと曲がり、まっすぐ立っていられなくなった。

川口のせいなのに、はあとため息をついて、「……ごめんね」と謝る柳岡に背を向けて、座り込んだ。

「じゃあないから、俺の背中に乗れ！」

「えっ、いいよ。自分で走れるよ」

「無理やろ、どうみても！ほれ」

川口は柳岡の腕をとって自分の首に回し、柳岡を背負うなり、「重っ」と漏らしたが、柳岡は聞かなかった事にした。

川口はジャンプするように、背負い直して走り出した。

上り坂には道を通してくれそうな男はほとんどおらず、

川口はスルスルと奇跡のように避けていた。
背負われた柳岡は目をつぶっては開いた。

「おい、怪我不いか？俺の最強の反射神経について来れるのは
山田ぐらいやから、大丈夫やと思うけど」

川口は得意げにそう言い、「よお、待たせたなあ」と大笑した。

「川口！」

「麗も来たのか」

川口の背を見て、佐野が言った。

「てつきり、お前は最後まで寝た振りしてると思った」
山田が言った。佐野も葛木も頷く。

「そうしたかったけどなあ。おっさんに頭撫でられるのはアカンわ。
撫でられるぐらいなら、戦ったほうがマシやわ」

「何でお前の頭を撫でるんだよ」

「分からん」

「あとちょっとで着くから、終わるまで塔の中に隠れてたら？」

「そつやなあ。あの塔に隠れたら、誰にも追われずにすむかもしれないし。」

安全かも知らん。でも、縦に長いホラーハウスみたいやねんけど……あ、誰か出てきた」

「ん？」

約四百メートル先の塔の七階、黒い高欄が付いた廻縁に、顰の面を被った男が出てきて法螺貝を吹き、もう一人出てきた男は四角い枠の中に丸い円がぶら下がる物を運んできて、ゴォーンという音と、張り裂けるシンバルのような音を叩き鳴らした。「何？」全員が首を傾げた。

——カタカタ。カタカタ。

「何の音？」

「地震？」

「地震じゃないやろ。地面揺れてないし」と川口。「じゃあ、何？」

「あそこで貝吹いている奴らが原因なのは確かだな」

「――あの塔、動いてないか」

葛木が言った。全員がじつと塔を見ていた。
カタカタ。カタカタ。

「もしかして？」

「まずい」山田が麗を川口の背から下ろして、
近くにいた坂ノ浦学園の生徒に「しばらく、こいつ預かってくれ」
と押し付けた。

「私も行くよ」

「駄目」と拒否する山田。 葛木は叫んだ。

「佐野ちゃん。今から俺と山田と川口が援護するから、走れ。
それで、何がなんでも塔の中に入れ」

「ん、わかった」

「川口、行くぞ」

6 - 8 (後書き)

走って、走って、走りまくる。

それが青春。

近頃、筋肉痛が・・・

四大将決戦

——ドドドドッ。塔の頂上が地下の天井により深く入り込もうと
していた。

囲の土とともに地面から離れてゆく。カタカタカタ。カタカタカタ。
ひどい轟音に雄叫びが圧倒される。直径八、七メートルとすつか
り開いた穴から、

影に隠れた木造の齒車がもう少しで姿を見せようとしていた。

東西南北の生徒たちが塔へ走る。

「行け！行け！行けええ！」

掠れきった声が叫んだ。昇るばかりで塔はちょうどいい高さで止
まるうとはしない。

その足で飛び乗る他がない。すぐそこまで来ている。

「早く、早く！」

執拗に黒塗りの男たちが行く手を阻むが、うちの大將だけは通し
てもらつと、

我武者羅に刀で払い退け、行く道を作る。血に塗れ、黒に塗れても
もう、あいつらが無事、塔へ行かせることができれば上等じゃない

か。

疲労さえあるものの、最後の力を出し切れれば、黒塗りの男たちの足止めぐらい、

なんてことない。そんなに柔に育った覚えがない。「よっしああ」

大声出して勇み立つ。自分の強さと友人たちの強さを信じているから。

「頼む、通れ！」

頷くように、四方の方角から塔へ、喉が切れそうなほど息を吐き吸い。

あと200mの距離を、遅くなり速くなりもしながら走り抜ける六人。

北一人、西の一人が塔の土に飛んだ。後から東の二人も飛び。

南は二人飛んだが、南の狩野が着地に失敗し。片手だけなんとか土に捕まった。

疲れ果てた腕では持ち堪えそうにもなく、今飛び降りるのは、みすみす穴の中に落ちて自滅するようなものだ。だったら、どうする。

助かりそうにない。終わりか。目を閉じずに死を直視した。後悔もなく。

ありのままの誰かを強く信じたことで、誰かの救いの手が落ちた狩野の手を強く引き止めた。

「巽さん」

「……」

鳴滝は無言で狩野を引き上げようと、息んだ。

狩野は「おい、藤尾行くぞ」と聞こえてきた周防の声に、はっとして鳴滝に言った。「すみません、巽さん。離してください」

「傷に触りますし。まだ、あなたはこの先へ行かないといけません。俺がこんな様で、お一人で行かせるしかなくて、本当に申し訳ありません。」

……でも、巽さんには必ず勝ってもらわないと。ご存知のはずです。この場所にいる全員の命の保障がないんです。どうなるか。

あいつら、本気で俺たちをこの場に閉じ込めて殺す気なのかもしれません。

何を考えて、刃物持ち出すこんなゲームをさせているのか分かりませんけど、

あなたはこの塔を出て、それで、ゲームを終わらせてください。

あなたに相応しいのは頂点なんです。俺はあなたを信じているから、

だから、勝ってくださいのなら俺はここで死んでもかまいません。お願いです！

行ってください。あなたを無事行かせることが、今、ここでの、俺の存在意義で、葛岡高全員の願いなんです」

もう片方の手を持ち上げて、この状況で、たいそうな科白を吐くとは、

なんてばかばかしいんだ。鳴滝は唸るように言った。「黙れ」

「そうだ。馬鹿じゃないか。ドラマじゃないんだから、惨めに落っこちて死ぬだけだ。かっこつけるな！」

グイっと、狩野の体が持ち上がったと思えば、藤尾が狩野の片腕を持ち上げていた。

「藤尾行輝」

「英司、何も言わずに先にいけ。——鳴滝くん、その手の俺の腕に掴まえさせるんだ。それで、先にいつてくれ。後は俺が何とかするから」

鳴滝はじつと藤尾を見た。「お前……」

「うるさい、ナルオカ！藤尾は何とかするって言ってたんだ。絶対に落とさねえよ。」

敵助けるなんて、藤尾ぐらいだぞ。土下座して感謝しても足りねえよ」藤尾が言った。「英司、それは大袈裟だ」

「おい、落ちている奴。助けられといて、藤尾に手を出すなよ」

手を出したら俺が許せねえと言い。そして、「他の奴らはこの中だな！足痛てえけど、走ったらすぐだろ」と、ぶつぶつ言いながら周防は塔の中へ入っていった。

「鳴滝さん！」たまらず狩野が叫んだ。狩野はこれ以上、鳴滝に遅れを取って欲しくないと言っていた。黙った鳴滝はまた、じつと藤尾を見てから、「——藤尾行輝、頼んだ」と、狩野の片手を藤尾に預け。鳴滝も塔の中へと向かった。

影に包まれた塔の内側、中央に木造の階段が一つ、上へと繋がっていた。

先に着いた周防が三階へ通じる階段をのぼっている。天井から埃が落ちた。

鳴滝は口を腕で塞いで、周防と、後二人を追うため階段を登りはじめた。

足の筋肉がピキピキ鳴り、中古の玩具のように動きにくくなっていた。

油を一滴も注さず、余裕もなく走るなんていつ以来だろう。

塔三階、四角の狭い空間は木壁で囲まれ、階段に接する床も木造だった。通り過ぎた二階も同じ造りだった。十七階すべてそうなのかもない。味わいのある古い造り、どこことなく黒い寺と似通っていた……。三階の木床で「ちょっと、君」と東がはじめて言った「何

？」と、佐野。

「僕のサーベルを避けてばかりじゃないか。つまらないね。向かつてはこないのかい」

「……この状況で、それを言うの？」逃げに逃げた拳句、塔の壁に背がぶつかり追い詰めた佐野に、サーベルの剣先を向けている東。フフンと東が笑った。

「君は僕の相手にふさわしくないんだろうね。弱すぎる」

「——ん、悪かったね」

半分ぶち切れそうになりながらも、冷静に佐野は東の隙を探した。東は確かに、佐野より強かった。東のサーベルはからかうように、佐野のわき腹のちよつと横や腕のちよつと下を迂回し。

佐野は刀を構えるどころか、後ろに後退することしかできなかった。壁にぶつかってから、東は気を緩めることなく、佐野の行動をいちいち監視していた。佐野は「これは負けたな」と思った。

塔に来るまではこのゲームに本気になりかけたが、こうも東に徹底的に追い詰められては、佐野の本気はあっさり冷めてしまった。元々、冗談と遊びしか知らない男が、急にまじめになっても不幸になるだけだ。白旗のかわりに、刀を床に置いて、戦意がなくなったと見せようとしたが、予想以上にドンツと床が軋んで驚いた。誰かがやってきたのだ。

「うおおおお！見つけた」

見るまでもない周防だ。楽しい遊び相手がやってきた。

周防が叫んだ。「お前ら、俺を置いていくなんていい度胸だ！」

「スルデン！」

東が周防に気を取られた隙に、佐野は刀を持って横にそっと逃れた。

でも、東は佐野が逃げたことなど気に留めていなかった。

「助かった…」と佐野。東は強敵である周防しか見ていなかった。どうやって、あの禿げた男を跪かせようか。東の頭の中もそれしかなかったのだ。

佐野は物音立てないようにそっと、そっと、壁を沿って東や周防の反対側に行こうとした。だが、周防が刀を投げてきた。赤い紐は揺れ鈴がチャリンと音を立て、刀が壁に突き刺さった。佐野はちよつとゾツとした。もう少し動いていたら顔に刺さっていた。刀は佐野の耳に触れそうだった。周防が言った。

「逃げるな！二人とも俺が殴り倒してやるからな」

「何を言っているのだい。僕の美しい顔を傷つけるだって？」

「無礼な」

東がサーベルで突くように、周防へ走った。周防は考えないなしに、

拳を握り東に殴ろうとしていた。二人が組み合った。

刀をそこらに投げ捨て、転げ回りながら殴り蹴り合いをし出した。

佐野はのろのろと歩きながらも、気づかれないように階段まで歩いて、

一気に駆け上った。

そうして、ようやく登ってきた鳴滝は、殴り合っている二人を見て、

さつと上の階をのぼる佐野を見上げた。どう見ても、今度は佐野を追いかけた方が

いいなと、鳴滝は階段を登ろうと体を捻ると、わき腹が痛んだ。傷が熱い。

手で押さえて前屈みになった。すると、鳴滝の横を周防が瞬く間に走り抜け、

刀を手に足を引きずっているとは思えないほど力強く、階段を二段飛ばしで登っていった。「ギャー」と東が叫ぶ声がきこえた。

「ば、僕の美しい顔に血が！血が！」

動転した東はひたすら叫んでいた。東の顔に引掻き傷が三本。

鳴滝はそんな東を振り返ってから、まっすぐに立って、手すりに手をついて急ぎ階段を登った。

六階、最初にやってきた佐野が廊下に寝転んだ。ハアハアと、息

が上がりすぎて、

突然、途切れてしまいそうだった。床の振動で、誰かが登ってくる気配はするが、

誰だろう。起きないと。

思ったより厳しい立場だ。周防はとにかく、後の二人は化け物だ。逃げないと。

よろよろ壁に手をついて立ち上がったとき、いきなり現れた周防が佐野の顔を殴った。

「かつ」

麻痺する感覚と、じわつと、口の中が血で溢れた。

床に倒れた佐野は顔面押さえ、血の唾を吐いた。佐野の前に立ちほだかった周防が笑っているように佐野には思えたが、ドンツと大きい音が鳴ると、

周防が佐野に覆い被さってきた。違う。飛んできたんだ。

カードし忘れた佐野は頭を壁にぶつけ、意識が飛んだ。

佐野と周防の少し向こうで鳴滝が立っていた。

飛び蹴りしたのか。この距離で！

周防が佐野の上で声を我慢しながらも痛がっていた。

階段から東が怒りながら登ってきたが、「僕を置いていくなんて」

…」と言いかけると、鳴滝が肘で東の顔を殴った。「グヘツ」後ろ

に反れた東の顔から鼻血が噴出し、東は慌てて両手で押さえ、座り

込んだ。鳴滝は三人を見下ろすと、静かに階段へと体を傾けた。と、

周防が「うおおおおお」立ち上がって、ガツと鳴滝の肩を掴んで、

驚き振り返った顔を殴った。

「ナルオカふざけるなよ！お前の弱つちい蹴りなんて効いてねえよ」

鳴滝は膝をついた。殴られた衝撃が全身を、特に、傷口を激しく疼かせたのだ。一発殴ったぐらいなのに様子のおかしい鳴滝を見て、周防は首を傾け、「まあいつか」と殴らずに階段を飛び登った。

塔の八階、一人周防は廊下を塞ぐ木の壁を叩いた。

叩いた感覚では、周防の叩く壁は重いというより軽かった。ところで、

なぜ周防が壁を叩いているのか、というと、周防は窓を探していたからだった。

塔の外から見たとき、確かに十七重塔にはすべての階に窓があったはずなのだが、

塔の内側はすべて壁に囲まれて、窓すらなかった。

もしかしたら、この壁の先にあるんじゃないかと周防は直感的に思ったのだ。

しかし、窓を探してどうするつもりなのだろうか……。

周防が言った。「壁壊すしかねえか」

塔の持ち主に許可もなく、周防は自身の拳で壁をぶち抜こうとしていた。

だが、下で何やら動く音が聞こえて、周防は舌打ちして、階段へ走った。あとの三人が上に登ってきたのかかもしれない。

6 - 9 (後書き)

メーリ クリスマス！

白ケーキに顔面からダイブしたかったのに、
勿体ないとケーキが逃げた。
夢です

階段を登って九階を通り越し、十階で試そうと思ったが、ここじゃあ壁を壊しているうちに追いつかれそうで不安だと、もう一階、十一階まで来た周防はさっそく壁を殴りに殴った。拳の皮膚が捲れ、傷だらけになっても、壁は少しへこんだ程度だった。

「ああゝ、疲れてんのかな。仕方ねえ」

周防は自分のポケットから蛍光黄色のインナーバンドを取り出し、手にはめた。動きにくいから付けなくなかったと周防は呟き、息はいて壁を「砕ける！このお！」

一発殴った。パンツと壁ごとぶち破ると、六畳の一室が現れて、反対側に障子が見えた。障子があるということは、窓はそこにあるのだろう。

部屋は右側だけ広く、隣の部屋とは襖で仕切られていた。周防はズカズカと部屋に入り、障子を開けて下を見下ろすと、大勢の人間たちが渦巻くように刀や素手で戦っていた。

ここがどの方角を向いているのか、あれが仲間なのか。凄まじきままでの場所にいたのに、まるで他人事のようだった。凄まじい。

誰も死んでいないだろうな……

ドンドンツと、また誰かが登ってきた。周防は咄嗟に隣の障子を開けて、

新しく現れた部屋をぐるりと走った。三人の中で素早くのぼってきた佐野は、

壁が破られ開けた六畳の部屋へ迷うことなく飛び入り、周防の影を見つけ追った。

ひどく打ちつけたせいで頭がクラクラしていた。気づいたら、わき腹を押さえた鳴滝が周防を追う佐野を追いかけていた。後ろには東の姿がかるうじていないだけましなぐらいだが、ボス犬に追いかけられているような嫌な気分だった。

県一の速さで先頭の周防は、部屋を四つ回ると元の部屋に戻った。破れた壁から木の廊下に出ようとしたり周防を東が待ちわびていた。

自他共に美しいと称していた顔の頬には三本の引つ掻き傷が。鼻の両穴から顎まで流した鼻血を制服のシャツで無理やり拭き捨て、白く薄い七分丈の下着のみを着ていた。

東の顔はもはや血と埃に赤黒く着色されていた。怒りすぎてもう紳士精神なんて捨ててしまった東が周防に攻撃をしかけた。

「マルシエ！」点のような東の怒涛の突きを周防は刀で不器用に持ち防いだ。だが、当て外れに振り回すことしかできなかった。東が叫んだ。

「アタツケ！」「うおっ」

「アロンジェルブラ！」

「はあ、それ何語だよ！大体、お前の刀じゃねえじゃん。卑怯だろ」

「フンツ、怖気づいて負け犬が吼えるなんて見苦しい。僕も男だ。もう手加減はしない。もう二度と立てないようにしてくれる！」

「負け犬」にカチンときた周防は剣を投げた。

「うおおおお！誰が負け犬だと。刀なんか使えるか。こい！」
「フンツ」

ぐったりしている佐野を部屋に残して、廊下へ出てきた鳴滝はまた同じように荒れ狂う二人に「勝手にしてる」捨て言い、脇を通って階段をゆつくり上った。そして、鳴滝にやられる振りをしていた佐野は、鳴滝が上の階へ行ったのを見はかつて、起きあがり。階段に忍んで歩いていった。

と、東の手が伸びてきて、佐野は東の盾にされた。周防のパンチが飛んできた。

鳴滝に蹴り殴られ、もう意識が危ないのか、不可思議にも頭に浮かんだのは

「ロイヤルストレートフラッシュ」という言葉だった。いつも、佐野は最高の決め手を持っていた。逃げるなら逃げるでそれでもいいでも、今日に限ってそれを出さないまま終わるのか？

「死にそう」

ぼそつと呟き、佐野はぐつと反れた首をもどして、周防に顎が砕けそうなほど激しい左アッパーをくらわした。アッパーはうまく周防の顎にはまり、「カハッ」と周防の口から歯が飛んだ。佐野はアハハと薄笑い、

「時には、敵の手も最高の武器になるってね。効いたろ……」とふつと倒れた。

周防は顎を押さえ、「うおおああああ」と痛みに叫んだ。東は同じプレイヤーとしての何かに感動して握手した。「すばらしい！」

「ああああ……。俺の歯が！すっげえ貴重な歯なんだぞ」

抜けた歯を大事そうに持って周防は半泣きでぶつぶつ言った。「いい気味だ」といわんばかり東は微笑み、倒れた佐野に賞賛を送りながら階段を優美にのぼりだした。

塔の十三階から十四階へ階段の途中。鳴滝は階段の手摺りを頼りに階段をのぼっていたが、やけに静かになったなと後ろを振り返った。すると、暗い階段が二重に見えた。

限界が近いのか。無心で瞼を閉じて開き、前を向いた鳴滝はそのことはあまり考えないようにした。じいさんの征したこのゲームには弱音など好都合。

黙々と、鳴滝は階段をのぼっていた。

一階からずっと階数だけはしっかりと数えていた鳴滝は、もちろんもうすぐ着く階が十四階だと分かっていた。十四階に着けば、あ

と三階。この塔を出れば、ゲームは終わりだ。汚れに汚れても、尚
いっそう色っぽくなるだけの男は息を吐いて、

肩にかけていたシャツまで引き千切り、血に染まったシャツの帯の
上からよりきつく新しい帯で巻きつけた。「フウ、フウ」と早く息
を吐くことさえ憎らしい。

弱っている事を嫌でも感じてしまうからだ。漂うご機嫌な鼻歌が、
逝ってしまいそうな意識を呼び戻す。腰に紐で結んだ刀が重い。

鼻歌の後に、周防の耳が辛いほどの大声が十四階まで響いてきた。
周防はともお怒りのようで、階段を走り踏むことすら破壊音のよ
うに強烈だった。

東のなにか外国語を叫んだ。近い。周防が「刀を忘れた！」と言っ
た。そうして、音が一時消えたと思うと、バンツと何かが壊れた。

十五階への階段を上りはじめていた鳴滝は下の階でなにか起こっ
たことを知った。だが、そんなことに動じる鳴滝ではない。わめき
声を少し遠くに聞きながら、階段をのぼりつつつけた。

6 - 1 0 (後書き)

半年ぶりの更新。

どうせなら、このまま一気に最後までお楽しみください。
いくぜ、連続更新!!

十五階から十六階の階段をのぼる鳴滝の元へ、いきなり群れのよ
うに周防、東、佐野の三人がやってきて走り転げた。鳴滝を単独で
は行かせないつもりなのだろう。

「ナルオカ！勝つのは俺だ」

周防が叫んだ。三人とも頭には血管が浮かんでいた。

右側の東は素手で周防の耳をひっぱり、何度も平手打ちしては周防
の頭を蹴落とそうとしていた。周防の方は痛みを他所に、赤紐と黄
色の紐がついた二本の刀と青い紐のサーベルを持っている佐野の首
を腕で締めあげている。鳴滝は三人を見て、まず真ん中にいた周防
を軽く蹴った。

「ちよっ」

慌てて、佐野はすべての刀を捨てて階段の手摺りにつかまった。

佐野の首を絞めていた周防は助かったが、より絞められた佐野はた
まったものじゃない。一人落ちそうになった東は手に触れらものに
咄嗟に捕まった。

「いつていていてえ！」周防の頭に爪を食い込ませた。

「ふう、驚いたよ。まったく」

涼やかにバランスを取った東はサーベルを拾い、笑った。周防は「このお」と言ったそばから、佐野から腕を離してしまい、階段から転がり落ちた。ドン、ドスツと廊下の壁にぶつかって周防は痛みを叫びた。東は高笑いした。鳴滝もふつと鼻で笑い、階段をのぼってゆく。佐野は上段と下段を見て比べ、にんまりした。どっちに行ってもどうなるかは同じだ。刀を手に持って、鳴滝、東の後ろに付く。

不自然に、三人の足が速まった。出遅れた周防が十六階を越えた三人を下から追いあげた。周防が佐野ではなく、その前にいる東の髪を引っ張り殴って二位の順位を奪い、十七階へ。

最後の階までとうとうやってきた。次へと進む階段はなく、四面に壁が行く手をくませていた。しかし、周防が十一階で壁を壊してくれたおかげで、壁の先に道はあると分かっていた。鳴滝は腹の帯をまたきつく結び、叫び狂いながら上がってきた周防に迎え打つ。殴りにかかった周防はこの勝敗を自身の勘と勢いにまかせた。

「うりいああああああ」

拳に沿うような皮膚を手に感じながら、床に突っ込み倒れた周防。鳴滝の膝が崩れた。脳が衝撃に揺れ、気絶した。周防は見届けるまでもなく、さっと立ち上がり、サーベルで乱れ突いてくる東に右腕を出しストレートから左フック、猛ラッシュの連打を打ち込んだ。サーベルと周防の拳が身を守りながら行き違う。周防の両頬と腕には無数の切り傷がつき。東の左臉は悲惨にも蒼く腫れあがり、口の端は切れていた。

まだ弱い命を燃やすように戦い、目は重すぎる疲労に充血していた。動きが鈍くなっていた、これは本来の実力じゃない。これ以上やり

あつても力尽きたら負けるだけだ。相手があとどれだけ持つのかも分からない。息が続かないのいいことに、互いに離れた。階段の最終の段からそのやりとりを見ていた佐野は口笛を吹いた。周防と東が佐野を見た。唾を飲み込みながら、なんとか途切れそうな呼吸をする。

周防が言った。

「なあ、外にいるやつらまだ生きてるよな？」

「どうだろう。……できることなら、生きていて欲しいけどね」と、東は戦意が失せてしまったのか、その場に座り込み、目の覚ましそうにない鳴滝に目を向けた。

鳴滝の傷はひどいものだった。

「いなくなると、寂しい連中だね」

佐野は最後の階に入り、左の壁に凭れかかってしんみりそう言った。

「いなくなるとか、まだわかんねえだろ」

「ハゲマルの言う通りだ」

「あああ？誰だよそれ」

「ねえ、とりあえず協力して道作って、とつとと外出ない？疲れたよ」

「じゃあ、彼を起こさないと。重症だよ」と言う東に、「さっき動いてたぞ」と気絶させた本人、周防は尚も言った。「俺、刀取りに

「いかねえと」

「何度も忘れるなんて馬鹿だよ」

「おい、なんて言っただあ？」

「まあ、まあ。道作つとくから、先に刀を取りに行つてきなよ」

「おう。頼んだ」と片手あげて、周防は階段を下つていった。

周防が刀を拾って十七階に戻ってくると、鳴滝は目を覚まして東と佐野に支えられていた。壁には穴が開いていた。ちょうど、さらに上へと繋がった梯子が覗いていた。あれを一発で見つけ当てたことには、さすがの周防もすごいことだと思った。

「やるじゃねえか」と、周防。周防に気づいた鳴滝。

「当然だ。喧嘩は終わったのか？」

嘘のように空気が変わって半分面白くなさそうに聞いた。「さあね」

佐野は首を傾げた。

「僕はもううんざりだ。これ以上、顔に傷がつくと、京佳に嫌われそうだよ」と東。

周防は笑いながら言った。「お前の顔、すげえもんなあ」

「ツルツには言われたくない」

「何だあ、やる気かあ！」

「いいとも！」

「おいおい」

喧嘩をやり直そうとしている二人に、佐野はついてけないとため息をついた。鳴滝は、東と佐野に「もういい」と告げて、一人、新しい階段の方へ歩いた。

まだゲームは終わってない。

胸騒ぎを忘れ、梯子に足をかけた。人が丸々一人通ることができるだけの、地上へと続く狭い四角柱の穴があいた通路。その壁側に梯子がかかっていた。

一番手をゆく鳴滝の次に不満そうな周防が、三番手は東。四番手は佐野の順で梯子をのぼりだした。真つ暗闇の、それも重力に逆らつて梯子をのぼるのは難しいことだった。

負傷さえしなければと、鳴滝は自分の無用心さを呪った。感覚のみで数メートルのぼりにのぼった。四人とも揃つて無言を通していた。

刀やサーベルは梯子をのぼるのに予想以上に邪魔な存在で、壁にぶつからないようにするのに必死だったのだ。汚れすぎた手で梯子を持つたび滑りそうだった。

もう終わりたい。そう望むことすら切のないことのように思えた。と、鳴滝は行き止まりにぶつかった。「いつてえ」

下の周防が鳴滝の足にぶつかり、そのまた下で、東と佐野がぶつかったようだった。「何してんだよ」と周防。鳴滝は何も言わずに手で行き止まりを探った。

辿り先は何かで塞がれているようだ。鳴滝はその何かをドンツと叩いた。

すると、その何かが浮いたのだ。

「蓋か？」鳴滝は何度も叩いて、最後の力でその塞ぐものを上へ叩き除けた――

6 - 1 1 (後書き)

作者より、寛ぎの眠りを求めて
六章最終話へどうぞ

ざわざわとひしめき合う人々の声がきこえた。

よく知る微々たる空気の温かさが冷たさに混じって汚れた肌に触れた。

ここは地上だ。間違いない。赤い灯りが黒い紺の空に浮かぶ。顔に影の差した大人たちが、鳴滝を地上へと引っ張りあげた。

鳴滝はうんともすんとも言えなかった。夢のように幻想的だった。

身体を預け、極楽浄土にでも連れて行っていかれるのか。

気づけば、なにやら屋根を除く、天井から床と柱まで虎と草が彫られ、

白と緑で塗られた神輿の中で横たわっていた。鳴滝の後にも、周防、東、佐野がまた別の大人たちの集団に引っ張りあげられ、三方の方角それぞれ、朱の鳥と赤い炎の神輿、青い竜と白い雲の神輿、茶色い亀に絡まる蛇と黄色の波の神輿に乗せられた。

八百屋の初夫さんが歌うのに合わせて、心臓まで響く太鼓を打ち鳴らしはじめた。神輿が「わっしょい」という掛け声と共に動き出した。

門倉学園高校の建築科、ペラジー・マントノン教諭が東の乗った丑寅へ向かう神輿にタオルと水を投げ込んだ。十字路の商店街端から四方の学校が定めた通学路には、電信柱や家に提灯がぶら下がっていた。

辰巳へ向かう神輿の中で寝転がった周防の元に誰かが一人が乗り

込んできた。

そして、言った。「君、起きているのか？」

周防は上半身を起こした。死んだような目で見つめられて、周防はゾツとした。

「誰だ？」

見たこともない人物、それは坂ノ浦学園高校の乗本教頭だった。

乗本教頭は言った。

「時間がないので、私のことは気にしないように。明雲高校を含む他三校の屋上への扉が開放されました。君はその刀を持って、明雲高校へ着いたらすぐに屋上へ行きなさい。そして、屋上に用意された松明に火を灯すのです。四校のうちの誰かが松明を灯せば、すべての戦いは終わりです」

周防は「どうやって——」と聞こうとしたが、乗本教頭は「では私は降ります」と、多言せずに神輿を降りていった。未申へ向かう神輿から門倉の紫垣理事長が降りた。肉屋の仁さんが戌亥の方、白く光る提灯に沿い進む神輿を、砂金であしらわれた扇子を二つ振って見送った。

通学路をジグザグに行き、北の、門倉学園高校近くのピザ屋の前でパウロとナナミちゃんが神輿に手を振った。十五分とちょっともすれば学校を見えてきた。

四つの学校の校門には松明が二つ構え。待っていましたとばかりに校舎のいたるところに雪洞が置かれていた。校中は真っ暗というのに……。

神輿は校門を通りこして、校舎の正面玄関前で止まった。

その時、四つの神輿が四つの学校にほぼ同時に到着した。疲労や傷に気力ない大將たちは神輿を担いだ大人たちによって、靴箱の並ぶ玄関に運ばれた。

大人たちは大將の手に刀を握らせ、また、「わっしよいわっしよい」と神輿を担ぎどこかへと帰っていった。

己意外、物音しなくなった校舎の中、息絶えそうな顔をした南の鳴滝は手が赤くなるほど刀を握りしめて、刀を支えに立ちあがり。何重にも揺れる廊下に目を移した。

足音が恐ろしく響く校内、暗い闇が目を開けていること空けていないこと。曖昧にさせた。毎日通う学校だから、どこに何があるか知ってはいても、暗闇の校内は土地勘をわざと狂わせようとしていた。腹がすきすぎて、胃が身体にくっついたようだった。

気を緩めば眠ってしまいそうだ。

地下での戦闘や、山頂や地上への続け様の階段は精神すらも酷使させていた。

内心、諦めの言葉が幾つもでてきたほど。

東の周防は無理に使った足がとうとう動かなくなってしまい、刀を足代わりに階段を数段のぼるが、今度は右腕の筋肉が痙攣しだしたので、左手で強く押さえつけた。

西の佐野は頭を抑えて下向きに階段を斜めにのぼっていた。

北の東は咳き込み地面へ吐血した。度を越したストレスで急性胃炎を起こしてしまったのだ。「京佳」と呟き、床に身体を解放させた。下弦の月が階段の窓からわずかな先を照らしていた。階段の後に繋がる狭い地面を進み、階段をのぼろうとした。

だが、目の前さえまともに見えない鳴滝は転げた。身を庇うために反射的に受けた手が衝撃を痛みに変えて散らした。「ぐあっ」

まっすぐのぼれない佐野は壁に身体を擦りながら階段をのぼっていた。

こんなゲーム参加するんじゃないかと後悔し、瞼が勝手に落ちてきた。辛すぎて涙が流れていた。

痙攣した筋肉を押さえ片足で階段をのぼる周防は、まだ地下にいる仲間を思った。

「今、終わらせてやるからなあ。……だから、ぜったい死ぬなよお……ぜったいだ」

両目両鼻から涙を垂れ流し、仲間を救いたい一心で進んでいた。吐血した口元を拭い、東も屋上へ向かうために身を起こした。たった数階だろうと。

繰り返す次の階段をのぼろうとした。ふいに足元が見えなくなり、顔を上げた。

行き止まりか？ 大きな黒い四角の壁が行く手を阻んでいた。ぼんやりそれを眺めた。

まだ行けそうな気がするだけだ。

佐野はそれ以上何も考えずに階段をのぼり上がり、壁を押した。ダンッダンッと鉄の音になった。記憶にある仕草で、手探りで取っ手を掴み捻った。

ザーッと耳に聞こえると、勢いのある風が全身に吹き付けた。屋上だ。

前へ倒れそうな身体を必死で持ち直して、松明を探した。

学校から十字路の商店街の方へ見れば、そこは十字の赤い光で照らされ、

知らない曲が百屋の初夫の声にのせて途切れとぎれに聞こえた。

東の屋上で周防が屋上にのぼり出て、うろつろと探し回りだした。

周防同様に松明をさがしていた佐野は身体の限界を急激に感じて、鉄の扉のすぐそばのコンクリートに手を置き寄りかかった。寝起きのような鈍さだったが、佐野が手を置いたのはコンクリートではないのは分かる。

位置をずらして、何度も触り比べた。少し左に反れるとコンクリートの壁か、

右にはパイプしかない。はじめに触ったものは、周囲に縁のついたもつとこう柔らかいゴムのようなもので、肌触りが悪い細く編まれた物が真ん中を横切っていた。

最後に手に触れて気づいた。

それが何なのか、どうすれば松明は見つかるのか一瞬で佐野は悟った。

間違えじゃなければ。佐野は笑いながら言った。

「ああ、これでやっと遊びが終わる」

さつと刀を利き手に持ち、佐野は刀をゴム状の壁に突き刺した。

バチンツと何かが離れ飛んだ。数秒後、西の松明が燃え。

松明からさらに仕掛けられていた花火が天空にのぼった。佐野は後ろから倒れた。

「すつげえの」

花火は亀に絡んだ蛇を形取り、黄色く消えていった。十字路の商店街から大きな歓声があがった。

花火の音を聞きながら、屋上手前で座り眠るようにうな垂れていた鳴滝の元に提灯をぶら下げて何者かがやってきた。警戒して刀を握ったが、表れた人物の顔を見て刀から手を離れた。「親父」「ご苦労さん。ちったあ、楽しんだか？」と鳴滝の父。鳴滝はふつと鼻で笑った。鳴滝組長は「そうか」と頷き。提灯を下げて、鳴滝の赤黒い包帯を照らした。

「お前は本当に。亡くなった津幡のじいさんにそっくりだな。嘘を押し通すのが上手いというか、不器用というのか」

「……」

組長は言った。「意地張るんじゃあねえよ。まったく、チビの方じゃない、亡くなった母があので泣いてるぜ。無鉄砲もいいが、もう少し賢くになりやがってたんだ。実母に会いたいんだろ。そんな大怪我追って、会っ前に死んだらどうするんだ」

鳴滝は柄にもなく、顔を真っ赤にさせた。「亡くなった母の話はするな」

四階の階段では、激痛で動けずに咳き込み倒れる東の前に花柄のワンピースの上にピンクのカーディガンを羽織った篠宮が立っていた。東は口元押さえ、篠宮を見上げた。

「京佳」

篠宮はそつと美しい手の甲を差し出した。

「あなたの頑張りは見させてもらったわ。結婚の話は置いて、付き合うことには付き合っただけよ」

東はその言葉に目を見開いて飛び起きた。血に汚れた手をズボンで拭き取って、

身なりを整えて篠宮に言った。「本当だね？僕と付き合ってくれんだね？」

篠宮は東の手を握り「ありがとう」と頷いた。東はパツと花でも咲いたように大いに喜んで、篠宮の手を引っ張り、キスするでもなく抱きしめた。

東の屋上であと少しの所で勝利を逃した周防。しかし、周防は安心した顔で屋上に寝転がっていた。これで仲間はお助かるんだ。と、周防の元にも誰かがやってきた。顔を向けた。鉄の扉から周防に笑いかけたのは木崎先生だった。木崎先生は言った。

「英司。奥村や小沢たちを拾いに行くぞ。手伝え」

花火の後に、西の屋上に小面をかぶった女が一人、木彫りの箱を手には、佐野に近づいてきた。佐野は驚いた。まだ、用があるのか……。

小面の女が言った。

「お疲れさまでした。勝者である佐野荘輔様には、おやかたさまより褒美を頂けます。あなた様のお望みを仰ってください。私はあなた様のお望みをこの箱にしまい、おやかた様にお届けいたします」

「——ん。おやかた様ってゲームの黒幕だろ。気になるな」

「おやかた様の正体をお知りになる、それがお望みですか？」

「あ、いや。違う」

「うーん、そうだな。がつつり肉が食べたい。バトルBゲームに参加した人全員に最高級の肉を振舞って。それぐらいしてよ」

「はい。では、石黒さゆり様の行方はお知りにならなくてよろしいのですね」「……何でそれ知っているのかな」

「うん。でも、いいよ。隠れたい人を探してもしょうがないし。このゲーム、頑張ったのは俺らだしね。ご褒美に肉ください」と笑い言った佐野。小面の女は佐野の無理な願いを無愛想に「承知しました」と、佐野に一礼して屋上をおりて行った。あっさりとしたものだった。佐野はなんだか気が抜けてしまい、欠伸してバタリと倒れた。風に流れる雲が隠したはずの月から遠ざかった。月が、星がまた世界を輝かせる。

6 - 1 2 (後書き)

完結。

といたいたいところ、もう一本付き合っておくれ。

エピソード

エピソード

十字路の町の地下、十七の塔の十階。小面の女二人が薙刀を持ち守る壁の中では、空を走る麒麟の蒔絵が描かれた本漆朱塗りの盃に透明の液体が注がれた。電気の行灯があちらこちらに置かれ、均一した明るさがつづいている。

下座の方から小面の女が三人に、翁の面の老人が四人壁に沿うように座り胡坐をかいていた。窓側では十六の面を被る三人の若い男が。四人目からは独特な大童子、弱法師、小飛出、深井、延命冠者やらの面をかぶり、彼らの前には皿に料理の飾られた懸盤が置かれていた。客人として、彼ら四人だけに与えられた質素な朱塗りの杯に盛られた酒を口にしていた。上座の左手にはその十五人とは別格なのか、艶やかな紫の、竹林と統べる五色の鳳凰柄の着物に着替えた万媚の面を被る女が座っていた。女の右手、金箔の屏風に墨の四神が四方を守り睨む、その屏風の手前で、天狗の面をかぶる漆黒の着物をきた男が、盃の酒を面からわずかに開いた隙間から啜っていた。金の亀の絵付けされた皿や高坏は客人よりもやや華やかな飾り付けで、珍味や高級食材で作られた現代風の和食の残りが並んでいた。銚子を手に、紫の着物の女が飲み干した天狗男の盃に、酒を

足した。天狗男は微笑んで盃にまた口付けた。そうして、また酒を継ぎ足そうとした女に「もう結構」と、手で塞き止めた。男の目線の先は純白のスクリーンだった。映写機が今の今まで、十字路の地下と町の映像を映し出していたものだ。天狗男は言った。

「十六夜月にはじまり、二十三夜月に終わる戦。今年も良い見物だった。

欲のない勝者とはおもしろいが、他の大将もなかなか癖があつてよかった」

「恐れ入ります」

その場にいた十六人が一斉に手を前に出して腰ごと深々とお辞儀をした。

天狗男は頷きながら言った。

「死者はないな」

向かつて左側の、翁の面の老人が「さようでございます」と答えた。

天狗男はさらに頷いて、

「では、勝者への褒美は後日。各々の家庭に送るように」

右側の一同が「はつ。かしこまりました」とお辞儀した。天狗男は、今度は左手万媚の面の女に向かつて言った。

「美香、私は帰ることにする。お前は稲田に褒美を授け、この地下が静まってから、それから帰ってくるように」

「承知しました」と、万媚の面をかぶった美香がお辞儀した。

「関口、藤尾、玖珂、津幡は私と共に帰るぞ」

「はっ」

十六、弱法師、小飛出、深井、延命冠者が頭を下げた。天狗男は颯爽に立ち上がり、身を翻して和室奥の特別な階段へ赴き。天狗男の後に延命冠者の面の男を筆頭として五人が和室を後にした。彼らを見送った十一人は、俯き加減で一年で最も身の毛立つ行事が無事終わって、ひどくほっとしていた。

バトルBゲーム。現代の主要都市で起こる政治や経営戦争が世を動かす第一級の戦であり、世を動かさないが地域の隠された戦こそ第二級の戦いと呼ばれる。本作はその隠された戦という祭りを綴った一節にすぎず、戦というゲームは主がいる限り、知らずと終わりを迎えることはない。

完

エピローグ（後書き）

最後までお読みくださり、ありがとうございます！
いやあ、作者満足。天晴れ！

って話で終わればいいんですが、時間かかりすぎた上、誤字、脱字などが多く読みにくかったかもしれない。そこは大目に見てもらえればありがたいです。

作者の傲慢ですが、ただ、純粋に「遊び」を楽しんでもらえたら良いです！

しかし、本日2010/6/20のアクセス数が奇跡的に2・1万を越えていて、

作者は非常に感動しております。涙が豪雨のように出そうだ。雨季の奇跡。

ご感想も頂いて、もっと頑張らねばと思う限りです。

次回作については、がらりとかわって長編ファンタジー。

タイトル名は「灼熱の銀の球体」。

変な名前の普通のファンタジー小説でしょ？といっても、

バトルBゲームより以前から書いているもので、

それなりに作者の変てこな世界観丸出しになっていると思うので、補足などはHPからリンクできるようにしたいと考えております。

HPに載せてるバトルBゲームの短編が終わり次第

新作載せていく予定です。

はあーとため息が漏れるほど長々書きましたが、これから応援の方よろしく願います。

S

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0358d/>

バトルBゲーム

2011年10月4日13時48分発行